

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語とスペイン語（1）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001351

日本語と外国語との対照研究 I

日本語とスペイン語 (1)

国立国語研究所

1994

刊行のことば

国立国語研究所日本語教育センター第二研究室において、「日本語とスペイン語との対照言語学的研究」が始められたのは、1990（平成2）年度であった。まず、日本語とスペイン語との対照言語学的研究の現状把握から出発し、研究会を重ねる中で、研究推進の方向が探られた。1年間の試行期間を経て、1991（平成3）年度から、第一期3年計画の研究がスタートした。

当研究所では以下の諸氏に客員研究員として研究にあたることを依頼した。

大 倉 美和子	大阪外国語大学助教授(現 京都工芸繊維大学教授)
山 藤 昭 子	神戸商科大学助教授
高 垣 敏 博	京都産業大学助教授(現 教授)
三 原 健 一	大阪外国語大学助教授
青 山 文 啓	東海大学講師(現 助教授)
野 田 尚 史	筑波大学講師(現 大阪府立大学助教授)
メ サ ビルヒニア	帝京大学教授(1990年度)
福 嶌 教 隆	神戸市外国語大学助教授(1991年度から)
上 田 博 人	東京大学助教授(1992年度から)

また、所内における研究計画の立案・実行については、当研究所日本語教育センター第二研究室長 佐々木 倫子が担当した。

この報告書は3年間行われてきた第一期研究の最終報告にあたる。理論研究、応用研究を問わず、各研究者のテーマをまとめた第一部と、日西対照研究の概観を得ることを中心においた第二部からなる。日本語教育の世界では、学習者が増加の一途をたどっており、スペイン語を母語とする日本語学習者も例外ではない。この報告書が、スペイン語研究はもとより、スペイン語圏の学習者に対する日本語教育に、基礎研究の形で寄与するところがあることを願っている。

平成6年3月

国立国語研究所長
水 谷 修

I 研究

Artículos

日本語とスペイン語の名詞修飾

La modificación nominal del japonés
y el español

高垣 敏博……………1

Toshihiro TAKAGAKI

判断・ムード・（疑似）関係節

ー日本語・スペイン語・英語の場合ー

Juicio, modo y pseudo-relativos:
un estudio modelo contrastivo entre
el japonés, el español y el inglés.

三原 健一……………29

Ken-ichi MIHARA

「のだ」と es que

Noda y es que

福寫 教隆……………57

Noritaka FUKUSHIMA

日本語とスペイン語の無題文

La oración atemática del japonés
y el español

野田 尚史……………83

Hisashi NODA

日本語の自他とスペイン語の再帰

(In)transitividad del japonés
y construcciones reflexivas del español

青山 文啓……………105

Fumihito AOYAMA

談話標識と会話の構造

Marcadores discursivos y estructuras de
conversación: Funciones de ‘mira’ y ‘oye’

大倉美和子……………121

Miwako OKURA

日西対照研究とエラーアナリシスと

トランスリンガル・アプローチ

Estudio contrastivo, análisis de error
y aproximación translingual a la lengua española

上田 博人……………143

Hiroto UEDA

I I 概観

Bibliografía Temática

音声・音韻

Fonética y Fonología

上田 博人165

Hiroto UEDA

形態・語彙

Morfología y Lexicología

高垣 敏博177

Toshihiro TAKAGAKI

文法

Gramática

福寫 教隆191

Noritaka FUKUSHIMA

辞書

Diccionarios Comparados

青山 文啓207

Fumihito AOYAMA

言語教育・教授法

Enseñanza y Metodología

大倉 美和子215

Miwako OKURA

I 研究
Artículos

日本語とスペイン語の名詞修飾

La modificación nominal del japonés
y el español

高垣 敏博

Toshihiro TAKAGAKI

キーワード：名詞修飾、 限定詞、 名詞による修飾、 関係節、 内容節

1. 分類と目的

本稿は日本語とスペイン語の名詞修飾、すなわち連体修飾の構造を対比させて、両者の間にどのような類似点と相違点があるか指摘する目的をもつ。以下で扱われる項目の中にはいくらかでも対照研究がなされているものもあれば、全く手がつけられていない分野もある。

まず、両言語の連体修飾は大きく次のように対比することができるが、語順に鏡像の関係が見られる。すなわち日本語では修飾要素が被修飾名詞に先行するが、スペイン語では逆に、限定詞やある種の形容詞を除いては後続する。

日本語		スペイン語	
連体詞	} + 名詞	冠詞	} + 名詞 +
コソアド詞		指示詞	
形容詞		(形)	
名詞 + ノ			
関係節			
内容節			{ 形容詞 前置詞 + 名詞 関係節 de + 内容節

英語で、形容詞が名詞に先行したり、所有格の 's が前から後ろの名詞を修飾するが、スペイン語では形容詞も、所有 (de 前置詞句による) も後ろから修飾するなど、修飾要素が被修飾語に後続する傾向がより明瞭であると言える。¹⁾

2. 限定詞

ここでは限定詞 (determiner) という範疇の中に、日本語では連体詞 (1a) とコソアド詞 (1b)、スペイン語では冠詞 (2a) と指示詞 (2b) を含めることにする。「名詞を修飾することを専門にする、活用のない品詞」が「連体詞」である。それゆえ、述語として「*大きなです」などとは言えない。このような連体詞に匹敵する連体専用範疇としてはスペイン語の「冠詞」がある。

- (1) a. 連体詞: ある、あらゆる、いわゆる、たいした、例の、いろんな、大きな
- b. コソアド詞: コノ、ソノ、アノ (ドノ)
- コンナ、ソンナ、アンナ (ドンナ)
- (2) a. 冠詞: 不定冠詞 (un, una, unos, unas)

定冠詞 (el, la, los, las)

b. 指示詞: este, esta, estos, estas

ese, esa, esos, esas

aquel, aquella, aquellos, aquellas

冠詞には定冠詞と不定冠詞があって名詞の修飾をその職能としている(ただし、el mío, el grande などの定冠詞の代名詞化用法についてはいま考えないことにする)。日本人にとってスペイン語の冠詞は英語の冠詞と同じように習得が容易ではないが、さらに、英語と微妙に使われ方が異なることもその困難さを増幅している。例えば、抽象名詞 peace、物質名詞 water などが定冠詞を伴い la paz, el agua となったり、同じ名詞句でも文頭に立つときと、直接目的語になるときとで有無の違いが生じたりする: *El pan se vende en esta tienda.* ↔ *En esta tienda se vende pan.* 「この店ではパンが売られている」などはその一例である。²⁾

次に、指示詞を見てみよう。日本語では連体詞の一部として(1b)「コ、ソ、ア、ド詞」がある。一方、スペイン語においても(2b)のように近称、中称、遠称のように3系列である(「指示形容詞」は連体機能しかもたないが、これとは別にスペイン語には「指示代名詞」の体系も存在しアクセント記号の有無で区別される: *éste, ése, aquél*)。

ともに3系列であることから、両語の指示詞が一对一にうまく対応すればよいのであるが、実際にはそのようにならないことが多い。その大きな理由として、同じ3分割であっても、日本語のコ・ソ・アは「人称対応」型であり、スペイン語の *este / ese / aquel* は「話者からの距離」型に属するためであると言われる。³⁾ すなわち前者ではそれぞれコは1人称、ソは2人称、アは3人称の領域に存在する指示対象を指すのに用いられる。一方スペイン語では「話し手」から時空間的、心理的に離れていくにしたがって *este / ese / aquel* と使い分けられるという対立である。両語の用法が結果的に重なることはきわめて多いが、次のような例ではズレが認められる。

(3) -¿Cuál es el autobús para ir a la estación?

-Es *ése* que viene ahí.⁴⁾

(4) -駅行きのバスはどれですか?

-向こうからやって来るアレですよ。

これは場面指示(*deixis*)の例であるが、(4)の「アレ」は話し手にも話し相手にも属さない「向こう」にあるものを3人称として表現している。話し手、話し相手、バス

それぞれが人称の分担をしていると考えられる。スペイン語例の(3)では、バス停にいる話し手と話し相手は融合して、ともに話し手の視点に立ち、そこから離れた対象としてバスを *ese* で指している。バスは2人称ではないので、この *ese* を「人称対応」型で説明することは難しい。

文脈指示 (*anáfora*)での使い分けはより複雑である。(5)の例で、過去の出来事を指すのに単純に遠称の *aquel* が用いられていることがわかる。

- (5) *Aquella* fría madrugada de invierno Pierre divisó desde su escondite en lo alto del granero el fuego cruzado de los primeros disparos.

「その冬の寒い明け方、ピエールは納屋の天井近くの隠れ家から銃撃戦が始まったのを見た」(Manuel Puig *Boquitas pintadas* マヌエル・プイグ『赤い唇』野谷文昭訳、集英社)

ところが、日本語ではこれを「アノ」とは訳せない。「ア」系は話し手・話し相手が共に知っている事柄を遠い対象(場面指示の一種)として表現するときだけに用いられ⁵⁾、この例のような物語で作者が一方的に語りかける場合には用いることができない。文脈指示では訳のように「ソ」系で訳されなければならないからである。この場合、話し手・話し相手のどちらか一方が対象を知っていればよい。このようなズレから、スペイン語のネイティブ・スピーカーは次のような間違いをおかすことが多い。

- (6) 日本のかぞくとおしょうがつに会いました。あの日私たちはおせちりょうりを食べて、たくさんおさけとビールをのみました。(ふゆやすみ)
 (7) ほんだのこうじょうはとてもおおきかったです。私はあそこでプレゼントをもらいました。(りょうこう)⁶⁾

反対に、スペイン語を学ぶ日本人もこのような文脈で“*ese*”系を使う誤りをおかしていることが十分想像できる。

3. 形容詞

形容詞については、(8)に見るように、名詞修飾の用法(a)と述語として用いられる用法(b)の違いが問題になる(佐久間 1957 の「装定」, 「述定」に対応)。

- (8) a. 赤い花 la flor *roja* (名詞を修飾=装定)
b. その花は赤い La flor es *roja*. (述語として=述定)

(9) は、すでに(1a)で見た連体詞に分類されるが、これらはもともと「形容詞の名詞修飾形式に由来する」(益岡・田窪 1992 p.55)。

- (9) 大きな、小さな、おかしな、ろくな、いろんな、堂々たる

多くの形容詞は(8)と同じく両方の使われ方をするが、形容詞の中には(10)(11)のように連体修飾が難しいものもある。すなわち「多い、少ない」は文末でのみ用いられる。

- (10)a. 今日は学生が多い
b. *今日は多い学生が来ている
(11)a. 泳ぎに来た人は少ない
b. *少ない人が泳ぎに来た⁷⁾

一方、スペイン語でも大部分の形容詞は名詞修飾と述語の両方に用いられるわけであるが、名詞修飾の場合、名詞に対する位置が重要である。大半の品質形容詞は(12a)のように名詞の後ろに立つ。逆に所有形容詞などは、さきほどの指示形容詞などとともに名詞の前に立つのが原則である。

- (12) a. *tus ojos negros* 「君の黒い目」
b. *la casa nueva* 「新築の家」 / *la nueva casa* 「今度の家」
c. *un cierto negocio* 「ある仕事」 / *un negocio cierto* 「確かな仕事」

ただ、品質形容詞も(12b)の“nuevo”の例のように前後で意味に差があるものもいくらかあることは初級文法で学ぶ。後ろからかかる場合は本来の品質、すなわち「新しい=新築の」という意味。前に来ると「今度の」と転化した意味をもつと説明される。⁸⁾また、(12c)の“cierto”のように名詞の前では不定形容詞として「或る」という意味をもち、名詞の後ろでは「確かな、確実な」(=*seguro*)という意味の品質形容詞になるものもある。⁹⁾

ところで、専ら名詞の前で用いられるスペイン語の不定形容詞には(13)のようなもの

のがある。

(13) cada, todo, cualquier, demás, más, tal, alguno, ninguno

(14) a. Cada niño recibió su regalo. 「子供は各自贈り物を受け取った」

b. Todo hombre es mortal. 「人は誰でも死ぬ」

さらに品質形容詞の中にも名詞修飾としてのみ用いられ、述語としては使われないものもある。

(15)a. el futuro presidente 「未来の大統領」 / *El presidente es futuro.

b. la mano derecha 「右手」 / *La mano es derecha.

c. un ingeniero civil 「土木技師」 / *Un ingeniero es civil.

これとは逆に、名詞修飾では用いられず、述語としてのみ機能する形容詞はそれほど多くないように思われるが、詳しく調査する必要がある。¹⁰⁾

4. 名詞による名詞の修飾

名詞が名詞を修飾する場合、日本語では(連体)助詞「の」を介して前の名詞が後ろの名詞(＝主名詞、被修飾語)を修飾する。また、スペイン語では de を始めとする前置詞が、日本語とは逆に後ろの名詞を前の名詞に結びつける。

日本語の例から見てみよう。(16)のように意味関係は多様である。

- | | |
|------------------------|---------|
| (16) a. 父のコンピュータ, 会社の車 | [所有・所属] |
| b. 象の鼻 | [部分] |
| c. リオのカーニバル, 火曜日の研究会 | [場所・時] |
| d. 掃除の道具 | [目的] |
| e. 勝利の喜び, 地震の被害 | [理由・原因] |
| f. ガラスのコップ | [材料] |
| g. 言語学の本 | [内容] |
| h. 桜の木 | [種類] |
| i. 議長の土井さん | [同格] |
| j. 宮沢の嘘つき | [罵り] |

寺村(1980:234)によると、このように多様な意味関係は次第に拡大使用され、「明示形式がなくてもネイティブ・スピーカーにはそれと分かるような場合は、両者を結びつけるのに、ただ(連合的)結合を示すだけの機能をもった形式＝ノだけですませる」ようになるという。¹¹⁾

次に、主名詞が動詞派生名詞(被修飾名詞が動詞からの派生、ないしは動詞との連想が容易な名詞)の場合を見てみよう。

- | | |
|---------------------|-------|
| (17) a. 祖父 (*ガ) の散歩 | [ガ格] |
| b. 英語 (*ヲ) の勉強 | [ヲ格] |
| c. 8時 (*ニ) の到着 | [時のニ] |

このようなガ, ヲ, ニ(時)は『文法格』とも呼ばれ、格助詞は義務的に消去されるが、(18)に示されるような『意味格』¹²⁾ は動詞と名詞の関係を明示するために格表示成分が補われなければならない。すなわちそれらを省略するとあいまいになったり、意味が不明になってしまう。

- (18) 米国への出発, 中国からの到来, 理事会との折衝
 5時までの営業, 人工芝での試合 (?人工芝の試合)

それでは、スペイン語ではどうか。(19)に見られるように、ちょうど英語の of と同様に、前置詞の de が多用される。

- | | |
|--|------|
| (19) a. el coche <i>de</i> mi padre 「私の父の車」 | [所有] |
| b. los políticos <i>de</i> la oposición 「野党の政治家」 | [所属] |
| c. el sillín <i>de</i> mi bicicleta 「私の自転車のサドル」 | [部分] |
| d. la catedral <i>de</i> Burgos 「ブルゴスの大聖堂」 | [場所] |
| e. la fiesta <i>del</i> sábado 「土曜日のパーティー」 | [時間] |
| f. molinillo <i>de</i> café 「コーヒーミル」 | [目的] |
| g. víctimas <i>del</i> accidente 「その事故の犠牲者」 | [原因] |
| h. estatua <i>de</i> mármol 「大理石の像」 | [材料] |
| i. libro <i>de</i> lingüística 「言語学の本」 | [内容] |
| j. la ciudad <i>de</i> Burgos 「ブルゴスの大聖堂」 | [同格] |

k. el mentiroso de Miyazawa 「ミヤザワの嘘つき」 [罵り]

このような例を見ていると表している意味関係も日本語と似ていることがわかる。ただ、日本語では「の」が「連体の機能を一手に引き受けているのに対し、」スペイン語では、“de”以外の前置詞も連体的に使えるから、de の「負担はノほど大きくない」と言えるだろう。¹³⁾ “de”以外の前置詞が用いられる例としては, café con leche 「カフェオーレ」, libro sobre lingüística 「言語学に関する本」, estatua en mármol 「大理石の像」, el tren para Barcelona 「バルセロナ行きの列車」, cocina a gas 「ガスレンジ」, hombre a caballo 「馬に乗った男」, cielo sin nubes 「雲のない空」などがあげられるが、その意味で日本語の「の」に比べ “de” が連体の結合子としては度合いが低いことがわかる。

ところで、スペイン語で主名詞が動詞派生の場合も見てみよう。

- | | |
|---|---------|
| (20) a. la llegada del presidente | [主格] |
| b. la destrucción de la ciudad | [目的格] |
| c. la salida al extranjero (desde Madrid) | [着点・起点] |
| d. el viaje en avión | [手段] |
| e. sus relaciones con la familia | [随伴] |

(20a,b) のように主格、目的格の関係には de が用いられる。(20c,d,e) などでは “de” ではなくて、他の前置詞が用いられている。(18)のところで見たように日本語では、「補助の格助詞+の」によって関係が明示された。したがって、「の」はコンスタントに用いられていたが、スペイン語では de が一貫して用いられるようなことはなく、他のより明示的な前置詞(a, desde, en, con, por, para...) に取って代わられる。¹⁴⁾

概して、日本語では「の」を用いることによって名詞による名詞修飾は容易に、かつ生産的になされることはわれわれの日常の言語生活で実感できるところであるが、スペイン語ではずい分事情は異なるようである。高垣(1990)で行われた前置詞の頻度調査を見てみるとこの様子がよくわかる。スペインの週刊誌 Cambio 16 (905号, 1989年 4月 3日, 7-26頁) で(19)や(20)のような連体修飾で用いられる前置詞と文中の副詞句などで用いられる非連体用法の前置詞の頻度を比べてみた。前置詞は “de” 以外にも a, en, por, con, para, desde, como, sobre など比較的頻度の高いものも調べてみた。いま、前置詞ごとの連体機能と非連体機能の比率を示すと(21)のような結果になる。

(21) 前置詞ごとの連体機能と非連体機能の比率

	de	a	en	con	por	para	desde	sobre	...	計
連 体	84.7%	11.5%	10.7%	12.1%	7.8%	4.9%	3.7%	50%	略	46.3%
非連体	15.3%	88.5%	89.3%	87.9%	92.2%	95.1%	96.3%	50%		53.7%

“de”の全用法の中で連体修飾には84.7%，非連体には15.3%の比率が見られる。この前置詞がほぼ連体専用であることが示唆される。また、他の前置詞については逆に連体よりも非連体用法が中心的機能であることも読み取れる。スペイン語の“de”は日本語における「の」ほどではないが、それに匹敵する前置詞であると言えるだろう。

さらに、スペイン語の連体用法の前置詞句については次のような興味深い事実も指摘されている。英語では(22a)のような用法は文法的であるが、それに該当するスペイン語文(22b)は非文となる。英語を先に学んだ者がスペイン語で作文するときに誤り易い点である。¹⁵⁾

(22)a. The book *on* the table is mine.

b. *El libro *en* la mesa es mío.

c. 机の(上の)本はぼくのだ。

このような場合、関係節を用いて *el libro que está en la mesa* と説明的に言わねばならない。しかし、このように *en* 前置詞句が連体修飾できない主名詞にはどのような制約があるのか調べる必要があるだろう。一例を示すと、主名詞が次例のように抽象度を帯びると文法的になることがわかる。しかし、この名詞句も文頭に来なければ (23b)のように非文になる(*de* を用いると両文ともに適格文になる)。

(23)a. La agricultura *en* este país necesita mecanizarse.

「この国の農業は機械化される必要がある」

b. *El economista va a hablar *de* la agricultura *en* este país.

「その経済学者はこの国の農業について話をする」

ところが主名詞が動詞派生名詞の場合は en 前置詞句がより自由に用いられることがわかる。

(24)a. La entrada en el centro a las horas punta es muy incómoda.

「ラッシュ時に中心街へ入っていくのはとても不便だ」

b. ¿Conoces a alguno de los muertos en el accidente de ayer?

「昨日の事故で死んだ人を誰か知ってる？」

このように前置詞句による連体修飾に見られる制限を正確に把握することは今後の興味ある課題になるであろう。

すでに見たように、「の」によって連体修飾による意味の幅が広がっていくと、もはや結合子の「の」を必要としなくなるほど二つの名詞の結合度が増していく。こうして両名詞は「融合してほとんど一語(複合語)化することになる。」(寺村 1980, 235頁)日本語ではこの複合語化が生産的に行われ、電気ストーブ→電気ストーブ, 秋の風→秋風, 子供の服→子供服のような短縮が日常的に見られる。

スペイン語では、この種の造語が活発とは言えないまでも piso piloto 「モデルルーム」, ciudad dormitorio 「ベッドタウン」, coche cama 「寝台車」, niño prodigio 「神童」などの二語による複合語や hojalata 「ブリキ板」, bocacalle 「通りの入口」など一語に融合した複合語などに例示されるように決まればな語形成ではない。¹⁶⁾ 複合語形成は形態論の問題で統語レベルの修飾関係には含めるわけにはいかないが、その延長線上にあることをここで確認しておきたい。

5. 連体詞

ここでは、節が名詞を修飾する連体節について見てみる。大きく関係節と同格節(=内容節)に分ける。

(25)a. 私が新聞で読んだニュース <関係節>

b. 大統領が来日するというニュース <内容節>

(26)a. la noticia que he leído en el periódico <関係節>

b. la noticia de que el Presidente viene a Japón <内容節>

(a) の関係節では被修飾名詞(=主名詞)である「ニュース」と“la noticia”がそ

れぞれ関係節中の述語と何らかの格関係(ここではともに目的格)をもっている。一方(b)文では、連体節はそれで完結していて、主名詞の「ニュース」や“la noticia”の内容を表している。主名詞と連体節の関係は、(a)では「内の関係」、(b)では「外の関係」と呼ばれることがある(寺村 1980 の 237頁以下を参照)。

6. 関係詞

6.1

日本語の関係節では、主名詞と関係節を結びつける目に見える形式がない。¹⁷⁾ また、主名詞と関係節の述語との格関係はさまざまであるが、関係節化すると本来の格助詞が消去する。

- (27)a. 主格 [φスペイン語を学んでいる] 学生
- b. 対格 [学生がφ学んでいる] スペイン語
- c. 与格 [彼がφ花束を贈った] 恋人
- d. 場所 [先週φスペイン料理を食べた] レストラン
- e. 手段 [男がφ島へ渡った] 船

しかし、格助詞が消えると理解が容易でない次のような場合は関係節をつくるのが難しくなる。

- (28)a. 起点 *[学生がφ大学まで歩く] バス停
- b. 所有 *[私がφ名前を忘れてしまった] お客
- c. 随伴 *[私がφよく飲む] 同僚
- d. 理由 *[列車がφ遅れた] 事故

ただし、このような場合でも代用名詞句を補えば理解できる場合が多い。すなわち、(a) では「そこから」、(b) では「その人の」、(c) では「一緒に」、(d) では「それで」が入ると(29)のように文としての適格性が増す。¹⁸⁾

- (29)a. [学生がそこから大学まで歩く] バス停
- b. [私がその人の名前を忘れてしまった] お客
- c. [私が一緒によく飲む] 同僚
- d. [列車がそれで遅れた] 事故

日本語の関係節には(29)の例に見られるように、関係代名詞化されたはずの代用名詞句が残ることがあるところから、英語の関係節におけるような移動が行われていないのではないかという議論がなされる。¹⁹⁾

スペイン語は日本語と違い関係代名詞 *que, el que, el cual, quien*, 関係形容詞 *cuyo*, 関係副詞 *donde, cuando, como* などの形式を介在させる。(30b) の例では *que* の他に、*a quien* や *a la que* などの形式も可能で、それぞれ文体的に使い分けられている。

主名詞の格については、日本語でガ、ヲやニ、デの一部の用法の場合で省略できたが、スペイン語では前置詞は原則的に消去されない。ただし、(30b) のように対格(*que*)については前置詞が省かれることが多いのは例外的だと言える。例を見てみよう。

- (30)a. 主格 *el estudiante [que no trabaja]*
 b. 対格 *la actriz [que vimos ayer]*
 c. 与格 *el chico [al que dieron el premio]*
 d. 内容 *la casa [de la que hablamos]*
 e. 場所 *la casa [en la que (= donde) vivimos]*
 f. 着点 *la casa [a la que vamos]*
 g. 起点 *la casa [desde la que hemos venido andando]*
 h. 方法 *la manera [en que (= como) lo hace]*
 i. 随伴 *el perro [con el que pasea]*

スペイン語では、英語などと同様に関係詞の移動によって関係節が形成され则认为られる。Rivero(1991)の分析によると、主格や対格に見られる *que* は関係詞ではなくて接続詞に相当する補文標識 (*complementante*) であり、前置詞との組合せでできる(30c)以下、すなわち関係節の基底で斜格(=前置詞句)から生じた場合は関係詞であると区別される。²⁰⁾ 斜格・非斜格何れの場合でも関係詞の移動があり、非斜格の場合はその関係詞が消去され、その後補文標識が入って穴を埋めることになる。

ところで、日本語の代用名詞句(29)に似た用法が「口語スペイン語」の関係節においても観察される。

- (31)a. 与格 *Hay mucha gente que no le gusta la política.*

「政治が好きでない人が多い」

- b. 所有格 Tengo una amiga *que sus padres están en España.*

「私には両親がスペイン滞在中のガールフレンドがいます」

- c. 対格 Los gramáticos aconsejan muchas cosas *que nadie las dice.*

「文法家は人が誰も言わないような多くの事柄を忠告する」

- d. 随伴 ?En casa de una mujer *que yo vivía con ella*²¹⁾

「私が一緒に住んでいたある女性の家で...」

(31)の例で、与格(a)と所有格(b)の用法はかなり一般的であるが、対格(c)や随格(d)の例も Cortés (1990) の報告によれば口語ではめずらしくはないことがわかる。

Rivero はこのような代名詞要素残留の例については、関係詞移動が行われていない、そのため空のままの補文標識位置に *que* が入り穴を埋めると考える。これは *que* が二つの節を結び付ける結合機能を持ち、かつ代用表現で先行詞を繰り返すことによって、両者の関係をより明示化しているという Cortés の観察とも一致する。²²⁾

さいごに、日西語対照の視点から見ると、両言語において関係詞の移動が行われなという条件で代用名詞表現が残留するわけであるが、興味深い共通点であると言える。

6.2 関係句＝準動詞および陳述性の弱い動詞による修飾

日本語の連体節の中で(32)のような場合は、前節で見た関係節のような陳述性が感じられない(寺村 1980: 252)。

- (32)a. 団地へ行くバス

- b. 肉を切る包丁

寺村によると「文＝節らしさ」とは(a)主語があり、(b)動詞にテンス性がある、と定義される。(32)の例を見ると、動詞にテンス性が認められないだけでなく、主語がない。すなわち、誰が、とか何が、とかの意識が希薄である、という特徴をもっている。

- (33)a. 彼がいつも電車の中で読む本は...

- b. 何か読む本を...(= 読ミモノ = a book to read)

<文らしさがない> <不定詞>

また、(33a) では主語も時間(通勤時間)もはっきりしているのに対し、(33b) ではそうではなくて「読み物」程度の意味しかなく、これを英語で言えば a book to read, something to read のような不定詞で表現に相当することになる。日本語ではこうした述語が「非陳述形」であることを示す外形的なしるしはないので文脈を手掛かりに判断することになる。

一方、スペイン語には現在分詞、過去分詞、不定詞などの「準動詞形」があって外形で判断できる。準動詞は動詞の非人称形で、それ自体テンスや人称をもたないので関係節と比べて陳述性が弱いと考えられる。

現在分詞 (gerundio) は、英語ほど名詞修飾に用いられない。実際には(34a) のような用法が見られるが、先行詞が事物になると、制限がよりきつくなるようである (Butt & Benjamin 1988: 262)。²³⁾ 文法書などでは関係節を使う方が好ましいとされる (Seco 1972:115、したがって、それぞれ que vendía / que contiene と関係節で表現することがすすめられる)。

(34)a. un chico *vendiendo* postales 「絵はがきを売る少年」

b. ?una caja *conteniendo* libros 「本が入れてある箱」

主名詞は現在分詞に対して、主語の関係にあり、テンスは主節のそれに一致する。²⁴⁾

次に過去分詞は主名詞に性・数一致する。

(35) Las entradas *vendidas* por aquella mujer eran falsas.

「その婦人に売られた入場券はにせものであった」

主文の主語(las entradas)が過去分詞(vendidas)の主語と解釈される(動詞の意味に対しては目的格の関係にあるとも言える)。現在分詞が未完了であるのと違い基本的に完了の意味をもつ。²⁵⁾ また、‘por aquella mujer’ という動作主を除くと(Las entradas *vendidas* eran falsas)過去分詞は形容詞化していると考えられる。

不定詞による連体修飾には主名詞との間につなぎ語(que や前置詞 para, por など) が介し、「～すべき」という義務や必要性などの意味が出る。

(36)a. Tengo mucho *que hacer*.

「私はすることが多い」

- b. Necesito algo *para comer*. 「私は何か食べ物が必要だ」
 c. Quedan muchas cosas *por hacer*. 「すべきことがたくさん残っている」

不定詞と先行詞(主名詞)との間の文法関係では、(36)のように主名詞が不定詞に対する目的語の関係にあることが多い。しかし、関係詞を用いた場合は(37)のようにその他の関係も成りたつ。その場合、関係は関係詞の前に置かれた前置詞によって明示される。²⁶⁾

- (37)a. Busca algo *con que* arreglar el grifo. [手段]
 「彼は蛇口を修理するものを何か探している」
 b. Busca algo *en que* bañarse. [場所]
 「彼は水浴びできるところを探している」
 c. Busca algo *de que* quejarse. [原因]
 「彼は不平をこぼす口実を探している」
 d. Busca a alguien *al que* escribirle. [与格]
 「彼は便りをする相手を探している」

このようにスペイン語では現在分詞、過去分詞、不定詞などいわゆる準動詞形が非陳述的連体節、すなわち連体句として機能し、外形的に保証されていることがわかる。

7. 内容節

関係節や関係句と異なり、連体節が主名詞の内容を表しているような節を内容節と呼び日本語では(25b)、スペイン語では(26b)の例がこれに相当する。²⁷⁾

7.1 日本語の内容節

日本語の内容節(=同格節)を主名詞の意味により分類してみよう(寺村1980; 益岡・田窪 1992)。

- (38)a. 発言: 発言、報告、うわさ、質問、指示...
 b. 思考: 考え、気持ち、想像、希望、決定、疑い...
 c. 事実: 事実、こと、話、例、状況、可能性、記憶...
 d. 知覚: におい、味、音、色、写真、すがた、絵...

(38a) の「発言」の名詞には「発言、報告、うわさ、質問、指示」の他に「指摘、不平、電話、依頼、提案、意見」などがある。「発言」の主名詞は発言の内容節を「引用」するため、(39a) のように「トイウ」が必要である。

(39)a. 政治改革を必ず実行するトイウ発言

b. 政治改革を必ず実行する(トイウ) 考え

c. 18 才人口が減少している(トイウ) 事実

d. 魚が焼けるにおいがする。

(38b) の「思考」主名詞には「考え、気持ち、想像、希望、決定、疑い」、その他、「結論、祈り、決意」などがある。このグループの内容節には(39b) のように「トイウ」が入る場合と入らない場合がある。また、(38c) の「事実」の主名詞グループには「事実、こと、話、例、状況、可能性、記憶」や「経験、仕事、性格」などがある。これらの主名詞は(39c)の例に見られるように話し手の主観的態度が入りこむことが少なく、単なる叙述内容を伝える。そのため「トイウ」を用いることはできるが、主観性が少なくなるほど使われる度合いは小さくなる。さらに、知覚を表す主名詞(38d) には「におい、味、音、色、すがた、絵」や「気配、感触、写真、形」などがある。このグループの内容節は「～ガ..スル/シテイル/シタ」という形をとる。そして(39d) のように、引用の「トイウ」が用いられることはない。²⁸⁾

寺村(1980:258 頁)によれば、「修飾部が独立の文に近いものであるほど、それと主名詞を結びつけるつなぎのことば、「トイウ」‘that’の必要性は高い。逆にそれが、... はっきりと陳述性のない、たんに「コト」を表すだけのものであるときは、日本語では『トイウ』の介入はゆるされ」ない。すなわち、上の(38)の分類では(a)が最も文性、すなわち陳述性が高く、(b)(c)(d)と行くにつれて(40)に示すように次第にその陳述性が低下すると考えている(半叙述名詞については後述)。

(40)	大	←	陳述性	→	小
	発言		思考 事実		知覚 半叙述性

7.2 スペイン語の内容節

それでは、スペイン語の内容節についてはどうか。日本語の分類に基づいて主名詞を同じように分類することが妥当であるのか検討してみたい。その前に、形式的な面

で注意しておきたいことはスペイン語の内容節では主名詞と que節との間に前置詞の de が介入する点である。すなわち la opinión que...「～という意見」ではなくて、la opinión de que... となる。²⁹⁾

日本語の主名詞に倣って(41)のような分類を試みる。

- (41)a. 発言: opinión, comentario, afirmación, rumor, orden...
- b. 思考: idea, sensación, impresión, esperanza, seguridad...
- c. 事実: hecho, posibilidad, miedo, peligro....
- d. 知覚: cara, ojos, ruido, aspecto, aire...

一応 (a)から(d) のように意味に基づいた分類が成り立つ。そこで(a) の「発言」名詞の“opinión”を使った例文(42a) では、従属文は陳述性が高いと考えられる直説法の平叙文がくる。しかし、同じ主名詞でも(42b) のように不定詞も可能である。ところが不定詞は主語を持たないし、時制も持たないという意味で陳述性は低いはずである。³⁰⁾

- (42)a. Tengo (Soy de) la opinión de que el primer ministro debe dimitir.

「私は首相が辞任すべきだという意見をもっている」

- b. Soy de la opinión de castigar a los niños desde bien pequeños.³¹⁾

「私は子供が十分小さいときから罰すべきだという意見をもっている」

- (43)a. Tenía la sensación de que me miraba alguien.

「私は誰かに見られているような気がしていた」

- b. Tenía la sensación de estar mareado.³²⁾

「私は乗り物酔いしているの気分であった」

また(41b) の「思考」名詞も(43)の二つの例文に見られるように節・不定詞両方を取ることができる。さらに(41c) の「事実・可能性」の名詞の場合を見てみよう。ここでも(44)の例に示されるように節・不定詞がともに可能であることがわかるだろう。

- (44)a. No veo ninguna posibilidad de que se realice el proyecto.

「私にはその計画が実現される可能性が見えてこない」

- b. No veo ninguna posibilidad de realizar el proyecto.³³⁾

「私にはその計画を実現できる可能性が見えてこない」

(45)a. Tiene cara de haber llorado.

b. Tiene cara de que había llorado.³⁴⁾

「彼は泣いた顔している」

スペイン語では(41d)の「知覚」名詞までもが(45)のように節と不定詞の両方を許容することは興味深い。ただし、このような「知覚」の主名詞が日本語の(38d)の主名詞に相当するものかどうかについてももう少し検討する必要がある。

寺村(1980: 260頁以下)はさらに、無主語の内容句修飾形式をとる次のような名詞を挙げ、「半叙述の名詞」と呼んでいる。この種の内容句では主格語がふつう現れないで、主文の主体が内容句の主体であると解釈される。すなわち(46b)では「つめをかむ」のは「その娘」である。

(46)a. くせ、習慣、意図、つもり、約束...

b. その娘にはつめをかむ癖がある。

スペイン語でも、これに相当する主名詞グループを設けるとすれば、(47a)のようなものが考えられるだろう。

(47)a. costumbre, hábito, intención, promesa ...

b. La chica tiene el hábito de *morderse las uñas*.

例文(47b)でも“*morderse las uñas*”の主体は“*la chica*”であることが暗示される。このため、*de que* 節というよりは *de* 不定詞が用いられる方が一般的であると言えるかもしれない。³⁵⁾ しかし、このような名詞が不定詞専用でないことは(48)の例文が成り立つことから理解できる。ただし、“*comen*”の主語は主文の主体「私」とは異なっている。

(48) No me gusta el hábito (la costumbre) de que comen con las manos.

「私は彼らが手で物を食べるという習慣は好きではない」

このように、スペイン語の主名詞の意味により *de que* 節を取りやすいか、*de* 不定詞を取りやすいかを調べ、陳述性の階層を設定しようとしたが、その試みにはムリがあることが判明した。実際には、たいていの主名詞が節と不定詞の両方をかなり自

由に取ることができるためである。こうした日西語の対比から、日本語には有効であった(40)の階層はスペイン語にはうまく当てはまらないことになる。³⁶⁾

7.3 それでは、スペイン語の内容節を陳述性の大小で分類するときには有効な概念はあるのだろうか。今後の詳しい研究をまたねばならないが、ここでは文のモダリティを直説法と接続法との対立の中で捉え、前者を「陳述」、後者を「命題」と関連づけようとする福畠(1990), Fukushima(1990) の考え方を示しておこう。

文は「命題+陳述」から成り、「命題」は客体的意味、「陳述」は命題に対して話者が抱いている言表態度をさすと仮定する。そうするとスペイン語の従属節は、命題性の高いものと、陳述性が高いいわば主節的な働きをするものとに分けられると言う。

(49)a. Deseo que venga. 「私は彼が来ることを望んでいる」

陳述 命題

b. Creo que viene. 「私は彼が来ると思う」

陳述 陳述

(49a)では「彼の来訪」という観念が文の一素材として従属節に表現されているが、(b)では「彼は来る」という文に匹敵する、まとまった陳述を成していると説明される。そこで、スペイン語では、「陳述性の高い節は直説法で表され、命題性の高い節は接続法で表される」という仮説が成り立つ。このような考え方はTerrell & Hooper (1974) で提案された「主張」(assertion)と「非主張」の対立などと相通ずるところがある。³⁷⁾

いま、この仮説に基づいて内容節を検討してみよう。(49)のような文の従属節で用いられた叙法は主動詞の名詞化が行われても受け継がれることがわかる。

(50)a. el deseo de que venga 「彼に来てほしいという願望」

b. la creencia de que viene 「彼が来るという信念」

陳述性の高い内容節は(50b) 以外にも(51)のような例がある。³⁸⁾

(51)a. Tengo la seguridad de que te llamarán.

b. Tenía la sensación de que me miraba alguien. (=43a)

- (i)a. Los incas valientes no resistieron a los conquistadores.

「勇敢なインカは征服者に抵抗しなかった」

- b. Los valientes incas no resistieron a los conquistadores.

「インカは勇敢なので征服者に抵抗しなかった」

のように名詞に対する位置で解釈が変わる場合がある(Luján 1990, 81頁)。

9)類例には次のようなものがある。

semejante persona 「そのような」 / *dos objetos semejantes* 「似た」

varias páginas 「数ページ」 / *páginas varias* 「多様なページ」

el mismo hombre 「本人」 / *el hombre mismo* 「同じ人」

bastante dinero 「かなりの」 / *dinero bastante* 「十分な」

10) (15)の類例には次のようなものがある。

- (i) *el presunto asesino* 「殺人容疑者」 / **el asesino es presunto*.

la mera pregunta 「単なる質問」 / **La pregunta es mera*.

- (ii) *la ciudad natal* 「生まれた町」 / **La ciudad es natal*.

los obreros metalúrgicos 「冶金工」 / **Los obreros son metalúrgicos*.

- (iii) *la historia universal* 「世界史」 / **La historia es universal*.

el ataque cardíaco 「心臓発作」 / **El ataque es cardíaco*.

el Perú meridional 「南部ペルー」 / **El Perú es meridional*.

Luján (1980) 220~223 頁。また、Zierer(1974) 10, 30~31頁も参照。

述語としては用いられるが、名詞修飾では無理なものとしては次例が思いつく。

- (iv) *Está bueno*. 「健康」の意味で → **un hombre bueno* <善良な男>

La chica está roja. 「赤面している」 → **la chica roja*
<赤い服の娘>

el chico está blanco. 「青い顔をしている」 → **el chico blanco*
<白人の>

どれも形容詞の持つ複数語義のうちの食い違いによるもの(例えば、*bueno* の連体修飾では「健康な」とはならず「善良な」の意味しか出ない)で、連体修飾機能を持たないというわけではない。

11) 「母の写真」(動作主・対象・所有)のように曖昧な例もある。

12) 杉岡(1989) 167, 184 頁参照。

13) 寺村(1980)234 頁。

14) 高垣(1990) 172頁。

15) 高垣(1993)参照。

- 16) 高垣(1992) 20, 24 頁参照。
- 17) 久野(1973:150頁)によると「日本語には、関係代名詞と呼び得る形式がない」。
三原(1992)90頁も参照。
- 18) 井上(1976) 184~6 頁、井上(1978) 80-88, 222-224頁、三原(1992) 86~7 頁を参照。
- 19) 久野(1973)151頁。移動を考えないその他の言語事実についても久野(1973)19章参照のこと。三原(1992)も「日本語関係節において空演算子移動が生じていないと考える」と述べている(100頁)。
- 20) Rivero (1991) の分析の概略は次のようである。
 - (i)a. El profesor que habla es sociolingüista.
「話している先生は社会言語学者である」
 - b. El profesor que visitamos es sociolingüista.
「私たちが訪ねる先生は社会言語学者である」
 - (ii) Tengo el arma con que asesinaron a Juan.
「私はそれでホアンが殺された武器をもっている」

(i)の主格(a), 対格(b) は非斜格 (no oblicuo)で que をとる。(ii)は前置詞句、すなわち斜格で、con que, con quien, con el que, con el cual などいくつかの形式をもつ。関係節は次の書き換え規則で生成される。

 - (iii)a. NP → NP S'
 - b. S' → COMP S
 - c. COMP → ±WH whP

±WH には補文標識 que が入り、wh P は従属節から WH 移動により移動されてきた疑問詞あるいは関係詞の着地点となる。二重 COMP の±WH と wh P の二つの位置が共に空になったり、共に埋められることのないように表層のフィルターが設けられている。(i) では関係節の主語位置、目的語位置からいったん wh P の位置に移動するが、非斜格であるために消去する。その穴を埋めるために ±WH 位置に que が挿入される。一方、斜格の(ii)のような場合は関係詞 con que が移動した COMP の wh P 位置に残り、補文標識の que は挿入されない。
- 21)(31) の (c)(d) は Butt & Benjamin(1988)377, 380頁の例文。もう少し挙げると、
 - (i)対格 a lo mejor hay alguien *que* *la* conoces Cortés (1990:444)
 - (ii)与格 *Soy un emigrante *que* siempre *me* han preocupado los problemas de la emigración (= al que siempre han

preocupado los problemas)

(ii) はButt & Benjamin (1988: 380) で誤った用法として例示されているものであるが、現実には用いられていることを暗示する。

- 22) 「“que”が二つの節の結合機能をもち、代用語で先行詞を明示するという役割分担が見られるのではないか」(... mientras esté [= relativo] se limita a cumplir la función de nexos, queda a cargo de la forma redundante la identificación del antecedente.” Cortés 1990:440-441)

- 23) 公式表現などでは次のように「もの」の主名詞にでも用いられることがある。

Hoy publica el Boletín una orden prohibiendo (= que prohíbe) la fabricación de estos juguetes. 「『官報』はこのような玩具の製造を禁ずる通達を公示する」(Seco 1972 :115)

- 24) 現在分詞を形容詞として用いる場合は participio de presente を用いる。

Miro un árbol *floreciente* (*floreciendo). 「咲きつつある花を見る」
un problema *inquietante* 「気をもませる問題」、una respuesta *convinciente* 「納得させる答え」(Butt & Benjamin 1988:268)など。

- 25) 過去分詞の能動/ 受動の意味は動詞による(Gili Gaya 1961:199)。

(i) 他動詞は受け身になる。

una casa edificada con ladrillos 「レンガで建てられた家」
persona amada 「愛されている人」

(ii) 自動詞・再帰動詞は能動。

un pájaro muerto 「死んでいる鳥」, las hojas caídas 「落ち葉」
el delincuente arrepentido 「悔いている犯罪者」

(iii) 両方ある場合(主名詞がもの場合は受動、人の場合は能動)。

el problema resuelto 「解決した問題」/ el hombre resuelto 「決然とした人」

un libro leído 「読んだ本」 / una persona leída 「博識の人」

- 26) 「不定詞関係節」“Infinitive relatives” (Whitley 1986: 298) と呼ばれる。目的語以外の関係としては、No hay nadie con quien hablar. 「話し相手がない」(Butt & Benjamin 1988:379); No había (persona) de quien fiarse. 「信頼できる人がいなかった」; una pluma con que escribir 「書けるペン」など。主語の関係は成り立たない。¿Has encontrado un testigo que declarar? 「供述してくれる証人を見つけた?」(Rivero 1991:53, (53a)).

- 27) 外の関係による連体節では、修飾部は主名詞の内容を説明する。大きく内容節と相対名詞修飾節(「食べる前に手を洗いなさい」の「前」などを含む連体修飾節)

の二つに分類できるが、ここでは相対名詞修飾節についてはふれない。

- 28) 他にも「ガラスが割れる音がした」「子供が笑っている写真が置いてあった」(益岡・田窪 1992: 204)など。

- 29) Hernanz y Brucart(1987) は格理論における格付与のために前置詞が必要になると述べている。関係節との構造の差は次のように示されている。

(i)a. $[_{SN} \text{ el libro } [_{O} [_{COMP} \text{ que}_1] [_{O} \text{ Luis compró } t_1]]]$

b. $[_{SN} \text{ la idea } [_{SP} \text{ de } [_{O} [_{COMP} \text{ que}] [_{O} \text{ Luis viniera}]]]]$ (p.157)

また、内容節の主名詞は「内部項を下位範疇化させる名詞」(“sustantivos que subcategorizan un argumento interno”)であり、多くは動詞と関連した名詞 (temor, intención, prueba, demostración...)であるが、そうでない場合もある (miedo, seguridad...)と説明している (p. 159)。Plann(1985)も参照。

- 30) 「修飾部が独立の文に近いものであるほど、それと主名詞を結びつけるつながりのことば、「トイウ」‘that’の必要度は高い。逆にそれが、次に見るようにはっきりと陳述性のない、たんに「コト」を表わすだけのものであるときは、日本語では「トイウ」の介入は許されず、英語では内容が that 節では表わせず不定詞か前置詞句の形をとる」(寺村 1980: 258頁)。

- 31) 他に、Mi comentario de que él quiere ser profesor es verdad. 「彼が先生になりたいという私の発言は本当だ」/ Mi comentario de ser presidente será posible si todos me apoyan. 「私が会長になるという発言は皆が私を支持してくれれば可能性があるだろう」など。また、Me han dado orden de que calle (de callar). 「私は黙るように命じられた」は接続法をとる節でも不定詞をとる場合も同じ意味で用いられる。

- 32) 他に Tengo la seguridad de que te llamarán. 「君に電話があることは確かだ」/ Tengo la seguridad de conseguirlo. 「ぼくは確かにそれを手にいれる」なども節と不定詞の両方が可能である。

- 33) 類例として El hecho de que venga a verme (/de venir a verme) significa que me tiene afecto. 「彼が私に会いにやってくるというコトは私に愛着をもっているという意味なんだ」などがある。ここでも節と不定詞が用いられている。

- 34) もう少し例を挙げておこう。

(i)a. Tiene aire de ser de buena familia (de que es de buena familia).

「彼は良家の出である雰囲気をもっている」

b. Tenía ojos de aguantar (de que aguantaba) lo que le echasen.

「彼は自分の身に降りかかって来ることはなんでも耐えるというまなざしを

していた」

c. Tiene cara de comerlo todo (de que va a comerlo todo).

「彼は何でも食べてやるぞという顔をしている」

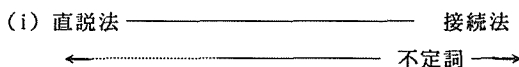
d. La cueva ofrecía el aspecto de haber sido abandonada (de que había sido abandonada) un cuarto de hora antes. 「その洞窟は15分前に人が出ていったという様子であった」

e. Se oía de vez en cuando un ruido como de que alguien entrase (como de cerrar y abrir la puerta). 「誰かが入るような(ドアが開閉するような)物音が時々聞こえていた」

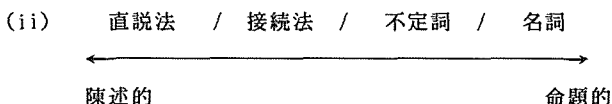
例文の多くは Skydsgaard(1977)をベースにマドリード出身のスペイン人 Vicente Fernández 氏の協力を得て作文したものである。

- 35) 英語では of ～ (ing)をとる habit, custom, experience, business, intention や to～ (不定詞) をとる intention, promise, attempt, tendency, desire, necessity など「半叙述性」の名詞があるという(寺村 1980:261-2頁)。
- 36) 寺村(1980: 256頁以下)は英語のケースを取上げ、“story, talk, prediction”のような「発話」に関する名詞、“idea, mood, understanding”など「思考」の名詞の場合は that 節を取り、“fact, possibility, effect”など「コト」の名詞の場合は that 節と不定詞や前置詞句の両方の可能性があり、“noise, sight, feeling”など「知覚」名詞の場合は that 節ではなく、of～ing を取るという傾向が認められる。さらに、注35の「半叙述性名詞」も that 節が用いられない、と記述している。
- 37) Fukushima(1990)169 頁。
- 38) (51a)は注32の例文と、(51b)は(43a)と同じものである。どちらも不定詞が可能である。
- 39) (52a)は(44a)と、(52b)は注31の例文と同じものである。どちらも不定詞が可能である。(52c)も Tengo miedo de llegar tarde. 「私は遅刻しないかと心配だ」のように不定詞も可能である。(52)の例文は Terrell & Hooper(1974)の分類で言えば、それぞれ「疑惑節」「命令節」「評価節」で、従属節に接続法を取るものの典型である。
- 40) 日本語では主語と時制の有無で陳述性の大小を仮定したが、スペイン語ではそれに対応する節と不定詞の対立がそれほど鮮やかに出ないばかりか、(51)(52)の内容節ではすべてそれに対応する不定詞構文に置き換えられることがわかった。そこで、このような de que + 節と de + 不定詞は対立ではなく、平行の関係であ

るのではないかと考えられる。出口(1982)で展開されている議論はこのような考え方を裏付けるものであると言えよう。出口は資料に現れる不定詞形を、仮に支配動詞が que 節を取るとすれば、直説法、推定法(いわゆる未来・過去未来時制を叙法として捉えている)、接続法のどれに匹敵するか判断し、その頻度を求めた結果、「従属節の法分布において、定形の8割以上が IND(直説法)で用いられるのに対し、不定詞のベースにある命題の法は、逆に、9割近く非直説法である」ことが判明した。そこで、「不定詞が叙法を mark すると主張するのではなく、その背後にある法環境が陰否的であって、もし主語・時制の明示が必要ならば、接続法形動詞で現れるような法性が陰在する傾向が強力である」と指摘しさまざまな証拠から論証している。この考え方は(i)のように図示できる。



一方、福寫(1990)は定形と非定形の対立関係を解消し、「直説法と名詞を両端とする推移関係」の中に不定詞を位置づけ(56頁)、(ii)のようにまとめている。



[参考文献]

- Butt, John & Carmen Benjamin(1988) *A New Reference Grammar of Modern Spanish*. Edward Arnold, London.
- Cortés R., Luis (1990) "Usos anómalos del relativo en el español hablado", *Revista Española de Lingüística*. 20:2.
- Demonte, Violeta(1977) *La subordinación sustantiva*. Cátedra.
- Ezawa, Terumi (1991) "Los demostrativos españoles y japoneses: estudio contrastivo" *Lingüística Hispánica*, 14, 49-67.
- Fukushima, N. (1990) "Sobre la cláusula superregente" *Indicativo y Subjuntivo*, I Bosque 編, 164-179. Taurus Universitaria. Madrid.
- Gili Gaya, S. (1961) *Curso Superior de Sintaxis Española*. Vox, Bibliograf.

- Hernanz, M. Ll. & Brucart, J.M. (1987) *La sintaxis I. Principios teóricos. La oración simple*. Editorial Crítica.
- Luján, Marta (1980) *Sintaxis y Semántica del Adjetivo*. Cátedra.
- Plann, Susan (1985) "Substantive: A neutralized syntactic category in Spanish", *Generative Studies in Spanish Syntax*, Bordelois, I. et al. (eds). Foris Publications.
- Rivero, María Luisa (1991) *Las construcciones de relativo*. Taurus Universitaria.
- Seco, Manuel (1972) *Gramática Esencial del Español: Introducción al Estudio de la Lengua*. Aguilar.
- Skydsgaard, Sven (1977) *La combinatoria sintáctica del infinitivo español II*. Castalia.
- Takagaki, T. (1984) "Subjunctive as the marker of subordination", *Hispania*, 67, 248-256. AATSP.
- Terrell, T. & J. Hooper (1974) "A semantically based analysis of mood in Spanish" *Hispania*, 57, 484-494. AATSP.
- Whitley, M. Stanley (1986) *Spanish/English Contrasts*. Georgetown Univ. Press.
- Zierer, Ernesto (1974) *The Qualifying Adjective in Spanish*. Mouton.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 上』大修館書店。
- 井上和子 (1978) 『日英対照日本語の文法規則』大修館書店。
- 江澤照美 (1991) 「スペイン語と日本語の指示詞の使われ方―聞き手の関与性をめぐって」関西スペイン語学研究会月例会 (10月20日 神戸市外国語大学)
- 太田 亨 (1992) 「日本語とスペイン語の『談話場』の特徴」日本語教育 77, 89-102.
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店。
- 佐久間鼎 (1957) 「修飾の機能」『日本文法講座』第5巻。明治書院。
(『日本の表現の科学』恒星社厚生閣 (1967)に再録)
- 杉岡洋子 (1989) 「派生語における動詞素性の受け継ぎ」久野・柴谷編『日本語学の新展開』くろしお出版。
- 高垣敏博 (1984) 「現代スペイン語における複合語の構成」『京都産業大学論集：外国語と外国文学系列』第11号, 93-137.
- 高垣敏博 (1990) 「スペイン語前置詞句の連体機能について：スペイン語の“de”

- と日本語の「の」を中心に」『京都産業大学論集：外国語と外国文学系列』第17号，158-197.
- 高垣敏博(1992)「語形成の日西対照」『日本語とスペイン語との対照言語学的研究：中間報告』国立国語研究所，19-40.
- 高垣敏博(1993)「EN の前置詞句の連体機能について：*libro en la mesaをめぐって」第13回関西スペイン語学研究会夏期セミナー(SELEK, 7月26-27 日，富士研修センターに於ける発表).
- 寺村秀夫(1980)「名詞修飾部の比較」『日英語比較講座 第2巻 文法』(国廣編)，221-266. 大修館書店.
- 寺村秀夫(1975, 1977, 1977, 1978) 「連体修飾のシンタクスと意味 1~4 」『日本語・日本文化』4~7 号. 大阪外国語大学留学生別科.
- 出口厚実(1982)「スペイン語における叙法と法性」『大阪外国語大学学報』第56号，1-16
- 林 四郎(1983)「代名詞が指すもの・その指し方」水谷静夫編『朝倉日本語新講座5 運用1』1-45. 朝倉書店.
- 福寫教隆(1990)「イスパニア語の叙法対立に関する一試案」『神戸外大論叢』第41巻2号 51-66.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版.
- 三上 章(1974)『文法小論集』くろしお出版.
- 三原健一(1992)『時制解釈と統語現象』くろしお出版.
- 森田良行(1967)「指示語の指導」『講座日本語の文法4 文法指導の方法』明治書院，52-68.

判断・ムード・（疑似）関係節

ー日本語・スペイン語・英語の場合ー

Juicio, modo y pseudo-relativos:

un estudio modelo contrastivo entre

el japonés, el español y el inglés.

三原 健一

Ken-ichi MIHARA

キーワード：（疑似）関係節、 概言のムード表現、 モダリティ、 判断確定性、
文末表現

本稿で分析の対象とする構造はいわゆる複合名詞句である。すなわち日本語に関しては、名詞に文的な修飾部が付加され全体として大きな名詞句を構成する、「太郎が_{pro}読んだ本₁」のような構造である。文的修飾部となり得るものは、上例のように節中に主名詞と同一指示となる空所（*pro*で表記する）が存在するものの他、空所が介在しない「太郎が来るという噂」のようなものがあるが、このうち本稿で扱うのは前者の構造のみである。前者は、一般的には英語などの制限的關係節と平行的に論じられることが多いが、それとは異なる構造を有すると考えられるので、日本語については「疑似」の名を冠する（詳しくは三原(1992)）。他方、スペイン語・英語の場合は、關係節という従来の理解に変更を加える必要はない。表題において「疑似」を括弧に入れて示したのはそういう理由による。

1. 問題の所在

疑似關係節がその文性において独立文と異なることは、後者で許容される終助詞や命令形が、前者では許容されないという事実を考えるだけでもそれと知れる（「*太郎が買ったね本/*お前が買え本」）。この説明を文の階層構造（南(1974)、益岡(1987)、田窪(1987)）に求め、例えば、疑似關係節は聞き手めあて要素を含み得ない階層類であるとすることは可能である。しかし、その階層類がなぜ聞き手めあて要素を許さないのかという疑問に対しては、別個の説明が要求されよう。これは記述的説明を超えた原理的説明でなければならない筈である。さらに後に見るように、聞き手めあてではなく話し手めあて要素に関しても、疑似關係節中で許容されるものとされ難いものがある。このことを根拠に文の階層を精密化し、疑似關係節が選択する階層を唯一的に特定する方法論も可能であろう。しかしながら疑似關係節中での要素の生起は、そのように厳密な類所屬的な概念ではなく、もっと滑らかでスペクトルの推移する原則によって規制されていると思われるのである。このことは議論が進む中で明らかになるが、その前に、本稿が解決したい問題の所在を明確にしておかねばならない。

高度に膠着的な言語である日本語において、動詞語幹と終助詞の間には助動詞類が一定の相互承接を遵守した上で点在し得る他、時制辞や、丁寧体などの文体的要素が介入することも出来る。これら全てを内包する連鎖はあり得ないだろうが、「（今頃は太郎も）叱られ始めているでしょうね」などは十分に可能である。このような連鎖において語幹に近いものほどコト性が強く、文末に近いものほどムード性が高いということ（寺村(1992)）は、確かに直感的にも納得のゆくことである。しかし残念なことにそれは、疑似關係節中での生起を正しく予測するものではない。寺村(同書:246)が詳細に考察している相互承接順序において、様態のヨウダ・伝聞のソウダ・説明の

ノダは同一箇所配置されるが、このうち疑似関係節中に収まるのはヨウダのみである（「子供が描いたような絵/*警察がマークしているような男/*彼が紛失してしまったの書類」）。また、純粹に聞き手めあてであるという点においてこれらの助動詞よりムード性が高いと思われる丁寧体は、疑似関係節中から除外されるものではない（「本機に御搭乗なさいませお客様」）。さらに、寺村（同書：269）が陳述度という概念でまとめている階層（1）も、疑似関係節中への生起と直接的には連動していない（（1）において右に行くほど陳述度が高くなる）。

- (1) ラシイ ~ダ 丁寧体 終助詞
 ダロウ (~ノダ/
 カモシレナイ ~ハズダ
 意向形 など)
 推量形 命令形

上で見たようにノダは確かに収まらないが、ハズダは、「月末に入るはずの金」のように可能であるからである。そしてここにおいてさらなる問題が生じてくる。

問題はこうである。寺村（同上）では、伝聞のソウダは内の関係に立つ連体修飾節（本稿での疑似関係節）中に収まらないが、ダロウやラシイは収まるようであるとして次の例が挙げられている。（以下、引用した例文についてはその出所を記すが、漢字・句読点などを原著者の意図が損なわれない限りにおいて改めることがある。）

- (2) a. *面白いような映画
 b. 彼が見ているだろう月
 c. 彼が書いたらしい手紙（寺村（1992:249-250））

(2a)があり得ない連鎖であることは言うまでもない。しかし(2b,c)は本当に可能な表現であろうか。筆者の内省では(2b)は相当に落ち着いた悪い表現であり、(2c)は(2b)に比べると容認性が高いが、文章化するに際しては避けたい表現である。他方、奥津（1974）は次の例を挙げこれらを可能な表現であるとしながらも、日本語として馴染まないと判断する話者もいるようだと言っている。(3c)については問題がないが、(3a,b)に関する筆者の判断は対応する上例と同様である。

- (3) a. これから起こるだろう悲劇
 b. アンデスに墜落したらしい飛行機
 c. もう会えないかもしれない夫（奥津（1974:55））

先の(1)では伝聞のソウダが示されていないが、恐らくラシイ・ダロウなど同一の箇所配置されるものと思われる。しかしそうすると、陳述的に同一の範疇に属す要素が異なった振舞いを見せることになる。また、既に記したようにそもそも丁寧体やハズダが可能であることから、結局のところ陳述度も、疑似関係節中における要素の

生起を統一的に説明する原理とはなり得ないということになる。寺村は慎重に、ムード性の高低あるいは陳述度が連体修飾節における要素の生起と関連しているとは述べているが、これらのみがそれを規制するとは言っていない。この言明を筆者なりに解釈すると、ムード性あるいは陳述度の度数を細密化してゆくことによって疑似関係節中での要素の生起を規定することは、基本的に正しい選択ではないということである。そしてそもそもムード性や陳述度に関して、そのように細密に度数化することは不可能であると思われるのである。

他方、奥津は詞と辞の峻別こそが重要であると明示的に述べている。これが統一的説明原理となり得るならば、疑似関係節における上述の問題は解決することになる。が、問題はそう単純ではない。奥津は「連体修飾節中に含まれるかどうか」を詞と辞の峻別に関わる規準の一つとしている。すなわち、含まれるものを詞、含まれないものを辞とするのである。もっとも奥津は、詞・辞という概念を時枝文法におけるそれと全同の意味で用いている訳ではないが、そのことは本稿での議論にとって重要な点ではない。問題は、連体修飾節内に含まれるかどうかという規準を「あらかじめ」設定し、含まれないものを辞と規定する点にある。そのような方法論においては、ある要素が含まれない場合、それはその要素が辞だからという説明になるが、なぜ辞ならば含まれないのかという本質的説明は依然として得ることが出来ない。そしてそもそも、本質的説明が得られないばかりか、このような方法論は循環論に過ぎないと思われる。さらに、奥津が判断詞と呼んでいるハズダ、ラシイ、カモシレナイ、ダロウ等は、先に記したように連体修飾節内で一律に許容される訳ではない。奥津の説明に忠実に従うと、連体修飾節内においてこれらを許容する話者にとってはそれらは詞であり、許容しない話者にとっては辞であるということになろう（奥津(1974:56)）。これが説得的な議論がどうかについての判断は読者に委ねたい。

上述のような問題点を背景として本稿では以下まず第一に、日本語における概言のムード表現に関するデータとその文法性判断を網羅的に記述し、その観察から「判断確定性」という概念による統一的説明を抽出する。第二に、スペイン語関係節では日本語疑似関係節とは異なった構図が見られることを述べ、この相違が日西語における判断様式の差から導かれることを論じる。そして第三に、英語がスペイン語と類似する様相を呈することを見る。判断確定性という統一的説明原理は、日本語において説明のムード表現・聞き手めあてのムード表現に関しても等しく適用されると思われるが、これら諸点についての検証は別稿に譲る。

2. データ

まずダロウから始めよう。筆者の内省、及び筆者が行なったインフォーマント調査によると、ダロウを内包する疑似関係節の相対的容認性は低い。

- (4) a. *?永遠に解決しないだろう問題
- b. *?僕が将来結婚するだろう女性
- c. ??日本人ならば誰でも感じるだろう不快感
- d. ?今頃はアラスカの上空を飛んでいるだろう村瀬君

ただし(4c)は(4a,b)に比べて微妙にはあるが響きがよく、事態の生起が話者によってほぼ確実視されている場合には容認性が向上するようにも思える。また(4d)のように底の名詞を固有名詞とし、英語の非制限的關係節に対応する構造にしてみると容認性がさらに高くなるようである。ここにおいて興味深いのは、ダロウをデアロウに換えると文法性が遙かに向上する、あるいはより正確に言えば完全に文法的となるということである。これらの諸点については第4節で論じる。

次にラシイとヨウダ・ミタイダは共に、現実世界における観察や情報から推論によって得た知識を述べるという点においては共通しているが、文法性に関しては異なった様相を見せる。(6a,b)でのヨウダ・ミタイダは、「山田君自身が噂を流しているようだ」「藤田君が大学に合格したみたいだ」という、いわゆる蓋然性のヨウダ・ミタイダであり、(11)で見る様態のそれとは異なることに注意されたい。

- (5) a. ??旧ソ連が参加するらしいオリンピック
- b. ??チョムスキーが雑誌に発表するらしい新理論
- (6) a. *山田君自身が流しているような噂
- b. *藤田君が合格したみたいな大学

ただし(5a,b)についてはもう少し穏やかな非容認性であると判断する話者もいるようである。また、「旧ソ連も参加するらしいオリンピック」とすると容認性が向上するという事実もある（その理由については後述）。

カモシレナイとニチガイナイは共に疑似関係節中に生起可能なようである。

- (7) a. 犯人が立ち寄るかもしれないアパート
- b. 倒産するかもしれない会社
- (8) a. #犯人が立ち寄るに違いないアパート
- b. #倒産するに違いない会社

ただし(8a,b)については、文法的観点から言えば適格であるかもしれないが、文体的には完全であるとは言い難い。注意深く推敲しながら文章を書く場合、例えば「きつと犯人が立ち寄ると思われるアパート」等のようにするのはないかと思われるからである。ダブル・クロスの表示はその意味で付けた。

次に伝聞のソウダは既に(2a)で観察したように、(9)において、連体形にしても疑

似関係節中に収まらない。この点において伝聞のソウダは、文法的となる(10)の予想・予感のソウダと顕著な対照をなす。また(11)に見るように、様態のヨウダ・ミタイダも何ら問題はない。もっとも実例にあたってみると、様態のヨウダなのか蓋然性のヨウダなのか明確に区別出来ないものがあることは認めておかねばならない。

- (9) a. *面白いような映画
 b. *警察がマークしているような男
- (10) a. 鈴木が好みそうな女
 b. マイルスが録音しそうでない曲
- (11) a. 子供が描いたような絵
 b. ミミズが這ったみたいな字

ハズダに関しては、ワケダ・ノダ等との形式上の類似(～ダで終わる)、あるいはワケダが内在する推論過程との部分的類似性から説明のムードとする立場もある(寺村(1984))。また仁田(1991:65)ではハズダは、「ある推論過程のもとでの確言」とされている。後に見るようにハズダは、確かに心理的には確言としたい態度を表明するが、述語の終止形、あるいは名詞・ナ形容詞における文末のダ語尾が典型的に示す確言には至り着いていないと思われるので、本稿では概言のムードとして分類する(益岡(1991)、益岡・田窪(1992)も参照のこと)。そしてハズダは疑似関係節との親和性を示す。

- (12) a. 月末に入るはずの金
 b. どう転んでも勝てたはずの試合

以上の観察をまとめると次のようになる。

OK	ソウダ(予想・予感)、ヨウダ・ミタイダ(様態)、デアロウ、ハズダ、カモシレナイ
OK#	ニチガイナイ
??	ラシイ
*?	ダロウ
*	ヨウダ・ミタイダ(蓋然性)、ソウダ(伝聞)

3. 判断確定性

第2節で見た現象はなぜ起こるのだろうか。まずダロウから始めよう。ダロウについては近年活発な議論が行なわれているが（森山(1989, 1992)、益岡(1991)、仁田(1991)等）、その中で本稿の分析にとって重要なのは森山による提言である。森山は、ダロウの推量としての用法は派生的なものであり、ダロウが有する本質的意味は「判断形成過程にあること」とした。判断形成過程とは、推論による判断を完了させ、結論に至り着こうとする精神の営みを示す概念である。従来から指摘されてきたようにダロウは、話者による主観的判断を示すにもかかわらず疑問形を持ち、この点において他の主観的判断のムード表現とは振舞いが異なる。

(13) a. 彼は来るだろうか？

b. *彼は来るらしいか？

c. *彼は来るかもしれないか？（森山(1992:65)）

話者による主観的判断は疑問形で聞き手に問いかけることが出来ない、という特徴付けは正しいと思われるが、そうすると、ダロウが示す特異な振舞いに対して明示的な説明が要求されることになる。ここにおいて重要なことは疑問文中のダロウが、必ずしも聞き手に対して情報提供を要求していないという点である。例えば話者Aが、Bが時間を知らないことを知っている場合でも、次の会話が成立し得る。

(14) A: 今何時だろう？

B: そうだね、今何時だろう。（同上、72頁）

森山が言うようにダロウが、主観的判断に未だ至り着いていないことを表示する形式であるとする、形成過程にある話者の判断を聞き手にも提示し、聞き手の意見を求めようとすることは可能であろう。例えば(13a)においては、話者は「彼が来る」という結論に達していないが、途上にある判断形成をいわば生のままの形で聞き手に放出しているのである。従って、判断形成過程を聞き手と共有しようとする(14)のような会話も十分にあり得るということになろう。さらに談話現場において、聞き手をも巻き込んで共通の判断形成過程を達成しようとする、ダロウの確認的用法も同列に論じることが出来よう。

(15) ほら、おいしいだろう。（同上、65頁）

ダロウの本質的意味機能を判断が未だ形成途上にあることに求めようとする森山の議論はおそらく正しいと思われる。判断形成過程にあるということは、すなわち判断が未だ確定していないと言うに等しいが、疑似関係節におけるダロウの非容認性の原因はここにあると思われるのである。判断が確定的であることを示す確言のムード表現が完全に文法的な連鎖を作るからである。

(16) a. 来週から始める仕事

b. 去年書いた本

以上のことに鑑みここで判断確定性の概念を提出したい。判断確定性とは、話者による判断が完全確定であるか、完全未確定であるかを両端として、その間にスペクトルの的に推移する判断の度合である。スペクトルの的に推移することにより、判断確定性は範疇化されないものとなる。詞・辞といった範疇化され得る概念では決してないのである。この概念化に従えば、判断確定性が最高次である確言のモード表現は疑似関係節中に生起可能であり、概言のモード表現は判断確定性が低くなるにつれて生起が困難になるということになる。ダロウの場合について言えば、判断形成過程が完了していない、従って判断確定的ではあり得ず、疑似関係節中に生起出来ないという説明の道を辿ることになるのである。ここで注意する必要があるのは、判断確定性が、必ずしも事態の（非）成立に関する蓋然性の度合と一致するとは限らないことである。例えば「犯人が立ち寄るかもしれないアパート」において、事態の成立に関わる蓋然性は決して高いものではないにもかかわらず、疑似関係節中にカモシレナイが生起可能である。これは後に述べるように、カモシレナイに関わる判断が、可能性の存在ということに関しては確定的であることによる。それに対して「*?犯人が立ち寄るだろうアパート」においては、「立ち寄る」という事態の成立に十分傾斜した判断が下されているにもかかわらず、疑似関係節との相性が悪い。一般的に言って概言のモード表現に関する研究において、事態の成立に関する蓋然性と、判断に関する蓋然性が時として混同されることもあったように思う。蓋然性という概念はあくまでも話者による判断に限定して用いられるべきである。そのことはここで明確にしておきたい。

4. デアロウ

では、デアロウと疑似関係節の相性がよいのは一体なぜなのだろうか。意味的には共通する部分が多い筈であるのに、である。従来ダロウ・デアロウは各々、口語的・文語的というスタイル上での違いという観点からのみ捉えられてきたように思う。寺村(1984)でも、デアロウはダロウよりも硬い表現、あるいは文語的な形式であるとされ、使い方には差がないようだという記述がなされている。しかしこれらには文法に関わる差異はないのだろうか。そのことを示唆する言語事実は確かに、ある。少し長いが、寺村(同上、230頁) 自身が挙げている森鷗外の例を観察してみよう(波線は三原による)。

- (17) ...そこでこう思慮する。武威は大阪役に豊臣方に附属して働いた後、諸国を遍歴したそうである。しかしこれより後は、寛永十一年に養子

伊織とともに小倉に来て、細川氏に継いでこの国を領する小笠原忠真のもとに客寓するに至るまで、武蔵の九州の地をふんだことを聞かない。武蔵が熊本に入って忠利を見たのはこの客寓中のことではあるまいか。もししからば原城陥落の十五年までの間はわずかに五年で、この間にいつか忠利が武蔵を引見し、武蔵はその時太兵衛を認識したことになるであろう。わたくしはそうだと考えたい。これが小説なら、わたくしはただそうだと書いて、上の如く辞を費やさぬであろう。

わたくしはここに、かつていわゆる歴史小説を書くに当たって慣用した思量のメカニズムを暴露した。

歴史家はこれを見てわたくしの放肆を責めるだろう。小説家はこれを見てわたくしの拘執を笑うだろう。西洋の諺に二つの床の間に寝ることがある。わたくしは折々自ら顧みて、この諺のわが上に適切な感ずる。（森鷗外「都甲太兵衛」）

デアロウが用いられている部分は鷗外が「そう考えたい」箇所であり、これをグロウとすると表現意図にそぐわないものになってしまい、不適切であろう。それに対して、歴史家や小説家が彼のそのような態度をどう評価するだろうかということを、具体的な証拠なしに推測している部分ではグロウが使われている。鷗外はおそらく無意識のうちにグロウとデアロウを使い分けているのであろうが、注意深く文章を書く者にとっては十分に納得のいく使い分けである。文章体において、当為のベキダにデアロウを後続させて「～ベキデアロウ」とする方が、「～ベキグロウ」とするより落ち着きがよいように感じるのは、そのことと無関係ではあるまい。

(17)の例においては、グロウ・デアロウを交換しても、表現効果の差を取捨すれば共に文法的であるが、グロウが容認されない環境も存在する。北原(1981)は、グロウの連体形としての用法はあるにはあるが極めて限定されており、コト等の形式名詞に前接する場合、あるいは正確には形式名詞ではないが、「暁」のような抽象的で希薄な概念を示す場合に限られるということを述べている箇所において、次の例を挙げている。

- (18) a. ...わが国の保守的分子の間に占領当局に対する反感が比較的強いであろうことは...（北原(1981:501)）

- b. わたくしが大臣になるであろう暁には...（同上、504頁）

ここにおいてまず第一に、(18a, b) がいずれも内の関係ではなく外の関係に立つものであること、そして第二に、グロウではなくデアロウが用いられていることに注意されたい。概略英語の同格節に対応する外の関係に立つ連体修飾節は、「? 彼が来るだろうこと（を予想して）」（森山(1989:102)）のように、内の関係より概言のムー

ド表現に対する許容度が高いことを初めとして、内の関係とは異なる振舞いも多いことはよく知られている。(18a)においても、筆者の内省ではダロウにすると落ち着きが悪いように感じられるが、(18b)では、ダロウに換えたものは明らかに非文法的である。

このことはすなわち、両者が単なるスタイル的変異体であるばかりでなく、文法的にも異なった機能を果たす手段であることを示していると思われるのである。つまりデアロウは、判断形成過程に関してはダロウとの類似性を保持しながらも、その事態が実現する（あるいは実現しない）ことに対するある種の期待感を有し、主観的には確定としたい気持ちを表わすものだと言えるのである。では、これを統語的に検証することは可能だろうか。この仕事は必ずしも容易であるとは言えないが、次例における微妙な文法性の差はこのことの傍証となるようにも思えるのである。

(19) a. 地球環境は十中八九破壊されるであろう/?破壊されるだろう。

b. 地球環境はおそらく破壊されるであろう/破壊されるだろう。

c. 地球環境は五分五分で?破壊されるであろう/破壊されるだろう。

蓋然性が高いことを示す「十中八九」を併置するとデアロウの方が微妙に落ち着くようである。さらに興味深いのは(19c)の例である。「五分五分」というのは決して確率が 50 % であることを述べるものではない。むしろ負の方向に傾斜してゆく判断を表わそうとするものである。「太郎は五分五分で勝つだろう」等の文意を、言外の意味の関与にも配慮しつつ慎重に考えてみられたい。幅のある蓋然性を示す「おそらく」では、当然のことながらダロウ・デアロウの双方が許容される。先に述べたように、判断確定性は話者による主観的確定性である。従って主観的確定として捉えたいデアロウは、そのことに従って疑似関係節中に生起出来るということになると思われるのである。

第2節で、(4a, b)と(4c)の微妙な文法性の差に言及したが、上で述べたことを勘案すると、ダロウ自体の判断確定性にもデアロウに近似するものと、そうでないものの間にある程度の幅があるようである。疑似関係節中にダロウを許容する話者は、ダロウにデアロウの意味を帯びさせているのかもしれない。しかしながら、実例ではデアロウが極めて多いこと、及び、同格節（外の関係）に頻発することは記しておく必要がある。疑似関係節中に現われるダロウの例は確かに実例にも見られるが、ここには明らかな一つの傾向が観察される。それは、底の名詞が固有名詞である（すなわち英語の非制限的関係節に対応する構造中に現われる）こと、あるいは、底の名詞が比較的長い修飾語を伴うことである。多くの実例を観察している三宅(1992)の論考から、ラシイの例と併せて列挙しておこう。北原(1981)の例(18a=21d)も再録する。【註】

(20) a. おそらく一生な~~お~~ることのないであろう病人のふじ子

- b. かつては男たちを魅きつけてやまなかっただろうエメラルド色の美しい瞳
 - c. 海部政権誕生の裏で繰り広げられたであろう竹下派の確執
 - d. この会議ではパレスチナ問題が大きな焦点になるであろうこと
- (21) a. 以来、人間的にも大きく成長したらしいボール
- b. 結婚式の帰りらしい千明と桃子と美和子
 - c. どうやら靴の底でドアを叩いているらしいガンガンという音
(以上、三宅(1992:22,43))
 - d. わが国の保守的分子の間に占領当局に対する反感が比較的強いであらうこと (北原(1981:501))

ここで例えば(20b)において、「エメラルド色の美しい」を除去してみると、筆者には(4a,b)と同等の非容認性を示すように思える。(21c)についても同様のことが言える。第2節の(5a)でも、「旧ソ連が参加するらしい今度のオリンピック」とすると容認性が向上するという指摘(坪本篤朗氏(個人談))も同列に考えられよう。修飾語が重層的に付加されることにより非制限的關係節に近似してゆくとも考えられるが、いずれにせよこの問題については、日本語における非制限的關係節を論じる際に総体的に考察することにしたい(第2節(4d)も参照)。

当節を閉じるにあたって、第2節で予告しておいた問題について簡単に触れておこう。それは、(22a=5a)に比して(22b)の容認性が高いという事実である。

- (22) a. ??旧ソ連が参加するらしいオリンピック
b. (?)旧ソ連も参加するらしいオリンピック

(22b) ではその使用に伴い、旧ソ連以外の諸国がオリンピックに参加することは前提とされている。すなわち、それら諸国の参加については判断確定性が達成されている(あるいはそれが無標の読みである)。(22b)の文法性が高い理由はおそらくこの点に求められると思われるのである。

5. 再び、判断確定性

ダロウ・デアロウと異なり、判断形成過程が完了した上で様々な判断確定性を示す、ニチガイナイ、カモシレナイ、ラシイ、ヨウダ・ミタイダについてはどのような説明がなされるだろうか。ニチガイナイは直感的確定(あるいは直感的確信)を示す。ハズダのように論理的推論による十分にあり得る結論を述べるものではないが、主観的には確定と捉えたい気持ちを表明するものである。ただ、直感的確定を示すということは、同時に、非確定であるかもしれない可能性を意図的に排除しようとする心の傾

きを示すということで、このことが既に述べた文体的な落ち着いた悪さの遠因となっているのかもしれない。また、ニチガイナイは直感的確信ということに伴い、話者の思い込みを私的認識中にとどめようとする傾向が強いため、天気予報や患者に対する医者診断といった、責任を持って答えなければならない文脈ではニチガイナイは不適切である。

(23) a. 明日の近畿地方は、全般的にぐずついた天気になるでしょう/*なるに違いありません。

b. 特にご相談のケースは、もしお子さんに同じ症状が出ても、まず100%良くなりますから心配いらないでしょう/*心配いらないに違いありません。

(三宅(1992:54)、*の例は三原による補足)

ラシイ(??)と蓋然性用法のヨウダ・ミタイダ(*)の文法性の差についてはどうか。ラシイは間接的経験から推論した結果得られる知識(客観的知識)を述べる傾向が強いのにに対して、ヨウダ・ミタイダは直接的経験に基づく推論から得られる知識(主観的知識)を述べる傾向が強い。このことは次の例からも理解されよう。

(24) a. あの人はどうも結婚しているらしい。田中君が子供と遊園地で遊んでいるのを見たと言っている。

b. あの人はどうやら結婚しているようだ。結婚指輪をしていたもの。

(益岡・田窪(1992:128))

田中君からの伝聞に基づく推論である(24a)ではラシイが、そして自ら確認した事実から推論した(24b)ではヨウダが各々適格であるが、これらを入れ換えてみると文法性が微妙に低下するのが分かる。自分の直接的体験であることがさらに明白な文脈ではラシイが使えないという事実(下の(25)参照)、あるいはラシイの場合、ニョルトという表現が多く見られるという報告(寺村(1984:251))等は今述べたことの傍証となろう。

(25) a. どうもこの手の仕事は私には向いていないようです/*向いていないらしいです。

b. 反対の方いらっしゃいますか。全員ご賛成のようですので/*ご賛成らしいので、そのように決めさせていただきます。

(益岡・田窪(1989:114)、*の例は三原による補足)

ラシイとヨウダ・ミタイダは共に、その知識が確定的なものであるとは言っていない。「旧ソ連がオリンピックに参加するらしい/山田君自身が噂を流しているようだ」と言う時、それらの事態の生起に十分に傾いた判断が下されているが、非生起となる可能性も否定されていない。ラシイとヨウダ・ミタイダはこのような特質を共有した上

で、互いを峻別する特質もまた内在化している。すなわち後者の場合、主観的経験ということに準拠して、話者自ら判断が未確定であることを表明しているのである。従って、ヨウダ・ミタイダが示す判断確定性は完全未確定としてよいであろう。それに対してラシイは未確定に近似してゆく形式とすることが出来ようか。

話者自ら判断が未確定であることを表明しているという点においては、カモシレナイもヨウダ・ミタイダと同列ではないかという反論はあり得るようにも思えよう。さらに、「太郎は来るかもしれない/太郎は来るようだ」という文を考える時、ヨウダを用いた方が「来る」確率が高いように感じるのに、先の表ではなぜカモシレナイが上位にあるのかという反論も考えられよう。しかしながら本稿で提出した確定性の概念が、現実世界における事態の生起可能性と直接的に連動しなければならない必然性はない。それはあくまでも「判断」確定性であって、「事実」確定性ではない。話者が判断を下すにあたって、その判断が話者の意識の中でどの程度確定的と捉えられているかを巡る概念である。このことに即して言えばカモシレナイは限りなく確定的である。なぜならば、「太郎が来るかもしれない」におけるカモシレナイは、「太郎が来る」という可能性の存在を確言的に述べているからである。それに対して「太郎が来るようだ」は、決して、太郎が来る可能性について確言的に述べたものではないのである。もっとも、カモシレナイを判断的に完全確定とするのは行き過ぎであろう。「来るかもしれない」と言うことは「来ないかもしれない」可能性を否定するものではなく、またそうであるからこそ、「来る」という確言形で表現していないのである。

本稿の主張にとって「可能性の存在」という概念は極めて重要である。話者が判断を下す時、その蓋然性の高低にかかわらず、いったん下した判断を同一文中で否定することは自己矛盾である。従って、決して(26a, b)のように言うことは出来ない。一方カモシレナイの場合、(27)のように言うことは一向に差し支えない。

(26) a. *彼は来るようだし、来ないようだ。

b. *彼は来るだろうし、来ないだろう。

(27) 彼は来るかもしれないし、来ないかもしれない。

この事実は、カモシレナイとそれ以外の概言のムード形式が判断的に異なった様式に属していることを示している。「彼は来るかもしれない」とは「彼は来る可能性がある」ということであり、その意味において可能性の存在に関しては判断確定的なのである。なお三宅(1992)が、多種多様な判断様式を内包する概言のムード表現を一律の原則で分類することは不可能で、幾つかの異なった範疇を設定する必要があるとして、カモシレナイを、グロウやラシイその他とは区別して「可能性判断」としていることも付記しておきたい。このことは後に、スペイン語と英語における判断を論じる際に重要な鍵となる。また、「彼は来るかもしれない」とは「彼は来る可能性がある」と

いうことであると上で述べたが、これらが全同であると主張しているのではない。可能性の存在ということを仮に言語的にパラフレーズすればそのようになると言っているのである。実際、「来るかもしれない」と「来る可能性がある」は文法的にも異なった様相を呈する。後者は言語形式として確言形を取っているので、例えばダロウを後続させることが出来るが、前者はこれが不可能である（井上優氏(私信)の指摘による。(28)(29)の例も井上による）。さらに、陳述副詞との共起にも差異が見られる(同上)。

(28) a. カール・ルイスもまだ金メダルを取る可能性があるだろう。

b. ?カール・ルイスもまだ金メダルを取るかもしれないだろう。

(29) a. 間違いなくカール・ルイスは金メダルを取る可能性がある。

b. ?間違いなくカール・ルイスは金メダルを取るかもしれない。

いずれにせよ、以上の議論よりカモシレナイを、確定に近似してゆく形式と捉えておこう。

ハズダについてはいささかの説明が必要である。既に共通理解として定着しているようにハズダは、ある根拠から論理的帰結によって導かれる結論を述べるものである。自分が知っている事実Pから推論すると当然Qであること、つまり得られた結論が客観的・正当な事実から推論された、十分にあり得る結論であることを示すのである。図式化すると $P\{P_1, P_2, \dots, P_n\}$ (前提) \rightarrow 推論 \rightarrow Q (結論) とでもなろうか。この結論は話者の意識の中では確定的なもの、あるいは少なくとも確定的と捉えたいものである。

許容度に関しては問題がない、予想・予感のソウダ、様態のヨウダ・ミタイダについてはどのような説明が与えられるだろうか。前者は、対象や状況が外面的に示している様子からその後の事態の展開を予想したり、対象・状況の内面を予測したりするものである。ここにおいて重要なことは、ソウダには推論によって述べるという意味あいがありなく、視覚等の感覚によって外面の様子を直接的・客観的に描写する表現形式であることである（寺村(1984)）。そのことに従い、これらの形式はいずれも判断的には確定であると捉えることが出来る。事態Aを特質の類似した事態Bで特徴付ける様態のヨウダ・ミタイダも同列に位置付けることが出来る。

ここまでの結論を判断確定性と共にまとめておこう。判断確定性が高い概言のムード表現ほど疑似関係節との親和性が高いことが理解されよう。

	ムードの表現	判断確定性
OK	ソウダ（予想・予感）、ヨウダ・ミタイダ（様態）	完全確定
OK	デアロウ、ハズダ	主観的確定
OK	カモシレナイ	確定に近似
OK#	ニチガイナイ	直感的確定
??	ラシイ	未確定に近似
*?	ダロウ	未確定
*	ヨウダ・ミタイダ（蓋然性）、ソウダ（伝聞）	完全未確定

6. 判断確定性と文末表現

先に喚起しておいたように、判断確定性の概念は現実世界における事態の生起可能性を捉えようとするものではなく、判断が話者の意識の中でどの程度確定的と捉えられているかを巡る概念である。そして判断が一義的には文末表現に宿ることを考えると、結局のところそれは文末表現に関する判断確定性であるということになる。このことは幾つかの言語事実から証明出来る。

- (30) a. 台風が接近するおそれがある地域
 b. 多分、秋頃には出版される本
 c. [[細川氏が指名されるだろう]と思う]人は手を上げて下さい。

(30a)を「*?台風が接近するだろう地域」とすると非文法的となることは既に確認してきた。ダロウと、オソレガアルという迂言的表現の蓋然性が全同かどうかは別にして、後者が低い蓋然性を示すことは間違いない。しかしながらここにおいて、オソレガアルは先に論じたカモシレナイと同様に、事態の生起可能性に関しては確言的である。つまり「台風が接近するおそれがある」とは、「台風が接近する可能性がある」

ということであり、可能性の存在を確言的に述べている訳である。「台風が接近するおそれがあるが、接近しないこともあり得る」と言えることにも注意されたい。次に(30b)における、相対的に高くない蓋然性を示す「多分」が問題を生み出さない。この文副詞を含む「その本は多分秋頃には出版される」という文は、事態の生起という観点からは蓋然性が低いかもしれないが、判断的には文末形式が示す確言の機能を帯びる。「多分」がダロウと呼応して「その本は多分秋頃には出版されるだろう」となるのは、それとは別個の現象である。そして最後に(30c)から、疑似関係節末述語「思う」が確言である限り、埋め込まれた節中にダロウが生じ得ることが分かる。

ここまでの議論で明らかにされたことは、次の二点に集約出来る。①疑似関係節中における概言のムード表現の生起は判断確定性の高低によって規制されている。②疑似関係節中における判断確定性は節末の述語形式に宿る。そうすると、さらなる説明を要する事項が浮上することになる。なぜ判断確定性なのかという問題、及び、なぜ節末形式なのかという問題である。これらについては三原（近刊）で詳細に論じたのでここでは繰り返さない。またそもそも、以上書き連ねてきたことも三原（近刊）の議論と重なる部分が多々あるので、道を急ぎスペイン語の検証に移ることにしよう。

7. スペイン語の場合

スペイン語関係節の構造は主語が最後にくることを除いて対応する英語関係節と基本的に同じである。

- (31) el libro que busca usted
 the book which are looking for you
 あなたが捜している本

当節ではまず、様々な概言のムード表現を含む日本語疑似関係節に対応するスペイン語関係節の例を列挙し、その後考察を加えることにする。調査方法としては、当方で用意したスペイン語の例文をインフォーマント（2名）にチェックしてもらう、という方法を取った。その際に、用意した例文以外の言い方も可能であればそれも示してもらった。（以下、次の略語を用いる。fut=未来形、pot=可能法、sub=接続法、何も記載がないもの=直説法）

- (32) *?日本人なら誰でも感じるだろう恥ずかしさ
 una vergüenza que sentirá /sentiría cualquier
 a shame which will feel(fut)/would feel(pot) any
 japonés
 Japanese

(33) ??旧ソ連が参加するらしいオリンピック

- (a) los juegos olímpicos en los que parece que
these games Olympic in those which (it) seems that
 participará la antigua Unión Soviética
will participate(fut) the old Union Soviet
- (b) los juegos olímpicos en los que puede que
(it) may (be)
 participe la antigua Unión Soviética
participate(sub)

(32)のダロウに対応するスペイン語表現では、sentir(feel)の未来形もしくは可能法が適合する。可能法には幾つかの用法があるが、ここで該当するのは英語の仮定法に相当するもので、概ねwouldで訳出され得るものである。未来形・仮定法をどう考えるかについては後述する。(33)に関しては、英語のseemに相当するparecer、もしくはmayにあたるpoderが用いられる。ただし、スペイン語は組織化された助動詞の体系を有さないので、poderも完全な活用のパラダイムを持つ動詞である。ここで、parecerに後続するque節には直説法未来形(participará)が用いられ、poderの場合は接続法現在形(participe)が使われるが、これは各々の動詞の統語的特性によるものであって、目下の議論と直接的な関わりはない。重要な点は各々seem/mayに対応する表現が用いられるという点である。直説法現在であるpareceは定義上、確言形であり、従って判断確定性は当然のことながら完全確定となる。同じく直説法現在となるpuedeは、may相当語であることから理解されるように可能性の存在について述べるものであり、その意味において判断的には確定に近似したものとなる。Juan puede o no puede venir (John may or may not come)と言えることに注意されたい。ただしインフォーマントによれば、この後に¿Quién lo sabe? (Who knows it)等を付けないと、文体的には不自然なようである。

蓋然性のヨウダ・ミタイダ、及びカモシレナイについてもparecer/poderが使われる。

(34) *山田君自身が流しているような噂

- un rumor que el mismo Yamada parece que está
a rumor which the very seems that (he) is
 haciendo correr
making spread

(35) 犯人が立ち寄るかもしれない隠れ家

- (a) un refugio por el que parece que pasará

*a hideout for the which (it) seems that (he) will drop
el criminal
(fut) in the criminal*

(b) un refugio por el que puede pasar el criminal

他方、ニチガイナイに対応する表現は、蓋然性用法のmustにあたるdeber de、あるいはhave toと同じ意味を持つtener queである。共に直説法であり、従って判断的には確定である。

(36) 解散するに違いない内閣

*el gabinete que debe de/tiene que dimitir en bloque
the cabinet which must /has to be dissolved*

伝聞のソウダについては、英語における表現を平行移動したものが用いられる。

(37) *警察がマークしているような男

(a) un hombre que dicen que es vigilado por
*a man who they say that is marked down by
la policía
the police*

(b) un hombre que se dice que es vigilado por la policía
it is said

(c) un hombre del cual he oído que es vigilado
*of+the that (I) have heard
por la policía*

英語のthey say/it is said/I have heardが確言形であるのと全く同様に、スペイン語の表現も確言形以外の何物でもない。

予想・予感のソウダについては、再びparecer/poderが適合する。

(38) ファンが嫌いそうな女

(a) una mujer que parece que es odiado por Juan
a woman who (it) seems that is hated by

(b) una mujer que puede ser odiado por Juan
may be

様態のヨウダ・ミタイダの場合は、as ifに相当するcomo siが用いられるが、英語と同様にcomo si 節中には接続法（仮定法）がくる。

(39) サンドイッチを20個も食べたようなお腹

*la barriga como si hubiera comido veinte bocadillos
the belly as if (he) had(sub) eaten 20 sandwiches*

最後にハズダについては、蓋然性用法のbe toにあたる deber de、haber de (he de と活用している)が用いられる。

(40) 月末に入るはずのお金

el dinero que debo de /he de cobrar al final de
the money which (I) am to receive at the end of
mes
month

勝てたはずの試合

el partido que hubiéramos debido de ganar
the game which (we) had(sub) have to win

以上の観察を日本語と対照させて表にしておこう。

ダロウ(*?)	未来形、可能法(would)
ラシイ(??)	parecer (seem)、poder (may)
ヨウダ・ミタイダ（蓋然性）(*)	parecer (seem)
カモシレナイ	parecer (seem)、poder (may)
ニチガイナイ	deber de (must)、tener que (have to)
ソウダ（伝聞）(*)	dicen (they say)、se dice (it is said)、 he oído (I have heard)
ソウダ（予想・予感）	parecer (seem)、poder (may)
ヨウダ・ミタイダ（様態）	parecer (seem)、como si (as if) + 接続法
ハズダ	deber de (be to)、haber de (be to)、 (+接続法)

データを観察してまず第一に気付くことは、スペイン語ではムード的な表現が日本

語ほど多様ではないということである。ラシイ、ヨウダ・ミタイダ(蓋然性)、カモシレナイ、ソウダ(予想・予感)については、一律に *seen* あるいは *may* に相当する表現が用いられている。これらが可能性の存在について述べる表現であり、従って確言に近似するものとなることは既に論じた。ニチガイナイ・ハズダの例に見える *must/have to* も判断確定性は高いと言えよう。伝聞のソウダに関しても上で見たように完全な確言形式が用いられている。総合すると、日本語における概言のムード表現がスペイン語では確言の動詞表現となるということが言える。そして重要なことは、日本語が判断確定性の高低で区別する表現を、スペイン語は現実世界における事態の(非)生起に関する可能性の(非)存在という形で区別するということである。従って、日本語では許容されない疑似関係節中のムード表現も、多分に確言的なものとして表現されるために、その生起に関して日本語のような制限がないのである。

ここにおいて問題となることは、まず第一に接続法(仮定法)をどう考えるかということである。(32)で見た可能法は接続法的な用法であるので、問題は結局のところ接続法の扱いに煮詰められてくるであろう。そして第二に(32)における未来形の問題がある。

英語においては未来形を可能性の存在という概念で捉えることは困難である。(41)の例が示すように、未来の *will* を伴う動詞表現を *or* で結び付けることが出来ないからである。ところが(42)に見るように、スペイン語ではこれが可能である。

(41) *John will or will not come.

(42) Juan vendrá o no vendrá.

will come or will not come

ただし(41)は未来時を指示しない読みでは一応可能である。この場合例えば、今日試験があるのにジョンが準備をしておらず、試験を受けに行くべきか行かざるべきか迷っているという解釈になるであろう。これは明らかに意志を表わす表現であり、今問題にしている表現とは異なるものである。つまり英語においては、未来形は日本語のダロウに相当すべき表現であるが、スペイン語ではカモシレナイ型の表現であるということが言えよう。そうであるとすれば(32)のように、スペイン語関係節中でこれが許容されることについては問題なかろう。しかしそれにしても、英語に関する問題は依然として残る。(43a, b) のように、関係節中に *will* が現れ得るからである。(43a) では *will* がデアロウの意味を帯びているような直感もあるが、(43b) については、ダロウなのかデアロウなのか一義的に決定することは難しい。

(43) a. We believe that solutions can be found which *will* prove satisfactory. (安井(編)(1987:201))

b. In the 1920s Wilkinson Sword introduced the stoppable

razor and then the 'Empire' range which many people *will* remember. (Palmer (1979:57))

英語関係節中に生起する未来形の問題については、現段階において筆者は提出すべき興味深い解決策を持たない。今後の課題としておきたい。

もう一つの問題、すなわち接続法の扱いに関しては節を改めて述べることにしよう。

8. 接続法の扱い

接続法と可能法にも幾つかの用法があるが、当面問題となるのは英語の假定法に相当する用法であった。言うまでもなく、假定法は現実世界とは別の可能世界を創出し、その世界の中における仮定的な事態を述べるものである。そうすると一見、その世界の中においては全ての判断も仮定的なものであり、従って常に未確定であるように思えるかもしれない。しかしながら、假定世界であることと判断未確定性が連動しなければならない必然性はない。いったんその世界に入り込んでしまえば、そこにおいて、その世界の中での判断を確定的とすることは常に可能である。「もし太郎が来れば、必ずしもめ事が起こる」と言う時、「太郎が来る」という可能世界が出現すればそこでは必ずしもめ事が起こる、という確定的な判断が下されているのである。そして当然のことながら、「もし太郎が来れば、必ずしもめ事が起こるだろう」のように、假定世界中で判断形成過程を完了させないことも出来る。つまり判断とは、現実世界であるか假定世界であるかを問わず、各々の世界の中において成立し得るものなのである。そのように考える時、関係節中での接続法・可能法が本稿での主張に脅威を及ぼさないことは既に明らかであろう。

9. 英語の場合

日本語が判断確定性のスケールに則った形で話者の主観的判断を体系的に区別するのに対して、スペイン語は話者の蓋然性判断を、事態の（非）生起に関する可能性の（非）存在という形でいわば客観的に提示する、ということを我々は確認してきた。つまり日本語に即して言えば、スペイン語はカモシレナイ的な判断ををする傾向が強いということになる。当節では英語でもこれと同等の判断形式が取られるということを見る。日本語の小説に現われる表現がその英訳においてどのような表現で表わされているかを観察するという方法を取ろう。取り上げた作品は次のものである。

遠藤周作『海と毒薬』（新潮文庫）（海）

Michael Gallagher *The Sea and Poison* (Tuttle)

川端康成『山の音』（新潮文庫）（山）

Edward G. Seidensticker *The Sound of the Mountain* (Tuttle)

対応関係は次の三種類になる。

①日本語の概言表現が英語では確言表現（可能性の存在表現を含む）となる。

②日本語・英語とも概言表現となる。

③日本語の確言表現が英語では概言表現となる。

あらかじめある程度予想されるように、用例として極めて多いのは①であり、実際の範疇に属するものがほとんどであった。②③については作品によって偏りがあるが、②が案外少ないことは意外であった。

まず①と②を併せて見てゆこう。ダロウについては様々に訳出されているが、will を用いているものは調べた範囲では見い出せず、would となっているものは幾つかあった。英文において該当する箇所をイタリックで示す（以下同様）。

(44) a. 頭が赤く塗ってあるのは金髪のもりでであろう。（海）

From the red paint on the head, *it seems* that his creator's aim was to make him a redhead.

b. 近所の百姓たちの家族が入浴に来ているのだろうか、湯を流す音、桶をおく音が微かに聞こえてきた。（海）

Evidently the local farming families were already inside taking their baths, for I could hear faintly but distinctly the noise of splashing water and the knocking of wooden buckets.

c. ガソリン・スタンドの主人は今ごろ、白い作業服を着てトラックに油を入れているだろう。（海）

In his white uniform, *was he* filling the tank of a truck?

d. 加代は半年も家にいただろう。（山）

I imagine she was with us six months or so?

e. 亭主は無造作に身を入れているが、三つの貝の身が入りまざって、それぞれの貝の身が元通りの貝殻にかかえられないだろうと、伸吾は妙に細かいところに気がついた。（山）

Casually, the man was putting the meat back into the shells, so mixed together, thought Shingo, that *it was unlikely* to be reassembled in the particular shells from which it had come. He was aware of very small niceties.

f. 生きているのだろうが動かない。（山）

It should have been alive, but it didn't move.

- g. 相手の女はこんな小娘ではないのだろう。(山)

She would not in any case be a sheltered girl like the one before him.

ラシイについては対応している例はなく、全てが確言形となるものであった。

- (45) a. あんたの女房は妊娠らしいな。(海)

It looks like your wife's pregnant.

- b. 細君がいない間、勝呂医師は一人で自炊しているらしかった。

(海)

Evidently, Dr Suguro did his own cooking while his wife was away.

- c. あそこも南京で大分、あばれたらしいぜ。(海)

He really raised hell in Nanking, I think.

- d. あまやかすというよりも、みんなに気安く愛されたい。(山)

She was not spoiled, precisely, but she seemed to expect affection.

- e. 菊子も言ってしまったから気にかかるらしく、美しい肩をじっとさせていた。(山)

Apparently Kikuko regretted having made the remark. Her beautiful shoulders were motionless.

蓋然性のヨウダも概言表現で対応しているものは多くはなく、僅かに(46e)のmightが一例のみあった。もっとも、このヨウダは蓋然性なのか様態なのか明確に区別することは難しいように思う。そして(46c)のように、日本語の概言表現をあっさりと確言表現に転換しているものさえ多い。

- (46) a. 彼は私などではなく別のことを考えているようだった。(海)

He was thinking about something else, it seemed, something which had nothing to do with me or my affairs.

- b. 変わっているようですね。(海)

'Funny, huh?'

- c. 私はそれがあの芋虫のような太い指の動きのためかと思ったが、それだけでもないようだった。(海)

I thought that I felt this way merely because the movement of his thick fingers was so suggestive of a cluster of caterpillars, but there was more to it than that.

- d. しかし菊子は末っ子らしく育ったようだ。(山)
Still, Kikuko had been reared as the pet of the family,
it seemed.
- e. 自分の頭の中に聞こえるようでもあるので、信吾は耳鳴りかと思
って、頭を振ってみた。(山)
Thinking that *it might be* in himself, a ringing in his
ears, Shingo shook his head.

カモシレナイは日本語においても可能性の存在を述べるものであった。そして予測されるように英語でも、可能性存在判断を示す *may / might* を用いている例が多く、*perhaps*等の文副詞で訳出しているものも極めて多い。

- (47) a. これからもおなじような境遇におかれたら僕はやはり、アレをや
ってしまうかもしれない アレをねえ。(海)
From now on, I'm not sure at all. If I were caught in the
same way, *I might, I might* just do the same thing again.
The same thing.
- b. いや、あの人は 御存知かもしれませんが、例の事件でな。
(海)
No. He *Maybe you know and maybe you don't know*; but
anyway what happened was what usually happens in a case
like that.
- c. 今、戸をあけてはいつてきた父親もやはり戦争中には人間の一人
や二人は殺したかもしれない。(海)
Now, this father of a family coming in through the door,
perhaps during the War he killed a man or two.
- d. このごろ少し耳が変になったのかもしれない。(山)
There's been something wrong with my ears last few days,
I think.
- e. あんたと女をこらしめに苦しませるように、分量を加減してある
かもしれないわ。(山)
Someone *might have measured* out just enough to make us
sick and teach us a lesson.
- f. ええ、しかし、菊子は知っているのかもしれませんが。(山)
She *may* already know.

ニチガイナイは一例のみ挙げておこう。

- (48) 今の修一の女は商売女か娼婦型の女に違いないと、信吾はにらんでいた。(山)

Shingo *was certain* that whoever now held Shuichi's attention was a business woman, perhaps a prostitute of sorts.

伝聞のソウダについては挙げるまでもないであろうが、they say/～said のパターンを取るものがほとんどである。

- (49) a. カミさんはむかし、看護婦だったそうだがね。(海)

They say she used to be a nurse.

- b. 二月あまり前に、芸者はこの待合を建てた大工と、心中しかかったのだそうである。(山)

Some two months before, *she said*, she had been on the point of committing suicide with the carpenter who had built the restaurant.

予想・予感のソウダについては、調査した箇所に関する限り用例を採集出来なかったが、問題はないものと思われる。様態のヨウダは、as if/apparently/like等を用いて「～のように見える」という表現法を取る他、次のように、実質的な語彙項目自体にその意味を込めて表わすことが多いということのみ述べておこう。

- (50) 金属をあてられたようなヒヤッとしたあの感じ(海)

the chilling metallic touch

最後にハズダに関しては様々な形式が充てられており、一般化することは困難なようである。

- (51) a. どうせ相談した所で相手が返事らしい返事をしてくれる筈はないからである。(海)

There is not much point in discussing something with somebody if he never bothers to give you anything resembling an answer.

- b. 女の方が早く老けるはずだが、逆になった。(山)

Women *generally* age faster than men, but in their case the reverse had been true.

次に③のグループ、すなわち、日本語の確言表現が英語では概言表現となっているものに移る。とりあえずその幾つかを観察してみよう。

- (52) a. これからお世話になりますよ。(海)

I hope we'll be good neighbors.

- b. ほっといても黙っているぜ。(海)

Even if you forget all about it, he *wouldn't* say a word.

- c. 先週の木曜ですから、五日前ですね。(山)

Last Thursday. That *would* make it five days ago.

- (53) a. 逃げたという奥さんはどんな人でした。(海)

The wife who *may have run* off, what kind of woman was she?

- b. あら、おじいさまとおばあさまはお歯が悪いから、お二人で仲よく召しあがるのかと思いましたわ。(山)

Oh, dear. But the two of you have such bad teeth, Grandpa --- I tought you *might* want to share one nicely between you.

- c. そうか。谷崎の友だちじゃ都合が悪くないのか。(山)

Don't you think it *might* be a little dangerous, having a friend of Tanizaki's around?

- (54) a. 私は彼にもこの河を見たり、街を歩いたりするような医学生時代があったのだと思って可笑しかった。(海)

When he had been a medical student, he *must have looked* at this river, walked through this town.

- b. 加代がね、帰る二三日前だったかな。(山)

That Kayo --- I think it *must have been* two or three days before she quit.

収集数に限りがあるので最終的結論は保留したいが、概ね次のようなことは言えると思う。英語の場合は、ある事態が起こる可能性があまり高くないと判断される時に概言形を使用し、日本語は、実際の場における事態の生起可能性よりもむしろ、それを主観的には「起こる」と捉えたい時に確言形を用いる傾向があるということである。例えば(52a)において、これから実際にお世話になるかどうかは未来のことなので未確定であるにもかかわらず、お世話になりたいという話者の気持ちを表わすために確言形が使われていると思われる。(52c)はこの説明には該当しないが、ここでの *would* は概言形と言うよりむしろ婉曲形であろう。日本語において、主観的には確定と捉えたくとも、話者自身完全にそうしきれない場合は常に起こり得る。この時、(53b)(54a)のように「思う」という表現を付加するか、あるいは(53c)(54b)のように、「～か(な)」等によって主張を緩和するのであろう。もっとも、このような手段は日本語に限定されたものではなく、(44d)の *I imagine* や(45c)の *I think* のように英語においても十分にあり得るものである。

ともあれ、以上の限られたデータからも日英語における傾向の差は抽出出来るであ

ろう。日本語が話者の主観的判断に傾斜した形で事態を見つめる傾向があるのに対して、英語は事態の生起可能性、すなわち客観的判断を重視すると言えるのである。データをさらに拡大することによってもっと繊細な構図が現われてくる筈であるが、日本語と英語、そしてスペイン語における概言のムード表現に関する一般的な傾向は、おそらく本稿で検証したものと甚だしく異なることはないであろう。

[注]

明治23年1月1日の読売新聞に面白い記述がある。尾崎紅葉が紅葉山人の名のもとに書いた「飾海老」という連載小説の第一回分である。この中で紅葉が、わずかな外国逗留の経験を洋行帰りと吹聴している男を揶揄し、日常会話にも英語風の言い回しを多用すると皮肉っている部分がある。ここで紅葉は「あつたでもあらう事を信じ得ない」という表現を槍玉に挙げ、「専ら直訳の句法を口にして」と述べている。この表現ではデアロウが用いられており、かつ同格節であるが、明治23年の時点で同格節中においてさえ、このような表現が日本語として馴染まないと判断されていることは極めて興味深い。この類の表現が本来日本語にはなかったものであり、それが、翻訳調の影響のもとに日本語に侵入し始めていることの明らかな証左であるからである。（平田由美氏（個人談）の教示による。）

[付記]

本稿をまとめるにあたって、様々な段階で、多くの方々から有意義な御教示・建設的批判を頂いた。全ての名前を挙げる余裕がないが、有田節子、井上優、岩崎卓、莊司育子、田野村忠温、坪本篤朗、山梨正明の諸氏には特に謝意を表したい。また、1993年8月10日に国立国語研究所で開かれた「日本語とスペイン語の対照言語学的研究公開研究会」における口頭発表の際にフロアーから受けた質問・コメントも、本稿の随所に生かしたつもりである。スペイン語のデータ作成には高垣敏博氏の多大な協力を得ているが、インフォーマントとして協力を頂いた、Vicente Fernandez（スペイン）、Isabel Fukuhara（ペルー）の両氏にも感謝したい。

[参考文献]

- 奥津敬一郎(1974).『生成日本文法論』.大修館書店.東京.
 北原保雄(1981).『日本語助動詞の研究』.大修館書店.東京.
 田窪行則(1987).「統語構造と文脈情報」.『日本語学』第6巻第5号.

- 寺村秀夫(1984). 『日本語のシンタクスと意味ⅠⅡ』. くろしお出版. 東京.
- 寺村秀夫(1992). 『寺村秀夫論文集Ⅰ』. くろしお出版. 東京.
- 仁田義雄(1991). 『日本語のモダリティと人称』. ひつじ書房. 春日部.
- 益岡隆志(1987). 『命題の文法』. くろしお出版. 東京.
- 益岡隆志(1991). 『モダリティの文法』. くろしお出版. 東京.
- 益岡隆志・田窪行則(1989). 『基礎日本語文法』. くろしお出版. 東京.
- 益岡隆志・田窪行則(1992). 『基礎日本語文法(改訂版)』. くろしお出版.
東京.
- 南不二男(1974). 『現代日本語の構造』. 大修館書店. 東京.
- 三原健一(1992). 『時制解釈と統語現象』. くろしお出版. 東京.
- 三原健一(近刊). 「概言のムード表現と連体修飾節」. 仁田(編)『複文の研究』
くろしお出版. 東京.
- 三宅知宏(1992). 「日本語の認知的モダリティの研究」. 未刊行修士論文. 大阪
大学. 大阪.
- 森山卓郎(1989). 「認識のムードとその周辺」. 仁田・益岡(編)『日本語のモダ
リティ』. くろしお出版. 東京.
- 森山卓郎(1992). 「日本語における「推量」をめぐる」. 『言語研究』第 101
号.
- 安井稔(編)(1987). 『現代英文法事典』. 大修館書店. 東京.
- Palmer, F.R.(1979). *Modality and the English Modals*. Longman. London.

「のだ」と es que
Noda y es que

福寫 教隆
Noritaka FUKUSHIMA

キーワード：説明、 結束性、 文脈、 話者、 主述構造

I. 問題提起

日本語には、「のだ」に代表される表現形式がある。「のである」、「のです」、音便形の「んだ」、「だ」を省いた「の」や、他の語を後接させた「のだった」、「のだが」、「のか」、「のだったろうか」など、さまざまな形をとってあらわれる。例(1)、(2)の下線部を参照。¹⁾

- (1) 「それはそうと、渋谷さん、体はどうなのの」

「思わしくありませんのです。神経痛だと思うのですが、その痛みが
あちこちに広がって」

「お医者様に診てもらったの」

「いいえ、丁度お正月ですし」

「だって暮から変だったじゃないの」

(三島由紀夫『午後の曳航』、110)

- (2) 「みかげは、 みどころありそうだから、 ふと言いたくなつたのよ。

あたしだって、雄一を抱えて育てているうちに、そのことがわかってきたのよ。つらいこともたくさん、たくさんあったわ。本当にひとり立ちしたい人は、何かを育てるといいのよね。子供とかさ、鉢植えとかね。そうすると、自分の限界がわかるのよ。そこからが始まりなのよ。」

(吉本ばなな『キッチン』、65)

「のだ」は、このように多用される形式であるが、日本語を母国語としない人にとっては、習得が難しいと言われている。次の誤用例を見てみよう。

- (3) a. この間どうしてもあのような別れ方をしてしまっただろう。(インド留学生)
b. 桜の花を見に行きたくないというわけではなかった。忙しすぎるから行けなかった。(香港留学生)
c. 早速ですが、1カ月前に山本さんに貸してあげた「現代教育学の基礎」という本を読むのは必要としているので一時返していただきたいですがご都合はよろしいでしょうか。(メキシコ留学生)
d. いつもあかいシャツを着ますから、たぶんあかいろがだいすきでしょう。(タイ留学生)
e. 私は夏休みの前に国に帰りたいでした。しかし、国の両親は日本へ来る予定があったのだから、私は国へ帰りませんでした。(台湾

(留学生)

(小金丸, 1990a: 186~191)

(3a)は「してしまったのだらう」と、「のだ」文を用いるべきである。(3b)の2文は単独では文法的だが、並べて用いる場合には、第2の文に「のだ」を補って「忙しすぎるから行けなかったのだ」とすべきであろう。(3c)は、他にも訂正を要する点があるが、問題を「のだ」に限れば、「返してまらいたいですが」という箇所を、「返してもらいたいのですが」と改める必要がある。(3d)も、「だいすきなんでしょう」と「のだ」を用いて表現すべきところである。一方、(3e)は「のだ」の使用に適さない箇所にそれを用いた誤用の例である。「あったのだから」でも「あったのですから」でも不適切であり、単に「あったから」とするか、もしくはいったん文を終結させ、新たな文を起こして「ありました。だから」、「あったのです。ですから」などとしなければならない。²⁾ このように、誤用の指摘は簡単なのだが、ではどのような場合に「のだ」を用い、どのような場合に「のだ」を用いてはいけないのかと問われると、説明は容易ではない。

以上のように使用頻度が高いのに、非母国語話者にとっては運用の困難な「のだ」という形式に対して、他言語との対照という視点から接近することによって、何らかの寄与はできないだろうか。本稿では、スペイン語(イスパニア語)における「のだ」と類似の形式を、日本語の「のだ」と対照させて、その共通点、相違点を明らかにし、各々の言語の特質を探ってみたい。

II. 「のだ」研究

「のだ」については、これまでに非常に多くの研究がある。その全貌の紹介については、田野村(1990)所収の「『のだ』の研究史」という優れた著作に譲り、ここでは以下の議論との関連で、限られた数の研究にのみ触れることにする。³⁾ まず「のだ」は説明を表す、という見解を採り上げよう。これは多くの研究者に支持されてきた見解である。たとえばAlfonso (1966:1, 405)は “the presence of NO DESU adds certain overtones to the statement, for it indicates some EXPLANATION, either of what was said or done, or will be said or done.” と述べている。例文(4a)の「のだ」文は、単に「話がある」ことを伝えるのではなく、引き留めたり、声をかけたりという動作を行った理由を説明しており、(4b)の「のだ」文は「読書中のあなたが吹き出したところを見ると」というような状況で用いられるというのである。

(4) a. 話があります。／話があるんです。

- b. 面白いですか、その本は？／面白いんですか？

(Alfonso, 1966: I, 405)

益岡(1991)も「説明」という語を用いて、「のだ」、「わけだ」が表すモダリティのカテゴリーに「説明のモダリティ」という名称を与えている。ただし前提とされる文あるいは状況と「のだ」文との間に直接のつながりがあると見るのではなく、中間に「それをどう説明すれば良いか」という課題を設定する。たとえば(5a)の2文の間には、「なぜ、そのようなことが起こったのか」という課題が介在する。従ってこの「のだ」文は、隠れた主題を持っている。それを補って言い替えると、(5b)のようになるという。

- (5) a. 花子が泣いている。大事にしていたカードがなくなったのだ。

- b. なぜ花子が泣いているのかというと、それは、大事にしていたカードがなくなったということだ。
(益岡, 1991:141)

田野村(1990)は、これまでに現れた「のだ」研究の中で最も包括的なものである。「説明」という概念では「のだ」の機能を捉えきれないとして、これを廃し、「背後の事情、実情を表す」という見方をとるべきであるとの主張を行っている。そして「のだ」の特質として「承前性」、「既定性」、「披瀝性」、「特立性」の4点を認め、「のか」、「のだろう」、「のではない」などの形式を綿密に分析している。

- (6) a. 承前性：もう春なんだなあ。

- b. 既定性：じゃ、そろそろ始め{ます／？るんです}か。

- c. 披瀝性：お酒はよく召し上がるんですか。

- d. 特立性：雨が降ったんじゃないですね。(田野村, 1990: 9~13)

「承前性」とは、例(6a)のような文を用いるには、「つくしが生えているのを見て」といった状況や言語的文脈を受ける必要があるという性質をさす。「既定性」とは、しばしば、発言に先だって既に定まっていることを表すという「のだ」の性質をさす。(6b)に「のだ」文が不適当であるのは、この性質に反しているからである。また「のだ」は、(6c)のように、外部の者には容易に知りがたい事情を披瀝することが多い。これを「披瀝性」という。最後に「のだ」は、1つの可能性を他の可能性から区別して問題とする場合に多用される。これが「特立性」である。(6d)は、たとえば「雨が降ったのではなく、私が水をまいたのだ」というような含みを感じさせるといふ。

また他方では、「のだ」をスコープという概念と結びつける説が、小金丸(1990b)や堀川(1990)によって提唱されている。たとえば小金丸によれば「のだ」には、命題と状況や文脈との関連を示す「ムードの「のだ」」だけでなく、前接要素を名詞化し、否定や疑問の作用域に入れる働きをする「スコープの「のだ」」があるという。(7a)は前者、(7b)は後者の用例である。

- (7) a. 「すみません。今日は、ちょっと…」 「忙しいんですか？」
b. 「あれっ、この本、買ったの？」 「あ、買ったんじゃないよ。借りたんだ」 (小金丸, 1990b: 74, 76)

日本語の「のだ」を外国語の類似の表現と対照した研究には、池上(1981)や霜崎(1981)、杉村(1982)、石原(1989)などの論考がある。初めの2つは英語との対照、あとの2つは中国語との対照を行っている。池上は Hurford(1973)の *it is that* 構文に関する考察を引用し、スル型言語である英語は *it is that* 構文を多用しないが、ナル型言語である日本語は「のだ」文を好む、という相関関係を導いている。霜崎は、「のだ」は先行文と後続文との「結束性」(cohesion)を示すとした上で、英語ではこの指標があまり表面化しないのに対し、日本語では顕在的に「のだ」で表されるという。

スペイン語には、英語の *it is that* に相当する *es que* という形式があり、しかもかなり高い頻度で使用される。そこでこの形式を「のだ」と比べてみれば、これまでの対照研究を前進させ、「のだ」の特徴を一層際立たせることができるかもしれない。またスペイン語の *es que* 構文の分析に、日本語の「のだ」研究の成果を援用して、新たな視点を持ち込むことが可能かもしれない。

III. 「のだ」と “es que”

では、この *es que* とは、どのような特徴を持った形式だろうか。*es*は繫辞動詞 *ser* の2人称単数形で、英語の *is* に相当する。*que*は名詞節などを導く接続詞で、英語の *that* に当たる。従って次の例(8)の返答の文を英語に置き替えれば、(*It is that I was sick.*ということになる。(スペイン語には、いわゆる形式主語の *it* のような用法がないので、繫辞動詞が文頭に來ている。))

- (8) -¿Por qué no fuiste? なぜ行かなかったの?
-*Es que* yo estuve enfermo. 病気だったんだ。

「のだ」が「先行する句を名詞化する『の』」と「断定の助動詞『だ』」から成ることを考えると、*es que* と「のだ」は統語的に対応しているといっていだろう。

- (9) Si tu mejor amigo ya no quiere estar contigo, ¿no será que ves demasiado la televisión? (君の一番の友達が、君といっしょにいるのをいやがるなんて、君、テレビ見過ぎなんじゃない?) (スペイン国营放送広告)

例(9)では *es que* が否定疑問文に用いられている。繫辞動詞は *es* ではなく3人称単数の未来形 *será* という形で、現在の推量を表している。このように *es que* という形式は、現在形以外の時制に改めたり、肯定平叙文以外の文を用いたりすることが形式上可能である。このような形式の多様性という点でも、「のだ」と似ているといえる。

また上の例で明らかのように、意味的にも *es que* は説明や理由を表し、「のだ」の用法の或るものと近似している。日本で編まれたスペイン語辞典をひも解くと、次のような記述が見られる。まず桑名・他(1990)の『西和中辞典』(p.1741)では、*es que* ~に対して「実は...である、というのは...である」という訳を当てている。宮城・他(1990)の『現代スペイン語辞典』(p.1024)は、「*es que* + 直説法」という形式は「理由の説明、言い訳」を表すとして、例文(10a~c)とその和訳等をあげている。またRubio 他(1992)の『新スペイン語辞典』(p.1499)も「(実は)...なのです」という意味だと述べ、例(11a, b)と訳文を掲げている。即ちいずれの辞書も、*es que* を「のだ」に近い意味を持つ表現と見做しているのである。

- (10) a. *Es que* no tengo dinero.
実を言うと私はお金を持っていないのです。
b. ¿*Es que* me vais a dejar solo?
僕を一人にしておくというのか?
c. ¿Cómo *es que* no has venido en coche?
何でまた車で来なかったんだ? (宮城・他, 1990: 1024)
- (11) a. ¿Por qué no viniste? -*Es que* estuve enfermo.
なぜ来なかったの? —— 病気だったんだ。
b. ¿Cómo *es que* has llegado tarde?
どういうわけで遅刻したんだ? (Rubio 他, 1992: 1499)

逆に「のだ」をスペイン語に置き替えるという場合は、どうだろうか。スペイン人が書いた日本語概説書 Planas 他(1984: 252)は、「のです」、「わけです」について次のように述べている。“Existen también algunos giros de sentido levemente causal, o más bien explicativo en un contexto dado, equivalente de algún modo a las expresiones castellanas 《es que...》, 《pues...》, 《resulta que...》.” (また軽く原因を表す形式が存在する。文脈の中で説明を表すと言ったほうが良いかも知れない。ある意味でスペイン語の es que, pues (というのは), resulta que (という結果になる) のような表現に相当する。)そして例(12a, b)などがあげられ、es queを用いた訳が付されている。

(12) a. 昨晚非常に遅くまで起きていたのです。

Es que ayer trasnoché hasta muy tarde.

b. どうして何も言ってくれなかったのですか。

¿Cómo *es que* no me dijiste nada? (Planas 他, 1984: 252)

石原(1985:90)では「のだ」は、“Se trata de la formación de la oración atributiva con la partícula anunciativa, cuya equivalencia en español sería una oración del tipo “Es que...”. Con este procedimiento indicamos réplica, explicación, oposición o contrariedad, con algún matiz de sorpresa.” (発題の小辞[「の」をさす]を伴う繫辞動詞文であり、スペイン語では es que の類の文に相当するであろう。応答、説明、反対、対立などを表し、多少驚きのニュアンスが含まれる。)と説かれ、例(13a~c)などがあがっている。

(13) a. 彼はずるいのです。 *Es que* él es astuto.

b. 彼女たちは来ないのですか。¿*Es que* ellas no vienen?

c. 彼らはそんなに怒っていたのでしょうか。

¿*Será que* ellos estaban tan enfadados? (石原, 1985: 90)

以上の説明により、es que が「のだ」と統語的にも意味的にもかなりの共通部分を有しており、両者の対照研究を行うことが無価値でないことが明らかになったと考える。

IV. “es que” 研究

es queに関する言及は、次のような文献に見出される。まず Kany (1945:253) は、

アメリカ大陸のスペイン語の特徴の1つとして疑問文での *es que* の多用をあげている。 “In some regions, particularly the Andean zone, *es que* abounds in questions, a locution which again reminds us of the French usage but which again is very probably a popular development found also in Spain.”と、フランス語の *Est-ce que...*? を連想させる点にも触れ、次のような例をあげている。

- (14) a. ¿Por qué *es que* Inocente pelea con mi papá? (エクアドル)
 なぜイノセンテは父とけんかするのですか。
 b. ¿Dónde *es que* está Juan? (キューバ)
 フアンはどこにいますか。 (Kany, 1945: 253)

Beinhauer (1958) は “La aclaración de una circunstancia que la necesita se introduce con *es que* (‘el caso es que’).” (状況の釈明を必要とするときは *es que* (事態は～なのだ) に導かれる文で表される。)と述べ、例(15a)は単なる疑問文だが、(15b)は「お兄さんが欠席していることの理由は、病気であるからか」といった意味を表すとしている。従ってフランス語の *Est-ce que...*? とスペイン語の *es que* は、音価が似ていても意味機能は異なるという。この説明のしかたは、第2節で見たAlfonso (1966)の「のだ」に関する説明と極めて似ていることに留意されたい。

- (15) a. ¿Está enfermo tu hermano? お兄さんにご病気ですか。
 b. ¿*Es que* está enfermo tu hermano? お兄さんにご病気なのですか。
 (Beinhauer, 1958, スペイン語訳 1973: 106)

フランス語の *Est-ce que...*? との関係については、Gili Gaya (1961)も Beinhauer と同意見である。Gili Gayaによれば、(16a)は肯定か否定で答えられる問いであるのに対し、(16b)のように問われると “se ve requerido a explicar los motivos de su satisfacción” (なぜ満足しているかという理由を説明しなければならない) (p.94) という違いがあり、*es que* で始まる疑問文は単なる疑問文ではないという。

- (16) a. ¿Te sientes satisfecho? 君は満足しているか。
 b. ¿*Es que* te sientes satisfecho? 君は満足しているというのか。
 (Gili Gaya, 1961: 94)

- c. *Era que* les parecía mal. 彼らには良いとは思えないのだった。
- d. Quizá *fuese que* estaba de malhumor. 恐らく彼は機嫌が良く
なかったのだろう。 (同, 96)
- e. [述部 es (=存在する、おきる)] [主部 que ~]

また es que は直説法現在形で用いられることが多いが、(16c) (線過去)や(16d) (接続法過去)のように他の時制もとり得ること、文の構成としては「接続詞 que 以下のことが存在する」という、完全自動詞文を成し、(16e)のように分析できることなどを主張している。

es que 構文を Gili Gaya と同じく (16e) のように捉える見地は、Bello(1847: § 1088), Real Academia Española (1973: 367~368) などがある。

一方、que 以下の部分が主部なのではないという考え方もある。たとえば Alcina 他 (1975: 1017) は、“hay que tener presente que el verbo *ser* cumple aquí una función identificativa y, de hecho, en algunos casos, admite como segundo término de identificación los neutros *ello*, *eso*, etc., en cuyo caso pasaría a ser el elemento marcado, atributo de la construcción.” (この構文では *ser* は同定機能を果たしていることに留意しなければならない。その証拠に、時には *ello* 「そのこと」、*eso* 「それ」などの中性の語が同定の相方として現れることがある。この場合 *que* に導かれる節は、まぎれもなく文の叙述補語ということになる。)と説いている。即ち、「そのことは」、「それは」というような先行文脈や状況を受ける主語が陰在しており、es que 文は(17a)のような構造をしていると見るわけである。またその根拠となる、中性の語を主語とする文とは、(17b~c)のようなものである。<4>

- (17) a. [主部 φ] [述部 es que ~]

- b. *Eso es que* debe haber perdió el autobús. 実はバスに乗り損
ねたらしいのだ。 (Alcina 他, 1975: 1017)
- c. -*Ello es que* cuando, pasado el primer susto, hubo lugar
de discurrir escapatorias y arbitrios, no hallamos otro que
el de avisar a tu amo, (...)

(L. Fernández de Moratín, *El sí de las niñas*)

「さてはじめの驚きからどうやら落着きをとりもどして、何とか
遁げ道なり手だてを考える段になって見ると、わたしたちにはお前

さんの御主人に、このことをお知らせするって方法の外には、何1
つ見つからなかったってわけなんだ。」 (会田由・訳)

高橋(1985: 87)も es que 文における動詞 ser は「完全自動詞の働きをしているのではなく、強調構文に用いられる典型的な繋ぎ動詞として働いている」と述べて、(17a)の分析を支持している。

以上のように、スペイン語の es que に関しては、何を主語と見るかという統語的問題に関心が集まっており、(16e)のような見地と(17a)のような見地が対立している。しかしその意味機能については、「説明」を表す、ということで、ほぼ意見の一致が見られる。上に紹介した研究以外にも、Moliner (1973: II, 1146), Steel (1976: 25~26), Porroche (1988: 120~122)などが「es que は先行文脈についての説明・言い訳を表す」という趣旨のことを述べている。

もし、この意味機能についての把握の仕方が的外れでなければ、文の構成は(17a)のようになっていると考えるのが妥当ではないだろうか。es queが「先行文脈についての説明・言い訳を表す」という、「のだ」に酷似した働きを持つのなら、文の構成も「のだ」文の構成と同種のものではないかとの推測も可能であろう。「のだ」文には「隠れた主題がある」(益岡, 1991)、「承前性がある」(田野村, 1990)といった指摘がなされていることは、第2節で見たとおりである。(17a)は日本語文法でいう「説明文」であり、陰在の主語で先行文脈を受けて、述部でその事情を述べようとするのにふさわしい形式である。他方、(16e)のような構成を持つ文は、「現象文」の1種であり、独立した事象を描くのに適するが、先行文脈とのつながりを明示するものではない。以上の理由により本稿では、es que文は(17a)のような構成をしていると見做すことにする。

V. 文例収集

5.1 第3、4節では、「のだ」と es que に関する従来の研究成果を検討してきた。この節では、両者の対応関係を実例に即して明らかにしていきたい。そのための資料として、次の4つの文学作品を選んだ。

- (18) a. Gabriel García Márquez (1961) *El coronel no tiene quien le escriba*, Editorial Sudamericana, Buenos Aires (1978). ガルシア・マルケス「大佐に手紙は来ない」内田吉彦・訳(1978)、集英社世界の文学28『カルペンティエール／マルケス』。

- b. Miguel Delibes (1983) *Cartas de amor de un sexagenario vo-*

luptuoso, Ediciones Destino, Barcelona. デリベス『好色六十路の恋文』喜多延鷹・訳 (1989)、西和書林。

- c. 三島由紀夫 (1963)『午後の曳航』、新潮文庫 (1968)。Mishima, *El marino que perdió la Garcia del mar*, Jesús Zulaika Goicoechea 訳 (1983), Editorial Burguera, Barcelona.
- d. 吉本ばなな (1987)『キッチン』、福武文庫 (1991)。Yoshimoto, *Kitchen*, Junichi Matsuura y Lourdes Porta 訳 (1991), Tusquets Editores, Barcelona.

即ち原文がスペイン語で書かれた小説で、邦訳のあるもの2点と、反対に日本人が書いた小説で、スペイン語訳のあるもの2点である。各々1つは1960年代、もう1つは1980年代の作品で、その時代が舞台になっているものを選んだ。(18a)の作者は、コロンビア人ノーベル賞作家である。(18b)は、現代スペイン文壇を代表する小説家の手になる書簡形式の小説である。

これらの原典と翻訳に見られる「のだ」と es que の用例の個数は、次のとおりであった。

(19)	のだ	es que	対応
a. Márquez	157	9	3
b. Delibes	571	9	6
c. 三島	309	7	2
d. 吉本	406	22	9
<hr/>			
	1443	47	20

のだ es que

表中 es que の用例の中に、la verdad es que (実は～なのだ) 3例、lo que pasa es que (おこっているのは～なのだ) 3例、el caso es que (問題は～なのだ) 2例が含まれている。これは前節の最後に述べた見解に基づいて、先行文脈や状況を受ける主語が顕在する文も es que 文の1種と見做しているためである。⁶⁵⁾

一瞥して明らかなように、「のだ」は es que に比べて大変使用頻度が高い。これは日本語文が原典である場合も、翻訳である場合も一貫している。とは言え es que も使用が稀ということではなく、ある程度の分量の実例が見られる。そして翻訳者が「のだ」を es que と訳し、es que を「のだ」と改めている事例は、20例あった。es que の運用の半分近くが「のだ」と対応しているから、両者が無関係ではないこ

とが確認されたわけである。

5.2 「のだ」と *es que* が対応する用例を順次、見ていこう。資料(18a)には次の3つの対応例がある。

- (20) -No estoy enfermo -dijo el coronel-. *Lo que pasa es que en octubre siento como si tuviera animales en las tripas.*

((18a) García Márquez, 18)

「わしは病気じゃない」と大佐は言った。「ただ、十月になるとけものが腹の中にいるような気がしてくるんだ」 (同和訳, 246)

- (21) -Déjelo, coronel. El sabe de mecánica.

-*Es que* no quiero molestarlo. (同, 58)

「見せて下さいよ、大佐。やつは機械がわかるんです」

「彼をわずらわしたくないんだよ」 (同和訳, 265)

- (22) -*Lo que pasa es que* a ti te falta carácter -dijo luego.

(同, 81)

「あなたに意気地がないことが問題なのよ」そう彼女は言った。

(同和訳, 276)

第1例の話者は、「医者に診てもらったら」と忠告する相手に対し、「体調が良くないように見える」事態の釈明をしている。第2例では、時計を見せようとしないうる理由を説明している。第3例の話者は、懸案をかかえ続ける相手にむかって、その背後にある実情を指摘している。全て *es que* と「のだ」がほぼ一致した機能を果たしている事例である。

次に資料 (18b)には、次の6つの対応例が見られる。

- (23) *Y el caso es que* aquí, en esta atmósfera apacible, con el vallejo de frutales a mis pies, podría seguir escribiéndole durante horas sin fatiga. ((18b) Delibes, 41)

本当のところは小生はこの落ち付いた環境の中、眼下に宝の山を臨むような気持ちで貴女様に向かい、何時間でも寝食を忘れて書き続けられるような気がするのです。 (同和訳, 43)

- (24) *Y el caso es que* este problema ya no es específico de las ciudades. (同, 45)

しかも、これは市街地に特有な問題ではないのです。(同和訳, 47)

- (25) Como podrá comprobar, los antecedentes familiares influyen en el hombre tanto como los genes y el medio, a no *ser que* sean los genes y el medio los que determinan aquellos incidentes. (同, 51)

これでおわかりのように家族の前歴は後世の人間にまるで遺伝や環境のように影響を与えています。もちろんこの前歴を決定したものは遺伝子や環境ではないのですがね。(同和訳, 54)

- (26) ¿Qué más? *¿Es que* hay más?, te preguntarás? (同, 82)

「それで? それでまた何かおっしゃっていただけるの?」と、おねだりになるでしょう。(同和訳, 90)

- (27) *¿Es que*, por casualidad, eres excrupulosa para comer y el simple color de los guisos ya te previene? (同, 97)

ひょっとして、あなたは食べ物について 過敏症ではありませんか。料理にちょっと色がついただけで偏見を持たれるのではありませんか。(同和訳, 107)

- (28) Y tal vez desde esta base, con los pies en el suelo, cabría la posibilidad de reanudar nuestro epistolario a no *ser que* mi físico le cause a usted verdadera repulsión. (同, 148)

これを基点とし、しっかりと足を地につけて、もし小生の肉体が貴女様にどうにもならない嫌悪の情をもたらすのでなければ、私たちの文通を再開できるのではと思います。(同和訳, 166)

(23)に先だって「今日の手紙は少し長くなり過ぎたかもしれません。」という文がある。(23)は、その弁明をしている箇所に入る。(24)は「不動産が高騰した」という文脈を受けて、その事情を述べる文である。(25)は「前歴の決定に関与したのは遺伝子や環境である」という可能性を排除して、「理由は別のところにある」ことを示唆している。田野村(1990)の言う「特立」の働きをする文であり、小金丸(1990b)の立場からは、否定の「スコープ」が es que 及び「のだ」で示された部分だと見ることができよう。(26), (27)は疑問文の例である。前者は、相手の美貌を称える句の列挙をふと中断して改行した箇所に現れる文で、その中断について、読者である相手が不可解に思ってその説明を求めるであろうという内容である。後者は、自分の勧めた料理が相手の口に合わなかったことについての「私」なりの解釈である。最後の(28)は(25)と同様、「特立」的な例で、「私」は「自分の容姿が醜いので相手に嫌われる」ということが事情の中から排除されれば、仲直りをしたいと提案している。6例とも

es queと「のだ」の共通の機能の上に成立した文である。

日本語の原典とスペイン語訳から成る資料に目を転じよう。(18c)には、次の2つの対応例が見られる。

- (29) 「それが君の英雄かい」と聴きおわった首領は、赤い薄い唇をゆがめて言った。「英雄なんて、そんなものはこの世にいないんだよ」

((18c) 三島, 48)

—¿Y ése es tu héroe? —dijo el jefe cuando hubo acabado. Su fino y rojo labio superior tenía tendencia a fruncirse cuando hablaba—. *¿Es que* no entiendes que en este mundo los héroes no existen?

(同西訳, 58)

- (30) 「俺が入ってきて、君の生活も一変した。これは何も俺が悪いのじゃないが、生活が一変したことはたしかだ」

(同, 145)

—Hijo, cuando entré en esta casa también cambió tu vida. No *es que* yo hiciera mal viniendo, pero tu vida ha cambiado.

(同西訳, 163)

第1の例では、「首領」は「それが君の英雄かい」という皮肉な質問をした背後の事情を「のだ」文で語っている。スペイン語訳では当該の文は「君は、この世に英雄など存在しないことが分らないのか」という、*es que*を用いた疑問文に改められているが、「そんな発言をするところを見ると」という状況を受けて、その説明を求める表現であり、原文の文意を反映している。第2例は、「君の生活が一変した」こと理由は「俺が悪い」ということではなく、他に求めるべきであるという文である。この資料においても、やはり「のだ」と*es que*の働きは、よく似ている。

最後に、資料(18d)に見られる9つの対応例を検討しよう。

- (31) 「みかげさん、家の母親にビビった？」彼は言った。

「うん、だってあんまりきれいなんだもの。」 ((18d) 吉本, 19)

—Mi madre te ha dejado boquiabierto, ¿eh? —dijo.

—Sí. *Es que* es tan guapa.

(同西訳, 23)

- (32) 「家具のところでこれにちょっとすわってみたら、どうしてもほしくなって買っちゃったんじゃない？」

(同, 24)

—Tu madre —empecé a decir—, ¿no *será que* vio el sofá en la

sección de muebles, se sentó, se encaprichó de él y acabó comprándolo? (同西訳, 26)

- (33) 「何で2人で久しぶりに会って、天気の話してるんだろうね。」
(同, 37)

—¿Por qué *será que* dos personas que hace mucho que no se ven, cuando se encuentran, acaban siempre hablando del tiempo?
(同西訳, 38)

- (34) 別に、する必要もなかったけれど、彼と会うといつもそうだった。自分が自分であることがものの悲しくなるのだ。
(同, 40)

Además, no tenía ninguna necesidad de hacerlo; pero *es que*, cuando estaba con él, sucedía siempre lo mismo. Me entristece ser yo misma.
(同西訳, 40)

- (35) 「どうしたの? 店は?」
(同, 47)

—¿Cómo *es que*...? ¿Y el bar? (同西訳, 46)

- (36) 「ところで、どうして私が行けることになったの?」 (同, 104)
—A propósito, ¿cómo *es que* voy a ir yo? —pregunté.

(同西訳, 95)

- (37) 本当は、自宅に電話を、と言おうと思ったのだが、私はそのかわりに、「泣いて包丁で刺したりしますけど、よろしいですか。」と言ってしまった。
(同, 112)

La verdad es que pensaba decirle: «Llámame a casa», pero en lugar de eso acabé diciendo—: Lloraré y te clavaré un cuchillo, ¿te parece bien?
(同西訳, 101)

- (38) 「このへんの宿はさ、昔、ぼうずが肉を食っちゃいけないっていうんでとうふをいろいろ工夫して食ってたんだよ、そいつを何で言うの、今風にしてお客に出すのが売り物なんだよね。」 (同, 144)

—Los hoteles de por aquí sirven *tôfu* cocinado de diversas formas. *Es que*, antiguamente, los bonzos prohibieron comer carne. Ahora lo han adaptado a la cocina moderna y es típico de este lugar.
(同西訳, 129)

- (39) 「橋を渡ってゆくのね。」
と言って、私は少し沈黙した。橋のところで会った、うららという人のことを思い出したのだ。
(同, 183)

—Vamos a cruzar el puente, ¿verdad? —dije, y enmudecí por un

instante. *Es que* me había acordado de Urara, la mujer que había visto en el puente. (同西訳, 165)

(31) は、相手の母親を見てあっけにとられたことについての釈明を表す文である。(32), (33), (35), (36)では疑問文の形式をとっている。第1の場合は、ソファの購入の動機は、こういうことではないか、という問いである。その他の3つの事例は、理由を尋ねる疑問詞で始まっており、「のだ」と *es que* が用いられる環境が整っている。2つ戻って(34)は、「そのことを彼に説明できるとは思えない」ことの背後の事情を述べている。(37)に進む。この例に見られる「のだ」は、「これ以上何かおっしゃりたいなら」とまで口に出した段階で、実際はどういう心境だったのかを示す文に現れている。対応する *la verdad es que* (本当は～なのだ) も同様である。(38)の原文は、タクシー運転手が通行中の観光地の解説をしている下りであり、翻訳では「豆腐料理がこのあたりの名物である」ことの理由を説明する文になっている。そして(39)は、「私は少し沈黙した」という先行文脈の背後の事情を述べる例である。

このように、「のだ」と *es que* が翻訳において対応している事例は、いずれも、先行する文脈・状況を受け、その事情、理由を述べるという、意味的に共通した機能を果たしているものである。このように意味的に共通性の高い形式でありながら、一方の言語では盛んに活用され、もう1つの言語ではそれに比べると控え目にしか使われないわけである。

5.3 今度は、両者が対応しない事例を検討していこう。まずスペイン語の資料で *es que* が用いられているのに、日本語の方では「のだ」以外の形式にあっている場合を検討する。該当例は27例だが、このうち2つを取り出してみる。

(40) —¿Usted cree que darán ese dineral por el gallo?

—No *es que* lo crea —respondió don Sabas—. *Es que* es absolutamente seguro. ((18a) García Márquez, 68)

「あの軍鶏にそんな大金を払ってくれると思いますか？」

「思うなんてものじゃない」とサバス氏は答えた。「絶対に確かなことです」 (同和訳, 265)

(41) 「だって、この大都会で住所ナシ、電話ナシで生きてゆくつもり？」

「だって、また引っこす時、また通知するかと思うと面倒で。」

((18d) 吉本, 42)

—¿Pero *es que* piensas vivir en esta gran ciudad sin dirección ni teléfono?

—*Es que*, cuando vuelva a mudarme, será pesado informar otra vez.
(同西訳, 42)

第1例では、原文に *es que* が2度現れているのに、邦訳では「思うなんてものじゃない」、「絶対に確かなことです」とされていて、「のだ」が使われていない。第2例では、原文では「～するつもり?」、「～と思うと面倒で」という文末の形式になっている部分が、スペイン語訳では共に *es que* に改められている。しかし文学的価値を度外視すれば、これらの日本語の文に「のだ」を用いても、意味に大幅な相違は生じない。(40)は、「思うというのではない。絶対に確かなのです」と訳すことも可能であり、(41)も文末を補って、「～生きてゆくつもりなのだ?」「だって～面倒なんだもの」と表現することもできる。その他の例もたいてい *es que* を「のだ」と置換しても文脈に矛盾しない文になる。

一方、「のだ」を用いた文は、全てが *es que* の文に移すことができるわけではない。日本語の資料に「のだ」が使われている箇所が、スペイン語側で *es que* に対応していない事例は、1423例という多数にのぼるが、強いて *es que* と置換すると、たいていは不自然になる。

(42) ¿Qué ha sucedido? ¿Por qué los hados maléficos se encarnizan con nosotros de este modo? No sé qué hacer ni pensar. ¿Qué te ocurre, amor?
(18b) Delibes, 111)

一体どうなされたのですか。何の因果で私たちはこんな風に苦しまねばならないのでしょう。今何をしたらよいのか、まるでわかりません。

一体何が起ったのですか。
(同和訳, 123)

(43) 房子は小さな叫びをあげた。傘は彼女の足の甲を打って倒れたのである。
(18c) 三島, 31)

Lanzó un pequeño grito. El parasol, al dar contra su pie, había caído a su lado.
(同西訳, 39)

たとえば(42)の邦訳には「のだ」が4回現れているが、原文の該当箇所に *es que* という表現は見られない。この表現を用いることが許されるのは、せいぜい文頭に *por qué* (なぜ) という疑問語が置かれた第2の文 (¿Por qué es que los hados maléficos se encarnizan con nosotros de este modo?) だけで、その他は標準スペイン

語では非文法的になる。また、(43)の原典では、「小さな叫びをあげた」理由を「のだ」文で表しているが、スペイン語訳は単に「傘は彼女の足を打って、そばに倒れた」となっているだけで、前の文との関係を明示する標識がない。この文に *es que* を冠することは文法的には可能だが、この文脈にあっては、単純な因果関係をことさらに強調した、くどくて不自然な文になる。「彼女は叫んだ」という文と「傘が足に当たった」という文を並列するだけで、両者の関係は十分了解されるから、つながりを示す語句は不要なのである。つまり、日本語の「のだ」は、文脈中のごく緩やかな関係をも取り結ぶが、スペイン語の *es que* は、「説明」の名に値するだけの明瞭な関係を示す必要があるときでなければ用いられないと言えよう。

以上をまとめると、*es que* の用いられた原文が「のだ」と訳されていない場合でも、たいていは「のだ」を使うことが可能であるのに対し、その反対の事例では、*es que* で置き替えるのが不適当だということである。つまり *es que* は、翻訳作品で「のだ」と対応しているものはもとより、非対応のものも「のだ」の域内に含まれているが、その逆は成り立たない。結局、「のだ」と *es que* の関係は、一方が他方をほぼ包含したものであり、相異なる意味領域を持つ2つの言語形式が1点で共通項を得ているというのではないと言える。

5.4 最後に、用いた資料の中で「のだ」と *es que* がどのような統語的環境に現れるのか、どういう語形をとるのかを見ておこう。

(44) 「のだ」内訳

- a. 主節：のだ、の、のだった、のだろう、のだって、のかもしれない、のかもしれないかった、のではない、のか、のかしら、のだろうか、のではないか、のではないだろうか。 1268
- b. 従属節：のだが、のだから、のだろうけれど、のだし、のではなく、のか、のなら、のであれば、のでなければ。 175

(45) “*es que*” 内訳

- a. 主節：肯定平叙文（直説法現在）21、肯定平叙文（接続法現在）2、否定平叙文（直説法現在）5、肯定全体疑問文（直説法現在）7、肯定部分疑問文（直説法現在・未来）3、否定全体疑問文（直説法現在・未来）3。 42
- b. 従属節・句：条件節（直説法現在）3、不定詞句（否定）2。 5

上の表に示すように、「のだ」は主節にも従属節にも多用され、さまざまな語が後

接する。⁶⁾ 他方 es que は主節の用例がほとんどで、しかも直説法現在以外の形態の使用例は6例しかなかった。⁷⁾ 第4節で引いた Gili Gaya(1961)の言を待つまでもなく、過去時制などの使用も可能なはずだし、名詞節の中などにも現れ得るのだが、実際の運用に至ることは稀なのであろう。なお表(43a)に「肯定部分疑問文3」とあるが、その内訳は、por qué(なぜ)で始まる文1例、cómo(どうして)で始まる文2例で、全て理由を尋ねる文である。

このように、「のだ」は使用可能な文脈的意味が広いだけでなく、統語的にも自在に用いられる。ところが es que は、文脈の上で制限があり、かつ統語的な変化に乏しい。以上で文例収集による資料に基づく「のだ」と es que の記述を終わる。ただ、es que は実例として得られた統語環境以外の環境に果たして現れ得るのかどうかを確認できないので、インフォーマント調査によってその点を補う必要がある。次節では、その方法と結果について述べる。

VI. インフォーマント調査

2つの問題に焦点を当てて簡単なインフォーマント調査を行った。第1はes queで理由以外のことを問う疑問文を作ることができるかという点。第2は es que 構文を名詞節の中に収めることができるかという点である。男女各2名のスペイン人被験者(知的職業に就く成人)に(46)と(47)の各文を示し、「自然(O)」、「やや不自然(Δ)」、「不自然(X)」の3段階の判断から1つを選んで回答してもらったところ、文の右に記したような結果となった。

(46) 疑問詞	男	男	女	女
a. ¿Es que no me quieres? 私を嫌いなのか。	O	O	O	O
b. ¿Por qué es que ya no me quieres? なぜもう私が好きではないのか。	O	X	Δ	Δ
c. ¿Cómo es que ya no me quieres? どうしてもう私が好きではないのか。	O	O	O	O
d. ¿Adónde es que quieres ir? どこへ行きたいのか。	Δ	X	X	Δ
e. ¿Con quién es que quieres ir? 誰と行きたいのか。	X	X	X	X
f. ¿Cuándo es que quieres ir? いつ行きたいのか。	O	X	Δ	X

- g. ¿Para qué *es que* quieres ir? × × × ×
何のために行きたいのか。
- h. ¿Quién *es que* quiere ir? × × × ×
誰が行きたがっているのか。
- i. ¿Qué *es que* quieres decir? × × × ×
何を言いたいのか。

(47) 従属節

- a. No *es que* Juan sea cobarde. ○ ○ ○ ○
ファンは卑怯なのではない。
- b. Tengo en cuenta el hecho de que digan △ ○ ○ ○
que no *es que* Juan sea cobarde.
ファンが卑怯なのではないと人々が言っ
ているという事実を私は考慮に入れている。

(46)の結果を見ると、sí（はい）か no（いいえ）で答えることを要求される疑問文(46a)を除くと、わずかなりとも許容されているのは、全て疑問副詞を用いた文であることが分かる。中でも理由を尋ねる文が自然だと判断されている。文例収集では、疑問詞を用いた文3例は全て理由を問うものであるという結果を得たが、インフォマント調査はそれを裏づけることになった。第4節で、(14b)のように「ファンはどこにいるのですか」という文に*es que*を使用する方言があるという Kany (1945)の指摘を紹介したが、これは標準語では難のある文だということになる。*es que*が「先行文脈や状況の説明をする」働きを持つことが、理由の疑問詞との共起の起因となっていることは、疑いない。他方、日本語の「のだ」は、(46b~i)の訳文で明らかのように、どの疑問詞とも軋轢を起こさない。先行文脈・状況との緩やかな「関連」を示す必要さえあれば、「のだ」は疑問詞を選ばず生起するのである。

(47b)は、(47a)を *decir*（言う）に支配される名詞節の中に入れ、それを*hecho*（事実）という名詞を修飾する節にして、更に *tener en cuenta*（考慮する）という動詞句の支配する名詞節に含めた文である。このように3重に埋め込んだ節に *es que*を用いてみたにもかかわらず、被験者は、おおむねこれを許容した。これによって、*es que*が従属節中に現れることは十分可能であり、実際の運用例が乏しいに過ぎないという推測が間違っていないことが確認された。

VII. まとめ

以上の考察をまとめると、「のだ」と *es que* について次のような記述ができる。

まず前者は極めて高い頻度で用いられ、終止形ばかりでなくさまざまな語を後接した事例も普通に見られる。主節にも従属節にも自由に現れ、共起する疑問詞の種類を問わない。他方、後者は、前者に比べると頻度が低く、主に主節中で直説法現在形で用いられ、それ以外の語形や従属節内での使用は、可能ではあるがあまり見られない。理由を問う疑問詞とのみ共起する。そして es que で表現できる意味内容は「のだ」で代替できるが、その逆は必ずしも成り立たない。

このように、どの点においても一方の領域が他方を凌駕しているわけだが、「先行文脈や状況の背後の事情、理由を述べる」ことを表す機能を持つという点で大きな共通性を持つ両者の間に、なぜこのように大きな隔りがあるのだろうか。この疑問については、次のように考えることができるかも知れない。

- (48) a. ?恋人が私にセーターを編んだ。
 b. 恋人が私にセーターを編んでくれた。
 c. そんなところに立っていられては、迷惑だ。
 d. 「昨日、田中さんに頼んでおきました。」
 *「すみません。田中さんは誰ですか。」
 e. 「すみません。田中さんって誰ですか。」

日本語は、文の内容に話者の主観的評価を形式として明示して添えようとする傾向があると言われることがある。例えば(48a)に比べて(48b)の方が自然に感じられるのは、話者自身に直接影響のある事柄は、傍観者的に述べるよりも自分が利益を受けることを合わせて表現すべきであるという意識が働くからだと思われる。また(48c)のように、ある出来事を描写しつつ、それが話者に被害を及ぼすことにも言及する間接受動文が発達しているのも、この例である。⁸⁾ 次に(48d)の返答の文が誤っているのは、話者の情報の領域に属していない対象物には、(48e)のように「という」の類の形式を付加する必要があるからである。外国人学習者にとって習得困難なこの事象も、上に述べた原理に基づくものと思われる。⁹⁾

さて、「のだ」も、やはり話者の主観を文の表す事行に反映させようとする形式の1種である。「のだ」文には、先行文脈や状況と結びつけて理解してほしいという話者の意図が、加味されているからである。文の連鎖の中に維持されている「結束性」(coherence)を示す機能そのものは、「のだ」と es que に共通して見られる。¹⁰⁾ だが、前者の形式ばかりが著しく頻繁に利用され、「具体的なことがらとしては存在しない」(田野村, 1990: 8)ほど漠然とした状況までも文と結束させる。後者の使用は決して少なくはないし、状況と文との結束もある程度可能であるが、到底、前者には

及ばない。この片寄りの原因は、先ほどから述べている日本語の特質に求めるべきではないだろうか。日本語では機会あるごとに、文に付された結束性を「のだ」という標識で明示し、「私がこの文を提出するのは、しかるべき脈絡があつてのことである」という文に対する話者の主観的評価をあらわにする傾向があることが、「のだ」が多用される原因だと考えてはどうだろうか。

es queも、ややもすると先行文脈などの「説明」とは言えないような、緩やかな結束性を持つ文にまで使われるきらいがないではないが、使用者が自己規制をして乱用を戒めているようである。Cortés Rodríguez (1991: 37)の調査によれば、この形式の使用率は社会文化階層の高さと反比例するという。また児童が es que を不必要に使用すると、教師はそれを厳しく訂正するということも見聞する。文末・節末に置かれる「のだ」とは反対に文頭に位置する es que は、後続する語句の役割を考えずに無思慮に使われる危険性があるからであろう。このようにして es que は、「説明」の名に値するだけの、かなり明瞭な結束性を表すことになる。第2節で、田野村(1990)が「「のだ」は説明を表す」という見解に批判的であることを紹介したが、もし「説明」という術語を es que の機能の規定に充てるならば、es que の能力を越えた結束性まで示せる「のだ」には同じ術語を使用しない方が、日西対照研究では無用の誤解を生まずにすむであろう。

本稿では、日本語とスペイン語において、一般に「説明」を表すとされる形式を対比して、その共通点と差異を明らかにした。機能の類似性をもとにスペイン語の es que 文の主述構造について私案を提示し、また両者の違いの原因を探る過程で日本語の文の特質の1つを示唆した。不十分な論究ではあるが、この奥深い問題に今後取り組まれる方々にいささかなりとも手掛かりとなることを念じて擱筆する。

[注]

* 本稿執筆に当り、多数の日本語学、スペイン語（イスパニア語）学、言語学の専門家から有益なご指摘をいただき、貴重な資料を提供賜りました。各位に厚く御礼申し上げます。

(1) なお例(1)最終行「だって暮から変だったじゃないの」の「の」のような用例は、他の「のだ」とは性質が異なるため、田野村(1990)や野田(1993)は、これを区別して扱っている。本稿では、これに従い、この種の事例は除外する。

(2) この種の誤用が日本語学習者に頻繁に見られることは、田野村(1990:103)も指摘している。

(3) 田野村(1990)以降の論考で本文に名を挙げなかったものには、次のようなものがある。杉本(1990)、小金丸(現 野田)(1990a, 1991)、渡辺(1991)、野田(1992a, b, 1993)、青山(1992a, b)、田野村(1993)。

(4) 例(17d)の原典は前世紀の戯曲だが、引用箇所は現代語と大きな隔たりがない上、邦訳(『娘たちの「はい」』会田由・訳(1953)、岩波文庫、p.31)が存在するので、ここに掲げた。

(5) la verdad es que は資料(18b)、lo que pasa es que は(18d)、el caso es que は(18a)から得られた。

(6) 表(44a)中「のだって」とは、「田辺の彼女は1年間つきあっても田辺のことがさっぱりわかんなくていやになったんだって。」((18d)吉本, 45)のような用例をさす。

(7) 表(45a)にいう接続法現在の用例とは、次のようなものをさす。“—*Pueda ser que todo esté resuleto cuando se cumpla la hipoteca de la casa.*”(「家の抵当の期限がくるころには、すべて片づいているかもしれないよ」)((18a) García Márquez, 50, 同和訳, 261) これは、es que の前に poder(できる、かも知れない)という動詞を置く表現だが、イスパノアメリカのスペイン語では主節中で接続法形を用いることがある。本稿の資料では(18a)のみに見られた。また直説法未来形の個数は、肯定部分疑問文に1例(既出例(34))、否定全体疑問文に2例(同じく(32)など)、計3例である。

表(45b)にいう条件節の用例とは、“*Lo que tú acabas de decir, bueno, si es que piensas marcharte en seguida, sería muy duro...*”(「このお話、あなたが又すぐ船に乗るおつもりなら、それだったら、私、難しいと思うの」)((18c)三島, スペイン語訳, 121, 同原文, 105~106)の類をさす。不定詞句の用例とは、既出の(28)のような、a no ser que(～でないのならば)という成句的表現の事例をさす。

(8) 拙稿(1990)を参照のこと。

(9) (48d, e)の例文は、田窪(1991)に負う。また「情報のなわ張り」という概念については、神尾(1990)を参照のこと。

(10) 第2節で触れた霜崎(1981)の主張を想起されたい。

[参考文献]

Alcina, Juan & J. M. Blecua (1975) *Gramática española*, Ed. Ariel, Barcelona.

- Alfonso, Anthony (1966) *Japanese language patterns*, 上智大学。
- 青山文啓(1992a)「説明をめぐる日本語の文末表現」、東海大学文明研究所紀要 12。
- _____(1992b)「因果関係とその説明」、文化言語学編集委員会・編 『文化言語学—その提言と建設—』、三省堂。
- Beinhauer, Werner (1958) *Spanische Umganssprache*, Dümmlers, Bonn. (1973) F.Huarte Morton 訳 *El español coloquial*, Ed. Gredos, Madrid.
- Bello, Andrés (1847, 1970) *Gramática de la lengua castellana*, Ed. Sopena Argentina, Buenos Aires.
- Cortés Rodríguez, Luis (1991) *Sobre conectores, expletivos y muletillas en el español hablado*, Ed. Librería Ágora, Málaga.
- Gili Gaya, Samuel (1961) “¿Es que...?”, *Studia philologica. Homenaje ofrecido a Dámaso Alonso* 2, Ed. Gredos, Madrid.
- 堀川智也(1990)「「のだ」を用いる文の焦点」、北海道大学言語文化部紀要 19。
- Hurford, James R. (1973) “Deriving S from S + is,” *Syntax and semantics* 2 (J. P. Kimball 編), 大修館書店。
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』、大修館書店。
- 石原忠佳(1985) *Gramática moderna de la lengua japonesa*, Edi-6, Madrid.
- 石原嘉人(1989)「「是....的」と否定のスコープ」、中国語学 236、大修館書店。
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』、大修館書店。
- Kany, Charles E. (1945) *American-Spanish syntax*, The University of Chicago.
- 小金丸(現 野田)春美(1990a)「作文における「のだ」の誤用例分析」、日本語教育 71、日本語教育学会。
- _____(1990b)「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」」、日本語学 9-3、明治書院。
- _____(1991)「「のではなく」の機能」、阪大日本語研究 3、大阪大学。
- 桑名一博・他(1990)『西和中辞典』、小学館。
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』、くろしお出版。
- 宮城 昇・山田善郎・他『現代スペイン語辞典』、白水社。
- Moliner, María (1973) *Diccionario de uso del español*, Ed. Gredos, Madrid.
- 野田春美(1992a)「複文における「の(だ)」の機能」、阪大日本語研究 4、大阪大学。
- _____(1992b)「単純命題否定と推論命題否定」、梅花短大国語国文 5、梅花短期大学。
- _____(1993)「「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐる」、日本語学 12-11、明

治書院。

- Planas, Ramiro & J.A. Ruescas (1984) *Japonés hablado*, Ed. Alhambra, Madrid.
- Porroche, Ballesteros, Margarita (1988) '*Ser*', '*estar*' y verbos de cambio, Arco Libros, Madrid.
- Real Academia Española (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa-Calpe, Madrid.
- Rubio, Carlos & 上田博人(1992)『新スペイン語辞典』、研究社。
- 霜崎 實(1981)「「ノデアル」考 — テキストにおける結束性の考察 —」、*Sophia Linguistica* 7、上智大学。
- Steel, Brian (1976) *A manual of colloquial Spanish*, Sociedad General Española de Librería, Madrid.
- 杉本和之(1990)「「のだ」の種々相」、中京国文学 9、中京大学。
- 杉村博文(1982)「「是....的」— 中国語の「のだ」の文 —」、森岡健二・他・編『講座 日本語学 12. 外国語との対照Ⅲ』、明治書院。
- 高橋覺二(1985)「Ser の主語」、イスパニカ 29、日本イスパニヤ学会。
- 田窪行則(1991)「対話における知識管理について — 対話モデルからみた日本語の特性」、『アジアの諸言語と一般言語学』、三省堂。
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ。「のだ」の意味と用法』、和泉書院。
- _____(1993)「「のだ」の機能」、日本語学 12-11、明治書院。
- 渡辺 実(1991)「「わがこと・ひとごと」の観点と文法論」、国語学 165、国語学会。
- 拙稿(1990)「スペイン語と日本語 — 間接影響表現の対照 —」、近藤達夫・編『講座 日本語と日本語教育 12. 言語学要説(下)』、明治書院。

日本語とスペイン語の無題文

La oración atemática del japonés
y el español

野田 尚史

Hisashi NODA

キーワード：無題文、 主題、 主格、 格助詞「が」、 語順

1. はじめに

文には、題目をたてて、その題目についてなにかを述べる有題文と、題目をたてないで、できごとを述べる無題文がある。

日本語では、題目はふつう「～は」で表されるので、有題文は「～は」をもつ(1)のような文であり、無題文は「～は」をもたない(2)のような文である。

(1) 彼女は何も 言わなかった。(村上春樹『羊をめぐる冒険』p.143)

(2) 夜が きました。(遠藤周作『沈黙』p.75)

(日本語の例文とスペイン語の例文の対応をわかりやすくするために、述語の部分を線で囲み、主格名詞の部分に下線をひいてある。)

無題文では、主格名詞は、(2)のように、「～は」ではなく、「～が」で示される。

一方、スペイン語では、題目(主題)は、野田尚史(1994)で規定したように、述語より前におかれた主格や対格、与格の定名詞だと考えられる。したがって、有題文は述語より前にそのような名詞をもつ(3)のような文であり、無題文は述語より前にそのような名詞をもたない(4)のような文である。

(3) Ella no añadió nada. ((1)のスペイン語訳 p.111)

(4) Llegó la noche. ((2)のスペイン語訳 p.70)

無題文では、(4)のように、下線をひいた主格名詞は、線で囲んだ述語より後ろにおかれる。

このような無題文は、典型的には存在や出現を表す述語を使って、新しい人や物の存在や出現を述べるなど、日本語とスペイン語で共通な点も多い。しかし、日本語では述語が形容詞でも無題文になれるが、スペイン語ではむずかしいなど、違いもみられる。

この論文では、はじめに日本語とスペイン語の無題文の範囲を決めたうえで、無題文に使われる述語や主格名詞の性質や、無題文がはたす機能などについて、日本語とスペイン語の共通点と違いを明らかにしたい。

2. 日本語の無題文

日本語の無題文は、題目を表す「～は」をもたない、次の(5)のような文である。このような無題文では主格名詞は「～が」で表される。

(5) その場で新しい戦争が 始まった。

(ガルシア=マルケス『百年の孤独』p.102)

ただし、「～は」をもたない文といっても、もともと「～は」があるのに省略されていると考えられる文は、無題文には含めない。たとえば、次の(6)は、文脈から

「僕は」が復元できるので、「僕は」が省略された有題文とみる。(これは、三上章(1959)などが「略題」とよぶものである。)

(6) 平凡な女の子と 知りあって、平凡な初恋を した。

(村上春樹『羊をめぐる冒険』p.57)

また、主格が「～が」で表されていても、述語が題目になっていると考えられる文も、無題文には含めない。たとえば、次の(7)の「君が言ったんだろう？」は、「言ったのは君だろう？」にかえてもいように、述語の「言った」が題目になっていると考えられる。したがって、この文は、述語が題目になっている有題文とみるのである。(これは、三上章(1959)などが「陰題」とよぶものである。)

(7) 「でも暇つぶしの友だちが本当の友だちだって誰かが言ってたな」と鼠は言った。

「君が 言ったんだろう ?」 (村上春樹『羊をめぐる冒険』p.371)

無題文というのは、題目をもたないという点だけで特徴づけられた文であって、述語の形などで特徴づけられたものではない。したがって、述語は(8)のように形容詞や名詞であってもよく、(9)のように否定であってもよい。

(8) 風が、強い。 (吉本ばなな『キッチン』p.46)

(9) 「でも煙が みえなかったな」 (村上春樹『羊をめぐる冒険』p.353)

また、(10)のように、未来を表すものであってもよく、(11)のように推量を表すものであってもよい。

(10) 手伝いが二人 来るよ。 (村上春樹『羊をめぐる冒険』p.295)

(11) 木や電線のゆるる音が 聞こえてくるようだ。

(吉本ばなな『キッチン』p.46)

このように規定した無題文は、松下大三郎(1928)の「無題断句」、三尾砂(1948)の「現象文」、佐治圭三(1973)の「存現文」、仁田義雄(1986)の「現象描写文」、丹羽哲也(1988)の「無題文」などと重なる部分が多い。しかし、ここでいう無題文は、(7)のような陰題の文を含まない点で、陰題の文を含む松下の「無題断句」や丹羽の「無題文」と異なり、(8)のような述語が形容詞や名詞の文を含む点で、述語が動詞のものだけにかぎる三尾の「現象文」と異なる。また、(9)のような否定文を含む点で、否定文を含まない佐治の「存現文」と異なり、(11)のような推量の文を含む点で、推量の文を含まない仁田の「現象描写文」と異なる。

3. スペイン語の無題文

スペイン語の無題文は、主格や対格、与格の定名詞が題目として述語より前におか

れていない、次の(12)のような文である。このような無題文では、主格名詞は述語より後ろにおかれる。

- (12) Allí empezó otra guerra.

(その場で新しい戦争が始まった。) ((5)のスペイン語原文 p.179)

ただし、題目をもたない文といっても、もともと題目があるのに省略されていると考えられる文は、日本語の場合と同じように、無題文には含めない。たとえば、次の(13)は、動詞の活用形から主格が「yo (僕)」だということが明らかなので、「yo」が省略された有題文とみる。

- (13) Conocí a una chica vulgar y tuve con ella un vulgar primer amor.

(平凡な女の子と知りあって、平凡な初恋をした。)

((6)のスペイン語訳 pp.42-43)

また、主格名詞が述語より後ろにおかれていても、ほかに題目があると考えられる文も、日本語と同じように、無題文には含めない。たとえば、次の(14)は、「quien dijo eso (言ったの)」が題目になっていると考えられる分裂文である。このような文も、有題文とみるのである。

- (14) -¿No fuiste tú quien dijo eso?

(not were you who said that)

(「君が言ったんだろう?」)

((7)のスペイン語訳 p.305)

スペイン語の無題文も、日本語の無題文と同じように、題目をもたないという点だけで特徴づけられた文であって、述語の形などで特徴づけられたものではない。したがって、述語は(15)のように否定であってもよいし、(16)のように未来を表すものであってもよいし、(17)のように推量を表すものであってもよい。

- (15) - No hay whisky escocés, señor.

(「スコッチはございませんが」)

(Cela, *La colmena* p.81)

- (16) Vendrán dos ayudantes.

(手伝いが二人来るよ。)

((10)のスペイン語訳 p.241)

- (17) Parece que se oyen temblar los árboles y los hilos de la luz.

(木や電線のゆれる音が聞こえてくるようだ。)

((11)のスペイン語訳 p.43)

このように規定した無題文は、Hatcher(1956)の「existential sentence(存在文)」や Suñer(1982)の「presentational sentence (提示文)」と重なる部分が多い。しかし、ここでの無題文は、「hay (英語: there is/are)」を使った(15)のような存在文を含む点で、そのような文を含まない Hatcherの「existential sentence (存在文)」と異なる。また再帰代名詞の「se」を使った(17)のような受動文を含む点で、

そのような受動文を含まない Suñer の「presentational sentence (提示文)」とも異なる。

4. 無題文の構造

日本語の無題文とスペイン語の無題文は、表面的には、まったく違う構造をもっているように見える。日本語の無題文は、主格名詞が「～は」ではなく「～が」で示されるといったことが重要であるのに対して、スペイン語の無題文は、主格名詞が述語より前ではなく述語より後ろにおかれるといったことが重要だからである。

しかし、このような違いがでてくるのは、日本語とスペイン語の無題文の構造が根本的に違うからだとは考えない。このような表面的な違いは、2つの言語の語順や格の表示のしかたのような文の基本的な構造の違いと、題目の表示のしかたの違いからくるものにすぎないのであって、日本語とスペイン語の無題文は、題目をもたないという点でまったく共通の構造をもっていると考える。

具体的には、次のようなことである。まず、格関係だけが問題になる段階での日本語とスペイン語の構造は、主格だけをとる1項述語の場合を例にすると、それぞれ次の(18)と(19)のようなものだと考える。

(18) 日 本 語： 主格名詞 が 述語

(19) スペイン語： 述語 主格名詞

日本語では、述語が後ろにおかれ、格関係は格助詞で表される。スペイン語では、述語が前におかれ、格関係を表すものは主格名詞にはつかない。(日本語とスペイン語の語順については、野田尚史(1983)に詳しい説明がある。)

次に、文の題目が問題になる段階で、(18)と(19)の主格名詞が題目になると、日本語とスペイン語で、それぞれ次の(20)と(21)のような文になる。

(20) 日 本 語： 主格名詞 は 述語。

(21) スペイン語： 主格名詞 述語。

日本語では、題目になった名詞には「は」がつき、スペイン語では、題目になった名詞は述語より前におかれる。(日本語とスペイン語の題目(主題)をもつ文については、野田尚史(1994)に詳しい説明がある。)

題目をもたない無題文の場合は、文の題目が問題になる段階でも、格関係だけが問題になる段階の(18)と(19)の構造がそのまま現れ、日本語とスペイン語で、それぞれ次の(22)と(23)のような文になる。

(22) 日 本 語： 主格名詞 が 述語。

(23) スペイン語： 述語 主格名詞。

このように、日本語とスペイン語の無題文は、どちらも、(18)と(19)のような格関係の段階の構造がそのまま現れるという点では、まったく同じである。表面的な違い、つまり、日本語では主格名詞が「～は」ではなく「～が」で示され、スペイン語では主格名詞が述語より前ではなく後ろにおかれるというのは、格関係の段階の構造(18)と(19)の違いや、題目の表しかた(20)と(21)の違いによるものにすぎないのである。

ところで、無題文は、題目をもたない点では、「～とき」「～たら」や「cuando～(～とき)」「si～(～たら)」のような従属度の高い従属節や従属句と同じである。(ただし、「～けれど」や「pero(～けれど)」のような従属度の低い従属節の場合は、独立した文と同じように題目をもつことができる。日本語の従属節の中の題目については、野田尚史(1986)に詳しい説明がある。)

したがって、無題文の構造は、従属度の高い従属節や従属句と似ていることが予想される。実際、次にみるように、従属度の高い従属節や従属句の構造は無題文の構造と基本的によく似ている。

たとえば、日本語では、(24)の「～たら」節や(25)の「～と」節では、主格名詞は、無題文と同じように、「～が」で表され、「～は」で表されることはない。

(24) “雄一が いたら何もいらない” (吉本ばなな『キッチン』p.97)

(25) そして春が 来る と三人の子供が生まれ、人々は畑に作物を植えた。

(村上春樹『羊をめぐる冒険』p.274)

また、スペイン語でも、(26)の「si～(～たら)」節や、(27)の「al[動詞の不定形]([する]と)」句では、主格名詞は、ほかに対格名詞などがいないかぎり、ふつう、無題文と同じように、述語より前ではなく後ろにおかれる。(従属節の主格名詞の位置については、Bledsoe(1987)が詳しい。)

(26) «Si está Yūichi, no necesito nada» ((24)のスペイン語訳 p.86)

(27) Al llegar la primavera, nacieron tres niños más, y los colonos prepararon los campos e hicieron la siembra.

((25)のスペイン語訳 p.220)

このように、日本語でもスペイン語でも、無題文は、従属度が高い従属節や従属句とほぼ同じ構造をもっているのである。

5. 無題文の述語

動詞や形容詞などの述語のなかには、無題文の述語としてよく使われるものから、無題文の述語にならないものまでいろいろある。ここでは、述語を5種類、つまり、ア)存在、イ)出現・発生、ウ)終了・変化、エ)状態、オ)動作にわけ、それぞれ

の述語が日本語とスペイン語の無題文としてよく使われるかどうかを検討する。(スペイン語の無題文に使われる述語については、Hatcher(1956)が詳しい調査をおこなっている。)

おおまかな結論を先にいうと、日本語でもスペイン語でも無題文の述語として典型的なのは、ア) 存在、イ) 出現・発生を表す述語である。残りの、ウ) 終了・変化、エ) 状態、オ) 動作を表す述語は、日本語では無題文の述語としてかなり使われるが、スペイン語ではほとんど使われない。これを表にまとめると、次のようになる。

(28)	日本語	スペイン語
ア) 存在 イ) 出現・発生	無題文の典型	
ウ) 終了・変化 エ) 状態 オ) 動作	無題文になる	無題文にならない

では、ア) からオ) の5種類の述語について順にみていこう。

ア) 存在を表す述語

日本語の存在を表す動詞「ある」「いる」などは、(29)のように、無題文の述語としてよく使われる。

(29) 「冷蔵庫にサラダが あるわよ」 (村上春樹『羊をめぐる冒険』p.29)

スペイン語でも存在を表す動詞「haber (ある、いる)」は、(30)のように、無題文の述語としてよく使われる。

(30) - Hay ensalada en la nevera -me dijo. ((29)のスペイン語訳 p.21)

ただし、このようなスペイン語の「haber」を使った存在文は、日本語の「～が」にあたる名詞が完全な主格とはいえない点で、やや特殊である。つまり、日本語の「～が」にあたる名詞が、ふつうの主格名詞とは違い、多くの方言で動詞と呼応せず、代名詞化すると対格の代名詞になるからである。

スペイン語の存在を表す動詞「estar (ある、いる)」も、次の(31)のように無題文の述語として使われる。「estar」の場合は、日本語の「～が」にあたる名詞は完全な主格であり、「haber」のような特殊性はない。

(31) Al lado de José Arcadio Segundo estaba una mujer descalza, muy gorda, con dos niños de unos cuatro y siete años.

(ホセ・アルカディオ・セグンドのわきに、四つと七つぐらいの年ごろの二人の子供をつれた、ひどく肥った裸足の女が立っていた。)

(García Márquez, *Cien años de soledad* p.341)

このほか、(32)の「残っている」や(33)の「quedar (残る)」のように実質的に存在を表す述語も無題文の述語になる。

(32) ……、この厳重な追放令にかかわらず実は三十七名の司祭が、信徒を捨て去るに忍びずひそかに日本に かくれ残っていた。(遠藤周作『沈黙』p.4)

(33) ……; pero en realidad, pese al severo edicto de expulsión, quedaban ocultos en el Japón treinta y siete misioneros incapaces de abandonar a su rebaño. ((32)のスペイン語訳 p.10)

イ) 出現・発生を表わす述語

日本語の「現れる」や「来る」、スペイン語の「aparecer (現れる)」や「venir (来る)」など、人や物の出現を表す述語は、無題文の述語としてもっとも典型的なものである。次の(34)は「出て来る」が使われた無題文の例であり、(35)は「salir (出る)」が使われた無題文の例である。

(34) 広げてみると、バナナの絵が書いてあるきれいなグラスが 出て来た。
(吉本ばなな『キッチン』p.51)

(35) Lo abrí y salió un bonito vaso con el dibujo de un plátano.
((34)のスペイン語訳 p.47)

また、日本語の「始まる」「起こる」「生まれる」などや、スペイン語の「empezar (始まる)」「ocurrir (起こる)」「nacer (生まれる)」など、ものごとの発生を表す述語も、無題文の述語としてよく使われる。次の(36)は「始まる」が使われた無題文の例であり、(37)は「comenzar (始まる)」が使われた無題文の例である。

(36) とにかく、そのようにして羊をめぐる冒険が 始まった。
(村上春樹『羊をめぐる冒険』p.67)

(37) De este modo tan sencillo comenzó la aventura de dar caza al carnero.
((36)のスペイン語訳 p.50)

このほか、日本語の「見える」「聞こえる」やスペイン語の「verse (見える)」「oírse (聞こえる)」も、映像や音声が目や耳に入ってくることだと考えれば、「出現・発生」を表す述語の一種とすることもできる。次の(38)は「聞こえる」が使われた無題文の例、(39)は「oírse (聞こえる)」が使われた無題文の例である。

(38) 拍子木の音が中庭で 聞こえた。(遠藤周作『沈黙』p.147)

(39) En el patio se oyó un tableteo de matracas.
((38)のスペイン語訳 p.135)

ウ) 終了・変化を表わす述語

日本語の「終わる」「消える」や、スペイン語の「terminar(終わる)」「apagarse(消える)」のように、終了を表す述語は、出現や発生を表す述語にくらべ、無題文になりにくい。とくにスペイン語では、その傾向が強い。Contreras (1976: pp.52-53) も、「empezar (始まる)」を使った(40)と(41)では、無題文である(41)のほうが文脈の制限が少なく広い範囲で使えるのにならして、「morir (死ぬ)」を使った(42)と(43)では、有題文である(42)のほうが文脈の制限が少なく広い範囲で使えるとしている。(例文の大文字は、そこに文強勢がおかれることを示す。)

(40) La resistencia **EMPEZÓ**. (レジスタンス運動は始まった。)

(41) **Empezó** la RESISTENCIA. (レジスタンス運動が始まった。)

(42) El canario **MURIÓ**. (カナリアは死んだ。)

(43) **Murió** el CANARIO. (カナリアが死んだ。)

このように、スペイン語では終了を表す述語が無題文になりにくいことから、次の(44)と(45)のように、日本語では無題文が自然なときに、スペイン語では有題文が自然だということがよくおきる。

(44) 話をやめると老人の作り笑いが **消えた**。 (遠藤周作『沈黙』p.110)

(45) Cuando terminó de hablar, la falsa sonrisa del viejo **se apagó**,
..... (44)のスペイン語訳 p.101)

また、日本語の「なる」「変わる」や、スペイン語の「hacerse (なる)」「cambiar (変わる)」のように、変化を表す述語も、無題文にはなりにくい。とくにスペイン語では無題文の述語になることはほとんどない。したがって、次の(46)と(47)のように、日本語の無題文とスペイン語の有題文が対応することも多い。

(46) 午後、僅かながら**空が** **晴れました**。 (遠藤周作『沈黙』p.86)

(47) Por la tarde el cielo **se despejó** un poco,
((46)のスペイン語訳 p.81)

このように、スペイン語では、終了や変化を表す動詞は基本的に無題文になりにくいのであるが、終了や変化といえるような事態でもそれをできごとの発生としてとらえれば、無題文になる。たとえば、人の死亡でも、(48)では、「inesperadamente (思いがけなく)」「Me asusté (驚いた)」からもわかるように、できごとの発生ととらえられ、無題文になっている。

(48) Hace poco **murió** mi abuela inesperadamente. Me asusté.

(先日、なんと祖母が死んでしまった。びっくりした。)

(Yoshimoto, *Kitchen* p.12)

エ) 状態を表す述語

日本語の「強い」「きれい」のような状態を表す述語は、一時的な状態を表すときにかぎってであるが、次の(49)のように無題文の述語として使われることがある。

(49) ああ、月が とてもきれい。 (吉本ばなな『キッチン』p.152)

それにたいして、スペイン語では、「fuerte (強い)」「bonito (きれい)」のような状態を表す述語が無題文の述語にはなることはほとんどない。そのため、日本語の(49)のような無題文に対応するのは、次の(50)のような有題文になる。

(50) Oh, la luna está preciosa. ((49)のスペイン語訳 p.133)

オ) 動作を表す述語

日本語の「笑う」「座る」「呼ぶ」など、人の動作を表す述語も、次の(51)のように無題文の述語として使われることがある。

(51) 雄一がわたしを見て 笑った。 (吉本ばなな『キッチン』p.124)

このような動作を表す述語の無題文が使われるのは、動作主の立場からその動作を述べるような場合ではなく、外から見てそのような事態が発生したことを述べるような場合である。その意味では、この種の無題文は、「出現・発生」を表す述語の無題文に近いといえる。

一方、スペイン語では、「reír (笑う)」「sentarse (座る)」「llamar (呼ぶ)」など、人の動作を表す述語が無題文の述語になることはほとんどない。そのため、日本語の(51)のような無題文に対応するのは、次の(52)のような有題文になる。

(52) Yūichi, mirándome, sonrió. ((51)のスペイン語訳 p.107)

6. 無題文の語順

ここまでみてきたように、無題文に使われる述語には日本語とスペイン語で違いがみられた。存在や出現・発生を表す述語は、日本語でもスペイン語でも同じように無題文によく使われるのであるが、終了・変化や状態、動作を表す述語は、日本語の無題文には使われるが、スペイン語の無題文にはほとんど使われなかったのである。

では、終了・変化や状態、動作を表す述語がスペイン語で無題文の述語になれないのは、なぜだろうか。ここでは、その原因を、日本語とスペイン語の無題文の語順の違いから説明したい。

日本語の無題文の語順は、次の(53)のように、主格名詞が述語より前にくる。

(53) …… 主格名詞 …… 述語。

それにたいして、スペイン語では、無題文の語順は、次の(54)のように、主格名詞が述語より後ろにおかれる。

(54) …… 述語 主格名詞 …….

このような語順のために、スペイン語では、話し手は述語を言った後で主格名詞を言うことになり、聞き手は述語を聞いた後で主格名詞を聞くことになる。

述語が存在や出現・発生を表すときは、なにかが「ある」とか「現れた」と気がついた後で、その正体がなんであるかを確かめるということが可能である。しかし、述語が終了・変化や状態、動作を表すときは、主格名詞がなんであるかがはっきりしないのに、それが「変わった」とか「きれいだ」とか言うようなことはふつうできない。つまり、述語が終了・変化や状態、動作を表すときは、主格名詞の存在が前提になっているのである。

このようなことから、存在や出現・発生を表す述語の後に主格名詞がでてくることはゆるされるが、終了・変化や状態、動作を表す述語の後に主格名詞がでてくることはむずかしいのだと説明できる。

このような、前提になるもののほうが前に現れるという現象は、スペイン語の無題文だけにみられるものではなく、かなり一般的なものである。たとえば、次のように、日本語の「～を」と「～に」の語順にもみられる。

日本語では、対象の「～を」と相手の「～に」がいっしょに現れるときは、「～に～を」の語順が好まれる。たとえば、次の(55)のほうが(56)より自然だと感じられる。(国立国語研究所(1964)の調査でも、「～に～を」が53例あるのに対して「～を～に」は8例しかない。)

(55) 私は鈴木さんにキーを渡した。

(56) 私はキーを鈴木さんに渡した。

それにたいして、対象の「～を」と結果の「～に」がいっしょに現れるときは、反対に、「～を～に」の語順が好まれる。たとえば、次の(57)のほうが(58)より自然だと感じられるのである。(国立国語研究所(1964)の調査でも、「～を～に」が118例あるのに対して「～に～を」は1例しかない。)

(57) 片山さんは行き先をモナコに変えた。

(58) ?片山さんはモナコに行き先を変えた。

これは、次のように解釈できる。対象と相手ではどちらかがどちらかの前提になるとはいいいくいが、対象と結果では、対象のほうが結果の前提になっている。そのため、対象と結果の場合は、対象と相手の場合とは違って、対象の「～を」が、かならず結果の「～に」より前におかれるのである。

このように、前提になるもののほうが前に現れるという現象は、日本語の「～を」と「～に」の語順にもみられるものであり、一般性の高いものである。

7. 無題文の主格名詞

日本語と英語を比較して、日本語の主格名詞につく「は」と「が」の対立が、英語の主格名詞につく定冠詞と不定冠詞の対立と対応するといわれることがある。たとえば、寺村秀夫(1991)は存在表現の場合に明瞭に見られるとして、次のような例をあげている。

(59) 小さい花瓶はテーブルの上にある。

(60) The little vase is on the table.

(61) テーブルの上に小さい花瓶がある。

(62) There is a little vase on the table.

(59)の「は」と(60)の定冠詞が対応し、(61)の「が」と(62)の不定冠詞が対応するというのである。

しかし、こうした対応はこの2種類の存在表現にたまたまみられるものであって、一般的なものではない。たとえば、次の(63)や(64)のような英語の文は、(62)と同じく、日本語の(61)のような無題文に相当するものであるが、不定冠詞ではなく定冠詞や定冠詞に相当するものが使われている。

(63) Back come the Kahoks with the ball. (Green(1980:p.584))

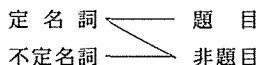
(64) Standing there was my brother. (Bolinger(1971:p.584))

このように、日本語の「は」と「が」の対立は、英語の定冠詞と不定冠詞の対立と直接には対応しない。これは、日本語と英語の場合だけでなく、日本語とスペイン語の場合でも同じであり、日本語の「は」と「が」の対立はスペイン語の定冠詞と不定冠詞の対立とは直接には対応しないのである。

それは、冠詞の定・不定は名詞のレベルのものなのにたいし、「は」と「が」の対立は文のレベルのものであり、本質的に違うものだからである。つまり、冠詞の定・不定は、その名詞が具体的になにを指すのかが聞き手にわかるかどうかといったレベルのものであるのにたいし、「は」と「が」の対立は、文の中でその名詞がその述語の主格にくることが予想しやすいかどうかといったレベルのものであり、直接には対応しないのである。

ただし、主格名詞が定であるか不定であるかと、主格名詞が題目であるかどうかとは、日本語でもスペイン語でも、また英語でも、次の(65)のような関係があると考えられる。

(65) 主格名詞の定・不定と題目・非題目の関係



つまり、定名詞は、題目の名詞としても、題目ではない名詞としても使われるが、不

定名詞は題目の名詞としては使われないということである。また、反対からいうと、題目になる名詞は定名詞にかぎられるが、題目でない名詞は定名詞でも不定名詞でもよいということである。

なお、ここで定名詞というのは、スペイン語で定冠詞がつくような照応名詞や、スペイン語で不定冠詞がつくこともあるような総称名詞のほか、人称代名詞、指示代名詞、固有名詞などである。不定名詞というのは、スペイン語で不定冠詞がつくか複数形で冠詞がつかないような非照応名詞のほか、「だれか」「だれ」、「alguien (だれか)」「quién (だれ)」のような名詞である。

では、(65)の対応関係をふまえて、無題文の主格名詞をみてみよう。そうすると、無題文の主格名詞は、題目になっていない名詞なので、不定名詞であっても定名詞であってもよいということになる。実際、次にみるように、無題文の主格名詞は、日本語でもスペイン語でも、不定名詞のことも定名詞のこともある。

まず、無題文の主格名詞が不定名詞になっているものとしては、次の(66)と(67)のような例があげられる。

- (66) 間もなく、つじつまの合わない戦争のニュースが つぎつぎに伝えられるようになった。(ガルシア=マルケス『百年の孤独』p.113)

- (67) Poco después empezaron a recibirse noticias contradictorias de la guerra. ((66)のスペイン語原文 p.193)

これらの文の主格名詞「つじつまの合わない戦争のニュース」は、照応のない不定名詞であり、スペイン語の(67)では冠詞のつかない複数形の名詞になっている。

次に、主格名詞が定名詞になっているものとしては、次の(68)と(69)や、(70)と(71)のような例があげられる。

- (68) ふたたび三月になり、ジプシーたちが 舞い戻ってきた。(ガルシア=マルケス『百年の孤独』p.6)

- (69) En marzo volvieron los gitanos. ((68)のスペイン語原文 p.60)

- (70) そのころピシタシオンが 死んだ。(ガルシア=マルケス『百年の孤独』p.114)

- (71) Por esa época murio Visitación. ((70)のスペイン語原文 p.194)

(68)と(69)の主格名詞「ジプシーたち」は、これよりすこし前の文脈にでてきた名詞と照応のある定名詞であり、スペイン語の(69)では定冠詞がついている。また、(70)と(71)の主格名詞は固有名詞である。

ただ、定名詞でも、一人称と二人称の名詞(人称代名詞)は、無題文の主格名詞にはなりにくい。(仁田義雄(1986)は、現象描写文のうちの眼前状況描写文というタイ

ブについて、主格名詞が三人称の名詞に限られることを指摘している。)

一人称の名詞が無題文の主格名詞になりにくいのは、話し手が話し手自身の動作を外から観察したできごととして述べるのがふつうはないからであり、二人称の名詞が無題文の主格名詞になりにくいのは、話し手が聞き手自身の動作をわざわざ聞き手に伝える状況があまりないからである。したがって、特別な文脈や状況では、一人称や二人称の名詞も無題文の主格名詞になる。たとえば、次の(72)と(73)のように、話し手が聞き手の知らないことを伝えるような状況では、二人称の名詞も主格名詞として使われるのである。

(72) そのつぎの年にあなたが うまれたのよ。

(ルルフォ『ペドロ・パラモ』p.30)

(73) Al año siguiente naciste tú; …… ((72)のスペイン語原文 p.26)

このように、無題文の主格名詞は、日本語でもスペイン語でも、不定名詞だけでなく定名詞が使われることも多いのである。

8. 無題文の機能

無題文は、典型的には、話し手が外から観察した事態を事態としてそのまま述べるような機能をもっている。

ただ、「5. 無題文の述語」でみたように、日本語の無題文とスペイン語の無題文では使われる述語の範囲に違いがあるため、無題文の機能も日本語とスペイン語で違いがみられる。それは、簡単にいうと、次のようなことである。

まず、無題文の機能は、細かくみると、次の2種類があると考えられる。

ア) 新しい人や物の出現 — 存在や出現・発生の述語を使って、新しい人や物の出現を述べる

イ) 新しいできごとの発生 — 終了・変化や状態、動作の述語を使って、新しいできごとの発生を述べる

このうちア)の機能は、日本語の無題文にもスペイン語の無題文にもよくみられるものである。しかし、イ)の機能は、日本語の無題文にはみられるが、スペイン語の無題文にはあまりみられないのである。

このことを具体例で説明しよう。まず、ア)の新しい人や物の出現を述べる機能というのは、次の(74)と(75)のような例にみられるものである。

(74) よろめくようにして一人の酔っぱらいが部屋に 入ってきました。

(遠藤周作『沈黙』p.18)

(75) En la habitació entró tambaleándose un borracho cubierto de harapos.

((74)のスペイン語訳 p.23)

これらの文は、「一人の酔っぱらい」の出現を述べることによって、この人物を新しく談話に導入する働きをしている。(スペイン語の無題文の機能については、Bledsoe (1987)が詳しく説明している。)

次に、イ)の新しいできごとの発生を述べる機能というのは、次の(76)のような例にみられるものである。

- (76) まだ若い月が、そうっと空を渡ってゆこうとしているのが目に止まった時、
バスが 発車した。 (吉本ばなな『キッチン』p.54)

この文は、「バスの発車」というできごとを述べるものであって、「バス」を新しく談話に導入するものではない。このような機能をもった無題文は、日本語ではよく使われるが、スペイン語ではあまり使われない。(76)のスペイン語訳も、次の(77)のように、無題文ではなく有題文になっている。

- (77) Cuando posé los ojos en una luna todavía creciente que cruzaba el cielo despejado, el autobús arrancó. ((76)のスペイン語訳 p.50)

ア)の場合でもイ)の場合でも、無題文が使われるのは、予想していなかったという状況のときが多い。ア)の場合なら、予想していなかった人や物の出現というときであり、イ)の場合なら、予想していなかったできごとの発生というときである。もし、予想していたことがそのとおりにおきたのなら、次の(78)と(79)の例のように、日本語でもスペイン語でも、無題文ではなく有題文が使われやすくなる。

- (78) 迎えの車は予告どおり四時に やってきた。 (村上春樹『羊をめぐる冒険』p.94)

- (79) El coche que venía a recogerme se presentó a las cuatro, según lo convenido. ((78)のスペイン語訳 p.73)

日本語の(78)も「～は」を使った有題文になっており、スペイン語の(79)も主格名詞が述語より前におかれた有題文になっている。

ここまで述べたことを表にまとめると、次の(80)のようになる。表の○は、左の欄の機能でよく使われることを表し、×はそのような機能で使われることがあまりないことを表す。

(80)	日本語の無題文		スペイン語の無題文	
	予想外の人や物の出現	○	○	
	予想外のできごとの発生	○	×	
	予想していたできごとの発生	×	×	

これは、たとえていうと、次のようなことになる。スペイン語の無題文は、典型的には、何の予想もしていないときに、なにかが自分の視野や意識に入ってくるという場合に使われる。日本語の無題文は、それに加え、すでに自分の視野や意識にあるものが予想していなかったことをするという場合にも使われる。そして、自分が注目しているものが予想していたことをする場合には、日本語でもスペイン語でも、無題文ではなく有題文が使われるのである。

9. 無題文の周辺

ここまで、日本語とスペイン語の典型的な無題文の構造や機能をみてきた。ここでは、やや特殊な無題文や、無題文と有題文の境界について考えてみる。扱う問題は、ア) 否定の無題文と疑問の無題文、イ) 主格名詞が述語より前にあるスペイン語の無題文、ウ) 状況成分が題目になっている文、の3つである。

ア) 否定の無題文と疑問の無題文

日本語では、無題文はそのままの形では否定にしにくいことが、寺村秀夫(1979)などで指摘されている。たとえば、(81)をそのまま否定にした(82)は、火事がおきるはずなのになぜか火事がおきなかったというような特殊な状況で使われるだけで、ふつうはおかしな文になるというのである。

(81) 火事がおきた。

(82) ?火事がおきなかった。

(82)のような否定文は、次の(83)のように、「は」を使って有題にする必要があるのである。

(83) 火事はおきなかった。

これにたいして、スペイン語では、無題文をそのまま否定にできないという制約はとくになく、否定文になっても無題のままである。(出口厚実(1985)は、肯定文と否定文で主語が主題になる割合がほとんどかわらないことを統計的に明らかにしている。)したがって、否定文であるために有題になっている日本語の(84)のような文と、否定文になっても無題のままであるスペイン語の(85)のような文が対応することになる。

(84) 放りこまれた時、ほかにはまだ囚人は いなかった。

(遠藤周作『沈黙』p.135)

(85) Cuando lo arrojaron allí, todavía no había ningún otro preso.

((84)のスペイン語訳 p.124)

また、日本語の無題文は、そのままの形で疑問文にすることもむずかしいといわれる。たとえば、久野暲(1973)は、(86)にたいする(87)のような疑問文は、中立的な質

問としてはごちなく、(88)のような「は」を使った文にしないといけないという。

(86) 太郎が来ました。

(87) ?太郎が来ましたか。

(88) 太郎は来ましたか。

これにたいして、スペイン語では、このような制約はとくになく、疑問文になっても無題のままである。したがって、疑問文であるために有題になっている日本語の(89)のような文と、疑問文になっても無題のままであるスペイン語の(90)のような文が対応することになる。

(89) 「あのおっちょこちょいは 来たのか ?」 (セーラ『蜂の巣』p.219)

(90) -¿Arrimó ese botarate por aquí? ((89)のスペイン語原文 p.172)

このように、日本語には無題文をそのまま否定文や疑問文にすることがむずかしいという特殊な制約があるが、スペイン語にはそのような特殊な制約はないのである。

イ) 主格名詞が述語より前にあるスペイン語の無題文

スペイン語の無題文は、主格名詞が述語より後ろにあることが特徴であった。しかし、次の(91)や(92)のように、主格名詞が述語より前にあっても、その主格名詞が不定名詞であれば、有題文でなく無題文だと考える。

(91) Una mariposa nocturna revoloteó sobre su cabeza mientras las luces estuvieron encendidas.

(電気のついているうち、一匹の蛾が頭の上を舞っていた。)

(García Márquez, *Cien años de soledad* p.327)

(92) Por los solares de la Plaza de Toros, dos hombres van de retirada .

(闘牛場の敷地を二人の男が引きあげて行く。)(Cela, *La colmena* p.89)

このような文を無題文とするのは次のような理由からである。まず、文の題目は、定名詞である必要がある。何を指すのかわからない不定の名詞についてあることを述べることはできないからである。そうすると、(91)や(92)の主格名詞は題目ではないということになり、(91)や(92)は無題文として扱うことになるのである。

(91)や(92)で主格名詞が述語より前におかれるのは、述語が出現や発生を表すものではなく、動作を表すものだからである。「6. 無題文の語順」で述べたように、動作や変化、状態を表すためには、主格名詞が表す人や物がすでに存在している必要があり、主格名詞を述語の後ろにおくことがむずかしい。そのため、このような文は、無題文であっても、主格名詞を述語より前におくしかないのである。

ただ、ここで次のような疑問がでてくるかもしれない。それは、(91)や(92)の主格名詞が定名詞になったような文、つまり次の(93)のような文のなかに、無題文と考

てよいものがないのかということである。「7. 無題文の主格名詞」でみたように、無題文の主格名詞は定名詞であってもよいからである。

(93) -¡Ding-dong! -el timbre sonó inesperadamente.

(ピンポンとふいにドアチャイムが鳴った。)(Yoshimoto, *Kitchen* p.14)

しかし、このような文は、無題文とはしないで、有題文だと考えておく。それは、このような文を無題文として、有題文と区別するような形のうえでの違いがないからである。もし、ポーズやイントネーションに違いがあれば、形のうえでは同じ文を有題文と無題文にわけることができるかもしれないが、いまのところそのような違いがあるとはいえないので、(93)のような文はすべて有題文と考えることにする。

ウ) 状況成分が題目になっている文

無題文は、時や所を表す状況成分をとともなうことが多い。そして、状況成分は、文頭におかれることが多い。たとえば、次の(94)のような文である。

(94) うしろの樹で、相変らず蟬が一匹 鳴いている。

(遠藤周作『沈黙』p.142)

この文では、「うしろの樹で」という、所を表す状況成分が文頭におかれている。

このような状況成分は、「は」がついていないかぎり、題目とはいえない。しかし、こうした成分は文頭にあって時や所を設定する働きをするものであるため、題目に近い性質をもつようになっている。実際、(94)を、次の(95)のように、「うしろの樹で」に「は」をつけて有題にしても、あまり意味はかわらないのである。

(95) うしろの樹では、相変らず蟬が一匹鳴いている。

前の(94)にたいして、次の(96)は、状況成分に「～は」がついて題目になっている。このような文は、無題文ではなく有題文とみなされる。

(96) 中庭には幾つかの牀机が 一列に並んでいた。(遠藤周作『沈黙』p.141)

しかし、こうした文の「～は」は、それについて述べるという題目としての働きより、対比的な意味をもたせるという働きが強い。したがって、(96)の「中庭には」から「は」をとりさって、(97)のように無題にしても、対比的なニュアンスがなくなるだけで、意味はあまりかわらない。

(97) 中庭に幾つかの牀机が一列に並んでいた。

このように、日本語で、文頭におかれた状況成分に「は」がつくかどうかという点での有題と無題の差(「～では」と「～で」の差や「～には」と「～に」の差)は、主格名詞に「は」がつくかどうかという点での有題と無題の差(「～は」と「～が」の差)にくらべると、非常に小さく、有題文と無題文の境界がはっきりしなくなるのである。

スペイン語でも、日本語と同じように、状況成分が文頭におかれると、題目に近い働きをすることになる。しかし、日本語とは違って、文頭の状況成分に「は」がつくかどうかという差は、イントネーションを無視すれば、表しわけられない。そのため、(94)のような「は」がつかない状況成分も、(96)のような「は」がつく状況成分もスペイン語では同じ形になる。次の(98)は(94)に相当するスペイン語であり、(99)は(96)に相当するスペイン語であるが、状況成分の表しかたに違いはないのである。

(98) En el árbol que quedaba detrás cantaba como de costumbre una cigarra.

((94)のスペイン語訳 p.130)

(99) En el patio había unos cuantos taburetes alineados.

((96)のスペイン語訳 p.130)

10. まとめ

この論文で述べてきた主な点を簡単にまとめると、次のようになる。

- 1) 日本語の無題文 — 日本語の無題文は、題目を表す「～は」をもたない文である。主格名詞は「～が」で表される。
- 2) スペイン語の無題文 — スペイン語の無題文は、主格や対格、与格の定名詞が題目として述語より前におかれていない文である。主格名詞は述語より後ろにおかれる。
- 3) 無題文の構造 — 無題文は、格関係だけを表す段階の構造がそのまま現れたものであり、従属度が高い従属節や従属句ともよく似た構造をもっている。
- 4) 無題文の述語 — 日本語でもスペイン語でも無題文の述語として典型的なのは、存在や出現・発生を表す述語である。終了・変化や状態、動作を表す述語は、日本語では無題文の述語としてかなり使われるが、スペイン語ではほとんど使われない。
- 5) 無題文の語順 — スペイン語では、主格名詞が述語より後ろにおかれる無題文には、終了・変化や状態、動作を表す述語はほとんど使われない。それは、主格名詞が述語より後に現れる語順では、主格名詞がなんであるかわからないうちに、それが「変わった」とか「きれいだ」とか言うことになって不自然だからである。
- 6) 無題文の主格名詞 — 無題文の主格名詞は、日本語でもスペイン語でも、不定名詞だけでなく定名詞も使われる。
- 7) 無題文の機能 — 日本語の無題文は、予想外の人や物の出現のほか、予想外のできごとの発生を述べる。スペイン語の無題文は、予想外の人や物の出現を

述べるだけで、予想外のできごとの発生を述べることはあまりない。

- 8) 無題文の周辺——日本語の無題文は、そのままの形で否定文や疑問文にすることはむずかしいが、スペイン語の無題文はそのままの形で否定文や疑問文になる。

[参考文献]

- 久野 暉(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 国立国語研究所(1964)『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊 分析』(国立国語研究所報告25) 秀英出版
- 佐治圭三(1973)「題述文と存現文——主語・主格・主題・叙述(部)などに関して」『大阪外国語大学学報』29
- 出口厚実(1985)「現代スペイン語における語順タイプの多様性とその頻度(1)」『大阪外国語大学学報』70-1
- 寺村秀夫(1979)「ムードの形式と否定」林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会(編)『英語と日本語と』くろしお出版
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 仁田義雄(1986)「現象描写文をめぐる」『日本語学』5-2 明治書院
- 野田尚史(1983)「日本語とスペイン語の語順」『大阪外国語大学学報』62
- 野田尚史(1986)「複文における「は」と「が」の係り方」『日本語学』5-2 明治書院
- 野田尚史(1994)「日本語とスペイン語の主題化」『言語研究』105 日本言語学会
- 丹羽哲也(1988)「有題文と無題文、現象(描写)文、助詞「が」の問題(上)(下)」『国語国文』57-6,7 中央図書出版
- 松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』紀元社、復刊 勉誠社 1974
- 三尾砂(1948)『国語法文章論』三省堂
- 三上章(1959)『新訂版 現代語法序説——主語は必要か』刀江書院、復刊『続・現代語法序説——主語廃止論』くろしお出版 1972
- Bolinger, Dwight (1971) A further note on the nominal in the progressive. *Linguistic Inquiry* 2.
- Bledsoe, Penelope Moore (1987) *Pragmatic constraints on postposed subjects in Spanish*. Ph.D. dissertation. Georgetown University.
- Contreras, Heles (1976) *A theory of word order with special reference to Spanish*. North-Holland Publishing.
- Green, Georgia M. (1980) Some wherefores of English inversions. *Language* 56:3

- Hatcher, Anna Granville (1956) Theme and underlying question. Two studies of Spanish word order. *Word* 12. Supplement No.3
- Muñer, Margarita (1982) *Syntax and semantics of Spanish Presentational sentence-types*. Georgetown University Press.

[例文出典]

- 遠藤周作『沈黙』新潮社 1966
- Endô, Shûsaku. *Silencio*. Traducido por Jaime Fernández y José Miguel Vara. Educación Atenas. 1972.
- 村上春樹『羊をめぐる冒険』講談社 1982
- Murakami, Haruki. *La caza del carnero salvaje*. Traducido por Fernando Rodríguez-Izquierdo y Gavalá. Editorial Anagrama. 1992.
- 吉本ばなな『キッチン』福武書店 1988
- Yoshimoto, Banana. *Kitchen*. Traducido por Junichi Matsuura y Lourdes Porta. Tusquets Editores. 1991.
- Cela, Camilo José. *La colmena*. Editorial Noguer. 1951.
- セーラ、ホセ『蜂の巣』（会田由・野々山ミナコ(訳)）白水社 1965
- García Márquez, Gabriel. *Cien años de soledad*. 1967. Espasa-Calpe, 1982.
- ガルシア＝マルケス、G『百年の孤独』（鼓直(訳)）新潮社 1972
- Rulfo, Juan. *Pedro Páramo*. 1955. Segunda edición de Colección Popular, 1981
- ルルフォ、フワン『ペドロ・パラモ』（杉山晃・増田義郎(訳)）岩波現代選書 岩波書店 1979

日本語の自他とスペイン語の再帰
(In)transitividad del japonés
y construcciones reflexivas del español

青山 文啓
Fumihiro AOYAMA

キーワード：自動詞、 他動詞、 再帰代名詞、 身体名詞、 着脱動詞

はじめに

末尾に現れる情報の性格には違いがあるものの、スペイン語も単語末尾に重要な情報が現れることは日本語の場合と同様である。本論部分で扱う問題の理解に最低限必要と思われる知識を提示しておくために、ここではスウェーデンで行なわれたスペイン語の語彙調査の結果について最初に取りあげる¹⁾。

この調査結果は、1977年6月から12月に出版されたスペイン本国の週刊誌および日刊誌に出現する語彙を、綴字の面から逆順に配列した逆引き辞典の形で公刊されている。ただし、活用語である動詞については、日本で市販されている逆引き辞典の場合とは異なり、見出し語レベルではなく個々の動詞の活用形のレベルまでが逆配列の対象とされている（このレベルで数えられた異なり語総数は57,237語である）。

以下にあげるのはスペイン語の単語末尾に現れるアルファベット27文字のうち、その語彙調査で上位五項目に数えられるものである（ただし、一般の順引き辞典で別見出しとして立てられるアルファベットのうち、この調査で立てられているのは ñ だけであり、他の ch と ll については無視されている）：

- 1) -s 28.359 %
- 2) -a 20.679 %
- 3) -o 19.598 %
- 4) -n 11.604 %
- 5) -e 10.978 %

スペイン語ではある単語が動詞であれば、その不定詞は例外なく *-ar*, *-er*, *-ir* のいずれかで終わる。このことは規則動詞の場合も不規則動詞の場合も変わらないので、これらの語尾を目安に動詞を三分するのが一般的だが、（他の叙法との形態論的な関係を考えあわせても）大きくは *-AR* と *-ER* の二つに分かれると考える方が合理的である²⁾。

最初に、スペイン語の活用と主語の関係を説明するために、規則動詞 *USAR* ‘USE’, *DECIDIR* ‘DECIDE’ の直説法現在の活用を取りあげる。スペイン語でも慣用的に不定詞が辞書の見出し語として使われるが、ここでは見出し語の標示として使われる不定詞を大文字で標記し、実際の文の中に現れる場合とは区別することにする。一般にスペイン語の場合でも、英語の場合でも、動詞の活用は主語の人称と数に呼応する、といわれる。しかし、以下にあげるそれぞれの動詞とその英訳の対比からも、スペイン語では動詞があまりに活用しすぎるために、かえって主語は冗長的な（あるいは、同格的な）情報しか与えず省略可能なものに対して、英語では逆に動詞があまりに活用し

ないために主語はそこでは必須の要素であり省略できないことがわかる。

USAR	
Yo uso	'I use'
Tú usas	'You use'
El usa	'He uses'
Nosotros usamos	'We use'
Vosotros usáis	'You use'
Ellos usan	'They use'

DECIDIR	
Yo decido	'I decide'
Tú decides	'You decide'
El decide	'He decides'
Nosotros decidimos	'We decide'
Vosotros decidís	'You decide'
Ellos deciden	'They decide'

いうまでもなく、スペイン語の活用語尾はすべて異なるのに対して、英語では三人称単数形が *-s* でマークされるだけだからである。

ところで、この二つの動詞の活用には最初にあげた五つのアルファベットがすべて現れる。Ⅰ人称単数形は両方とも *-o* で終わり、Ⅲ人称単数形に関しては *-a* か *-e* で終わる。このⅢ人称単数形に *-n* をつければその複数形に、*-s* をつければⅡ人称単数形になる。

実際のスペイン語の文の中では動詞の直説法現在と名詞を形の上で区別することは難しい。以下の表に示したように、動詞同様これらのアルファベットが名詞の末尾にも現れるからである。名詞の場合、語尾は人称／性／数に関する三つの情報を担うが、動詞の場合はそのうち人称／数に関する二つの情報を担う（そして、動詞のこれら二

つの情報は主語との間で共有される)。原則として、名詞はすべてⅢ人称であり、これらの語尾で終わる場合は単数 (sg) である。スペイン語の名詞は男性と女性の二つに分かれる³⁾ (この立場からすれば、少なくとも動詞の不定詞は男性である⁴⁾。cap. 72)。しかし、-e で終わる場合は、-o や -a で終わる場合とは異なり、男性名詞 (m) か女性名詞 (f) かはその語尾から判別することはできない。一方、同じ語尾で終わる動詞はすべて単数を示す。人称については -o で終わる場合だけがⅠ人称であり、他の二つはⅢ人称である。以上のことをまとめれば、以下の表のようになる。

	名詞	動詞
-o	Ⅲ / m / sg	Ⅰ / sg
-a	Ⅲ / f / sg	Ⅲ / sg
-e	Ⅲ / ? / sg	Ⅲ / sg

ところで、スペイン語の名詞でこれらの末尾要素に主に現れる性の区別の問題と、日本語の動詞における自他の区別の問題には類似した側面がある。次の節ではこの点について簡単に触れる。

スペイン語名詞の性と日本語動詞の自他

スペイン語の名詞に見られる性の区別は、それが現れる構文内部に性の情報に関する一致の問題を引き起こす。ここでは、問題を単純にするために、次の表にあげる定冠詞と名詞の間の情報の一致／共有に話題をしばることにする。

	sg	pl
m	el	los
f	la	las

一般に性の情報において対をなす名詞の間には、次のような対立が見られる (この場

合 -φ は、その単語が子音で終わることを示す)。

-φ ~ -a el autor 'author' la autora 'authoress'
 -o ~ -a el hijo 'son' la hija 'daughter'
 -e ~ -a el monje 'monk' la monja 'nun'

そして、この対立の型ごとに名詞の性の区別に関して、正しい予測が得られる、といわれる。上の対立の型を見れば、-a で終わる単語については、「女性 (f)」で一貫しているように見える。しかし、実際は以下にあげる対からも明らかなように、男女同形と考えられる例は珍しくない。

el colega 'colleague'
 la colega 'female colleague'

 el dentista 'dentist'
 la dentista 'female dentist'

これらの場合は、通常名詞の修飾要素と考えられる定冠詞が性の情報に関する担い手だと考えられる。さらに、次の例に見られるように、話し手によって *doctora* は「医者の奥さん」と「女医」という意味の間で揺れが生じている⁵⁾。

el doctor 'doctor'
 la doctora 'doctor's wife' / 'female doctor'
 la doctor 'female doctor'

このような鼎立状態を眺めると、(冠詞は常に現れるとは限らないものの) 性情報の確かな担い手は語尾より冠詞だと考えられる。

これと似た問題は日本語の自動詞と他動詞の対応にも見られる。最初に、問題を簡略化するために、ある動詞が自動詞に分類されるか他動詞に分類されるかは、以下のような基準に従うと考えよう。

- (A) ある見出し語が構文の中の述語の位置に現れる場合に限り (B) の条件を適用する。
- (B) その述語が自分以外の構成要素として二つ以上の名詞句を要求する場合に限り、(C) の条件を適用する。

(C) それらの名詞句の一つがヲ格をとまなう場合、この述語を他動詞と認める。

(D) (A)の条件だけを充たし、(B)(C)のいずれかあるいは両方の条件を充たさない述語を自動詞と認める。

次に、ある述語を音韻標記した場合に不変化部分を語幹、変化部分を語尾と呼び、前後をハイフンで区切ることになしう。例えば「助ける」と「助かる」は、それぞれ *tasuke-ru: tasukar-u* のように標記される。一般に、これら述語になる二つの動詞の語幹部分から、共通部分（下線部）を差しひいた残りの部分の対比から、どちらが他動詞であり自動詞であるかは予測可能とされる。

この場合は、*e ~ ar* という対立が得られ、これに従えば前者が他動詞で後者が自動詞という正しい予測をすることができる。このような対立からの予測に価値があるのは、同じ *e* がいつも他動詞を標示しているとは限らないからである。例えば、*tokas-u: toke-ru* の間にみられる *as ~ e* の対立で *e* が標示するのは、自動詞である。

ところで、「ドアがひらく」「ドアをひらく」のように自他両用に使われるものについては、 $\phi \sim \phi$ のようにゼロ形式同士の特別な対立と考えることができる（この場合の ϕ が指すものは異なるが、それを除けばスペイン語の男女同形の場合と同様である）。しかし *sazuke-ru: sazukar-u* の対立に見られるように、この種の対応からの予測が万能だというわけではない。この二つは「子どもを授ける」「子どもを授かる」のように両方とも他動詞だからである。このように、その動詞が他動詞か自動詞かは目的語がつけられるか否かによるのであり、この点で冠詞などにたよる必要のあるスペイン語の名詞の性別に類似した側面があるといえそうである⁶⁾。以下では、主に着脱動詞の問題を取りあげるが、そこで問題になるのは最後にあげた他動詞同士の対立である。その問題に入る前に、スペイン語の再帰代名詞について触れておきたい。

スペイン語の再帰代名詞とは

スペイン語の再帰代名詞は初学者の混乱を招きやすいものとしてよく知られているので、最初に再帰代名詞に関係する混乱の一端について簡単に触れることにする。混乱の第一の要因は再帰代名詞が、次の表に示すように、直接目的格の代名詞および間接目的格の代名詞とはⅢ人称形でしか、形の上での区別がつかないことである。

〈再帰〉		〈非再帰〉	
?		間接	直接
I	me	nos	
II	te	os	
III	se	le les	lo los
			la las

従って、Ⅰ人称とⅡ人称の四つの代名詞は形を見ただけでは、「直接」か「間接」かあるいは〈再帰〉か〈非再帰〉かは判別できないことになる。（ここにあげた代名詞の中に、斜字体で示した三つの母音 *-o*, *-a*, *-e* が現れる点で象徴的である：つまり、*-o* は男性を、*-a* は女性をそれぞれ示すが、*-e* で終わるものには性の区別はない；上の表の中で最も重要な点は *se* が性と数に関して何の情報も提示しないということである。ところで、この表では *se* の地位について意図的に単純化して示した。実際は、この代名詞についても〈再帰〉か〈非再帰〉かはわかりにくいので、*se* の上の破線は不要である⁷⁾。)

混乱にはもう一つ別の要因が関係する。〈再帰〉は、その構成要素の構文的役割である「間接目的語」「直接目的語」と併置されるのが一般的である。しかし、そこでは構成要素間の指示対象の問題とその構文的役割とが、区別されないままに並べられているようである。ここでは、上の表に示したように、最初に〈再帰〉と〈非再帰〉に分かれ、次にそれぞれが、「間接（目的語）」あるいは「直接（目的語）」どちらかの構文的役割を述語やほかの構成要素との関係の中で振られる、と考えることにする。

これらの代名詞について伝統文法の中に混乱が見られるのには理由がある。まず、Ⅰ人称とⅡ人称の四つの代名詞については〈再帰〉と〈非再帰〉の区別、また「間接」と「直接」の区別についても曖昧である。〈再帰〉と〈非再帰〉の区別については、それが現れる文の中に共存する構成要素間の情報を相互参照すれば明らかになる。つまり、次にあげる(1a)のように代名詞化された目的語は主語と動詞の間に現れるが、

三者間に同じ情報が共有されていれば〈再帰〉であり、(1b)のように情報の間にズレがある場合は〈非再帰〉である（性の情報については無関係なので、無視する）。

(1a) Yo me lavo. 「私は体を 洗う」

I /sg I /sg I /sg

b) Yo te lavo. 「私は（君の）体を 洗う／

I /sg II /sg I /sg 洗ってやる／？ 洗ってくれる」

このように〈再帰〉と〈非再帰〉の違いは、前者がその文の主語と同一の指示対象を持つ直接目的語あるいは間接目的語であるのに対して、後者は主語とは別の指示対象を持つ直接目的語あるいは間接目的語である。先に述べたことを考えあわせてもう少し正確にいいかえれば、スペイン語の主語は冗長的な情報しかつけないわけですから省略可能なので、主語が省略された場合〈再帰〉が指示を同じくするのは、先行文脈および述語動詞の活用語尾が持つ人称と数の情報に基づいて範囲をせまめられた限りの指示対象ということになる。

ところで、次の(2)と(3)の対に見られるように、Ⅲ人称形に限り〈再帰〉と〈非再帰〉が別々の形を持つ理由についても説明が必要かもしれない。つまり、話し手であるⅠ人称単数形と聞き手であるⅡ人称単数形は互いに場面の参加者であり紛れることはないが、それ以外のⅢ人称の指示対象については先行文脈や常識などの知識にたよって特定される度合いが高い。このため、その目的語が主語と同一指示かどうかは、最低限構文の中で明示される必要があるからだと考えられる。（現代のスペイン語では、間接目的語と直接目的語の区別が曖昧になっていて、直接目的語がヒトの場合は間接目的語と同じ形の代名詞が現れやすい。(2b)(3b)で直接目的の位置に間接目的語が現れるのはそのためである。）

(2a) Ella se lava. 「彼女は体を 洗う」

Ⅲ /sg Ⅲ /sg Ⅲ /sg

b) Ella le lava. 「彼女は（彼の）体を 洗う／

Ⅲ /sg Ⅲ /sg Ⅲ /sg 洗ってやる／洗ってくれる」

(3a) Ella se levanta. 「彼女は 起きる／体を起こす」

Ⅲ /sg Ⅲ /sg Ⅲ /sg

b) Ella le levanta. 「彼女は彼を 起こす／起こしてやる／

Ⅲ /sg Ⅲ /sg Ⅲ /sg 起こしてくれる」

ここで問題を可能な限り単純化していえば、スペイン語で非状態的な動詞を用いて表現される出来事には、他動詞が優勢な分野があり、その自動詞的な表現は他動詞構文の直接目的語の位置に、その文の主語と指示対象の等しい再帰代名詞を挟みこむことによって得られる、ということになるだろう。

身体名詞とスペイン語の再帰代名詞

これまであげた例は〈再帰〉であっても〈非再帰〉であっても、直接目的語の場合に限られていたが、(2)の動詞にはそれ以外に次の(4)(5)のような身体名詞が直接目的語として現れる構文がある（その場合、これまであげてきた代名詞は間接目的語へ格下げになる）。

(4a) Yo me lavo la cara. 「私は顔を 洗う」

I I I

b) Tú me lavas la cara. 「君は（私の）顔を 洗う／

II I II 洗ってくれる」

(5a) Ella se lava la cara. 「彼女は顔を 洗う」

III III III

b) Ella le lava la cara. 「彼女は（彼の）顔を 洗う／

III III III 洗ってくれる／洗ってやる」

この場合、大切なことは、直接目的語である身体部位の所有者が間接目的語の位置に〈再帰〉あるいは〈非再帰〉として表示される点である。これまで述べたことから、(4a)の me が〈再帰〉であり、(4b)の me が〈非再帰〉であることは、下にそえた人称情報を参照すれば明らかなはずである（理解を容易にするため、数に関する情報について以下では省略に従う）。

ここで日本語の側から見える問題について一言触れておきたい。日本語では、連体修飾語によるか補助動詞をそえない限り、「顔」の所有者については文脈に関する知識に依存して推論が行なわれる。しかし、日本語の側で少なくとも補助動詞をそえる可能性は、スペイン語の側に直接目的語であれ間接目的語であれ〈非再帰〉の現れる場合に限られる。

これらの日本語の補助動詞は本来授受動詞の用法から発達したものであり、「人称」

上の制約が見られることは先にあげた(1b)の日本語訳「私は(君の)体を洗ってくれる」が不安定なことからも明らかである。さらに、授受動詞一般が指示対象を異にする二者間の所有権とその方向性をめぐる問題であるように、この種のスペイン語の文でも以下に述べるように方向性は無視できない重要な問題である。これらのことを考えあわせると、日本語の補助動詞の出現がスペイン語で〈非再帰〉の場合に限られるということは指示対象を同じくしない二者を意味することになり、ここに上げたスペイン語の構文を授受表現の変種として今後捉えなおす必要性を示しているように思われる。

ところで、スペイン語のこの種の構文の問題は、同じように身体名詞が直接目的語として現れても、動詞によってはその構文に所有者を表わす再帰代名詞が現れないものがあることである。先の(3)にあげた動詞は、以下の(6)(7)のように身体名詞が直接目的語の位置に現れる一方で、再帰代名詞の方は現れない。

(6a) Yo levanto la mano. 「私は手をあげる」

b) Tú levantas la mano. 「君は手をあげる」

(7) Ella levanta la mano. 「彼女は手をあげる」

つまり、身体名詞を直接目的語として取る構文に、再帰代名詞が現れるものと現れないものの二種類がある、ということになる。この点に関しては既に明確な指摘がある。この問題は、次の例のように同一の動詞が同じ直接目的語を取る構文の対(8a)と(8b)を対比すると考えやすい。

(8a) Ella se pone el anillo en el dedo.

b) Ella pone el anillo en el cajón.

(9a) 彼女は指に指輪をはめる。

b) 彼女は箱に指輪をいれる。

つまり、再帰代名詞が現れる(8a)は、その日本語訳(9a)からも明らかのように、主語の方向に向かって、その身体に接触を伴う非状態的な動作でなければならない⁸⁾。(8)のスペイン語では同じ動詞に再帰代名詞が現れる場合と現れない場合とが対比可能だが、それに対応する(9)の日本語ではそれぞれ別の動詞になってしまう。

参考までに(8)(9)とは逆に、日本語で同一の動詞が別々のスペイン語に対応する例をあげておこう。

(10a) 彼女はエプロンをかける。

b) 彼女は枝にエプロンをかける。

(11a) Ella se pone un delantal.

b) Ella cuelga un delantal en/ de la rama.

このように、一つの動詞が述語として作りあげる構文の種類は動詞の形だけから予測することはできない。以下の節では(9a)(10a)を例とする日本語の着脱に関する構文に焦点をあて、簡単ではあるがその性格について考える。

日本語の着脱動詞

日本語の典型的な着脱動詞が身体名詞を包み込んでいることは既に指摘がある⁹⁾。

(12) 彼女はストッキングをはいている。

(13) 強盗は頭にストッキングをかぶっている。

つまり、「ストッキング」を着用する場合には「はく」という動詞しか使えないのではなく、着用にかかわる身体部位に大きく左右され、それに従っていずれかの動詞が使われる。このような場合、これらの動詞には身体名詞が包み込まれている、と考えることにする。

日本語の着脱動詞は、(A)着脱対象が衣服を中心とするか否か、(B)特定の身体部位が関係するか否か、(C)着脱行為を構成する特定の方法に焦点があてられるか否か等、三つの観点から、大きく典型的な(14)とそれ以外の(15)の二つに分けられる¹⁰⁾。以下には漢字の書き分けを無視して、そのうち着衣に関係する動詞だけをあげる(問題を単純化していえば、スペイン語ではこれらの動詞すべてに PONERSE 'PUT ON' が対応する)。

(14)a. きる (15)a. はめる

b. かぶる b. しめる

c. はく c. つける

d. かける

e. する

典型的な着脱動詞に分類される(14)のうち、特に「きる」は次のように(x)と(y)の

他動詞同士の対に加えて、(z)の使役形まで用意されている。(x)が主語の自分自身に向けた行為であるのに対して、(y)と(z)は主語以外の指示対象に向けた行為である。この点を反映して(y)と(z)は(x)に較べ、間接目的語（ニ格名詞句）が一つ増えている。また(y)と(z)は、前者が直接の行為であるのに、後者は言語行動によって仲介される点で異なる。仮にここでは、(y)を「直接使役」、(z)を「間接使役」と呼びわけることにしよう。

(16x) 彼女はコートを きる。

y) 彼女は子どもにコートを きせる／きせてやる。

z) 彼女は子どもにコートを きさせる。

上にあげた典型的な着脱動詞の場合、例えば(16)には(x)の「きる」という他動詞のほかに、(y)にもう一つの他動詞「きせる」が現れるが、それ以外の(15)に分類される動詞にはそれに相当するような他動詞の対が欠けていて、(17)の例のように(x)と(y)に同一の動詞が現れる。ただし、この場合でも(y)と(z)は、(x)に較べて間接目的語が一つ増える点では変わりがない。

(17x) 彼女はエプロンを かける。

y) 彼女は子どもにエプロンを かける／かけてやる。

z) 彼女は子どもにエプロンを かけさせる。

しかし、この問題は典型的な着脱動詞でも「きる」以外の動詞では、以下のように多少の出入りが見られるようである。「かぶる」では、(18)と(19)のように対象物によって違いが見られる。(20)の「はく」では、そもそも(z)の形はありえず、(y)の「はかせる」が直接使役と間接使役の両方の意味を担っているように思われる。同じことは(19)では逆転しているようである。

(18x) 彼女は毛布を かぶる。

y) 彼女は子どもに毛布を かぶせる／かぶせてやる。

z) 彼女は子どもに毛布を かぶらせる。

(19x) 彼女は帽子を かぶる。

y)?彼女は子どもに帽子を かぶせる。

z) 彼女は子どもに帽子を かぶらせる／かぶらせてやる。

(20x) 彼女は靴を はく。

y) 彼女は子どもに靴を はかせる／はかせてやる。

z)?彼女は子どもに靴を はかさせる。

ただし、ここで強調しておかなければならないことは、(14)に分類される典型的な着脱動詞では(x)と(y) — あるいは、(19)の場合のように(y)の代用としての(z)と、その(x) — との間に、同じ形の動詞が現れることはない、ということである。この点は(15)に分類される動詞が(17)に例をあげたように(x)と(y)に同じ形の動詞を使うこととは対照的である¹¹⁾。

この点については次のような理由が考えられるだろう。この節の初めにも述べたように、(14)の動詞には身体名詞が包み込まれている。とすれば、その包み込まれた身体名詞の指示対象が、主語と同じものを指すか、間接目的語と同じものを指すかは、何らかの形で標示されなければならないはずである。スペイン語では、その代名詞が〈再帰〉か〈非再帰〉か（さらに、その構文的役割が直接目的語か間接目的語か）によって、指示対象の異同を処理していた。しかし、日本語では少なくとも着脱動詞については、その動詞が身体名詞を包み込むかどうか、この問題を大きく左右する。(14)のように包み込むとすれば構成要素の増減に対応する他動詞の対を使い、それが主語の指示対象と一致するか、間接目的語の指示対象と一致するかを明示する。それに対して、(15)のように身体名詞を包み込まない着脱動詞の場合、同じ問題の処理は構成要素の増減だけにまかされる、ということになる¹²⁾。

むすびにかえて

恐らく、スペイン語の構文のあり方から、日本語の構文を眺めた場合、あるいはスペイン語の話し手が日本語を学習する場合、判断に困るのは構成要素間の指示対象に関する問題ではないだろうか。ここで一瞥しただけでも、ある文の中に現れる構成要素間の指示対象の異同に関して、日本語における辞書記述の蓄積が必要なことがわかる。逆に、私たちスペイン語学習者が望むのは、直接目的語であれ間接目的語であれ、再帰代名詞が現れる構文の範囲であり、その使用／不使用をめぐる一般化の蓄積である。このような一般化が、ある動詞の見出し語レベルにとどまる性質のものではなく、最低その動詞が作りだす構文レベルにまで逆のぼらなければならないことは、これまで述べてきたことから理解が得られるはずである。最後に希望的な観測を述べれば、こうした蓄積の中からお互いの言語の中で当然と思われることを脱して相対的な視野が生まれ、これまで以上に精度の高い記述に向けての端緒が開かれるように思われる。

[文献および注]

- [1]Mighetto, D. and Rosengren, P. (1985) *Diccionario Reverso*. Göteborg: Göteborgs Universitet.
- [2]Green, J.N.(1988) Spanish. *The Romance Languages*. ed. by Harris, M. and Vincent, N., London: Routledge.79-130.
- [3]Ojeda, A.E. (1984) A Note on the Spanish Neuter. *Linguistic Inquiry* 15, 171-173.
- [4]Bosque, I.(1990) *Las Categorías Gramaticales*. Madrid: Editorial Síntesis.
- [5]Nissen, U.K. (1986) Sex and Gender Specification in Spanish. *Journal of Pragmatics* 10, 725-738.
- [6]拙論(1986)体言と用言の結ぶ二つの関係、『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』7, 358-380, 東京：情報処理振興事業協会。
- [7]しかし、ここに述べたⅢ人称における指示対象の明示化の必要性も次のような規則によって無効にされてしまう：目的語の代名詞は動詞の直前に「間接」－「直接」の順序で位置するのが一般的だが、この二つの位置にⅢ人称代名詞が並ぶ場合は(a2)のような表現のかわりに(a3)が使われる。これは(b1)の直接目的語が代名詞化した場合の(b2)と区別がつかない（直接目的の代名詞の形は男性形の単数の場合を除いて定冠詞と同じものである）。

(a1) Ella le lava la cara.

(a2)*Ella le la lava.

(a3) Ella se la lava.

(b1) Ella se lava la cara.

(b2) Ella se la lava.

つまり、se は(b2)では<再帰>であるのに、(a3)では<非再帰>という相反する二面性を持つ。この二面性を解消するために多用されるのが、文脈上の知識などに加えて、間接目的代名詞と同格の名詞句である。この二つの例は、以下でも(5)として取りあげる。

- [8]宮本正美(1984)スペイン語における身体再帰代名詞の有無、『研究論集』40,

193-223. (関西外国語大学)

[9]宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』(国語研報告 #44)東京:
秀英出版。

[10]Backhouse, A. E.(1981) Japanese Verbs of Dress. *Journal of Linguistics*
17, 17-29.

[11]出口厚実(1982)スペイン語一再帰形式をめぐって一, 『講座日本語学10:外国語
との対照 I』東京:明治書院, 305-318.

[12]拙論(1991)二項関係についてのおぼえがき, 『ソフトウェア文書のための日本語
処理の研究』10, 77-122, 東京:情報処理振興事業協会。

談話標識と会話の構造

Marcadores discursivos y estructuras de
conversación: Funciones de ‘mira’ y ‘oye’

大倉美和子

Miwako OKURA

キーワード： ‘oiga(oye)’、 ‘mire(mira)’、 「あろう」「ねえ」「よ」、
会話構造管理機能、 対聞き手働きかけ機能

0. はじめに

談話標識は、会話を構成する発話の中に現れる語彙的意味をもたない語や句であることから、談話の「つなぎ語」(“filler/connectives”)として扱われてきたが、近年、“discourse marker”の名称でその使用者＝話者の会話管理の意向を示すものとして、そのコミュニケーション機能に関心が向けられるようになった。

日本語の間投助詞や終助詞、接続語などを談話標識としてとらえ、個々のコミュニケーション機能を分析した研究は、浜田(1991, 1993)、多門(1988)、伊豆原(1992, 1993)、メイナード(1993)などがある。また、田窪(1992)は、「談話管理理論」の立場から、談話標識の機能を記述している。

一方、会話の構造分析を目的にした研究は、日本語話者間の電話による会話資料をもとに進められてきた。ザトラウスキー(1991)、小野寺(1992)、熊取谷(1992)、岡本(1990, 1991)などがそれで、いずれも、隣接ペアや発話権のやりとりを手がかりに分析を行い、会話の構造を「開始部」「要件部」「終結部」に区分し、各部に現れる言語形式や話題が会話進行にはたす役割を説明している。

本研究は、いわば、両者の研究をつなぎあわせようとのもくろみをもっているが、多門(1988)、熊取谷(1992)、田窪(1992)に示唆を得ている。

多門(1988)は、「だって、ちょっと、あのう、じつは、やっぱり、じゃ」などの「前ぶれマーカ―」が発話権確保あるいは維持の方策として機能することを考察し、これらの談話標識の会話管理上の機能を指摘した。

熊取谷(1992)は、電話会話に使用される「はい」が、開始部においては呼び出しへの直接応答の機能を果たし、終結部においては「①隣接対を完結させ、②これにより話題を終結させ、③これにより談話内の移行場を作りだし、④談話を終結に向ける」機能を果たすと述べ、それぞれ談話進行を促進させる役割を果たしていることを明らかにした(23 ペ)。そして、その結果、あるひとつの談話標識がもつ複数の機能を会話の構造に即して検討することで、会話進行を促すために用いられる談話標識の会話管理上の役割が明確に記述できることを示したのである。

田窪(1992)は、話者の談話情報の処理過程に焦点をあてて、感動詞、接続助詞、終助詞の名称をもつ談話標識、「えっ、へーえ、さあ、だから、ね、よ」などを分析し、各談話標識が処理の方法(探索、推論、登録など)とその結果(推論に成功したか、失敗したか、新規情報は登録されたのかなど)を示す機能を果たしていることを明らかにしている。このことは、談話標識が、談話情報の処理のしかたを含め話者の内部情報を表出する機能をもつことを意味し、談話標識によっては話者の内部情報の表出が話者の聞き手への働きかけの姿勢を示すことを意味する。たとえば、「よ」の場合は、

「『情報を間接知識領域に記載せよ』」「さらに『これをいま関与的な知識状態に付け加えたのち、適当な推論を行え』」(p.1101)という内部情報の表出と聞き手への働きかけの機能をあわせもっていると考えられる。

上記の研究は、談話標識が会話管理に果たす機能を会話の構造管理の機能、話者の内部情報表出機能、対聞き手働きかけ機能の三つのレベルでとらえることの必要性を示唆している。

本稿では、個々の談話標識の機能を記述するにあたっては談話標識が会話のどの部分にあらわれるのか、そして、談話標識の前後の情報を結びつける（あるいは結びつけずに分離する）のに関与しているのか否かを視野にいれることが不可欠であるとの考え¹⁾から、会話構造と談話標識の関わりを考察することで、まずスペイン語の談話標識 ‘oiga(oye)’, ‘mire(mira)’が、会話の進行あるいは展開のしかたにどのように関与しているかという構造管理上の機能を明らかにし、つぎにそれらスペイン語の談話標識と会話の構造上対応すると思われる日本語の談話標識「あのう」「ねえ」「よ」との対照を行い、両言語における談話標識の機能の異同を探る。考察にあたって手がかりにしたのは、会話構造管理機能と対聞き手働きかけ機能の二つである。スペイン語談話標識の内部情報表出機能については、今後の課題とする。また、‘mire(mira)’については、大倉(1992)に述べたそのコミュニケーション機能を ‘oiga(oye)’との対比で整理することになる。スペイン語の談話標識のデータは *El habla de la ciudad de México: Materiales para su estudio*, U.N.A.M., México, 1971. に求めた。したがって、本稿で考察するスペイン語は、メキシコのスペイン語である。

1. 会話の構造

ザトラウスキー(1991),小野寺(1992),熊取谷(1992),岡本(1990,1991)などの行った電話会話の分析によって、ひとつの会話は、「開始部」「用件部」「終結部」の三部で構成されており、各部を区別するなんらかの言語形式あるいはトピックがあることが確認されている。

(ザトラウスキー1991の例, A=電話を受けた側)

開始部

<div style="border-left: 1px solid black; height: 100px; margin-left: 5px;"></div>	A	もしもし。	
	B	もしもし,	[]内はザトラウスキーの 用語
	A	おー。	
	B	A?	
	A	はい。	

(中略)

用件部 〔主要部〕	┌	B	あのね？
		A	うん。
		B	今、Tと飲んでるかもー。
		A	どこでー。
			(中略)
		B	そいでねー？
		A	うん。
		B	Tがね？
		A	うん。
		B	Aとお茶でもしたいっていうかも
			(中略)
		A	ごめんね。
		B	ううん。
		A	どーも。
		B	／／はい。
		A	うん。
		B	わかりました。
終結部 〔終了部〕	┌	A	じゃあねえ、
		B	うん。
		A	／／じゃあねー。
		B	バイバーイ。

(ザトラウスキー1992. p.91-96)

電話以外の会話においてもその内部構造に三区分があることは、水谷(1980)、柏崎(1991)でも述べられているとおりである。

(水谷1980の例)

(水谷1980の定義)

開始部	┌	A	あのう　．．．．．「話しの場づくりの要素」
		B	え。
用件部	┌	A	すみませんが、．．．．．「話題づくりの要素」
		B	はい。
		A	四谷駅へは、　．．．．．「内容」
		B	ええ。
		A	どう行けばいいんでしょう。

スペイン語の会話の構造も、つぎの例1, 例2にあるように, 「開始部」「用件部」「終結部」からなっている。

(『バルセロナへ行こう』NHK1991)

- 例1. 開始部 { A: Oiga,
B: (読んでいた新聞から顔を挙げてAを見る)
- 用件部 { A: ¿Dónde está la parada de taxis?
B: Sorry, I don't speak Spanish.
- 例2. 開始部 { A: Oiga, por favor
B: (カメラのファインダーから顔を挙げてAを見る)
- 用件部 { A: ¿Para ir a la Sagrada familia?
B: (早口でまくしたてる)
A: ¡Otra vez, por favor!
B: Mira, la segunda calle a la izquierda ...
- 終結部 — A: Gracias.

例3.

A :Regresamos a la esclavitud de la mujer, y eso es lo que tratamos de abolir.

B₁ :Ahora sí te voy a dar tu coñac, para que acabes tu tema, porque ya que te llevé la contraria ¿verdad? ¿Ya te diste cuenta de la manera de pensar de los mexicanos?

A :Sí.

B₂ :Bueno, hasta luego.

A :Ahora...después vienes a... a hablar cómo piensan los de deveras como tú.

B₃ :Andale, acábale.

(“El habla” p.275)

例3はスペイン語の会話終結部内の構造を示す例である。Bが会話切上げの意図を表明してから, すなわち終結部の切り出しをしてから (B₁), 会話を終結し(B₂), Aの発話を振り切って立ち去る (B₃) までのAとの会話だが, 終結部開始の談話標識‘Bueno’が会話終結の合図 (=別れの挨拶=hasta luego)の前に現れている。

2. 談話標識と会話の構造

ひとつの会話をこのような三つの部分に分けることができるのは, 会話を構成する個々の発話の伝達内容を観察することによって用件部を他の部分から区別することが

できるからである。しかし、熊取谷(1992)にあるように、談話標識自体も、会話の構造を三分割し、会話の進行を促す役割を果たしている。談話標識は、用件に関わる情報の量を変化させることはしないが、会話の流れの方向づけをしたり、進行させたりするのに関わっている。会話参加者は談話標識によって会話構造の三区分別を明確にしつつ会話を進行させているのである。談話標識によって会話の構造を区分することができるのは、それぞれの部分に固有の談話標識が使用されることによる。各談話標識ごとに、それが会話のどの部分に現れるかによってその機能が定まっているからである。「ところで」や「それが」や「じつは」のように用件部にしか現れない談話標識もあれば、「あのう」のように開始部にも用件部にも現れる談話標識もある。したがって、会話の構造との関係で談話標識の機能を明らかにする必要があるのは、同じ形式で複数の機能をもつ談話標識の場合である。

たとえば、上記1.で挙げた「あのう」も複数の機能をもつ標識の一例である。「あのう」は、会話の開始部では会話の開始機能を果たすが、用件部では用件切り出しの機能を果たしたり、発話権の維持を表明する機能を果たしたりする。

「じゃ」も会話の構造のどこに現れるかでその会話管理機能のちがいがみられる談話標識である。用件部に現れる「じゃ」（「デハ」）については、浜田(1991)が分析を行っている。もっとも、浜田の分析は、構造管理機能についてではなく、話者の内部情報表出機能について述べられている。すなわち、用件部の「じゃ」は、直前発話の伝達内容を受けて、あるいは「新しい状況の出現」（P.34）を目前にして、それを前提とした推論結果を述べる発話を導く役割を果たすがその本質的な機能であるという。（p.41）一方、終結部に現れる「じゃ（あ）」は、熊取谷（1992）によると、「談話の『後方指向の区切り標識』として機能し、前段終結、最終発話交換へ移行或いは前段終結内での移行を先導する役割を果たす」（p.23）。

談話標識はこのように、会話の構造のそれぞれの部分に即して会話展開を管理する機能を果たしているわけで、ひとつの談話標識が複数の機能をもつ場合、その構造管理機能を明らかにしておく必要がある。

3. 「あのう」のコミュニケーション機能

本節では、「あのう」の会話管理に関わるコミュニケーション機能について考える。

会話切り出しの機能を果たす「あのう」の例は、本稿第1節に挙げた水谷(1980)の例の「あのう」に該当する。また、議論が沸騰している場面で、それまで発言しなかった人が、「あのう、ちょっといいですか」と言って発話を開始する場合の「あのう」もこれに該当する例である。

用件部の「あのう」の例は、つぎの会話例にみることができる。

黒柳：なるほどね。で、学園祭でいらっしゃる、学園祭でお歌いになるって
いうときは、あのう、あれですか、そういうなんかバンドですか、そ
ういう音楽はどうしていらっしゃるんですか？ 全部。

千堂：ええ、うしろは生バンドでちゃんと。

黒柳：それは、あなた関係の、それとも学校の生徒さんの。

千堂：わたしの、あのう、専属というか。

黒柳：うん。

千堂：いつもやっていただいてる方を。

黒柳：あっ、そう。

黒柳：うまくできました？

千堂：失敗したのもありましたね。

黒柳：あっ、そう。

千堂：おにしめっていうんですか。

黒柳：ええ。

千堂：あのう、薄味すぎちゃいまして、で、ああいうのは関西でも、こう、
関西は薄味なんだけども、少し濃い目につけなきゃ早く、こう、悪く
なっちゃう。

黒柳：あっ、悪くなっちゃう。（「徹子の部屋」1991.8.26）

杉藤：というのは、この方はもう、大変ポーズ回数が多いんです、あのう、
文法的に文節ってことばがありますね。あのう一番細かく切った単位
ですが、この方のニュースは、あの平均しますと1.6文節ぐらいで
ポーズをちっさく置くんですね。（杉藤美代子『日本語学』1991.10月 P.21）

上記用件部の例に見られるように、「あのう」は、相手に向かって発信したい内容
はすでに決めているのだが、どのような言語形式を選択するのか、あるいはどのよう
な手順で伝達するのか、まだ話者自身が明確でないときに使用される。すなわち、伝
達形式についての処理が終わっていないことという話者の側の内部情報を表している。
この、内部情報表出機能は、その出現位置が会話構造のどこであっても「あのう」が
もつ機能である。

そこで、「あのう」のコミュニケーション機能をまとめると、つぎのようになる。

（ア）会話構造管理機能

（1）予期せぬ場面での突然の「あのう」は会話の切り出しの機能をもつ。

(2) 会話開始後の「あのう」は、用件部への移行あるいは用件部の展開中であることを示す機能をもつ。

(イ) 内部情報表出機能

(3) 後続発話の伝達形式を選択中であることを示す機能をもつ。

(ウ) 対聞き手働きかけ機能

(4) 発話権の維持を表明し、後続発話を組み立てるのに必要な情報処理のための時間を確保したい意向を伝達する機能をもつ。

多門(1988)は、「あのう」について、水谷が提案した「ディスコース・ユニット」の三区分「1. 話の場づくりの要素, 2. 話題づくりの要素, 3. 内容」に言及しながら、「〔話の場づくりの要素〕は〔話題づくりの要素〕と分明に区別できるのかどうかという問題がある。〔話の場づくりの要素〕さえも話題に関わったかたちで提出される面がある場合も多分あるであろう。水谷氏の挙げられている『あのう』も単に場づくりに用いられるというより、既に内容に関わっていると稿者(=多門)には思われ、大枠で〔場づくりの要素〕〔話題づくりの要素〕の区別を認めた上でも、双方に関わったかたちでの記述の仕方を工夫していく必要がある」(59 ペ)と課題を残したが、「あのう」の機能を(ア)~(ウ)のようにとらえることで多門の課題にも答えることができよう。

ところで、「あのう」の多用は、場合によっては相手の反応をみてから発話を続けようという話者の意図の現れとなることがある。この「あのう」は、いわゆるためらいを示す「あのう」として、いくつかの日本語学習者用教材や参考書でも触れられている。それらには「あのう」の会話開始機能と並べてためらいや遠慮の気持ちを表す「あのう」の働きが挙げられている²⁾。

このような談話標識について述べた日本語教科書は数少ないので貴重な指摘であるが、そこに見られる説明では、「あのう」の諸機能が並列して述べられているため、学習者の立場からすると、「あのう」を会話のどの部分で使用すれば、ここに述べられたような話者のためらいや遠慮を伝えることができるのか、会話開始部の「あのう」にはためらいを表す機能があるのか、ないのかを知りたいということになろう。「あのう」を会話開始の機能をもつ標識ととらえるのは、構造管理の観点からの説明であるが、適当な言葉を捜していることを伝える標識ととらえるのは話者の内部情報表出に焦点をあてた説明である。そして、「あのう」をためらいや遠慮を表す談話標識ととらえるのは話者の伝達姿勢に焦点をあてた説明である。「あのう」は、開始部に現れてもためらいを表すことが多いので、開始部の「あのう」はこの三つの機能を同時に果たしているものとみるべきである。

「あのう」のこのためらいを表す働きは、上記(イ)(3)に由来する。

相手にとって好ましくないと推定しうる内容を伝達しなければならないとき、言語形式や発話構成の決定に必要な情報処理の時間を確保する必要が生じると、つぎのセールズ電話の例にあるように、「あのう」が多用される。

X：あのー，体型的にね？

気になるようなところってございますか？

D：もちろんあります。

おなかのまわりとかー， (ザトラウスキー1992. p.62)

X：あのー，着けてるだけでね？

D： ええ。

X：摩擦によって，あのー，脂肪を小さくして，移動ーさして，
あの，細くしていくー下着があるんですね？

D： ええ／／え。

X：あのー，(0.8)あのー，今販売してないんですけどね？

D： ええ

X：あのー，試着キャンペーンってのを行ってまして，

(ザトラウスキー1992. p.62)

これは，相手の負担度を下げるのに貢献するとみなしうる言語形式や発話構成の選択がまだ終了していないことを示す「あのう」を用いることで聞き手への配慮を表すことができるためと考えられる。したがって，(3)の機能をもつ「あのう」を使用する話者の態度そのものが伝達姿勢としての「ためらい」を示すととらえるべきで，「あのう」のコミュニケーション機能に「ためらい」を示す機能があるとは考えがたい。³⁾

会話切り出し機能を持つスペイン語の‘oiga(oye)’も，「あのう」と同様に，開始部にも用件部にも現れる談話標識である。そこで，次節で‘oye’の会話管理上の機能を会話の構造に即して考察することにする。

4. ‘oiga(oye)’のコミュニケーション機能

メキシコのスペイン語の談話標識の研究は，管見したところ，J. M. Lope Blanch (1983, 1987)のもの以外見当たらない。Lope Blanch は，メキシコ人の会話に頻繁に現れる¿ves?, bueno, esto, ¿entiendes?, ehなどを“muletilla”つまり“palabras vacías o de relleno”についてつぎのように述べている。

En general, esas muletillas sirven para proporcionar al hablante el tiempo

necesario para que vaya organizando mentalmente su elocución. ... sirven para mantener la atención del interlocutor, haciéndole participar de algún modo en la exposición oral, a la vez que proporcionan también al hablante el tiempo indispensable para ir organizando su pensamiento y para seleccionar las estructuras expresivas correspondientes.(p.225)

Lope Blanch は、“muletilla”が、一般的に、話者に発話を組み立てる（考えをまとめ表現形式を選択することも含めて）のに必要な時間を与え、聞き手の注意を保ち続け聞き手を発話内容に引き込むのに役立っているとみる。会話管理の観点からすれば、話者が考えをまとめ表現形式を選択するあいだの時間稼ぎの機能とは、発話権維持の機能ということであり、また、聞き手を発話内容に引き込む機能とは、相手の反応を引き出し、会話を進行させようとする話者の対聞き手働きかけ機能ということである。しかし、Lope Blanch は、それぞれの“muletilla”は、diversa naturaleza, distinta funciónをもつと述べる(p.225)にとどまり個々の談話標識のコミュニケーション機能についての具体的な分析は行っていない。

ベネズエラ、スペインのスペイン語の資料をもとに、談話標識の定義を行いつつ、その機能を述べているものに、Hugo Obregón Muñoz(1985), Luis Cortés Rodríguez(1991)がある。

両氏の主たる関心は、個々の談話標識のコミュニケーション機能を明らかにすることよりも、むしろつなぎ語あるいは冗長語(“muletilla” “expletivo”)と談話標識(Obregón Muñozでは“marcador interaccional”, Cortés Rodríguez では“conector paragrafíco o extraoracional”)とをどのように区別するかを追求することにあるからであろうが、談話標識そのものについての分析は、未整理な点が多い。Obregón Muñoz は、会話の中でくりかえし用いられる語彙的意味を持たない語や句をすべて無教養のしるしとして無用の長物扱いする傾向を批判し、話者が使用するそれらの語には談話進行上なんらかの機能があるはずとの立場で談話分析を行うべきであると主張しているが、Cortés Rodríguezは、つなぎ語あるいは冗長語(“muletilla” “expletivo”)を“valor conceptual”をもたぬものとして談話標識から区別する立場をとっている。‘o sea, claro, vamos, entonces, bueno’を考察の対象とし、これらの表現をはさんだ前後の文(談話)の結束性に関与しているか否かを重視して談話標識と冗長語の区別を行っているのだが、談話標識の会話管理機能についてはほとんど論じられていない。

4.1 ‘oiga(oye)’の会話構造管理機能

1. で見たように、予期せぬ場面での ‘oiga(oye)’ は、「あのう」と同じく会話開始部の切り出し機能をもっている。そして、会話開始後、用件部に現れる ‘oiga(oye)’ は、発話権の確保・維持を表明する点でも日本語の「あのう」と同じ機能をもつ。しかし、用件部の ‘oiga(oye)’ には、発話組み立てが未完了であることを示し、時間確保をはかる機能はもたない。この点で「あのう」とは異なる。

以下にみるのは、用件部に現れる ‘oiga(oye)’ の例である。用件部では、‘oiga(oye)’ は発話権の確保を示すとともに新しい話題導入をはかる機能をもっている。

まず、‘oiga(oye)’ の現れる会話例をみてみよう。

[1]Inf. —...que en los cuartos de abajo ...(中略)...que da para una cañada en donde pasa un río... pero claro que está muy hondo... entonces el río no se alcanza a ver, nada más que en época de aguas, que sube el nivel; pero es una barranca ¿no?—entonces dicen que espantan en esos cuartos.

(a)

[2]Enc. —¿Qué significa eso?

[3]Inf. —¿Que espantan? Bueno pues que ... que... ¿no sabes qué quiere decir que espantan?

[4]Enc. —Aparecidos.

[5]Inf. —Que se aparecen, sí. Que se aparece la Llorona. Entonces dicen que, fíjate...

(a)

(a)

[6]Enc. —Oye ¿nos puedes contar algo de la Llorona?

[7]Inf. —Sí, ¡como no!

(a)

[8]Enc. —Bueno, a ver.

(“El habla” p.50-51)

この例では、[1]の(a)に現れた ‘espantan’ の意味が分からないために[2]の発話が[1]の発話を中断させ、説明を求めている。[5]の前半部分で語の意味の説明を終えたあと、Informantは[1]のつづきを話すべく(a)をくり返し本題にもどろうとしている。しかし、[6]はそれを別の話題に転換させている。[6]の発話の冒頭の ‘oye’ は、新しい話題を会話に持ち込む合図である。[6]で導入される新しい話題は、[5]に現れた語、‘llorona’ をてがかりにしている。

つぎの ‘oye’ も新しい話題を導入するとき、直前発話に現れた表現をてがかりにしている例である。

[9]Enc. —Te digo: ¿Qué señora sabe pintar y .. —dime—qué señora se pone a los ochenta años...?

[10]Inf.B. —¡Huy! Pero muchas...

[11]Enc. —Aunque no sepas hacer té...aunque no sepas hacer té, ni

prender una estufa, está perfecto...

[12]Inf.B.—Oye, aunque sea el de la medallita.

[13]Enc. —¿Cuál?

[14]Otra voz—¡Ah! ¿El de la medallita?

[15]Inf.B.—Sí; es ese té que es un sobrecito, con un hilito que nada más lo metes a la tetera... con el agua caliente ¿verdad?

[16]Otra voz—¡Y ya!

[17]Inf.B.—Y la muchacha esta que tenemos, dice que le... le parece una medallita ¿verdad?, y así le ha puesto...

[18]Otra voz—¿La medallita?

— (中略) —

[19]Inf.A.—Con eso es suficiente, claro.

[20]Enc. —No, pero sí... Y ¿siempre habías pintado tú?

(“El habla” p.234)

[12]の‘oye’は、[11]の発話に現れた「お茶をいれること」という表現(a)をてがかりにしてティーバッグの話題(b)を持ち出す発話の冒頭に現れている。[18]のあと[20]で元の問題にもどるまで五回の話者交代が行われて[20]により[9]で開始された「絵をかく」話になる。

‘oiga(oye)’は上の例のように、直前発話に現れた語や句をてがかりにしたり、何かを思い出したりして別の話を挿入するときに、発話の冒頭に現れる談話標識である。

つぎに、直前発話の内容とはなんのつながりももたない‘oiga(oye)’の例をみてみよう。

[21]Inf.—...y entonces el sábado yo le digo que vaya o no vaya, o mi mamá le dice ¿no?...Oye: Y tú ¿crees que haya yo quedado a la altura del felpudo?

[22]Enc.—No, no tanto, no tanto. Te tienes que mejorar tú con tu...(incomprensible).

[23]Inf.—Pues yo también creo. Oye, con estos pasteles que me estás dando voy a dar una engordada que para qué te platico ¡Qué horror!

[24]Enc.—Bueno, oye: ¿A qué horas quieres que te llame el sábado? Mañana, mejor dicho.

(“El habla” p.48)

[23]の‘oye’⁴⁾は、それまでの話題とは無関係に、インタビューアーの持参したケーキについての発話を導入するのに用いられている。この例では‘oiga(oye)’は、直前の話題と無関係な話題に会話の流れを転換する合図として機能する。⁵⁾

‘oiga(oye)’ は、直前発話との関連がなくても使用できる談話標識である。つまり、‘oiga(oye)’ は、直前発話と後の発話を分離する合図を聞き手に送る談話標識として機能する。

つぎの例は、メキシコ人インフォーマントによって、この会話展開の中では‘oiga(oye)’の使用は不可能であり‘mira’でなければならないと指摘されたものである。この会話資料（資料Ⅲ，p 43-54）のインタビュアーがメキシコ人ではないことから（“Observación: La investigadora que dirigió la encuesta no es mexicana.” p.43），メキシコのスペイン語とは異なる‘oiga(oye)’の語法に違和感があったのであろう。

[25]Inf.—Ah ¿no? Yo te tengo que llevar a Teotihuacán [risas]. Tú sabes que hace poco han descubierto un nuevo palacio que se llama... ¿cómo?... Papaloquetzal: el templo de las mariposas. Fabuloso; dicen que está fabuloso. No sé si ya se pueda ver, porque hasta hace poco no permitía el Instituto de Arqueología que se entrara todavía; (二文省略) pero probablemente consiguiendo un permiso se pueda entrar,

(テオティワカン一帯にある遺跡についての説明をしている七文省略)

[26]Enc.—¿Qué distancia hay de la ciudad a ese yacimiento?

[27]Inf.—¡Ah! ¿La distancia? Es una hora solamente de aquí. De aquí a Teotihuacán una hora.

[28]Enc.—Se puede ir perfecto; entonces podremos conseguir un permiso de ir cualquier fin de semana.

[29]Inf.—Sí, sí, podemos perfectamente bien.

[30]Enc.—Se podría hacer, pues sería lindísimo, de lo más interesante ver los frescos ahora que están en su lugar natural.

[31]Inf.—Sí, a ver si se puede conseguir el permiso. Ya ves que son chocantones, eh, para dar los permisos; pero, en fin, yo creo que sí se puede.

[32]Enc.—Yo creo que puedo mover influencias más o menos como para conseguirlo.

[33]Inf.—Sí.

[34]Enc.—Oye, por medio de Mimí S., la mujer del doctor S., un médico vecino.

[35]Inf.—¿Se llama así?

[36]Enc.—Mimí C. de S.

(“El habla” p.46)

[36] Enc. - Mimí C. de S.

(“El habla” p.46)

‘oiga(oye)’と同じく知覚動詞であって動詞の本来の語彙的意味が薄れた談話標識の‘mire(mira)’の場合、直前発話との結びつきが極めて強い。(大倉1992参照) 非公開の遺跡を見学するための許可についての話題が他の話題をはさんで [28] の ‘entonces’によってつながられ、[31]から許可の話題にしぼられていく。[31]で許可入手はなかなか困難であることが提示されている。[34]は、[31]の情報や、[32]の発話にある ‘mover influencia’(有力者のコネを使って)の流れからすると、後続発話によって提供される情報が聞き手にとっては予測不可能な(期待に反する)情報であること、さらに直前発話[32]との結びつきの強い発話がつづくことから、別の話題を導入する合図である ‘oiga(oye)’ではなく、‘mire(mira)’がふさわしい談話標識であるということになる。

以上から、‘oiga(oye)’が果たしている会話構造管理機能はつぎのようにまとめられる。

- (5) 開始部で会話開始の切り出し機能をもつ。
- (6) 用件部で、別の話題を挿入することを表明する機能をもつ。
これに対し、‘mire(mira)’は、
- (7) 用件部において現行話題を維持する意向を表明する機能をもつ。

4.2 ‘oiga(oye)’の対聞き手働きかけ機能

4. 1. に挙げた会話例で見られるように、‘oiga(oye)’は、「あのう」がもつ対聞き手働きかけ機能の、発話権の確保あるいは維持を知らせる機能をもっている。しかし、後続発話を組み立てるのに必要な時間確保の意向を伝える機能は見られない。

6) ‘oiga(oye)’の構造管理機能である挿入話題の導入にあたっては伝達内容、伝達形式ともに確定しているはずである。つぎの例にも見られるように、直前発話に触発されて思いついたことを述べる発話が ‘oye’につづくことが多い。

[37] Inf.B. -Y le decía...le decía: “Juan, deja que te mate el toro en la plaza”; le decía él a Belmonte.

[38] Inf.A. -Pues tenía razón: ¿Qué hace un torero: -¡imagínate! -viejo, con reumas, y que nadie le haga caso? Realmente.

[39] Enc. -Oye, y Solórzano...Sí se llama Solórzano ¿verdad?

[40] Inf.A. -¿El grande o el chico?

[41] Enc. - El grande.

(“El habla” p.176)

Solórzanoという閩牛師のことを思い出して質問する発話である⁷⁾。これらの‘oye’には、聞き手を話題に引き込もうとする働きかけの機能がある。発話の冒頭、発話内文頭に現れる‘oiga(oye)’のこの引き込み機能は、日本語の「ねえ」のもつ機能に共通する。

伊豆原(1992)によると、単独で現れる「ねえ」は、開始部でも用件部でも聞き手を「話の中に引き込む」機能をはたすという(p.104)。

A : ねえ。

B : ...

A : ねえ。

B : うん。

(伊豆原1992. p.163;下線伊豆原)

回答者：アメンボっていうのはねえ、足が長いでしょ。(はい)糸みたいだね。(はい)で、足の先だけをつけているわけですよ、水面に。(はい)でね、今度見てごらん下さい。足の先だけがね、水面がこうへこんでるんです。ねえ。じゃあれがなんでこうへこんでいるのかなってというのが...

(伊豆原1992. p.163;下線伊豆原)

また、‘oiga(oye)’は、発話末や発話内文末にも現れて、引き込みの機能を果たす。‘oye’が発話末に現れたつぎの例を見てみよう。

[42] Inf. —...Se formó un círculo muy bonito, porque fuimos varias parejas de novios y varias parejas de matrimonios ¿ves?

[43] Enc.—Anhá.

[44] Inf.—Entonces llegamos y ... este ... ¡ay!, como ciento cincuenta muchachos, oye.

[45] Enc.—¡No, hombre!

[46] Inf.—Yo creí que era una cosa de unos veinte.

(“El habla” p.379)

[47] Inf.—Y de todos los credos religiosos.

[48] Enc.—Ah, sí(=¿Ah, si? 筆者注); y ¿cómo lo organizaron?

[49] Inf.—Entonces no podía estar... No sé como(=cómo 筆者注) lo organizaron; con propaganda, pura propaganda, oye.

[50] Enc.—Anhá.

[51] Inf.—Tú no podías tocar un tema... así, católico... de frente.

porque había muchos muchachos de otra religión. Había israelitas, había ateos, bueno...había de todo.

[52] Enc. - Anhá.

[53] Inf. - Y además había intercambio de palabras, oye. Te podían preguntar ellos, y les tenías que contestar tú. (“El habla” p.380)

この例に現れた ‘oye’ は、聞き手を話題に引き込むだけでなく、聞き手に自分のもつ情報を提供し、話者自身の驚きを伝えることにより、話者の情報の世界に聞き手を取り込もうとする話者の働きかけを表している。聞き手の取り込みかたとして、その情報をもとに話者がもつ意見や感情を推論してほしいという話者の内部情報表出機能に基づく働きかけがあるものと思われる。これは、O. に挙げた田窪(1992)の指摘する日本語の「よ」の機能に通じるものである。「よ」に関しては、伊豆原(1993)はそのコミュニケーション機能として「持ちかけ」を挙げ、メイナード(1993)は、「よ」の使用は(相手の心的態度に焦点を置く「ね」に対して)情報に焦点を置いた話者の助詞選択の結果を示すものだとしている(p.106-109)。「よ」が、「相手中心」ではなく「情報中心」を示す(メイナード1993, p.109)のも、聞き手に情報を持ちかける(伊豆原1993)のも、そうするだけの価値を話者が認めているからで、聞き手に何らかの反応を期待しての働きかけがあると考えるべきであろう。その意味で、田窪(1992)の推論要求に説得力がある。

そこで、‘oiga(oye)’の対聞き手働きかけ機能は、

- (8) 用件部で発話権の確保あるいは維持の表明機能をもつ。
- (9) 新規の情報を持ちかけ聞き手を話者の情報の世界に引き込む機能をもつ。
- (10) 発話末、発話内文末のでは、聞き手を話者の情報の世界に取り込み機能をもつ。とまとめられる。

一方、‘mire(mira)’の場合は、聞き手を自らの情報世界に取り込むのではなく、話者の情報を聞き手に提供することによって、相手の判断の修正を図ろうとする。Obregon Muñoz は、聞き手の Acuerdo, entendimiento, atención を求めるときに使用される談話標識として、¿te das cuenta?, ¿sí?, ¿no?, ¿eh?, ¿verdad?とともに ‘mire’ ‘mira’を挙げている(p.58)。さしづめ、Obregon Muñozのいう ‘entendimiento’ を要求する談話標識ということになる。

‘mire(mira)’の対聞き手働きかけ機能は、(11)(12)となる。

- (11) 発話権維持の意向を表明する機能をもつ。
- (12) 話者の立場を主張する情報を持ちかけ話者の立場に対する聞き手の理解を求める機能をもつ。

‘oiga(oye)’ と ‘mire(mira)’の対聞き手働きかけ機能のちがいは、両標識の出現

位置のちがいに関わっている。‘mire(mira)’は発話の冒頭（もしくはそれに等しい位置）、発話内文頭には現れるが、発話末、発話内文末には現れない。

5. ‘oiga(oye)’‘mire(mira)’と「あのう」「ねえ」「よ」

以上、‘oiga(oye)’のコミュニケーション機能の考察を軸に、‘mire(mira)’と‘oiga(oye)’の異同、「あのう」「ねえ」「よ」との対応関係をみてきたが、最後に、‘mire(mira)’と「ねえ」の共通点について見ておきたい。

‘mire(mira)’は直前発話をうけて、その話題を維持する機能(8)をもつが、この機能は「ねえ」にもみられる。

「... ところがその素晴らしいワルツ、とっても悲しかったのが、だんだん明るい調子になっていくのよ、これ以上は無理っていうくらいロマンチックでさ、けどすごく明るくて陽気な調子にね。そしてそのシーンは終わるの、彼が一言も口をきかないままね、でも彼の頬が嬉しきでほころんでいるのが分かるし、ピアノは鳴り続けているのよ。ねえ..... このシーンがどんなにすてきか、あなたには想像できないと思うわ」

（集英社文庫『蜘蛛女のキス』116 ペ）

この「ねえ」は[34]の文脈で用いられるはずの‘mire(mira)’に通じる「ねえ」の機能である。すなわち、‘mire(mira)’も‘oiga(oye)’と同様、聞き手引き込みの機能をもっているが、引き込んだあとの対聞き手働きかけ機能が‘oiga(oye)’とは異なっている。そして「ねえ」は、‘mire(mira)’‘oiga(oye)’と同じく、言語形式選択中を示す「あのう」の機能(3)をもたない。したがって、内部情報表出機能を検討することでこれらの談話標識の機能の異同をより明確にできると考えるが、それは今後の課題として残された。

以上の考察の結果は表のとおりである。

‘oye’ ‘mira’ 「あのう」 「ねえ」 「よ」 の会話管理機能一覧表

機能			‘oye’	‘mira’	あのう	ねえ	よ
会話構造管理	開始部	切り出し	○	×	○	○	△
	用件部	切り出し	○	×	○	○	×
		話題転換	○	×	○	○	×
		話題維持	×	○	○	○	×
対聞き手働きかけ	発話権確保維持		○	○	○	○	×
	待機		×	×	○	×	×
	引き込み		○	○	×	○	×
	取り込み		○	×	×	×	○
	理解／説得		×	○	×	×	×

[注]

- (1) 熊取谷（1992）が考察した「はい」の類に属するものに「あのう」がある。
「あのう、ちょっと、すみません。」の「あのう」は相手へのよびかけ＝会話開始の合図の機能を果たしているが、「ちょっと、すみません。あのう……」にみられる「あのう」は用件開始の合図として機能している。
- (2) 『現代日本語コース中級Ⅰ』（名古屋大学総合言語センター）
「『あのう』は、意見を述べる前だけではなく、話しかける時や依頼する時にも使います。『あのう』は、(1)会話の開始を聞き手に知らせる働き、(2)適切な言葉を捜していることを伝える働き、(3)聞き手の時間を取るためのためらいを示す働き、が

あります。」(p.272)

Senko K. Maynard(1990) *An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies*, The Japan Times.

“...to attract your friends’ attention,...When you don’t know the name, or cannot recall the name of the person, the following phrases are useful. (a) あもう、すみません (が)... (b) あもう、失礼ですが... (c) あもう...” “The hesitation marker *anoo* is useful to express your unwillingness(with even a sense of guilt) to bother strangers for your need.” (p.193)

Osamu Mizutani/Nobuko Mizutani(1977) *nihongo notes 1 speaking and living in japan*, The Japan Times.

“*Anoo* is sometimes used merely as a stopgap phrase when one cannot think of the right word”, “*Anoo* indicates that the speaker is not yet ready to speak up; it is used to show his hesitation.” “*Anoo* also is used by itself as a signal to start a conversation...” (pp.78-79)

(3) 「ためらい」の表し方のひとつとして「いいさし」がある。「いいさし」のかたちで使用される「それが」や「だって」は「ためらい」を表すが、それはこれらの語に「ためらい」を表す機能があるからではなく、「いいさし」のかたちでその語を使用するという話者の伝達態度そのものによって「ためらい」が表されるのである。「あもう」の場合も、後続発話を続けずに相手の反応をまつのは、この「いいさし」にあたる。話者の態度が示す「ためらい」は「あもう」を選択したことに加えて増幅され、相手への配慮を大きくすることになる。

(4) 複数のインフォーマントからこの位置には ‘mira’も使用可能であるとの指摘があった。この位置での ‘mira’ は談話標識として用いられているというより目のケーキを聞き手も見ている状況を前提にした ‘mira’ (「見てよ／見ろよ」) であり、動詞 *mirar*の語彙的意味に依存した用法と考えられる。

(5) メキシコ人のBerenice Aguilar氏(京都工芸繊維大学院生)によると、会話の最中に一人がゴキブリをみつけた場合、‘Oye, ¡Por aquí está caminando una cucaracha!’(相手にゴキブリを見てもらうつもりのないとき) , ‘Oye, ¡ya viste la cucaracha?’ (相手に見てもらいたいとき) のように、それを知らせる発話の冒頭に ‘oiga(oye)’ が現れるという。

(6) Obregón Muñoz(1985)では、‘este’についてつぎのような説明をしている。‘si se trata de circunstancias o razones psicológicas que retardan el recuerdo de alguna idea, “este”, “e: aparecerán para llenar la gunas de silencio; (p.79)

(p.79)

(7) なにかを思い出して情報を付け加えたり、質問するときに ‘oye’ の後ろに ‘y’ が現れるという。(Berenice Aguilar氏談)

[参考文献]

- 伊豆原英子(1992)「『ね』のコミュニケーション機能」『日本語研究と日本語教育』, 名古屋大学出版会
- (1993)「『ね』と『よ』再考-『ね』と『よ』のコミュニケーション機能の考察-」『日本語教育80号』
- 大倉美和子(1992)「‘Mire’のコミュニケーション機能」『日本語とスペイン語との対照言語学的研究中間報告』国立国語研究所日本語教育センター第二研究室
- 岡本能里子(1990)「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72号
- (1991)「電話会話における対人関係維持としての言語使用-電話会話と留守番電話の終結部を分析して-」『ディスコースプロセス研究』3巻2号
- 小野寺典子(1992)「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」『日本語学』9月号
- 柏崎秀子(1991)「話しかけ行動の談話分析-言語行動の実態調査」『日本語教育学会春季大会予稿集』
- ザトラウスキー, ポリー(1991)「会話分析における『単位』について-『話段』の提案-」『日本語学』10月号
- (1992)「セールスの電話の会話分析の試み」『日本語学』1992.9月号』
- 熊取谷哲夫(1992)「電話会話の開始と終結における『はい』と『もしもし』と『じゃ』の談話分析」『日本語学』9月号
- 田窪行則(1992)「談話管理の標識について」『文化言語学-その提言と建設』
- 多門靖容(1988)「外国人の日本語談話行動における誤用の研究 2. 談話進行のコントロールについて」『日本語の普遍性と個性に関する理論的および実証的研究 研究報告(4)』
- 浜田麻里(1991)「『デハ』の機能-推論と接続語-」『阪大日本語研究3』
- (1993)「ソレガについて」『日本語国際センター紀要 第3号』
- 水谷信子(1980)「話しことばの文法の総合的考察-ディスコース分析試論」

『アメリカカナダ十一大学連合日本研究センター紀要 第3号』

メイナード・泉子・K(1993)『会話分析』, くろしお出版

Vigara Taust, Ana M.a(1980) *Aspectos del Español Hablado*, S.G.E.L.,
S.A. Madrid.

Schiffrin, Deborah(1987) *Discourse markers*, Cambridge University Press,
Cambridge.

Obregon Muñoz, Hugo(1985) *Introduccion al Estudio de los Marcadores
Interaccionales del Habla Dialogada en el Español de Venezuela*,
Instituto Universitario Pedagógico de Caracas, Caracas.

Cortés Rodríguez, Luis(1991) *Sobre Conectores Expletivos y Muletillas
en el Español Hablado*, Editorial Librería Agora, Málaga.

Senko K. Maynard(1990) *An Introduction to Japanese Grammar and
Communication Strategies*, The Japan Times.

日西対照研究とエラーアナリシスと
トランスリンガル・アプローチ

上田 博人

Hiroto UEDA

Estudio contrastivo, análisis de error
y aproximación translingual a la lengua española

キーワード：エラーアナリシス、 対照研究、 中間言語、 難易度、
スペイン語教育

人は努力する限り間違えるものであると言われる。とくに自らのものとは異なる新しい世界に入ろうとするときには、多くの誤りは当然のことである。幼児の言語獲得や学生や社会人の外国語習得の過程を観察すると、そこにも多くの誤りが見られるが、人はけっしてそれを侮らず、むしろ積極的に評価して、さらなる発展の足がかりになるように激励することだろう。

ここで、第二外国語の習得における誤り（「誤答」error）に限って考察を進めると、二つの立場が考えられる。一つは、外国語の「正しい」使い方を学ぶためには誤答は「避ける」べきものであり、学習者にとっても教師にとってもけっして重要なものではない、という否定的な考え方である。他方、誤答は外国語の習得の過程を如実に示す貴重な資料であり、それを考察することによって学習者の直面している問題点を探ることができる、という積極的な見方もある。私がスペイン語を教育するという日常の作業のなかで経験してきたことを振り返ると、個人的には前者の立場（「規範主義」prescriptivismo）よりも、後者の「記述主義」（descriptivismo）の立場をとるほうが、教育面で効果があり、また研究面でも建設的であったと思う。そこで、以下では学習者の誤答を一次的な資料として、その観察から得られたいくつかの理論と実践に関する問題点を述べることにしたい。

1. 学習者の誤り

外国語の学習者は、どのような要因で誤りをおかすのであろうか。われわれはいつもこの疑問が頭から離れることはない。また教師のなかには、これは明解で一律的な解答が得られるはずはない、と考える人もいるだろう。しかし、学習者の多くの誤りを前にすると、やはりこの「どうして」という問題を避けてはいられない気がする。

この問題に取り組む前に誤りの種類について明確にしておきたい。つまり「誤り」には目標言語（外国語）の構造によるものと他の言語（おもに母国語）の干渉によるものがある。これらは、比較的「安定した」誤りであって、個人よりも集団（クラスの一定数）に属し、また繰り返されるのが特徴である。それに対して、散発的で体系的に欠けるタイプの誤りもある。これも多くを観察すれば、何らかの傾向が現われてくるが、「安定した」誤りのように比較的明確な解釈が困難なものが多い。

以上をまとめてみよう。

「誤り」の種類

散発的な誤り	… ①
安定した誤り	
他の言語（母国語）の干渉による誤り	… ②
外国語の構造に起因する誤り	… ③

はじめに、①の「散発的な誤り」は学習者がたまたまおかす偶発的な誤りであって、学者によっては、これを「ミステーク」(fallo)として、ここでの分析の対象である「エラー」(error)と区別する者もある(注1)。たとえば次がその例である。

○ *Entre [De] muchos libros que he leído hasta ahora, *las [la] novela que *acabé [acabo] de leer me ha dado la más profunda impresión.

星印の部分は目標言語の文法または慣用に照らしてエラーであるとみなされるものであるが、この文の2番目のエラーの las には、どのような合理的な説明もできない。たまたま出現した「散発的な誤り」と考えられるだろう。これは以下で扱う「安定した誤り」とは区別しなくてはならない。この理由で以下の考察では除外することにした。

次に、②の「母国語または他の既習外国語の干渉による誤り」について考えてみよう。干渉(interferencia)とは、いちおう外国語の学習にあたって、他の言語が影響して本来の目標とは異なる形を与える現象であるとする。もちろん、「よい」干渉、つまり干渉の結果がプラスにはたらく場合もある。そこで、よい影響も悪い影響も含めて「転移」(transferencia)という用語を用いることもできる。これの具体的な例は後で述べることにする。

さて、③の「外国語の構造に起因する誤り」(言語内エラー errores intra-linguales)について、米山朝二氏と佐野正之氏(『新しい英語科教育法』東京：大修館書店、1983, p. 93)は次のものをあげている。スペイン語の例は私が付け加えたものである。

(1) Over-generalization: 外国語の規則を拡大して適用するため、例外などを無視してしまう。例: He *eated [ate] too much.; two *mouses [mice]; She made me *to [φ] come. スペイン語の例としては次のものがあげられる。

○ Es mejor que juegues *alguno [algún] deporte exterior.

○ La fiesta deportiva es *posponedo [pospuesta] indefinidamente a causa de la lluvia.

(2) Simplification: 文法標識を最小限におさえ、動詞の活用語尾、名詞の屈折形、冠詞、助動詞等の文法形態素を省略したり、異なった文型を区別するのに最大限の手がかりのみを用いる。例: He *eat [eats] too much.; *that [these] two dog; what *you are [are you] doing? スペイン語の例は、

○ Cuando *escala [se escalan] montañas, hay que seguir los consejos de un experto.

○ *El cuerpo fortalece dar un paseo y hacer gimnasia. [El cuerpo se fortalece dando paseos y haciendo gimnasia.]

(3) Developmental errors: 母国語として英語を習得する過程と類似したエラー。例: He took her *teeths [tooth] off.; I didn't *weared [wear] any hat. スペイン語の例は、

○ ¿Tú sabes conducir el coche? -- Sí, *sabo [sé] conducir.

(4) Induced errors: 特定の教材、教授過程の配列、方法などにより誘発されたエラー。英語の例はあげてないが、スペイン語の例は、たとえばつぎのような辞書の丸写しなどがこれにあたるだろう。これは、「注意する」=prestar la atención を文脈を無視して適用したためにおきたエラーである。和西辞書に工夫が欲しいところである。

○ Un atractivo del esquí y el montañismo es la dificultad y la aventura. Por ello es necesario tener los instrumentos suficientes y *prestar la atención [ser precavido].

(5) Errors of avoidance: 特定の言語項目の使用を困難だと考え、それを避けて別の表現法を用いる傾向。これも英語の例がないが、スペイン語の例としては、後でも触れるが接続法を避けた次のケースがある。

○ Estudiaré mucho *para creer en mis palabras [para que crean en mis

palabras].

(6) Errors of overproduction: 特定の言語項目が正確に使用されているものの、その頻度が異常に高い場合。

この分類はさまざまな現象の現れかたを説明して、たしかに多くの示唆がえられる。スペイン語の例もこれに従って分類すると、エラーの問題点がより明確になると思われる。ところが、要因の「分類」とするにはここに異質のものが同時に扱われていることを指摘しなければならない。(1)と(2)は構造的な解釈だが、それ以外は異なる。たとえば、(3)と(6)は現象的なものであるし、(4)と(5)は要因を述べたものだ。しかも、(4)は言語学的な問題以前のことだろう。また、(2)と(5)には部分的な重複があると思われる。そこで、もう少し踏み込んだ理論的な考察と枠組の提示が必要となる。

学習されている言語が「外国語」であるかぎり、学習者には当然、母国語の背景がある。また、スペイン語の学習者ならば、その多くには英語の知識もある。厳密にはこの二つは分けて考えるべきだが、とりあえず以下の考察にかかわらないので、外国語ではない言語(母国語と既習外国語)としてまとめておこう。

③の「二言語間の相違にもとづくエラー」(errores interlinguales)が生まれる過程を説明するには少なくとも3つの立場があるようだ。かりにそれらを

- (1) 転移説 (teoría de transferencia)
- (2) 対立説 (teoría de oposición)
- (3) 中間言語説 (teoría de interlengua)

とよぶことにしよう。第一の「転移説」は、とくに「言語接触」(lenguas en contacto)の問題と大きくかかわっている。外国語の学習の最終的な目標が「二言語使用者」(bilingüe)を形成することであるとすれば、1個人のなかに2つの言語体系が共存することになって、そのうちの一方の要素が他方に干渉することがある。また、それが個人を超えて、特定の言語に定着することもある。言語接触の研究者であったワインライヒは、文法の面でもさまざまな現象をあげているので参考になる(Uriel Weinraich. *Languages in contact.*)。私の資料の中から、日本語の干渉と思われる例をあげてみよう。

○ Alimento un pajarito, nada hay más divertido que oír *ese [su] canto.

○ No hay *más impresionante libro [libro más impresionante] que el libro que he terminado ahora mismo.

最初の例では「その歌声」の「その」にあたるスペイン語 *ese* を用いているが、この場合は所有を示す「その」 *su* でなければならない。ネーティブの協力者はなぜここに *ese* を用いたのか首をひねっているが、日本人の教師ならば日本語の干渉だとわかる。2 番目の例は「深い感銘を受けた本」という日本語の語順をそのままスペイン語に移したために起きた間違いである。ほかに、既習外国語の干渉が現われる場合もある。

○ En mis tiempos de estudiante, frecuentemente jugaba al tenis con mis amigos después de las clases, pero recientemente estoy tan ocupado que *hacerlo [no puedo hacerlo].

これは英語の *too... to...* という相関句の干渉だろう。

さて、次にあげるのが構造的な解釈をとる「対立説」で、スペイン語文法についてはアメリカ合衆国のストックウェル、パウエン、マーティンの共著『英語とスペイン語の文法構造』(Robert P. Stockwell, J. Donald Bowen, John, W. Martin, 1967, *The Grammatical structures of English and Spanish*) がその代表である。スペイン語を学ぶアメリカ人のために書かれた本だが、そこには多くの文法項目が、それぞれの言語においてどのような対立となっているかを示し、学習の難易度を予想している。(難易度については、後で詳しく扱う。) ここで「対立」というのは、文法的なカテゴリーの選択のことで、たとえば英語の BE 動詞に対してスペイン語には SER と ESTAR の対立があるという考え方をする。それによると、学習者のエラーの原因は母国語の要素の単純な転移による、というよりも、ある対立が母国語になくて外国語にあるという事情があるためだと説明される。たとえば、スペイン語を学ぶアメリカ人は SER と ESTAR の区別が非常に難しいので間違えやすい、という。

この説は構造言語学の理論や、それにもとづく文型練習(「バタンブラクティス」 *ejercicios de patrón*) やオーラル・アプローチ (*método audio-lingual*) の実践において大いにもてはやされた。バタンブラクティスでエラーを極力排除するために徹底的な自動化をめざしたわけである。

最後にあげるのが、学習者のエラーを積極的に評価する「中間言語」説 (*teoría de interlengua*) である。「中間言語」とは見慣れない用語だが、ようするに外国語習得過程において学習者が形成する 1 つの言語体系である、と考えるのである。そし

て、学習者のエラーは、自らが接したデータとの相互作用にもとづいて、外国語の構造的な性質を自らが解釈していく過程を示すものだ、と主張する (S.P. Corder, 1981: *Error Analysis and Interlanguage*, Oxford Univ. Press)。そして、母国語の影響そのものよりも学習過程で形成されたこの「中間言語」を重視するため、そのエラーの多くは「母国語の特徴との明らかな関係は何もない」とまで明言している (同書, p. 66)。

以上が、母国語の干渉に関する主な3つの学説だが、私の集めた誤答例を、それぞれの立場から見直してみると、それぞれに難点があることがわかる。はじめに「転移説」だが、これで説明できる例はきわめて少なく、しかも、その大部分は学習者が教材 (とくに和西辞書) を不適切に解釈したものであった。純粋に母国語の転移、たとえば日本語の特徴である否定語 (辞) を動詞の後や文末におくなどという誤りは一度も見つからなかった (注2)。

次に「対立説」だが、これはたしかに多くの点で有効であることが認められる。たとえば日本人に難しい定冠詞／ゼロ冠詞, SER / ESTAR, 直説法／接続法, の区別などは「対立」の概念を使えばうまく説明ができるだろう。つまり、これらの対立は日本語に存在しないために日本人にとって困難点となるのである。また、教授法の点から言えば、これらをとくにきわ立たせた比較対照の方法をとれば効果的だと思われる。しかし、これらにも増して頻度が高いのは単純な語順や形態の間違いだ。たとえば、*los todos libros [todos los libros] や、*Tradució[Tradujo] el libro. というエラーである。これらには「対立」の概念はあてはまらない。「対立」とは先に述べたように母国語、または外国語の中に存在する交替だが、ここであげたものは学習途上の段階の言語 (「中間言語」) にだけ存在するものだからである。

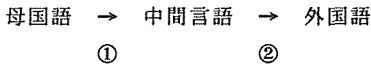
学習者の誤りを積極的に評価してその体系を探ろうとする「中間言語説」は、たしかに魅力のある立場だが、これは刻々と変化して、とらえどころがない。1週間前の学習者の中間言語は今週のものとは違う。また、それが解明できたとしても、今度はわれわれの目的である誤りの原因を探り、それを直す有効な教授法を探るという大きな作業が残っている。そう考えるといつまでも中間言語に拘泥しているわけにはいかないのである。

ここで有効と思われるのは、従来の対照言語学が行ってきた母国語と外国語の比較でなく、学習者の言語習得過程を示す中間言語と外国語との比較を行なうことだと思う。ここで新たな「対立」の概念を提案したい。対照言語学で考察されるのは2言語間の要素 (カテゴリー) の対応だった。また構造言語学での「対立」とは1言語内の体系における2要素 (カテゴリー) 間のものである。

対照言語学： A言語の要素 ← 対応 → B言語の要素

構造言語学： 1言語の要素 ← 対立 → 同言語の要素

ここでは対照言語学とも構造言語学とも違う新たな視点を中間言語に見いだして、あらためてその体系と外国語とを比較するという立場をとる。そうすると、たとえ外国語に存在しない要素であってもちゃんと扱えるわけである。たとえば、先の例の *los todos libros と todos los libros を比較し、また、*tradució と tradujo を比較する。こうなると、もう母国語の干渉（下の図の①に属する）は問題にならない。エラーアナリシスでは下の②を扱う。



外国語（スペイン語）の個別的そして体系的な言語記述は、これまで数えきれないほどあるが、中間言語から見た外国語の記述／説明というのはほとんどない（注3）。しかし、実践面から見ると、そうした記述／説明はとても重要であろう。これはスペイン語を研究するとともに教育する立場にもある人の大きな課題だと思う。従来のエラーアナリシスでは②の関係のなかで、とくに中間言語に焦点をあてているが（注4）、中間言語から見た外国語の記述／説明もそれに劣らず重要なテーマであると思う。「中間言語から見た外国語の記述／説明」というのは、長くてややこしい言い方なので、エラー・アナリシスと区別してトランスリンガル・アナリシス（análisis translingual）という用語を提唱したい。たとえば、先の ese と su の区別などは日本の学習者のおかすエラーによってはじめて明らかとなるトランスリンガルな問題だと言える。他の母国語を背景とした人のおかすエラーと重なる部分も当然あると予想されるが、その要素を排除する理由はない。いずれにしても、構造主義が強調する個別言語の固有の体系は尊重するが、外国語学習という実践面からは、その体系も相対化しなくてはならないということである。

2. 難易度

学習者にとって外国語のどのような部分が困難なのだろうか。この問題について、

先にあげた「対立説」をとるアメリカの3人のスペイン語研究者 (Stockwell, Bowen, Martin) は次のような説明をしている。まず母国語 (英語) と外国語 (スペイン語) の中で、該当項目の対立が義務的なものか任意的なものを検討する。つまり、対立をなす2つの項目のうち、かならずどちらかが選ばれなくてはならないのか、どちらでもよいのか、ということである。たとえば、スペイン語の直説法／接続法の対立はそれぞれの使い方において決まっているので義務的である。一方、英語の He is speaking now. に対するスペイン語の Él habla ahora. と Él está hablando ahora. はどちらも可能なので任意的だとする。

また、二言語を比較するときにその間に構造的な対応があるかも見る。英語の過去時制とスペイン語のそれには構造的な対応があるが、両言語の否定命令文にはそれが無い。そこで、英語話者はつぎのような否定命令文のエラーをおかす。

No *habla [hables] tan fuerte.

No *estudian [estudien] aquí.

次に、機能／意味的な対応も考慮する。たとえば、指示形容詞と名詞の数の呼応は両言語に共通して機能／意味的な対応があるが、動詞の /-s/ は両言語において機能／意味が異なる。

this book / these books
este libro / estos libros

(He) speaks.
Hablas.

これらの観点から両言語の考えられる対応の可能性をあげてそれを難易度の順に並べたのが次の表である。

< 難 >

		母国語の 対立	構造的 対応	機能／意味的 対応	外国語の 対立
①	1	なし	なし		義務
	2	なし	なし		任意

②	3	任意	なし	あり	任意
	4	義務	なし	あり	義務
	5	任意	なし	あり	義務
	6	任意	なし	あり	任意
③	7	義務	なし		なし
	8	任意	なし		なし
④	9	任意	あり	なし	任意
	10	義務	あり	なし	義務
	11	任意	あり	なし	義務
	12	義務	あり	なし	任意
⑤	13	任意	あり	あり	義務
	14	義務	あり	あり	任意
	15	任意	あり	あり	任意
	16	義務	あり	あり	義務

<易>

ここで2点指摘したい。1つは義務と任意の違いである。はたして彼らのあげている任意的な対立の例はほんとうにどちらでもよい対なのだろうか？

Él habla ahora. / Él está hablando ahora.

Él es un filósofo. / Él es filósofo.

当時のアメリカ構造主義の草分けであったブルムフィールドはその著作『言語』の中で、形が異なれば意味が異なる、と述べている。私も、少なくとも研究態度としては、意味が似ているからといってこれらを「任意的な」対立とすぐに決めてしまわないほうがよいと思う。すくなくとも研究姿勢としては、形が違うならば、その意味／機能の違いは何かを常に問い続けるべきであろう。

また、二言語の比較をするには何か共通の基盤がなくてはならない。対照言語学では、文法構造を問題にするときは、機能／意味の共通性を土台とするのが普通だ。そ

うでないと表面的なつまらない対を扱うことになる。たとえば、先の英語の speak-S とスペイン語の habla-S である。やはり、機能／意味の対応は前提とすべきだろう。そこで、先の表は、次のようにとても簡単になる。

<難>	母国語の 対立	構造的 対応	外国語の 対立
①	なし	なし	あり
②	あり	なし	あり
③	あり	なし	なし
④	あり	あり	あり

<易>

さらに④のケース、つまり構造的対応がある場合は、学習上の問題がなく、きわめて容易に学べるので、理論上はともかく実際にはとくに取り上げる必要はないと思われる。また、ここでの例のように、母国語が英語であり外国語がスペイン語のようなとき、つまり、歴史的に同じ系統（インド・ヨーロッパ語）に属する場合は有効かもしれないが、日本語とスペイン語を比べるときは、ほとんど役立たないのである。そうすると、この基準も取り去ると、結局次のような表になってしまう。

	母国語の 対立	外国語の 対立	難易度
①	なし	あり	3（困難）
②	あり	あり	2
③	あり	なし	1（容易）

つまり、母国語にない対立が外国語にあれば困難であるし、逆に母国語にあって外国語にない対立は容易だということだ。どちらにもある場合はその中間に位置する。これはとても常識的な判断で、「対立」の概念はすぐれているのだが、それを除けばとくに目新しいことはないと言ってよいだろう。つまり「知っていることは容易であり、知らないことは難しい」というのと同じことになるからだ。日本人がスペイン語

を学ぶ場合について、それぞれの例をあげてみよう。

①性（男性／女性）と数（単数／複数）：これらは日本語にない文法カテゴリーである。性は形態上の問題であることが多いのだが、数は形態と意味／機能の面でとくに日本人の学習者には困難となる。次の例がその様子を示している。

○ Tenemos que hacer ejercicio moderadamente para ponernos *fuerte [fuertes].

○ A pesar de que soy torpe en el tenis, me gusta mucho. Siempre que no llueva, lo practico tres horas *en el domingo [los domingos].

はじめは文法的な一致の間違いである。次の例は文法というよりも、「毎週の日曜日」のことを指しているので概念的な問題となる。

②肯定／否定：日本語にもスペイン語にもそれぞれの形態と意味／機能があり、①に比べて学習は容易である。ただ、スペイン語の否定命令文や不定詞の否定形などがいくぶん日本人にとってめんどろな問題となる。

③数量詞と数詞：日本語には名詞によって数量を示す独特の接尾辞があるが、スペイン語ではすべて同じ数詞が使われる。しかし、日本人にとってスペイン語の数詞の使い方はほとんど問題にならない。

これが従来の対照言語学的な分析方法だが、次に述べるのが中間言語と外国語を比べる方法、つまり、先に述べたトランスリンガル・アナリシスである。対照分析では言語A（母国語）と言語B（外国語）の構造がわかっていて、そこから学習者の難易度（X）を知ろうと試みられた。難易度は、学習者のおかす誤りとなってあらわれると予想される。これは理論的／演繹的方法と言えるだろう。

母国語（A）



比較 → エラー／難易度（X）

外国語（B）

ここでは対応する意味／機能をもとにして母国語（A）と外国語（B）の形式的な比較を行う。それに対して、トランスリンガル・アナリシスでは、母国語であらわされた明示的な意味（A）と収集されたエラー／難易度（E）を比較することによって、外国語の言語構造（X）を探るのである。

母国語 (A)



比較 → エラー／難易度 (E)

外国語 (X)

この第二の方法では、学習者にとっての難易度を説明するには、第一の方法のように2つの言語を比較することはできない。片方の外国語が未知数 (X) だからである。この方法では、難易度はエラーを直接観察することで経験的に (帰納的に) 得られる。難易度は連続的に存在する中間言語の出現順位と強い関係があると思われる。つまり、早い時期に形成された肯定的な (「正しい」) 中間言語に存在する言語要素は、遅い時期のものに比べて学習が容易なものだと言える。

多くの事例を観察するとエラーには、経験的に3つのタイプがあることがわかる。1つは想像される中間言語の言語的な枠組み (marco de referencia interlingual) 内で外国語の正しい実現が可能であるはずなのに間違えてしまう場合である。たとえば数詞とか動詞の人称形態がそうである。そのなかでも数詞は単に日本語とスペイン語の形態的な対応の問題だけなので、比較的早い時期の中間言語において形成されていると思われる。一方、動詞の人称形態は日本語にないものだから、数詞と比べると困難である。

また、問題の言語要素の概念の枠 (marco de referencia conceptual) が形成されやすいものは比較的容易なものとなる。たとえば数 (単数／複数) とか、性 (男性／女性) などがそうだ。しかし、抽象度の高い定性／不定性などはきわめて困難である。

さらに、困難なのが未だ説明のための完全な概念枠が作られていない問題である。これらはまだ言語学の論文に取りざたされている。しかし、言語研究の発展とともに、これらも絶対的な困難点ではなく、少しずつ解決されてきている。以上を簡単にまとめると次のようになる。

中間言語 による説明	概念的な 説明	例	難易度
容易	容易	数詞	1 (容易)
困難	容易	数 (単数／複数)	2 ↑
困難	困難	冠詞 (定性／不定性)	3 (困難)

3. 教室で

以上が、トランスリンガル・アナリシスの理論的な枠組みである。つぎに実際的な問題に移りたいと思う。実際に私たちが教室で出会うさまざまな学習者のエラーにどのように対処すべきかということである。先にもふれたように、厳密に規範主義的な立場は学習者にとっても、教師にとってもフラストレーションがたまるばかりである。学習者にとっては、間違いをおかすたびごとに矯正され、正しい外国語の習慣が形成されるまで、とにかくがんばらなくてはならない。また、教師の立場からは、間違いを見つける度に直すという非生産的は作業が繰り返され、ときに絶望的になったりする。

私は、外国語の授業は教師から学習者への一方的な伝授の場ではなく、両者の双方向的なコミュニケーションの場であるべきだと考える。そこで行なわれるのは、単に教師の知識の伝達ではなく、教師も学習者から学ぶことでもあるのだ。教室はそのための共同作業の場となる。そうすると、学習者の授業に参加する動機づけが高まり、教師にとっても授業が単なるノルマでなく、自己研鑽の有意義な機会ととらえることができるだろう。

また、教師がエラーを分析する研究者という立場をとると、教室は彼のフィールドワークの場ともなる。そこで行なわれるデータ収集には個別的な方法と組織的な方法がある。個別的な方法ではデータに直面したときに記録する。そのようにして集めた例を私のカードからいくつかあげてみよう。

- *treinticuatro [treinta y cuatro]
- Aprendí español *a [en] la Universidad.
- Recibí *una carta de él [su carta].
- Recibí su carta pero no *contesté [la contesté].

次に紹介するのはサンプリングによる組織的な方法である。ここでは、クラス全員に同一の作文（スペイン語文への翻訳）の課題を出す。1週間に短い文章を10から15ぐらい出すのが適当な量だと思う。翌週に集めたレポートを次のように課題の文章ごとにまとめる。クラスが10人以上のときは10人だけを選ぶ。これは150題（15×10）が1週間のできる仕事（事実上は丸1日の仕事）のリミットだからで

ある。

○例題：「読書によって知識を広くしななければならないと思います。」（注5）

- A) Pienso que tenemos que extender los conocimientos para la lectura.
- B) Pienso que debemos estar más sabios por la lectura.
- C) Creo que tenemos que ampliar nuestros conocimientos por la lectura.
- D) Pienso que tengo que ampliar mi conocimiento por la lectura.
- E) Creo que debemos ampliar nuestro conocimiento por leer libros.
- F) Yo pienso que tenemos que ampliar conocimientos por la lectura.
- G) Pienso que hay que ampliar conocimientos por la lectura.
- H) Creo que debemos de extender los conocimientos por la lectura.
- I) Creo que debemos de extender nosotros conocimientos por la lectura.
- J) Creo que tengo que difundir los conocimientos por leer los libros.
- K) Creo que con la lectura debemos ampliar nuestro conocimiento.

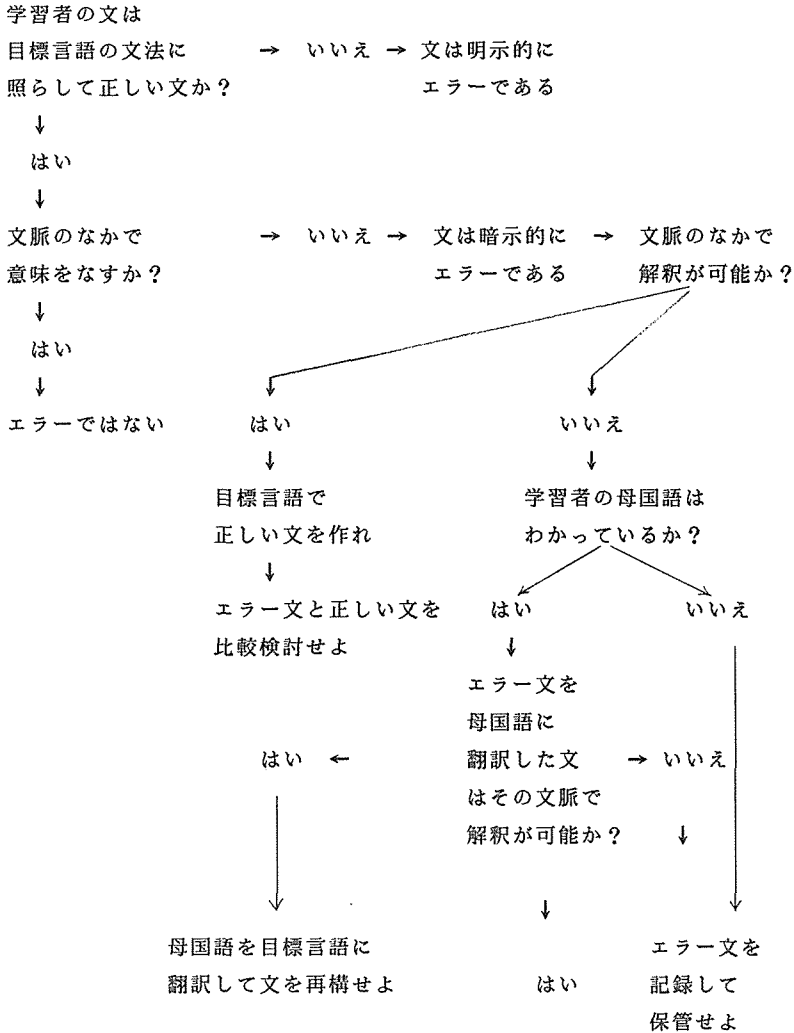
- S) Pienso que debemos ampliar nuestros conocimientos por medio de la lectura.

こうして、同一の日本語文をベースに学習者の中間言語の現れであるレポートを比較検討し、個々の問題について考察する。ネイティブの協力者がいればずっと効果的である。教室ではさらに削減して4人分のレポートを解答例とともに印刷して配布する。こうして、提出から解答までは1週間の時間差で行なうが、これ以上になると学習者も自分のレポートの内容を忘れてしまい効果が薄れてくる。また教師の仕事も複雑になるので、量的にはかならず1週間で終わらせるものにすべきである。

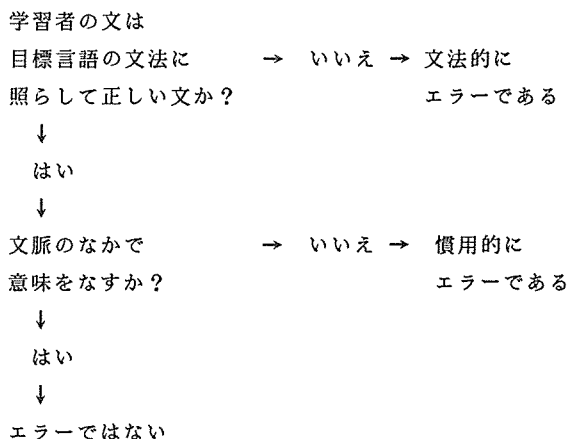
私の関心は中間言語そのものの構造ではなく、いかにして中間言語を目標言語に近づけるかという点にあるので、個々の学習者の発展段階を追うということはない。もし中間言語そのものの記述をめざすならばサンプリングという方法ではなく、特定の個人のレポートを追跡調査することが必要となるだろう。たぶん言語学的な研究というよりも言語心理学的な研究になると思う。

4. 検討

ここでの関心であるエラー・アナリシスの具体的な方法を見てみよう。ピット・コーダー (Pit Corder) は彼の目的である中間言語の記述のための資料収集方法を次の図式で説明している。



ビット・コーダーのエラー・アナリシスの状況は学習者の意図する意味が解釈できるか／できないかという点と母国語がわかっているかどうか、という点で処理の流れが変わる。ところが、作文（翻訳練習）であるならば、学習者の意図する意味はすでに与えられた日本語だし、また母国語（日本語）も当然わかっている。先の図式にならって説明すると、次のようになろうかと思う。ここで明示的誤り（overtly idiosyncratic）と暗示的誤り（covertly idiosyncratic）というのはわかりにくいので、文法の誤り（error de gramática）と慣用の誤り（error de norma）と言い換えることにする。これはコセリウの「体系」（sistema）と「規範」（norma）の区別に対応する。



慣用的なエラーの説明は簡単である。つまり、「文法的には正しいが、実際にはそうは言わない」ということである。説明は簡単だが、その習得となるとルールではなくリストに属するのできわめてやっかいだ。これは学習者が一定のレベルに達して、いわゆる「停滞期」（plateau）の段階になったときに多く直面する問題である。学習者が1つ1つコツコツと克服していかななくてはならないことだろう。たとえば、次がその例だ。それぞれ文法的には正しいのだが慣用ではないと説明される。

○ fiesta *de deportes [deportiva]

○ Es muy agradable deslizarse en unos esquís *de [desde] la cumbre de la colina hermosa *con [cubierta de] la nieve.

また、方言の違いも慣用的なエラーと見なされる。つまり、スペイン語の「体系」に属するのでその点では正しいのだが、もしスペインの慣用を学ぶという目的があるならば、エラーとなる。もちろん、これは方言を差別するものではない。スペイン以外の特定のバリエーションを学ぶならばスペインに特有な表現はエラーとなる。

○ Estoy interesado en la colección de sellos de correo *del exterior [extranjeros].

○ Debe hacer algún deporte al aire libre, no te encierras sólo en tu *pieza [cuarto].

○ Es muy agradable oír el canto de los pájaros cuando me despierto *en [por] la mañana.

一方文法的なエラーは、ルールに属することなので教室で適当な指示があってしかるべきだろう。ルールに属することをリストとして扱うことはかけ算を知らないで足し算ばかりすることと同じである。そのための教材は、まさに学習者の中間言語にある。これを大いに活用して教室にフィードバックするのが効果的だ。そのほうが学習者にとっても自らの体験と直接にかかわらない例文で理解するよりも、ずっと身近に感じて受容されやすいのである。

最後に、研究者としての立場からの提案をしたい。これまでの文法研究は、圧倒的多数が目標言語（スペイン語）の固有の問題を扱ったきわめて理論的な研究である。そのおそらく20分の1にも満たないのが母国語と目標言語との対照研究であろう。そして、ここで扱った中間言語から見た目標言語の研究は一部のわずかなエラーアナリシスを除けば皆無に近いという状態だ。この時期に、教室の現場で採集されたトランスリンガルなさまざまな問題点を整理してファイルしてみれば膨大な数の項目となるだろう。これは1個人の研究ではとうてい処理が不可能な量である。そこで、トランスリンガルな問題点の指摘、およびその解決策を話し合う場があってしかるべきだと思う。それには、教育・研究者の幅広いネットワークを作り、活発な研究会を開催し、高頻度のレポートを発行しなくてはならないだろう。しかも、ここでの中心テーマが日本人の学習者の中間言語からみたスペイン語の問題点であるために、外国での理論・実践的な研究成果を待ってはいただけないのである。

5. 日本語教育とスペイン語教育

以上述べてきたことは、スペイン語教育の現場とスペイン語学という理論をどのように実際に結びつけるかという課題について、私なりの考えをまとめたものである。もちろん、両者は切り放してとくに関連づける必要はない、という意見もあろうかと思う。しかし、研究者でもあるが、教師でもあるという社会的な立場はそれなりの責任があるはずだ。また、両者が有機的に結びつけられれば、学習者も教師も大きな動機づけがえられるし、教室は活性化されるだろう。その結果として、私たちが何よりも望んでいる学習者の外国語の能力向上に役立つはずである。

立場をかえて、日本でスペイン語話者に日本語を教育する人にも、ぜひ中間言語の詳細な観察とその観点からの日本語の考察を勧めたいと思う。私の手元にはわずかな資料しかないが、それでも、これまでに述べてきたことと同じことがあてはまるような気がする。たとえば、早稲田大学の乾英一氏は論文「スペイン語教授法の問題点：「作文」の位置づけ」『語学教育論集6』（早稲田大学語学教育研究所，1991）で次のような興味深い日本語の例をあげている。これは文通を希望するバルセロナの大学生の日本語文である。字の間違いはそのままにしておく。

- (1) 私は19年です。
- (2) あなたにかきたいです。あなたはかきますか。
- (3) 私は日本ごも大学でべんきょうします。

中間言語を示すこの日本語文から乾氏は次のような分析をしている。まず、原文と考えられるスペイン語文はこうである。

- (1) Tengo diecinueve años.
- (2) Quiero escribirte. ¿Me escribes?
- (3) Estudio también el japonés en la Universidad.

例1の場合は、año=「年」という形でこの単語を理解しているものと思われる。例2の場合は escribir の「手紙を書く」という意味がとらえられていない。例3では、現在形を「…する」という形でしか理解していないことがわかる。「…している」は未習なのだろう。

これが、乾氏の分析だが、私はこれらがそのような中間言語の現れではなく、辞書や教科書をそのまま使った induced error である可能性も考えられると思う。しか

し、これらはすべて推量にすぎない。やはり、直接本人に会って確かめなければわからないことだろう。そのための理想的な環境は、まさに教室と言える。トランスリンガル・アナリシスの観点から見てとても教えられるのが、酒入郁子／佐藤由紀子／桜木紀子／中村貴美子／中村壽子／山田あき子氏の『外国人が日本語教師によくする100の質問』（バベルプレス、1991）である。そこには「新宿に行く／新宿へ行く」、「太った人／太っている人」、「風邪をひかないように／ひかないために」など興味深い例がたくさん示されて研究されている。これらはともすれば任意的な対立、つまりどちらでもよいなどと判断されがちだが、「教室」というトランスリンガルな場ではもっとシビアなものがあるようだ。その点、私たちスペイン語教師が見習わなくてはならない。

ところで、作文の授業について、乾氏は先の論文のなかでとても大事な点を指摘している。乾氏が在外研究のためにスペインに滞在中に、マドリードの外国語学校のスペイン語の先生の依頼で、日本人学生の作文のエラー分析を手伝ったときのことである。ある学生の次のような内容のスペイン語文が問題となった。その内容は

「夏休み中に両親が日本からやってきて、私の通っている学校を見たいということで連れて来たところ、ずいぶん小さくて、きたない学校だと言われた。外見は立派ではないかもしれないが、中身はとてもいい学校だと反論した。だから、私は両親が私の言ったことを信じてくれるように、>がんばって勉強しなければならない」

というものだ。ここで<…>の中が、スペイン語で *para creer en mis palabras* となっていたので、スペイン人の教師はこれを「自分の言ったこと、すなわち、この学校がよい学校だということを信じて」と、解釈して *para creer* ではなく *creyendo* の間違いだと考えたのである。しかし、乾氏は、日本人留学生の作文であることを考えると、ここは<…>のような文脈であると考えのほうが自然で、本来は *para que crean ...* と接続法を用いるべきところだったのだ、と述べている。接続法が難しいので前置詞＋不定詞を用いるのは日本人の *error of avoidance* であるというわけである。

そこで、乾氏は「こうした作文の授業は、本来日本人教員とネイティブ・スピーカーが共同で行なうべきであり、そうすることによって、最大の効果が得られる」と主張している。私もそれを実践してみたが、たしかにネイティブと日本人とのどちらかだけでは多くの大事な点が見逃されてしまうようだ。たとえば、次はスペイン人教師（東京大学教養学部ハビエル・リャノ氏）と私（上田）の分析が食い違った例の一部である。

(誤) Recientemente apenas ando por las montañas porque estoy ocupado y se me han debilitado las piernas, pero antes solía recorrer las montañas.

(正) (...), pero antes solía recorrer las montañas a menudo.

リャノ：副詞がない (Falta el adverbio.)。

上田：学生は「習慣性」を示す動詞 *soler* に「しばしば行なう」という「繰り返す」性の意味があると誤解している (El alumno cree equivocadamente que 'soler' tiene el significado frecuentativo, de 'hacer algo a menudo'.).

(誤) Lo es importante que leer libros y saber las cosas escritas pero lo más importante es leer libros y pensar saliendo del libro por sí mismo.

(正) Es importante leer libros y saber las cosas que hay en ellos escritos, pero lo más importante es leer libros y saber pensar por sí mismo partiendo de ellos.

リャノ：最初から最後までシンタクスの乱れがある (La frase tiene errores de sintaxis de principio a fin)。

上田：英語の干渉である。lo = 'it', que = 'to' ととれば、構文は論理的である (Lo que veo aquí no es tan grave como dice el prof. Llano. Es interferencia del idioma inglés: 'lo' corresponde a ing. 'it' y 'que', a ing. 'to')

(誤) Todos los muchos libros que he leído no me emocionan más profundo que la novela que termino leer justamente.

(正) De todos los muchos libros que he leído, ninguno me ha emocionado tanto como la novela que acabo de terminar de leer.

リャノ：この学生は比較するものを逆にしている (El alumno ha hecho una comparación al revés.)。

上田：彼の間言語内で論理の矛盾はない。ただ、学生は todos ... no ... で全体否定文を作ろうとしたので間違えたのだ (La verdad es que no se trata de una comparación al revés. En la lógica del alumno, no hay contradicción. Lo que está mal es la sintaxis de la negación: todos ... no ..., con que quiso expresar la negación total.)。

このように、1つの言語を超えて現象を見ようとするときには、当然複数の視点が

必要になる。そこでもし、日本語の教育・研究者とスペイン語の教育・研究者が2つの言語の具体的な問題を討議すればお互いにとってさらに多くの洞察が得られるのではないだろうか。私はこれを行なったことがないので、まったくの希望的な観測にすぎないかも知れない。しかし、それでも具体的な研究と教育の方法やそこで得られた知見の交換は有意義であることは十分に予想される。そのためにも、先に述べた研究者のネットワーク作りの必要性を強調したい。

[注]

(1) P. Corder, *Error analysis and interlanguage*. p. 10. コーダーは非体系的な「ミステーク」を「言語運用」(performance)の間違いとし、体系的な「過渡期の言語運用」(transitional competence)の現れである「エラー」と区別している。スペイン語については Martín Perís [1988] “La enseñanza de idiomas modernos: de los contenidos a los procesos.” *Cable*. No.1, p.17. が参考になる。

(2) 日本の7歳の少年がアメリカで英語を習得する様子の記述を読んでも、やはり母国語の影響などないようである (Milon, J. P., [1974] “The Development of negation in English by a second language learner,” *TESOL Quartely*, 8, p.137-43)。

(3) わずかな例の1つとして、次の辞典があげられる。Soriano, Engracia [1976]. *Diccionario de dificultades de la composición española para japoneses*. Tokio: Universidad de las Esclavas del S.C. 日本語の例としては森田良行『誤用文の分析と研究：日本語学への提言』(明治書院)がある。

(4) たとえば, S. Fernández López, [1988] “Interlengua y análisis de errores: Un estudio evolutivo sobre producciones escritas,” *Cable* No. 1, p. 27-35.

(5) 1992 年度は花村哲夫・宮城昇『スペイン語作文の基礎』(白水社)を使った。例題は同書 p. 35 の Ejercicio 7 a) 2 である。S) が解答で、ネーティーブチェックも済ませてある。

I I 概観

Bibliografía Temática

音声・音韻

Fonética y Fonología

形態・語彙

Morfología y Lexicología

文法

Gramática

辞書

Diccionarios Comparados

言語教育・教授法

Enseñanza y Metodología

上田 博人

Hiroto UEDA

高垣 敏博

Toshihiro TAKAGAKI

福畠 教隆

Noritaka FUKUSHIMA

青山 文啓

Fumihito AOYAMA

大倉 美和子

Miwako OKURA

音声・音韻

上田 博人

はじめに

スペイン語の音声学と音韻論の分野は幅広く、それぞれの分野ですでに膨大な論文と著書が発表されている。最新の文献録 (Antonio Quilis, 1984) によれば以下ののような数字となり、総数は 2823 となる。

1) 記述的音声学・音韻論

総論	...	128
母音	...	121
子音	...	86
その他	...	469

2) 方言音声学

スペイン	...	361
ラテンアメリカ・その他	...	494

3) 音声史

...	401
-----	-----

もとより、これらすべてをここで取り上げることはできないので、とくに重要だと思われるものを論文ではなく主に著書を中心に紹介することにしよう。ただし、日西対照研究に限ってはまだ本格的な著書がないので、例外的に論文だけとなる。さらに詳しい書誌のためには次のものが参考になる。

- Huberman, Gisela B. 1973. *Mil obras de lingüística española e hispanoamericana: Un Ensayo de síntesis crítica*. Madrid: Playor.
- Frey, Herschel J. 1974. *Teaching Spanish: A Critical bibliographic Survey*. Massachusetts: Newbury House.
- Quilis, Antonio. 1984. *Bibliografía de fonética y fonología españolas*.

Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.

音声学

大きく調音音声学と音響音声学の研究に分かれる。調音音声学の分野では T. Navarro Tomás の著書は出版年は古いが現在でも価値を失っていない。スペイン語の音声の概観をつかむには必修の入門書と言える。最近のものとしてはアメリカ合衆国で発行されたものがあり、発音練習のテキストもかねているのが特徴である（発音教育の項）。

スペインの音響音声学の第一人者 Antonio Quilis によって、最近(1981)、総合的な専門書がまとめられた。なお、Quilis は共同で英語圏の学生のために発音指導の本も出版している（発音教育の項）。

Tomás Navarro, Tomás. 1918. *Manual de pronunciación española*. Madrid:

Consejo Superior de Investigaciones Científicas.

Antonio Quilis. 1973. *Álbum de fonética acústica*. Madrid: Consejo

Superior de Investigaciones Científicas.

-----, 1981. *Fonética Acústica de la lengua española*. Madrid: Gredos.

構造主義音韻論・音素論

構造主義言語学の枠組みでの音韻論には主に2つの流れがある。1つはヨーロッパ流の機能主義で、その代表は Alarcos Llorach(1971) である。音韻体系のパラダイムの中での個々の音素間の対立関係を重視し、対立のない場合は「中和」という概念を用いる。

たとえば, masa と pasa は [m] と [p] の違いで意味が変わるのでここに対立が認められるほど重要であるが, campo と canto の [m] と [n] の違いは単に次の子音に同化しただけであって重要ではない。そこで対立が中和したことを示す「原音素」/N/ を設定し, /kaNpo/, /kaNto/ のように表記される。

一方アメリカ合衆国の構造主義は音（異音）の分布に注目して、そこから音素を設定し、そのとき「中和」は認めない。Hara (1973) は後者の立場から半母音と中和という2つの問題点を論じている。

- Alarcos Llorach, Emilio. 1971. *Fonología española (4a edición aumentada y revisada)*. Madrid: Gredos.
- Hara, Makoto. 1973. *Semivocales y neutralización: Dos problemas de fonología española*. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.

生成音韻論

生成文法の標準理論の枠組みからスペイン語の音韻論の最も重要な問題点を論じたもので、大方は Chomsky and Halle (1968, *The Sound Pattern of English*) の方法に従っている。通時的にも共時的にもスペイン語の音韻論のなかでとくに興味深いのは二重母音化と口蓋音化である。音声的な同化作用などの形式化も明示的でわかりやすい。

また、生成音韻論では、動詞の活用、名詞の複数形、派生などの形態的な変化も音韻的な特徴と変換のルールで説明される。生成音韻論の特徴は、一見直接的な関係がないと思われる現象（たとえば、複数形とアクセントの位置）に統一的な説明を与えることであって、それが大きな魅力となっている。たとえば、papel「紙」の基底形を//papele//としておけば、複数形の形成は /-s/ だけでよいので、libro //libro// など、母音で終わる他の語と同じ規則で処理できる。しかもアクセントの配置も「終わりから2番目の音節」であるということで統一して説明できるという。これらの規則が適用されたあとで //papele// の場合は語末の /e/ が脱落するわけである。一方で、音韻規則の例外については語彙の構造（レキシコン）に何らかのマークをつけることで処理している。問題はこのような「つけ」をどの程度レキシコンにかぶせることができるか、ということにあらう。

以下にこの流派の代表的な著作をあげることにしよう。Contreras y Lleó (1982) は比較的新しい「自然生成音韻論」にそってスペイン語とカタラン語を論じている。

- Contreras, Heles y Lleó Conxita. 1982. *Aproximación a la fonología generativa: Principios teóricos y problemas*. Barcelona: Anagrama.
- Guitart, Jorge M. y Roy, J. 1980. *La estructura fónica de la lengua castellana*. Barcelona: Anagrama.
- James W. Harris. 1969. *Spanish Phonology*. Cambridge: M.I.T. Press.

William W. Cressey. 1978. *Spanish Phonology and Morphology: A Generative View*. Washington: Georgetown University Press.

歴史音韻論

Menéndez Pidal の著書(1958)はスペイン語の歴史音声学を学ぶための必携書である。Lapesa (1988)には新しい見解が多く盛り込まれている。なお、構造主義音韻論・音素論の項で取り上げた Alarcos (1971)はその第二部で、機能・構造主義の立場からスペイン語の音声史を再構築している。Macpherson の著書は出版年が記載されていないが、私の記憶では1970年代の中ごろではないかと思う。記述的な音声学と歴史的な変化を合わせた本で各項に参考文献もあり、イギリスの大学での教科書として書かれたもののようである。Ariza Viguera (1989) も教科書風によくまとまっている。また、Otero (1971)は生成音韻論に基づくロマンス語の史的音韻論である。

日本語で読めるものとしては Gili Gaya (1961)の翻訳(1984)と片岡(1982)がある。

Ariza Viguera, Manuel. 1989. *Manual de fonología histórica del español*. Madrid: Síntesis.

Gili Gaya, Samuel. 1961. *Nociones de gramática histórica española*.

日本語訳『スペイン語の歴史』(松野道男訳)東京:南雲堂 1984。

片岡孝三郎. 1982. 『ロマンス語歴史文法』東京:朝日出版社。

Lapesa, Rafael. 1988. *Historia de la lengua española*. (Novena edición) Madrid: Gredos.

Macpherson, I. R. *Spanish phonology: Descriptive and Historical*. Manchester University Press.

Menéndez Pidal, Ramón. 1958. *Manual de gramática histórica española*. (Décima edición) Madrid: Espasa-Calpe.

Otero, Carlos-Peregrín. 1971. *Evolución y revolución en romance*. Barcelona: Seix Barral.

地域・社会的なバリエーション

Resnick (1975) は広範な文献資料を使って音声の特徴と地域の関係をデータ行列とし、そこからラテンアメリカ・スペイン語の方言区画を試みている。Lincoln Canfield (1981) は各国ごとに音声の特徴を簡潔にまとめている。Perissinotto (1975) は対象をメキシコシティに限定し、音声のバリエーションを性別や社会層と関連づけて論じている。

- Lincoln Canfield, Delos. 1981. *Spanish pronunciation in the Americas*.
The University of Chicago Press.
- Perissinotto, Giorgio S. A. 1975. *Fonología del español hablado en la Ciudad de México*. México: El Colegio de México.
- Resnick, Melvyn C. 1975. *Phonological variants and dialect identification in Latin American Spanish*. The Hague: Mouton.

発音教育

音響音声学の項で取り上げた Quilis の著書(1969)は調音音声学、音響音声学、「対立」の概念に基づいた構造言語学の成果を十分に取り入れて、学問的な水準も高い。Dalbor (1969)も異音(代表として音素の具体的な実現形)と音素をきちんと区別して、前者の環境を明示的に示している。Sánchez y Matilla (1974)は個別の音声やイントネーションの簡単な説明と練習問題を掲げている。Merino (1965)は個々の文字の発音方法を英語やフランス語などと比較しながら教示している。

日本人のための発音教育に関しては原(1985)と乾(1990)がある。前者は発音教育の現場からの具体的な問題点を扱ったものであり、後者は日本人のためのスペイン語発音教育の簡単な教科書である。

- Dalbor, John B. 1969. *Spanish pronunciation: Theory and practice*.
New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Hadlich, Roger L., Holton, James S. and Montes, M. 1968. *A Drillbook of Spanish Pronunciation*. New York: Harper & Row.
- 原誠. 1985. 「日本人学生にスペイン語発音を指導する際の技術的問題点」
AVEC Report No. 1. 東京外国語大学視聴覚教育センター。
- 乾英一. 1990. 『スペイン語の発音』早稲田大学語学教育研究所, 語研教材
選書(37)

Merino, José. 1965. *La Pronunciación del español para extranjeros*.

Madrid: Alhambra.

Quilis, Antonio y Fernández, Joseph A. 1969. *Curso de fonética y fonología españolas para estudiantes angloamericanos*. Madrid:

Consejo Superior de Investigaciones Científicas.

Sánchez, Aquilino y Matilla, J. A. 1974. *Manual práctico de corrección fonética del español*. Madrid: Sociedad General Española de Librería.

対照音声学

対照言語学の1分野としての対照音声学も理論の枠組みによって大きく3つに分かれている。Delattre (1965) は純粹に音声学のレベルでイントネーション、母音、子音、統計を4つのヨーロッパの言語(英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語)で比較した著書である。アメリカの構造主義の立場からは Stockwell and Bowen (1965) が重要である。とくに2言語の音韻組織を比較した上での難易度の序列が興味深いので以下に採録しよう。

難易度	順位	英語	スペイン語	例
①	1	ゼロ	義務	有声子音音素の摩擦音形 [b]
	2	ゼロ	任意	[r], [x]
	3	任意	義務	d / d
②	4	義務	任意	/n/ の前の i / e
	5	義務	ゼロ	母音間の弾音 /t/
	6	任意	ゼロ	[æ]
③	7	任意	任意	母音の前の一連の子音
	8	義務	義務	sw + 母音

「ゼロ」は当該言語に存在しないもの、「義務」はかならず起こるもの、「任意」は存在するが、それが実現するかしないかは義務的ではないものである。たとえば1のケースではスペイン語の *haba* の *b* は [haβa] となって、かならず摩擦音となる。

そんなことは英語にはない（ゼロ）ので英語の話し手にとって、非常に困難となる。一方8では、sw の次には両言語で必ず（「義務」）母音がくるので、英語の話し手にとってまったく困難ではない。

Tamura (1979, p. 77) は、この Stockwell and Bowen の基準に沿って、日本人にとってのスペイン語発音の難易度と、訛り (acento) の強さの度合いを示している（日西対照音声学の項）。

Di Prieto (1971, 1974) は音素ではなくて、素性を用いた生成文法の枠組みを示している。彼によれば、「音素の基底にある相補分布や自由変異という概念は、音素の仮定を含めないでも、より大きな理論に組み入れられる。より重要なことは、各言語それぞれの特性に基づいた音素の概念は、言語の対照にはほとんど価値がないということである。共通の基盤から派生しない抽象的な単位を対照するよりも、共通な水準から出発することが必要である」（1974, p.182-183）。また音形論を名詞の複数形の形成などの文法論と関係づけている点も生成音韻論の特徴である。

Delattre, Pierre. 1965. *Comparing the phonetic features of English, French, German and Spanish*. Heidelberg.

Di Prieto, R. J. 1971. *Language structures in contrast*. 日本語訳『言語の対照研究』（小池生夫訳）大修館書店（1974）。

Stockwell, Robert P. and Bowen, J. D. 1965. *The Sounds of English and Spanish*. Chicago: University of Chicago Press.

日西対照音声学

日本語とスペイン語を比較するという観点からの研究や、その応用としての発音教育を論じたものは著書として出版されてはいないので、ここで紹介するのはすべて研究論文である。

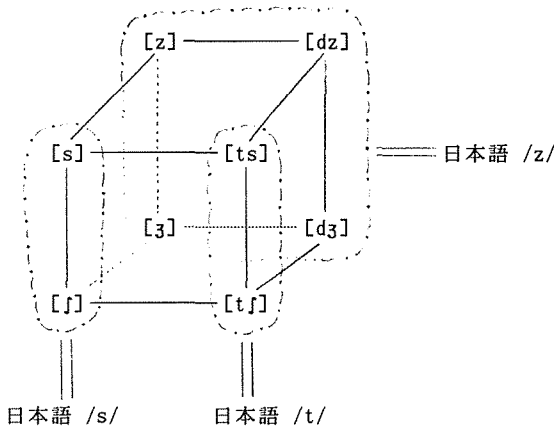
Hara (1964) は研究史の上で最初の本格的な論文でスペイン語と日本語の音声をアメリカ構造主義の音素論の立場から論じたものである。前半で日本語の音素体系が扱われ、後半で日本人にスペイン語を教える際の注意点が述べられている。母音の [u] と日本語の無声化、半母音の /y/ の口蓋化、/w/ の非円唇化を注意し、子音では類似する音素のペアの音声の特徴の違いを個別に説明している。たとえば、スペイン語の /b, d, g/ の摩擦の異音は重要であり、とくに /d/ の摩擦化が日本人にとって困難であるという。また、/g/ を [ŋ] のように発音する人は少ない、と報告している。

Ueda (1977, 1978) は日西語の音声を対照的に見る際に音声レベルの実現がどのようにに両言語において音素化されているかを音声の「場」を設定して説明している。たとえば日本人にとってスペイン語の /fV-/、/fuV-/ と /xuV-/ の区別が困難なことを説明し、三者がすべて日本語の /hwV-/ に対応するからであるとしている。すなわち、日本人にとって次のようなスペイン語のペアの区別が難しいということになる。

fe : fue
juego : fuego
juez : fez

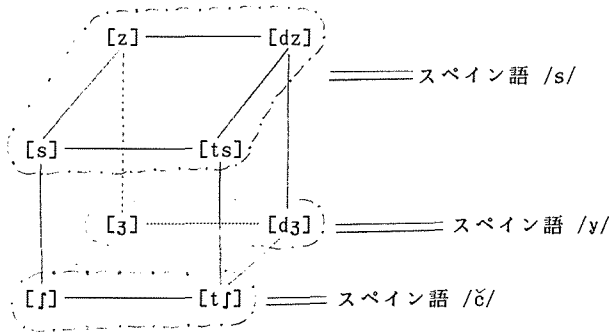
M. Tamura (1979) は /x/ と /f/ について、日本語の /h/ の摩擦異音が /u/ の前にだけ出現するので、スペイン語を学ぶ日本人の初学者は ‘frío’ と ‘julio’ を混同すると説明している。

次に、スペイン語話者にとって困難な日本語の音声の区別の例をあげよう。歯茎と硬口蓋で発音される摩擦音と破擦音には、[s], [z], [ts], [dz], [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] の8つがある。これを無声／有声，摩擦／破擦，歯茎／硬口蓋の3つの点で区別すると次のような配列となる。そして点線で囲んだところが日本語における音声のグルーピング（音素）である。



この図は日本人にとって、たとえば [z] と [dz] の区別が難しいことを示している。英語の cars と cards の区別は非常に困難である。

ところが、スペイン語の音声の構造化は、これとまったく異なっている。



歯茎音に関しては有声と無声の区別がスペイン語にないので、たとえばスペイン語話者にとっては日本語の「数」[kazu] と「糟」[kasu]の弁別が困難である。また、歯茎の破擦音は摩擦音と同じように聞こえてしまう（「糟」と「勝つ」）。日本語の「シ」を「チ」のように発音することもよく知られている。

Ueda の研究がいわば音声のパラディグマティックな体系の比較であったのに対して、大倉(1976)と Morimoto(1985) は音節を単位にしたシンタグマティックな構造の比較である。大倉はスペイン語国民のための発音教材の作成という実的な要請による研究である。そこでは個別の音の練習の他に、とくに日本語のリズム（モーラ）の習得、母音の長短（「オバサン」／「オーバーサン」）、促音（「カコ」／「カッコ」）、撥音（「アニ」／「タンイ」）の重要性を強調している。

Morimoto (1985) の研究の特徴は両言語の対応の種類を類似度の点から4つの段階に分類している点にある。

- 1) 類似度の第1段階：両言語の音素がほとんど同じバリエントを持つ場合。例：母音 /a/, /e/, /o/, 子音 /k/, /p/, /m/
- 2) 類似度の第2段階：対応する音素があるが、そのバリエントが異なる場合。例：母音 /u/（スペイン語は円唇化があるが日本語にはない）
- 3) 類似度の第3段階：対応する音素はないが、一部のバリエントが共通する場合。

例：日本語の /tj/ [tʃ] とスペイン語の /tʃ/ [tʃ]。

4) 類似度の第4段階：対応する音素も、共通するバリエントもない場合。例：日本語の /h/ とスペイン語の /x/。日本語の促音と撥音など。

倉重（1982）の論文は、母音の弱化に焦点を合わせ、日本語とスペイン語の各々の現象を音声学的に考察し、比較しようとするものである。日本語では地域により（奥羽南部から関東・北陸の大部分、北海道の中央都市、出雲、九州、琉球）、母音の無声化が起こるが、これとメキシコシティの母音の弱化、消失を比較し、その条件などを考察したものである。また、俗ラテン語時代から現代スペイン語の成立にかけての母音の消失について、歴史的な観点からも取り扱っている。

最近では川上（1989）がスペイン語の音声を日本語と対照させながら詳しく説明し、内容も説得的でわかりやすい。次は [tʃ] の発音の部分の引用である。

ch chico, noche, muchacho, chulo

「チャ」行でよい人もいますが、最近の、とくに女性の中に、「チャ」行を発音するときに舌の先の方が歯のあたりにくっつくだけの人がわりと目立ちます。記号で書けば [tsʲ] といったところで、「ツァ」とでも表したくなるような音です。スペイン語の ch [tʃ] を発音するときは、なるべく（…）舌を上を、つまり歯茎から硬口蓋にかけてベタリくっつけて「チャ」行を言うようにします。

川上氏には別に西和辞典の発音表記を比較・考察した論文（1990）がある。

また、安富（1992）は音響音声学の手法を用いて両言語の母音の持続時間を比較したものである。

最後に、森本（1984, 1988）の論文は残念ながら今回の紹介のために参照することができなかったことを付記しておきたい。

Hara, Makoto. 1964. "Actualidad y orientación para la enseñanza de español en Japón", *Presente y futuro de la lengua española*, II, pp. 356-372.

川上茂信. 1989. *Método práctico de pronunciación española*. 私家版（日本語）.

-----, 1990. 「西和辞典の発音表記：新しい2冊の辞典をめぐる」東京外国語大学視聴覚教育センター年報. No. 5, pp. 9-23.

- 倉重範子. 1982. 「スペイン語と日本語の母音の比較研究」『宮城昇教授還暦記念論文集』東京外国語大学, pp. 191-209.
- Morimoto, Yoshiharu. 1984. "El acento español y el acento japonés", *Sophia Lingüística*, 16, pp. 10-17.
- Morimoto, Yoshiharu. 1985. "El sistema fonológico español y el sistema fonológico japonés en contraste: Comparación a base del silabario japonés", *Actas del Primer Congreso de Histanistas de Asia*. Asociación Asiática de Hispanistas, Seúl, Corea, pp. 187-199.
- Morimoto, Yoshiharu. 1985. "Las cinco vocales castellanas y japonesas: Un análisis espectrográfico", *Sophia Lingüística*, 23/24, pp. 181-191.
- 大倉美和子. 1976. 「日本語・スペイン語音声の比較」『日本語教育のための日本語と主要外国語との音声の対照研究』大阪外国語大学留学生別科。
- Tamura, Miyoko. 1979. "Un estudio de los sonidos del español y el japonés", 長崎外国語短期大学論叢。
- Ueda, Hiroto. 1977. "Estudio contrastivo de los sonidos españoles y japoneses (1): vocales y semivocales", *Lexicon* (Tokyo: Iwasaki Linguistic Circle), 6, pp. 29-46.
- Ueda, Hiroto. 1978. "Estudio contrastivo de los sonidos españoles y japoneses (2): consonantes", *Lexicon* (Tokyo: Iwasaki Linguistic Circle), 7, pp. 16-37.
- 安富雄平. 1992. 「スペイン語の母音の持続時間：日本語の長音との比較において」『ロマンス語研究』（日本ロマンス語学会）25, pp. 81-86.

おわりに

以上でスペイン語の音声・音韻についての簡単な文献紹介を終えるが、あまりに専門的な著書や論文は割愛した。また紹介の仕方も「日西対照研究」の趣旨にそうように、とくに発音教育と対照研究の項では、具体的な例を挙げて説明した。

文献を概観して二つ気づいたことがある。一つは、方言研究ではラテンアメリカのスペイン語の資料は豊富にあるのだが、それが発音教育と結びついていないというこ

II 概観

とである。多くの論文はスペインのスペイン語を主にしているが、人口の面でも面積の面でも、また日本との関係の点からも、これからはラテンアメリカスペイン語の重要性が高まると思われる。考慮すべき点であろう。

また、一般にスペイン語の発音が日本人にとってやさしいと思われているためか、日本人によるスペイン語音声教育の研究が少ないという点も指摘したい。これは、出口厚実氏による網羅的な文献録「国内の雑誌に発表されたスペイン語学に関する文献」（『大阪外国語大学論集』，1，1989，pp.119-143）によって確かめられる。音声・音韻の理論の発展だけでなく、教室での実践の記録や教育の工夫の発表が望まれる。

最後に、本稿を準備するのに出口厚実氏、大倉美和子氏、高垣敏博氏、乾英一氏、川上茂信氏に資料のことでお世話になった。ここに感謝の意を表したい。

形態・語義

高垣 敏博

本節で扱う分野は表題の形態論、語彙論の他に意味論や談話に関する領域である。文中における語と語の関係を分析する文法論(次章)と違って、独立した単位としての語の形態や意味、機能などについて論じた文献を中心に概観する。ここでも、日西語対照研究の比重は小さいので、まず各分野のスペイン語研究について紹介し、次いで日西語を対照したものがあれば言及することにする。対象は現代語の分析に限ることとし、スペイン語史に関する研究や方言的バリエーションなどについて論じたものについては扱わない。文献は出口「国内の雑誌等に発表されたスペイン語学に関する文献(その1, その2)」『大阪外国語大学論集』第1号, 第2号(ともに1989年)に負うところが多い。

[1]形態論

形態論を「屈折」と「派生」に大別し、それぞれ[1.1][1.2]で扱う。派生はさらに接尾辞化と複合語化のプロセスに分かれる。[1.3]では形態論を理論的に論じた研究を紹介する。

[1.1]屈折

屈折でまず問題になるのは名詞の性や数であろう。性については酒井(1984a, 1984b, 1984c, 1986, 1988)や小野(1982)が動植物に話題を絞って扱っている。Arce(1978)と上田(1985)はそれぞれ一般論あるいは語形成論の立場から論じている。名詞の数は坂東(1982, 1985, 1986a, 1986b)に一連の論考があり、出口(1974b)は複数形成を扱っている。

動詞の活用や内部構造は屈折のもう一つの重要なテーマである。これに関しては出口(1971, 1974a, 1979)、上田(1982, 1984, 1987)や Benevides(1981)などの文献がある。

Arce, Germán M. (1978) "El género en castellano", *Lingüística Hispánica*, 1, pp. 3-25.

Benavides, Juan M. (1981) "Apuntes sobre morfología verbal"
『語学研究』 28, pp. 1-14.

坂東省次(1982)「現代スペイン語における名詞の数に関する一考察—対立と中和」『京都外国語大学研究論叢』23, pp. 160-184.

- 坂東省次(1985) “Observaciones preliminares acerca del número”
『京都外国語大学研究論叢』26, pp. 200-227.
- 坂東省次(1986a) “Delimitación de oposición y neutralización del número” 『京都外国語大学研究論叢』27, pp. 285-309.
- 坂東省次(1986b) “Una consideración semántica sobre la categoría de número en español (1)”, *Hispánica*, 30, pp.1-17.
- 出口厚実(1971)「スペイン語動詞屈折語尾の構造」『大阪外国語大学学報』23, pp.35-60
- 出口厚実(1974a)「スペイン語動詞 paradigma の形態音韻論的側面」
Hispánica, 18, pp. 51-68.
- 出口厚実(1974b)「スペイン語における複数形成について」『大阪外国語大学学報』30, pp. 1-14.
- 出口厚実(1979)「動詞の内部構造と付接嵌入について」*Estudios Hispánicos*, 6, pp. 19-32.
- 小野茂(1982)「西語動物名詞の性の決定に関して」 *Hispánica*, 26, pp. 77-88.
- 酒井優子(1984a) “Moción de género: el género del español y del portugués en el léxico de la planta”, *Lingüística Hispánica*, 7, pp. 93-112.
- 酒井優子(1984b)「スペイン語洗礼名の省略形に見られる性の中性化」*Sophia Linguistica*, 16, pp. 99-108.
- 酒井優子(1984c)「性決定の要因—植物語彙におけるラテン語からスペイン語への性転換」*Hispánica*, 28, pp. 81-99.
- 酒井優子(1986)「性決定の要因(3) —植物語彙におけるスペイン語とイタリア語の性」 *Sophia Linguistica*, 20, pp. 411-420.
- 酒井優子(1988)「性決定の要因(4) —植物語彙におけるスペイン語とイタリア語の性」 *Sophia Linguistica*, 23, pp. 181-191.
- 上田博人(1982)「西語動詞活用 of 7 基本形」『宮城昇教授還暦記念論文集』pp. 377-392.
- 上田博人(1984)「不規則動詞の形態論」 *Hispánica*, 28, pp. 128-143.
- 上田博人(1985)「スペイン語語形成論(4)—文法性について(1)」『東京外国語大学論集』35, pp. 47-63.
- 上田博人(1987)「スペイン語繫辞状動詞の分類」『スペイン語学研究』3, pp. 103-118.

[1.2]派生

接尾辞を扱った研究には森本(1992)の -ante(-ente, -iente)、上田(1979b)の -ble、上田(1987)の -mente やその他に上田(1979a) などがある。酒井(1986a)(1986b)(1987a)(1987b)では -eño, -ense, -no, -ero, -ario などの地名形容詞の接尾辞が分析されている。人名の接尾辞では高垣(1988)がある。広康(1992)は英語から借用された語の分析を行っている。また、三好(1978)(1981)や伊藤(1982)では縮小辞の機能について論じられている。動詞から派生した派生名詞については上田(1984)、高垣(1985)(1987)などがある。

また、複合語については西川(1985)、高垣(1984)(1991)で詳しく論じられている。高垣(1992)は日西対照の立場から両語の派生接辞と複合語形成について概観している。

広康好美(1992)「派生による名詞アングリシスモの形成と複数形」『ロマンス語研究』25, pp. 3-11.

伊藤文雄(1982)「スペイン語の示小接尾辞 (-ito, -illo)について」『宮城昇教授還暦記念論文集』pp.119-136.

森本裕子(1992)「スペイン語における-ANTE(-ENTE, -IENTE)形の意味論分析: Cognitive grammarの視点から」『ロマンス語研究』25, pp.49-55.

三好準之助(1978) “Sobre algunas funciones del sufijo diminutivo español”, *Lingüística Hispánica*, 1, pp. 143-160.

三好準之助(1981)「示小辞の基本的意味機能と文脈的意味分類の一基準」*Hispánica*, 25, pp. 31-52.

西川喬(1985) “Compuestos de verbo más sustantivo en español”, *Lingüística Hispánica*, 8, pp. 43-68.

酒井優子(1986a)「スペイン語の地名形容詞: -eño を伴う派生」『文京女子短期大学英語英文科紀要』19, pp. 145-154.

酒井優子(1986b) 「スペイン語の地名形容詞: -ense を伴う派生」*Hispánica*, 30, pp.68-83.

酒井優子(1987a)「スペイン語の地名形容詞の派生語尾に関する形態音韻論的考察:-母音+no」『スペイン語学研究』2, pp. 45-64.

酒井優子(1987b)「スペイン語の地名形容詞の派生語尾に関する形態音韻論的考察:-ero と-ario」*Hispánica*, 31, PP. 71-85.

高垣敏博(1984)「現代スペイン語における複合語の構成」『京都産業大学論集』13-3, pp. 93-137.

- 高垣敏博(1985) “Los sustantivos verbales y la transitividad”,
Lingüística Hispánica, 8, pp. 69-82.
- 高垣敏博(1987)「スペイン語の名詞化表現とその文法関係」『京都産業大学論
集』16-3, pp. 79-101.
- 高垣敏博(1988)「スペイン語における人名の愛称形について」『世界口承文芸
研究』9, pp. 805-823. 大阪外国語大学.
- 高垣敏博(1991)「スペイン語の『動詞＋名詞』型複合語について」『京都産業
大学国際言語科学研究所所報』12, pp. 134-152.
- 高垣敏博(1992)「語形成の西日対照」『日本語とスペイン語との対照言語学的
研究－中間報告』国立国語研究所, pp. 19-40.
- 上田博人(1979a)「語形成における制限付きの規則性－若干のスペイン語接尾
辞に関して」『東京外国語大学論集』29, pp. 1-17.
- 上田博人(1979b)「派生語と辞書－スペイン語接尾辞 -ble の意味と記述」
Léxico, 8, pp. 16-26.
- 上田博人(1984) “Nombres de acción en español”, Lingüística
Hispánica, 7, pp. 135-150.
- 上田博人(1987)「接尾辞 -mente のつく副詞と con + 抽象名詞」『スペイン
語学研究』2, pp. 81-86.

[1.3]形態論

形態素など、語を構成する単位の定義、設定など形態論の基本的問題に取り組んで
いるものとして原(1982)や上田(1983a)(1983b)(1984)などがある。最近出版されたス
페인語形態論の2冊の概説書、Lang, M.F.(1990) *Spanish word Formation. Productive Derivational Morphology in the Modern Lexis*. Routledge; Varela,
Soledad(1993) *La formación de palabras*. Gramática del español. Taurus
Universitaria.は基本的文献として有益である。

- 原 誠(1982)「スペイン語形態論」『宮城昇教授還暦記念論文集』pp. 81-100.
- 上野勝広(1992)「現代スペイン語の形態的『逸脱』に関する一考察」『明治学院
論叢』494, pp. 71-84.
- 上田博人(1983a)「スペイン語語形成論(1)－記述単位の検討」『スペイン語学
研究』1, pp. 79-95.
- 上田博人(1983b)「スペイン語語形成論(2)－基体の設立における技術的な問題
点」Hispánica, 27, pp. 87-100.

上田博人(1984)「スペイン語語形成論(3) - 交替形について」『東京外国語大学論集』 34, pp. 51-66.

[2]各品詞の形態と機能

文を構成する品詞は他の品詞との関係でその意味をもつので、そのような統語機能から切り離して各品詞の働きを規定することはできないが、ここではできるだけ独立性の高い機能語を中心に見ていこう。

まず、冠詞では佐藤が一連の論文でさまざまな問題を扱っていて重要である。また、Arce(1983)は冠詞を一般的に、Martinell(1988)は中性定冠詞を考察している。定冠詞の代名詞化用法については江藤(1983)が、定冠詞+queの用法については高橋(1978a)(1979b)が詳しい。堀田(1989)はスペイン語の冠詞と日本語の助詞「は／が」とを対照させて論じている。

接続詞については、有吉(1986)が sin embargoについて、深沢(1986)が porqueについて、また中岡(1984)も porque と como について、同じく中岡(1986)が puesto que, ya que, pues, que などの用法について詳しい分析をしている。

前置詞では de に関する研究が最も多く、近藤(1975)(1977)、野田(1982)、高橋(1980a)、吾郷(1988)、高垣(1990)などが挙げられる。その他、高橋(1972)(1979a)では a や en、野田(1979)(1987)では con や por が、Bosque(1980)では否定の文脈で sin が扱われている。前置詞と名詞や動詞など他の品詞との結びつきおよび用法については高橋「スペイン語前置詞の活用」(1)～(13)が有益である。

指示詞については三好(1979)(1985a)(1985b)や江澤(1991)で日本語との対照研究がなされている。所有詞では有吉(1975b)が所有形容詞と所有代名詞を扱っている。

人称代名詞は次章の文法の領域に属するテーマが多いと考えられるが、ここで扱うことにする。主格代名詞については出口(1968)、voseo と tuteoについては堀田(1976)、また usted に関しては高橋(1976)、leísmo / laísmo / loísmo では浦和(1976)がある。弱形代名詞の性質および連続の現象については研究が多く、出口(1972)、(1985)、有吉(1975a)、宮本(1975)、堀田(1982)(1984)、渡辺(1982)(1983)、山下(1986)などが詳しい。

動詞では接続法過去形の -ra形と -se形の区分について論じた中岡(1980)と parecer 構文を扱った江澤(1987)を引用しておく。また、名詞では集合名詞を扱った坂東(1983)、不定詞の名詞的用法についての高垣(1986)、その他として出口(1969)、坂東(1987)などがある。

Arce, German (1983) "Valor y uso del artículo en español",

- Lingüística Hispánica 6, pp. 27-42.
- 有吉俊二(1975a)「現代スペイン語における弱形代名詞に関する一考察—変
形文法におけるそれらの sources と status の位置付け」
『熊本短大論集』51, pp. 19-70.
- 有吉俊二(1975b)「現代スペイン語における所有形容詞および所有代名詞に
ついて」『熊本短大論集』50, 79-116.
- 有吉俊二(1986) “On the position of the adversative conjunctive adjunct
《sin embargo》”, Lingüística Hispánica, 9, pp. 9-18.
- 坂東省次(1983)「スペイン語の集合名詞」『京都外国語大学研究論叢』24,
pp. 203-219.
- 坂東省次(1987) “Sobre los nombres objetos físicos compuestos”
『京都外国語大学研究論叢』30, pp. 231-242.
- Bosque, Ignacio (1980) “La preposición SIN”, Lingüística
Hispánica, 3, pp. 71-85.
- 出口厚実(1968)「主語人称代名詞の使用と省略について—動詞語尾との関連
を中心とする頻度調査」Estudios Hispánicos, 1, pp. 104-118.
- 出口厚実(1969)「イスパニア語不活動体名詞における語尾 -a / -o の対立と
意味」『大阪外国語大学学報』21, pp. 77-94.
- 出口厚実(1972)「スペイン語人称目的格と代名詞化」『大阪外国語大学学報』
26, pp. 1-18.
- 出口厚実(1985) “Proforma y variable lógica”, Lingüística Hispánica,
8, pp. 1-12.
- 江藤一郎(1983)「スペイン語のいわゆる『定冠詞の代名詞的用法』について」
『外国語教育(天理大学)』9, pp. 46-60.
- 江澤照美(1987) “El verbo parecer y su construcción”, Lingüística
Hispánica, 10, pp. 39-57.
- 江澤照美(1991) “Los demostrativos españoles y japoneses---estudio
contrastivo”, Lingüística Hispánica, 14, pp. 49-67.
- 深沢光代(1986)「porque による原因の従位接続」『清泉女子大学紀要』34,
pp. 49-61.
- 堀田英夫(1976)「VOSEO と TUTEO」Hispánica, 20, pp. 52-68.
- 堀田英夫(1982)「スペイン語代名詞の重複構文について」『宮城昇教授還暦記
念論文集』pp. 101-118.
- 堀田英夫(1984) “La construcción redundante del pronombre español y el

- foco”『愛知県立大学外国語学部紀要言語・文学編』17-2,
pp. 271-284.
- 堀田英夫(1989) “Las partículas japonesas GA / WA y los artículos
españoles”『愛知県立大学外国語学部紀要』21, pp.197-214.
- 近藤豊(1975)「前置詞 de に就いて一動词语種との関係に立った予備調査」
『天理大学学報告』99, pp. 29-45.
- 近藤豊(1977)「前置詞 de と分離・回復・知覚確認動詞について」
『天理大学学報告』106, pp. 9-24.
- Martinell G., Emma (1988) “El uso del artículo neutro lo en español y
de sus equivalentes en inglés”, *Lingüística Hispánica*,
11, pp. 61-86.
- 宮本正美(1975)「スペイン語余剰代名詞構造」『関西外国語大学研究論集』22,
pp.225- 261.
- 三好準之助(1979) “ESTE-ESE en una deixis especial”, *Lingüística
Hispánica*, 2, pp. 107-122.
- 三好準之助(1985a) 「指示詞の指示方法: 日西両語の場合」『京都産業
大学国際言語科学研究所所報』7-1, pp. 135-153.
- 三好準之助(1985b)「スペイン語の指示詞と人称」*Hispánica*, 29, pp. 17-30.
- 中岡省治(1980)「接続法過去 -se形と -ra形についての一考察」*Estudios
Hispánicos*, 7, pp. 43-58.
- 中岡省治(1984)「副詞的従属節の位置に関する一考察—理由節を導く porque と
como の機能を中心として」『大阪外国語大学学報』64,
pp. 229-250.
- 中岡省治(1986) “Ensayo sobre el uso y diferenciación de las construc-
ciones causales españoles: <puesto que>, <ya que>,
<pues> y <que>”, *Lingüística Hispánica*, 9, pp. 115-154.
- 野田忠行(1979)「関係語論—前置詞 conと動詞との関係」『駒沢大学外国語学部
論集』7, pp. 99-111.
- 野田忠行(1982)「関係語論—前置詞 de と動詞との関係」『駒沢大学外国語学部
論集』15, pp. 125-154.
- 野田忠行(1987)「関係語論—前置詞 porと動詞との関係」『駒沢大学外国語学部
論集』26, pp. 21-48.
- Romero, Robert (1973) “A note on Perlmutter’s global constraint on
Spanish clitics”, 『言語研究』63, pp. 44-73.

- 佐藤玖美子(1973a)「スペイン語における照応の定冠詞」『駒沢大学外国語学部紀要』2, pp.45-56.
- 佐藤玖美子(1973b)「スペイン語の不定冠詞複数形について」『駒沢大学外国語学部論集』 2, pp. 103-117.
- 佐藤玖美子(1973c)「身体の部分を表す名詞と冠詞について」Hispanica, 17, pp. 1-21.
- 佐藤玖美子(1974)「スペイン語に於ける関係文と冠詞について」『駒沢大学外国語学部紀要』3, pp. 61-81.
- 佐藤玖美子(1975)「スペイン語に於ける名詞の指標としての冠詞について」『駒沢大学外国語学部紀要』 4, pp. 65-81.
- 佐藤玖美子(1979)「スペイン語の冠詞と主格について - 1」『駒沢大学外国語学部紀要』8, pp. 119-138.
- 佐藤玖美子(1982a)「スペイン語における一般的に言及された名詞と冠詞について - 主格における考察」『駒沢大学外国語学部紀要』10, pp. 249-266.
- 佐藤玖美子(1982b)「Contexto と冠詞について - 主格における考察」『宮城昇教授還暦記念論文集』 pp. 241-260.
- 高垣敏博(1986)“Sobre el infinitivo nominal del tipo: Se oía el repicar de las campanas”, Lingüística Hispánica, 9, pp. 179-190.
- 高垣敏博(1990)「スペイン語前置詞句の連体機能について - スペイン語の “de” と日本語の『の』について」『京都産業大学論集』 19-3, pp. 158-197.
- 高橋覺二(1972)「前置詞 a と直接補語」『アカデミア 文学・語学編』19, pp.93-110.
- 高橋覺二(1976)「Usted について」『アカデミア 文学・語学編』23, pp. 233-256.
- 高橋覺二(1978a)「/ 定冠詞 + QUE / 構文(1)」Hispanica, 22, pp.103-117.
- 高橋覺二(1978b)「スペイン語前置詞の活用(1)」『アカデミア 文学・語学編』25, pp. 337-353.
- 高橋覺二(1979a)“Oposición facultativa de ‘a’ y ‘en’”, Lingüística Hispánica, 2, pp. 145-163.
- 高橋覺二(1979b)「/ 定冠詞 + QUE / 構文(2)」Hispanica, 23, pp.100-116.
- 高橋覺二(1979c)「スペイン語前置詞の活用(2)」『アカデミア 文学・語学編』26, pp. 243-269.

- 高橋覺二(1979d)「スペイン語前置詞の活用(3)」『アカデミア 文学・語学編』27, pp. 167-194.
- 高橋覺二(1980a)“¿Cambiar con ‘de’ y cambiar sin ‘de’, oposición facultativa?”, *Voz de Iberoamérica*, 9, PP. 19-22.
- 高橋覺二(1980b)「スペイン語前置詞の活用(4)」『アカデミア 文学・語学編』28, pp. 163-191.
- 高橋覺二(1980c)「スペイン語前置詞の活用(5)」『アカデミア 文学・語学編』29, pp. 139-166.
- 高橋覺二(1981a)「スペイン語前置詞の活用(6)」『アカデミア 文学・語学編』30, pp. 195-222.
- 高橋覺二(1981b)「スペイン語前置詞の活用(7)」『アカデミア 文学・語学編』31, pp. 125-153.
- 高橋覺二(1982a)「スペイン語前置詞の活用(8)」『アカデミア 文学・語学編』33, pp. 47-82.
- 高橋覺二(1982b)「関係詞と接続詞 : como の場合」『アカデミア 文学・語学編』32, pp. 69-96.
- 高橋覺二(1983)「スペイン語前置詞の活用(9)」『アカデミア 文学・語学編』34, pp. 35-62.
- 高橋覺二(1984)「スペイン語前置詞の活用(10)」『アカデミア 文学・語学編』36, pp. 41-66.
- 高橋覺二(1985a)「スペイン語前置詞の活用(11)」『アカデミア 文学・語学編』38, pp. 33-60.
- 高橋覺二(1985b)「スペイン語前置詞の活用(12)」『アカデミア 文学・語学編』39, pp. 19-40.
- 高橋覺二(1986)「スペイン語前置詞の活用(13)」『アカデミア 文学・語学編』40, pp. 25-40.
- 江藤一郎(1986)「スペイン語の存在を表す動詞 ‘hay’ と ‘estar’について」『天理大学学報』152, pp. 21-39.
- 浦和幹男(1974)「Leísmo, laísmo, loísmo に関する一考察」『語学研究』3, pp. 1-51.
- 渡辺節子(1982)「対格・与格における揺れ — Luis Romero と Dolores Medio の場合」『宮城昇教授還暦記念論文集』 pp. 445-458.
- 渡辺節子(1983)「代名詞連続と形式の揺れ」*Hispanica*, 27, pp. 101-116.
- 吾郷成子(1988)「スペイン語の前置詞 a/de と日本語の格助詞『に』『から』

『の』』『福岡 YMCA 日本語教育論文集』 2, pp. 1-26.

山下好孝(1986)「弱形代名詞重複構文について」 *Hispanica*, 30, pp. 111-122.

[3]語彙論・意味論

[3.1]理論・総論

原(1982)(1983)は意味論を理論的に考察している。意味論の個別の問題を扱ったものには上田(1988)の同義語、佐藤(1988)の類義語、上野(1991)の二重語、宮本(1978)の新語や広康(1992)[1.2 参照]の外来語などの研究がある。

酒井(1982)(1983), 酒井・大森(1985)(1987)では海外で次々出版されるスペイン語の意味論関係の研究を簡潔に紹介している。また、高橋(1986a)(1986b)では教育の視点から基本語彙を考えている。

原 誠(1982)「意味について(上)」『東京外国語大学論集』32, pp. 49-69.

原 誠(1983)「意味について(下)」『東京外国語大学論集』33, pp. 12-32.

宮本博司(1978)「現代スペイン語における新語に関する一考察」『語学研究』
14, pp.63-73.

酒井優子(1982)「スペイン語語彙論など」『海外言語学情報』1, pp.309-320.

酒井優子(1983)「スペイン語語彙論」『海外言語学情報』2, pp.197-205.

酒井優子・大森洋子(1985)「スペイン語意味論」『海外言語学情報』3,
pp.209-217.

酒井優子・大森洋子(1987)「スペイン語意味論・語用論」『海外言語学情報』4,
pp.236-243.

佐藤邦彦(1988)「類義語と意味理論」『言語・文化研究』6, 67-76.

高橋覺二(1986a)「スペイン語教育基本語彙について」『アカデミア 文学・語
学編』41, pp. 89-127.

高橋覺二(1986b)「スペイン語教育基本語彙と語学力の関係」『アカデミア
文学・語学編』43, pp. 87-119.

上田博人(1985)“Un ensayo sobre la constitución cuantitativa del léxico
español”, *Lingüística Hispánica*, 8, pp. 83-102.

上田博人(1988)“Formas homonímicas en español”, *Léxico*, 17, pp.22-33.

上野勝広(1991)「スペイン語における<二重語>—ラテン借用語(cultismo)の意
味機能を中心に」『明治学院論叢』473, pp. 39-50.

[3.2]語・句の意味

この節では個々の語や句の意味、あるいは相互の意味的差異について論じた研究を紹介する。類義の差に注目した論文に高橋(1981)の *llegar* と *venir*, 高橋(1982)の *volver* と *regresar*, 岸(1986)の情愛を表す動詞、山下(1987), 寺崎(1988)の存在を表す動詞、*hacerse* / *ponerse* / *volverse* / *convertirse*のような「変化動詞」を扱った近藤(1979a)(1979b)(1979c)(1981a)(1981b)などの研究がある。太田(1991)は談話の観点から *ir* と *venir* の意味について論じている。酒井(1981)(1983)は色彩語や人間と動物を表す語など特定の意味の場の語彙を扱っている。また連語のレベルでは、高橋(1975)(1977)は *ir a* + 不定詞や *acabar de* + 不定詞、中岡(1977)(1978)はヘルンディオなどの迂言用法、小池(1988)は動詞と前置詞の連結に焦点を当てている。

- 岸大介 (1986) 「『情愛』をあらわすスペイン語の動詞, *adorar*, *amar*, *apreciar*, *estimar*, *querer* の意味について」『語学研究(神奈川大学外国語研究センター)』9, pp. 69-95.
- 小池和良(1988) “*Verbos preposicionales españoles y su alcance*” 『スペイン語学研究』3, pp. 459-62.
- 近藤豊(1979a) 「イスパニア語の‘変化動詞’についての予備的調査報告—*hacerse* + 名詞形容詞・副詞」『天理大学学报』121, pp. 43-59.
- 近藤豊(1979b) 「イスパニア語の動詞 *volverse* による変化表現について(前)」『外国語教育(天理大学)』6, pp. 57-66.
- 近藤豊(1979c) 「イスパニア語の動詞 *volverse* による変化表現について(後)」『外国語教育(天理大学)』7, pp. 49-57.
- 近藤豊(1981a) 「イスパニア語の‘変化動詞’についての予備的調査報告—*ponerse* + 名詞形容詞・副詞」『天理大学学报』123, pp. 125-147.
- 近藤豊(1981b) 「変化動詞 *convertir(se)* の意味と用法 — <もの> 主体表現をめぐる」『天理大学学报』129, pp. 113-128.
- 中岡省治(1977) 「進行形『*estar* + *gerundio*』に関する考察(1)」*Estudios Hispánicos*, 4, pp.1-14.
- 中岡省治(1978) “*Notas sobre las perífrasis en gerundio de sentido durativo*”, *Lingüística Hispánica*, 1, pp. 161-191.
- 荻原寛 (1986) 「いわゆる中性定冠詞 *lo* の語彙論における位置」『語学研究(神奈川大学外国語研究センター)』9, pp. 29-68.
- 太田亨 (1991) 「*ir* / *venir* の用法について—日本語との比較において」『スペイン語学研究』6, pp. 57-70.
- 酒井優子(1981) “*Expresiones de color en español*” *Sophia Linguistica*,

8, pp. 85-93.

酒井優子(1983)「スペイン語における類推に基づく人間と動物の意味関係について」*Hispanica*, 27, pp. 70-86.

高橋覺二(1975) “sobre la consecuencia “ir a + infinitivo””, *Hispanica*, 9, 58-69.

高橋覺二(1977)「ACABAR DE + INFINITIVO について」『アカデミア 文学・語学編』24. 191-215.

高橋覺二(1981) “Diferencias semánticas de ‘llegar’ y ‘venir’”, *Lingüística Hispánica*, 4, pp. 119-134.

高橋覺二(1982)「Volver と regresar の差」『宮城昇教授還暦記念論文集』pp. 321-334.

寺崎英樹(1988)「SER / ESTAR の意味と機能」『スペイン語学研究』 3, pp. 85-102.

山下好孝(1987)「Hay, estar, ser を使った存在文について」*Hispanica*, 31, pp. 176-190.

[3.3]語彙集

ここではコンピュータを利用して特定の出典から作成されたコンコーダンスや語彙集を紹介する。演劇を対象にした上田(1984)(1985)(1987a)(1987b)の豊富なデータやマドリードの口語スペイン語を扱った宮本(1986)(1987)などが特筆できる。また、宮本ほか(1981)(1984)にはスペインの俗語の生きた情報が盛り込まれている。

宮本正美・Casado Velarde 他 (1981)「半島スペイン語における隠語語彙に関する覚書(1)」『関西外国語大学研究論集』34, pp. 83-98.

宮本正美・Casado Velarde 他 (1984) “Slang used by present-day Spanish young people (2)”『関西外国語大学研究論集』39, pp. 235-243.

宮本正美(1986) “Lista de las palabras que salen en《El habla de la Ciudad de Madrid》(1)”, *Lingüística Hispánica*, 9, pp. 59-94.

宮本正美(1987) “Lista de las palabras que salen en《El habla de la Ciudad de Madrid》(2)”, *Lingüística Hispánica*, 10, pp. 77-120.

上田博人(1984)「スペイン語演劇作品の言語学的分析(1) テキストおよび語索

引」 東京外国語大学.

上田博人(1985)「スペイン語演劇作品の言語学的分析(2) 機能語のコンコーダ
ンス」 東京外国語大学.

上田博人(1987a) *Análisis lingüístico de obras teatrales españolas*
(III): *Textos e índice de palabras*. Facultad de Artes y
Ciencias. Univ. de Tokio

上田博人(1987b) 「資料集: スペイン語の語彙の頻度と広がり」東京外国語
大学.

[3.4]日西対照

語彙の分野で日本語とスペイン語を対照させた研究に大倉(1990)や興津(1972)(1979)
(1980a)(1980b)がある。後者には両語の類似点や食い違いについての詳細な観察が見
られる。上田(1982)は日西語の呼称を比較している。

大倉美和子(1990)「日本語とスペイン語の語彙の対照」『講座日本語と日本語教
育 7:日本語の語彙・意味(下)』 pp. 27-53. 明治書院.

興津憲作(1972)「イスパニア語と日本語の比較研究(4) - 対応語の欠如・格違い・
品詞違い・異種概念の不当同居」『サピエンチア』6, pp. 81-98.

興津憲作(1979)「イスパニア語と日本語の比較研究(5) - 語形が似ていて紛らわ
しい語」『サピエンチア(英知大学)』13, pp. 97-120.

興津憲作(1980a)「イスパニア語と日本語の比較研究(6) - 語形は違うが内容が
似ていて使い分けが問題になる語」『サピエンチア』14,
pp. 113-143.

興津憲作(1980b)「イスパニア語と日本語の比較研究(7) - 西語が日本語から細
分化していてその区別が問題になる語」『サピエンチア』15,
pp. 107-121.

土屋博嗣(1983)「形容詞連用形のスペイン語訳に関して」『亜細亜大学教養部紀
要』28, pp. 118-135.

上田博人(1982)「日西語の呼称の比較 - 話者、聞き手、関係について」『東京外
国語大学論集』32, pp. 71-86.

[4]談話

文文法を越え、文のつながりを談話の中で捉えようとする試みはスペイン語学でも
見られる。ここでは談話をテーマとして論じたものを引用しておくが、これまで見た

語以下の単位を扱う形態論、語彙論、意味論とは全く異なるレベルの話題であることは言うまでもない。

石崎優子(1983)「『談話の文法』によるスペイン語の構造と意味」 *Sophia Linguistica*, 11, pp. 117-124.

太田亨 (1992)「日本語とスペイン語の『談話場』の特徴」『日本語教育』77, pp. 89-102.

酒井優子(1988)「スペイン語のいわゆる‘付加疑問’とその答えのつながりについて」 *Hispánica*, 32, pp. 121-133.

酒井優子(1988)「スペイン語の全体疑問文に SÍ か NO で答える場合の是認と否認」『スペイン語学研究』 3, pp. 65-84.

寺崎英樹(1984)「スペイン語の語順と談話の原則」 *Hispánica*, 28, pp. 114-127.

文法

福嶋 教隆

1. スペイン語文法

1.1 単行本

スペイン語文法に関する研究は、スペイン語圏ばかりでなく世界各地で盛んに行われており、その成果は枚挙にいとまない。ここでは紙幅の都合上、その一端を記すにとどめる。既に日本語による紹介のある研究も多いので、詳しくはそちらを参照されたい。

コロンブスがアメリカ大陸に到着した1492年に、早くも非常に整ったスペイン語文書が現れた。Nebrija の *Gramática de la lengua castellana* (カスティリア語文法) である。中岡(1985~1991)の日本語訳によって容易にその内容に接することができる。

その後の文法の発展は、西川(1988)の『スペイン語時制研究史』に詳しいが、特筆すべきは、1714年の Real Academia Española (スペイン王立学士院) の創設である。スペイン語を「清め、定め、輝きを与える」ことを目標に設けられたこの組織は、辞書と並行して文法書を編纂し続けてきた。Nebrija の前掲書と同じ題の初版が1771年に世に出て以来、版を重ね、今世紀にはいって『スペイン語文法』と名を改めた。最新の1973年版では従来の規範的様相を一掃して、*Esbozo de una nueva gramática de la lengua española* (スペイン語新文法試論) という、記述的な著作になった。現在、Emilio Alarcosを中心に新版編集の作業が進められている。

19世紀の研究者で際立つのは、ベネズエラの Bello である。その著『カスティリア語文法』(1847)は、のちにコロンビアの Rufino J. Cuervo の注釈を加えた形で公けにされた。その着想は示唆に富み、今日でも古さを感じさせない。

今世紀では、Gili Gaya の *Curso superior de sintaxis española* (スペイン語統語論講義, 1943) の意味論に力点を置く文法が大きな力を持っていた。また Fernández Ramírez の *Gramática española* (スペイン語文法) は1985~1986年の再版・遺稿刊行後、従前よりさらに強い影響を与えている。歴史文法では Lapesa の *Historia de la lengua española* (スペイン語史, 1942) という名著がある。まもなく日本語訳が上梓の予定である。Lapesa については原(1988)による紹介がある。

現代のスペイン語学界では、温故知新の柔軟な思考法を採る Bosque (著書 *Las categorías gramaticales* (文法範疇, 1989) など。本稿の筆者による紹介 (1988) あり) や生成文法の旗手 Demonte (著書 *Teoría sintáctica* (統語理論, 1989) な

ど)、教育面への応用を重視する Marsá (著書 *Cuestiones de sintaxis española* (スペイン語文法評論, 1984. 邦訳あり) など)を初めとする多くの研究者が活躍している。Martinell (1992)「この20年のスペイン言語学」(西文)がスペイン語学界の現況を簡潔に述べている。また大修館が1982年以来、数年おきに刊行している『海外言語学情報』も、毎号スペイン文法に関する章を設けている。

1.2 論文

文法に関する研究を発表する専門誌の例としては、Consejo Superior de Investigaciones Científicas (科学研究高等審議院) 発行の *Revista de Filología Española* (スペイン文献学論叢)、Sociedad Española de Lingüística (スペイン言語学会) 発行の *Revista Española de Lingüística* (スペイン言語学論叢)、Instituto de Cooperación Iberoamericana (イベロアメリカ協力研究所) の *Lingüística Española Actual* (現代スペイン言語学) などがある。諸大学からもスペイン語学専門の紀要が刊行されている。Santiago de Compostela 大学の *Verba* (ことば)、Extremadura 大学の *Anuario de Estudios Filológicos* (文献学研究年報)、Oviedo 大学の *Archivum* (記録)、Valladolid 大学の *Anuario de Lingüística Hispánica* (スペイン言語学年報) などが名高い。

イスパノアメリカでも活発な研究が行われている。メキシコの El Colegio de México (メキシコ大学院) の *Nueva Revista de Filología Hispánica* (新スペイン語文献学論叢)、コロンビアの Instituto Caro y Cuervo (カロ・イ・クエルボ研究所。三好(1991)による紹介あり) の *Thesaurus* (宝典)、ペルーのカトリック大学の *Lexis* (ことば)、チリ大学の *Boletín de Filología* (文献学紀要)、アルゼンチンの生成文法研究者たちによる *Revista Argentina de Lingüística* (アルゼンチン言語学論叢)、また国境を越えた組織 Asociación de Lingüística y Filología de la América Latina (ラテンアメリカ言語学文献学会) が1989年に創始した *Lingüística* (言語学) などがあげられる。

大修館の月刊言語に「海外の言語学」と題する連載記事(かつては原誠、現在では上田博人が執筆)があり、上に記したような専門誌の最新号の主な論文の紹介を行っている。文献を知るには、González 他(1989)の *Bibliografía de sintaxis española* (スペイン語統語論文献一覧) や、先に引いた *Nueva Revista de Filología Española* 誌の 39-1 (1991) の文献リストなどが便利である。

1.3 非スペイン語圏の研究

独仏のスペイン文法研究の質の高さには、殊に瞠目すべきものがある。前者ではベ

ルリンにある Ibero-Amerikanisches Institut (イベロアメリカ研究所) などの施設に万卷の書を備え、重厚な研究が行われている。後者では *Grammaire de l'espagnol* (スペイン文法, 1969. 邦訳あり) を著した Pottier が、頂点に立つ 1 人と目されている。

英国のもの堅い記述的学風は、古くは Spaulding (1958) *Syntax of the Spanish verb* に、最近では Butt 他 (1988) *A new reference grammar of modern Spanish* によく表れている。

アメリカでは、Bolinger が鋭い言語感覚で大きな業績を残した。 *Essays on Spanish* (1991) に、著作の一部が収められている。また Linguistic Symposium on Romance Languages の年次録や、The American Association of Teachers of Spanish and Portuguese の機関誌 *Hispania*、また初めは Pittsburgh 大学、のち Minnesota 大学から出ている *Hispanic Linguistics* などにスペイン語文法の論文が掲載される。Chomsky がスペイン語を対象にして持論を展開した *Language and problems of knowlegde* (1989. 邦題『言語と知識』) など、生成文法による論考も数多い。

1.4 日本における研究

我が国のスペイン語学は、明治時代に始まる。その黎明期の事情は、中川(1992~93)「明治期におけるスペイン語及びスペイン文学への関心」に詳しい。また現代に至る鳥瞰は、瓜谷(1985)の「日本におけるスペイン語教育」(西文)、同(1990)「日本におけるスペイン語の学習、教育、研究の歴史」で得ることができる。

笠井(1933)『西班牙語四週間』は学習書の体裁をとってはいるが、その後の日本のスペイン語文法研究に大きな貢献をした。本格的な文法書としては高橋(1951)の『スペイン広文典』(1967年に改定)、永田(1955)『イスパニヤ語』、会田・他による『テーブル式スペイン語便覧』(1961)、興津の『中級イスパニア語文法』(1972)などがある。1982年に東京スペイン語学会が編んだ『宮城昇教授還暦記念論文集』は24点のスペイン語学の論考を収めている。また歴史文法では、最近、中岡の『中世スペイン語入門』が上梓された。まもなく山田善郎らによる中級文法書も発刊の見込みである。

専門誌としては、関連学会、研究会の機関誌や大学の研究誌がいくつかある。日本イスパニヤ学会の *Hispanica*、日本ロマンス語学会の『ロマンス語研究』、関西スペイン語学会の *Linguística Hispánica*、東京スペイン語学会の『スペイン語学研究』、大阪外国語大学の *Estudios Hispánicos*、上智大学の *Sophia Linguistica*、そして最近創始された京都外国語大学の *Revista de Estudios Hispánicos de Kioto* などである。また第3回大会が1993年に東京で開催されたアジア国際イスパニスタ会

議の会議録にも多数の論文が掲載されている。

文献検索には、出口(1986)「国内の雑誌等に発表されたスペイン語学に関する文献」や板東(1993)『スペイン研究日本語文献目録』が役に立つ。

2. 日本語文法

この項の対象は、スペイン語圏における日本語文法研究である。日本語は南蛮人宣教師によって早くから研究されていた。スペイン人による文法書としては、Collado の *Ars grammaticae Iaponicae linguae* (日本文典, 1632) が名高い。鎖国後も先行文献を手掛りに、Juan de Jesús の *Arte de la lengua japonesa* (日本語文典, 17~18 世紀)、Oyanguren の同題の書などが編まれた。明治期にも *Vocabulario japonés & lecciones de japonés* (日本語辞典・日本語講座, 1897. 著者 T. de N.) という小冊子が出ている。

今世紀にも González (1954) *Gramática de la lengua japonesa* (日本語文典) という、宣教師による日本語研究の成果が上がっている。最近では、大倉・他 (1982) *Curso intensivo de japonés para hispanoparlantes* (スペイン語話者のための日本語集中講座) がメキシコで、Planas 他 (1984) *Japonés hablado* (口語日本語) がマドリードで出た。さらに石原の *Gramática modern de la lengua japonesa* (日本語現代文法, 1985) がグラナダで、Nakamura 他 (1989) の *Japonés hablado* (口語日本語) がベネズエラのカラカスで出版された。

スペイン語圏で発表された本格的な日本語研究の論文はさほど多くない。だが Rodríguez-Izquierdo の「普遍概念は凡言語的意味論を支え得るか? 一日西両語を中心に」¹⁾と題する論文(1978)のように、日本語・日本文化に深い理解を示す対照研究も存在する。また Bosque (1985)「物理的広がりを表す形容詞の比喩的用法」は、日西両語を含む多くの言語における形容詞と名詞の共起関係についての原理を論じた研究である。

3. 日西文法の対照

3.1 総論

日本語とスペイン語の文法を対照言語学的に研究する試みは、1960年代後半から始まった。総論は、興津 (1972a)『中級イスパニア語文法』、大倉(1976)「日西比較表現論」、原(1984)「スペイン語創出文法理論が究極的に目指すもの」などに見ることができる。このうち興津 (1972a)は、後述する「イスパニア語と日本語の比較研究」(1967~81)という7部にわたる論文の前半を発展させたもので、終始、日本語との相違に着目しつつスペイン語文法を解説している。大倉(1976)は、第1部で表現比較の

一般的問題を論じたあと、第2部で日西対照を扱う。語彙の項では「涼しい、寒い、冷たい」といった形容詞を取り上げ、文法の項では、スペイン語の再帰動詞による受動文が日本語のどのような構文に対応するかという問題を扱っている。また原は「運動を表す中核がさまざまな格を伴って文が創出される」という「創出文法理論」を提唱しているが、1984年の前掲論文は、同理論が日西対照研究と大きく係わりを持つこと、同理論が語学教育にも有用であることを示している。

なお日西対照の問題を随筆的に描いた著作に、興津(1989)「随想：一イスパニア語研究者から見た日本語」、同(1992)『外国語から見た日本語』がある。

3.2 動詞

3.2.1 態

日西対照の文法研究は、目下のところ動詞に関連するものが多い。まず受動態、能動態といった「態(ボイス)」については、日本語の間接受動やスペイン語の再帰受動など、両言語とも興味深い現象を抱えているので、その類似点、相違点を考察した研究がいくつも見られる。興津(1969)「イスパニア語と日本語の比較研究(2)－受動態」がその嚆矢である。スペイン語の受動文およびそれに類する構文を分類したのち、日本語の間接受動文をスペイン語に訳した場合、どのような文型になるかを一覧として掲げている。これに続いて先述の大倉(1976)「日西比較表現論」における再帰動詞の考察が現れる。またOgura(1979)「西日対照研究：受身・再帰・自発・可能について」は、スペイン語のさまざまな受動形式が日本語ではどのような表現に対応するかを論じた。

出口(1982)「ヴォイスースペイン語」は、能動、受動だけでなく使役や可能も「態」に含め、また関係文法的見地から「反受動態」の概念も取り入れて、スペイン語の態を論じる。同言語の他動性指向の強さと、日本語の何かを被った人間を中心に据える性行とが、際立った違いであるという。福嶋(1983～1984)「イスパニア語における関心の与格を伴う自動詞文について」は、*Se me murió el gato.* (私は猫に死なれた。)のような構文の分析に際し、随所に日本語文法の成果を援用した。同(1990a)「スペイン語と日本語－間接影響表現の対照－」は、いま触れた構文と日本語の間接受動文との関係を考察し、両構文は結果的には共通する部分を有するものの、主眼となる想念には隔たりがあることを示し、日西両語の態の特質に言及した。

最後に近藤(1992)「西日受身表現について－Ser+過去分詞－」は、三島由紀夫の『金閣寺』とそのスペイン語訳を資料に使い、受動態の形式をとって現れる動詞の意味特性と受動との相関関係をさぐる論考である。

3.2.2 自動と他動

態と接して自動と他動の問題がある。前段で紹介した著作はいずれもこの問題も取り上げているが、特にこれに的を当てた研究としては、石崎(1981)の「スペイン語と日本語における他動詞化と自動詞化」があげられる。日西両語を通じて、他動詞化とは causalityの付与であり、自動詞化とは theme の主語化であるとの主張がなされている。また高橋(1988)「日本人に苦手なスペイン語の表現」は、教育的視点から日西のさまざまな違いを考察しているが、中でも「スペイン語は現実の出来事を動的に捉える傾向が強い」ことから生じる自動詞・他動詞および能動・受動のずれを中心に扱っている。

3.2.3 モダリティ

モダリティもさまざまな研究者の関心を集めている。日本語の動詞に承接する助動詞、終助詞の問題と、スペイン語のモーダルな動詞や叙法とを比較する試みが多い。大倉(1972)「『坊っちゃん』における推量表現 ―「う」「よう」とそのスペイン語訳」は、Jesús González Valles 訳 *Botchan*を子細に検討した結果、推量の「う」、「よう」の大半は直説法の動詞で置換され、しかも何らモーダルな動詞や副詞を伴わないものが多いことを明らかにしている。興津(1970)の「イスパニア語と日本語の比較研究(3)―接続法」は、日本人にとって接続法がなぜ難解に思えるのかという問題を念頭におきつつ同叙法を論じている。

本田(1985)「日本語とスペイン語の叙法性に関する一考察」は、従属節の内容について話者がどのような判断をしているかを示す形式がスペイン語には叙法として存在するのに対し、それを欠く日本語は曖昧であるとする。

福寫(1990b)「超主節について」、同「イスパニア語接続法統語論・意味論」(ともに西文)は、国語学における時枝誠記、渡辺実らの陳述に関する研究や日本語学における益岡隆志らのモダリティ研究をスペイン語叙法の分析に援用し、直説法を陳述性の高い法、接続法を命題性の高い法とみなす提案を行っている。また同(1991)「イスパニア語モダリティ研究の最近の動向について」は、日本語のモダリティ研究と比較しつつスペインの学界の一傾向を紹介した論考である。

和佐(1992)「くていねいさ」にみる日西対照」は、スペイン語では丁寧さというモダリティを表す形式の1つに *¿Quiere usted ~?* (あなたは～したいですか) という文があるが、日本語に直訳すると不適切な表現になることなどを考察している。

3.2.4 時制、相

この分野については、大倉が早くから研究をしている。同(1977)「日西両語動詞

「現在形」の用法をめぐる」および同(1978a)「*「た」をめぐる一考察*」がその成果である。前者では、日本語のル形とスペイン語の直説法現在形とでは、表し得る「現在」の範囲がどのように異なるかを記述している。後者では、タ形とスペイン語のさまざまな過去時制との対応が論じられている。

近年、従属節の時制に焦点を絞り、統率束縛理論の立場から分析する試みが行われている。三原(1992a)「視点、統率、時制解釈」は、従属節の内容を発話時視点から捉えるか、主節の表す時の視点から捉えるかに関する規則をたて、まず日本語や英語にこの規則を適用する。その詳しい議論が同(1992b)『時制解釈と統語現象』で展開されるが、スペイン語の関係節、同格節および主語名詞節についても言及がある。三原・高垣(1991)「スペイン語従属節の時制」は、スペイン語にも上の規則が通用することを示している。

3.2.5 語法

意味的に近似していながら日西で語法が微妙に異なる動詞の存在も、早くから対照研究で取り上げられてきた。まず興津(1967)「*イスパニア語と日本語の相違—向き違いの言い方—*について」は、*Me agrada la noticia.*(そのニュースは私を喜ばせる。)のように感情や判断の主体を目的語として表す形式を「向き違いの言い方」と名付け、両言語の論理の差を考察した。この問題を「～が好きだ」という表現に絞って論じたのが、堀田(1993)「*Gustar*、「好き」、*like*」(西文)と題する、「は」と「が」に関する日本語研究の成果を十分に踏まえた論述である。

興津は、「*イスパニア語と日本語の比較研究*」(4)～(7)でも、動詞をはじめとする語の用法について、丹念な記述をしている。(4)「対応語の欠如・格違い・品詞の違い・異種概念の不当同居」(1972b)、(5)「語形が似ていて紛らわしい語」(1979)、(6)「語形は違うが内容が似ていて使い分けが問題になる語」(1980)、(7)「西語が日本語から細分化していてその区別が問題になる語」(1981)と、それぞれ興味深い内容を示唆する副題が付いている。

蔭山は「*「見える」とそのスペイン語訳—『坊っちゃん』『砂の女』を通じて—*と題する1978年の論文で *parecer* (思われる)などの動詞を考察した。大倉(1978b)「*スペイン語の感情表現*」は、日西両語における「うれしい」、「こわい」、「うらやましい」を表す形式の対比を試みた。山下(1988)「*存在構文における普遍性について*」は、日本語の「いる、ある」やスペイン語の *hay* (～がある)を初め、いくつかの言語の存在文を比較し、その普遍的原理を探った。

太田(1991)「*ir/venir* の用法について —日本語との比較において—」は「行く、来る」という移動動詞に関する問題の考察である。日英対照研究の成果から「ホーム

ベース」(話者が心理的に視点を置いている位置)という概念を取り入れ、その領域の広さの違いを論じている。

3.3 その他の品詞

3.3.1 名詞・代名詞

先に紹介した興津(1972a, 1979, 1980, 1981)の諸論文は、動詞以外の品詞、特に名詞についても多くの言及がある。また福畠(1985)「イスパニア語の使役文、知覚文と文法関係」は、使役文・知覚文における動詞の取り得る必須項の数と名詞・代名詞の格との間に一定の相関関係が、日西両語を通じて認められることを示した。

代名詞については、上田(1982)「日西語の呼称の比較—話者・聞き手・について」という、緻密な研究がある。聞き手をさす代名詞の選択に、日本語では目上か目下かという基準が大きく関与し、スペイン語では親しい人か疎遠な人かということが重要になることを示したものである。青山(1992)の「スペイン語の構文情報」も、代名詞などの示す性や数の情報について論じている。

3.3.2 指示詞

スペイン語の指示詞は、いわゆる近称、中称、遠称の3体系であるところから、日本語のコソア体系との相違が問題にされ、近年、研究者の関心が集中している。三好(1985)の「指示詞の指示方法：日西両語の場合」に端を発して、江澤(1991)「スペイン語と日本語の指示詞の対照研究」(西文)、同(1992)「スペイン語と日本語の指示詞の対応について」(西文)、田中(1992)「指示詞が指し示すもの—日西比較の試み—」、太田(1992a)「日本語とスペイン語の指示語体系について」といった論文が発表されている。

まず三好(1985)は、日本語の指示詞は話者と聞き手という2つの基準点を持つのに対して、スペイン語では話者が基準となるとして、各々の用法を説明している。江澤(1991, 1992)は三好の成果を踏まえた上で、特にスペイン語の中称、遠称と「その、あの」の対応のずれについて精査を行っている。田中(1992)も、眼前指示、文脈指示の両事例において日西の指示方法の差異を記述している。最後に太田(1992a)は、「プロトタイプ」や「メンタルスペース」などの概念を用いて、スペイン語の中称とソ系列の差が特に著しいことなどを主張している。

3.3.3 前置詞と格助詞

蔭山(1979)「格表現の対照研究—スペイン語との対照」、同(1980)「格表現の対照—日本語とスペイン語の場合—」は、両言語のさまざまな格の表し方を動詞文と形容

詞文に分けて対比的に記述した。吾郷(1988)「スペイン語の前置詞 a/de と日本語の格助詞「に」」は、対象を限定した論考である。続いて高垣は「スペイン語前置詞句の連体機能について—スペイン語の“de”と日本語の「の」を中心に」(1990)で、前置詞deと格助詞「の」が作る名詞句を分析し、両小辞はごく類似した機能を持つとの結論に至っている。

3.3.4 形容詞・副詞

この分野では、土屋(1983)の「形容詞連用形のスペイン語訳に関して」という研究がある。日本語の形容詞連用形はスペイン語との対照という点から見れば、結果を表すものと様態を表すものとに大別できるという結論が導かれている。

3.4 談話

3.4.1 語順

対照研究の範囲を語の次元ではなく、文全体や文を越える言語単位の次元で行う研究もなされている。まず語順については、田村(1975)「諸言語の中の日本語—語順について」が、20以上の言語の語順を類別する中で、スペイン語の語順の諸原則にも言及している。

野田は1981年の「文の題述構造—日本語とスペイン語の対照研究」と1983年の「日本語とスペイン語の語順」で、両言語の語順は構造的にはきれいな鏡像関係にあるのだが、そこに情報的な要因が加わるため、一見、規則的対応がないように見えるという主張を行った。また前田(1988)「日西ことわざ語順比較」は、両言語のことわざを「直線型」、「対比型」、「屈折型」の3種に分け、新旧情報との関係を論じた。

3.4.2 主題

日本語の副助詞「は」と格助詞「が」の問題をスペイン語の目的語前置文と対置させる観点、前項の野田(1981)、同(1983)が採用した。この問題は後に同(1992)「日本語とスペイン語の主題化」に継承され、主題は日本語では「は」の前の要素、スペイン語では動詞より前に位置する要素であるという提案がなされた。

堀田(1989)「日本語の助詞「は」と「が」とスペイン語の冠詞」(西文)は、定冠詞の事例は日本語の「は」に対応し、不定冠詞の事例は「が」に対応することが多いと指摘し、情報の視点からこの現象を考察した。また石原(1993)「語用論的観点から見た後置詞「は」と「が」」(西文)は、これらの助詞の諸用法及びその省略の条件を記述している。

3.4.3 語用論

近年は語用論対照研究も興ってきている。例えば太田(1992b)「日本語とスペイン語の「談話場」の特徴」は、日本語の対話では、話者と聞き手は互いの間にある情報の差を埋めて共通点を模索するのに対し、スペイン語では各々がその視点を保持しながら情報を交換する点が異なっていると主張している。また大倉(1992)「‘Mire’のコミュニケーション機能」は、元来「見なさい」という意味を表す談話標識 *mire* の機能を、発話冒頭に位置する場合と、発話半ばにある場合とに分けて記述し、日本語の対応表現を呈示している。

以上、スペイン語文法、日本語文法、日西対照文法研究の歩みと現状について略述した。殊に対照文法の項において、記載するに値する論考でありながら筆者の不明のため漏れているものがありはせぬか、また不適切な紹介をしてはおらぬかと恐れる。読者各位のご教示を乞う次第である。

[参考文献]

- 吾郷成子(1988)「スペイン語の前置詞 *a/de* と日本語の格助詞「に」」、福岡YMC A日本語教育論文集2。
- 会田由・他(1961)『テーブル式スペイン語便覧』、評論社。
- 青山文啓(1992)「スペイン語の構文情報」、『日本語とスペイン語との対照言語学的研究中間報告』、国立国語研究所。
- 板東省次(1993)『スペイン研究日本語文献目録1880-1992年』、自費出版。
- Bello, Andrés (1847, 1970) *Gramática de la lengua castellana*, Sopena Argentina, Buenos Aires.
- Bolinger, Dwight (1991) *Essays on Spanish: words and grammar*, Juan de la Cuesta, Newark.
- Bosque, Ignacio (1985) “Usos figurados de los adjetivos que denotan dimensiones físicas,” *Philologica hispaniensia in honorem Manuel Alvar*, II, Gredos, Madrid.
- _____ (1989) *Las categorías gramaticales*, Síntesis, Madrid.
- Butt, John 他 (1988) *A new reference grammar of modern Spanish*, E. Arnold, London.
- Chomsky, Noam (1988) *Language and problems of knowlegde. The Managua lectures*, MIT, Massachusetts. 田窪行則・他・訳(1989)『言語と知識』、産業図書。

Collado, Diego (1632) *Ars grammaticae Iaponicae linguae*, Roma.

Demonte, Violeta (1989) *Teoría sintáctica: de las estructuras a la rección*, Síntesis, Madrid.

出口厚実(1982)「ヴォイスースペイン語」、森岡健二・編『講座日本語学 10. 外国語との対照 I』、明治書院。

_____(1989)「国内の雑誌等に発表されたスペイン語学に関する文献(1952~1988)」、(1),(2)、大阪外国語大学論集1,2。

江澤照美(1991)“Los demostrativos españoles y japoneses—estudio contrastivo,” *Linguística Hispánica* 14、関西スペイン語学研究会。

_____(1992)“La correspondencia de los demostrativos españoles y japoneses,” *Linguística Hispánica* 15、関西スペイン語学研究会。

Fernández Ramírez, Salvador (1985~1986) *Gramática española*, 5 vols., Arco, Madrid.

福島教隆(1983,1984)「イスパニア語における関心の与格を伴う自動詞文について」(上)(下)、神戸外大論叢34-2,35-1、神戸市外国語大学。

_____(1985)「イスパニア語の使役文・知覚文と文法関係」、外国学研究 16 『言語における動詞の型と文の複合化—対照言語学の方法論を求めて—』、神戸市外国語大学。

_____(1988)「Ignacio Bosque 博士の文法研究について」、イスパニカ 32、日本イスパニヤ学会。

_____(1990a)「スペイン語と日本語—間接影響表現の対照—」、近藤達夫・編『講座日本語と日本語教育12 言語学要説(下)』、明治書院。

_____(1990b)“Sobre la cláusula superregente,” *Indicativo y subjuntivo* (I.Bosque 編, Editorial Taurus, Madrid.

_____(1991)「イスパニア語モダリティ研究の最近の動向について」、神戸外大論叢 42-1、神戸市外国語大学。(1992)補筆再録、『日本語とスペイン語との対照言語学的研究中間報告』、国立国語研究所。

_____(1992)“Sintaxis y semántica del modo subjuntivo en español,” Universidad Complutense de Madrid 博士論文。

Gili Gaya, Samuel (1943, 1951) *Curso superior de sintaxis española*, Bibliograf, Barcelona.

González, Rosario 他 (1989) *Bibliografía de sintaxis española* (1960-1984), Universidade de Santiago de Compostela.

González, Vicente(1954) *Gramática de la lengua japonesa*、自費出版。

原誠(1984)「スペイン語創出文法理論が究極的に目指すもの」、アジア・アフリカ文法研究13、東京外国語大学。

_____(1988)「世界の言語学者たち 12. R. ラベーサ」、月刊言語 88年6月号、大修館。

本田誠二(1985)「日本語とスペイン語の叙法性に関する一考察」、熊本商大論集31-1/2,熊本商科大学。

堀田英夫(1989)“Las partículas japonesas GA/WA y los artículos españoles,” 愛知県立大学外国語学部紀要21。

_____(1993)“‘Gustar’, ‘suki’ y ‘like’,” *Actas del Tercer Congreso de Hispanistas de Asia*, Asociación Asiática de Hispanistas.

石原忠佳(1985) *Gramática moderna de la lengua japonesa*, Edi-6, Madrid.

_____(1993)“Partículas postnominales ‘wa’ y ‘ga’: Desde un punto de vista pragma-lingüístico,” *Actas del Tercer Congreso de Hispanistas de Asia*, Asociación Asiática de Hispanistas, 東京。

石崎優子(1981)「スペイン語と日本語における他動詞化と自動詞化」、*Sophia Linguística* 8/9、上智大学。

Juan de Jesús (17~18世紀) *Arte de la lengua japona*, 稿本。

蔭山昭子(1978)「『見える』とそのスペイン語訳ー『坊っちゃん』『砂の女』を通じて」、日本語・日本文化 8、大阪外国語大学。

_____(1979)「格表現の対照研究ースペイン語との対照」、『格表現の対照研究ー日本語教育のために』、大阪外国語大学留学生別科。

_____(1980)「格表現の対照ー日本語とスペイン語の場合ー」、日本語・日本文化 9、大阪外国語大学。

笠井鎮夫(1933)『西班牙語四週間』、(1956新訂)『スペイン語四週間』、大学書林。

近藤豊(1992)「西日受身表現についてーSer+過去分詞ー」、天理大学学报171。

Lapesa, Rafael (1942, 1980^o) *Historia de la lengua española*, Gredos, Madrid.

前田幸夫(1988)「日西ことわざ語順比較ーその形式と情報構造」、語順研究3、亜細亜大学。

Marsá, Francisco (1984) *Cuestiones de sintaxis española*, Ariel, Barcelona.

三好準之助・訳(1993)『スペイン語文法評論』、三修社。

Martinell Gifre, Emma (1992) “La lingüística española en los últimos veinte años,” *Lingüística Hispánica* 15, 関西スペイン語学研究会。

三原健一(1992a)「視点、統率、時制解釈」、『日本語とスペイン語との対照言語学の研究中間報告』、国立国語研究所。

- _____(1992b)『時制解釈と統語現象』、くろしお出版。
- 三原健一・高垣敏博(1991)「スペイン語従属節の時制」、日本語・日本文化研究 1、大阪外国語大学。(1992)再録、『日本語とスペイン語との対照言語学的研究中間報告』、国立国語研究所。
- 三好準之助(1985)「指示詞の指示方法：日西両語の場合」、京都産業大学国際言語科学研究所所報 7-1。
- _____(1991)「コロンビア国立国語研究所」、京都産業大学国際言語科学研究所所報 12。
- 永田寛定(1955)『イスパニヤ語』、白水社。
- 中川清(1992, 1993)「明治期におけるスペイン語及びスペイン文学への関心」I, II, 国士館大学教養論集35, 36。
- Nakamura, Michio 他(1990) *Japonés hablado*, Ediciones Brown, Caracas.
- 中岡省治(1993)『中世スペイン語入門』、大学書林。
- Nebrija, Antonio de (1492, 1980) *Gramática de la lengua castellana*, Ed. Nacional, Madrid. 中岡省治・訳(1985, 1986, 1991)「カスティリア語文法」(1)~(4)、大阪外国語大学学報70, *Estudios Hispánicos* 11, 大阪外国語大学学報 72, 大阪外国語大学論集5。
- 西川 喬(1988)『スペイン語時制研究史(1492~1879)』、神戸市外国語大学。
- 野田尚史(1981)「文の題述構造－日本語とスペイン語の対照研究」、大阪外国語大学修士論文。
- _____(1983)「日本語とスペイン語の語順」、大阪外国語大学学報62。
- _____(1992)「日本語とスペイン語の主題化」、『日本語とスペイン語との対照言語学的研究中間報告』、国立国語研究所。
- Ogura, Hiromi (1979)「西日対照研究：受身・再帰・自発・可能について」、大阪外国語大学修士論文。
- 興津憲作(1967)「イスパニア語と日本語の相違－向き違いの言い方－について」、サピエンチア2、英知大学。
- _____(1969)「イスパニア語と日本語の比較研究(2)－受動態」、サピエンチア3、英知大学。
- _____(1970)「イスパニア語と日本語の比較研究(3)－接続法」、サピエンチア4、英知大学。
- _____(1972a)『中級イスパニア語文法』、創元社。
- _____(1972b)「イスパニア語と日本語の比較研究(4)－対応語の欠如・格違い・品詞の違い・異種概念の不当同居」、サピエンチア6、英知大学。

- _____ (1979)「イスパニア語と日本語の比較研究(5)ー語形が似ていて紛らわしい語」、サビエンチア13、英知大学。
- _____ (1980)「イスパニア語と日本語の比較研究(6)ー語形は違うが内容が似ていて使い分けが問題になる語」、サビエンチア14、英知大学。
- _____ (1981)「イスパニア語と日本語の比較研究(7)ー西語が日本語から細分化していてその区別が問題になる語」、サビエンチア15、英知大学。
- _____ (1989)「随想：ーイスパニア語研究者から見た日本語」、日本語学8-8、明治書院。
- _____ (1992)『外国語から見た日本語』、近代文藝社。
- 大倉美和子 (1972)「『坊っちゃん』における推量表現ー「う」「よう」とそのスペイン語訳」、日本語・日本文化 13、大阪外国語大学。
- _____ (1976)「日西比較表現論」、『国語シリーズ別冊4 日本語と日本語教育ー文字・表現編ー』、国立国語研究所。
- _____ (1977)「日西両語動詞「現在形」の用法をめぐって」、日本語・日本文化 6、大阪外国語大学。
- _____ (1978a)「「た」をめぐる一考察」、日本語・日本文化 8、大阪外国語大学。
- _____ (1978b)「スペイン語の感情表現」、『感情表現について(日本語教育のための日本語と外国語との「格」の対照研究ー中間報告ー』、大阪外国語大学留学生別科。
- _____ (1992)「『Mire』のコミュニケーション機能」、『日本語とスペイン語との対照言語学的研究中間報告』、国立国語研究所。
- _____ 他 (1982) *Curso intensivo de japonés para hispanoparlantes*, I, El Colegio de México.
- 太田亨(1991)「ir/venir の用法についてー日本語との比較においてー」、スペイン語学研究 6、東京スペイン語学会。
- _____ (1992a)「日本語とスペイン語の指示語体系について」、東京外国語大学修士論文。
- _____ (1992b)「日本語とスペイン語の「談話場」の特徴」、日本語教育 77、日本語教育学会。
- Oyanguren, Melchor (1738) *Arte de la lengua japona*, México.
- Planas, Ramiro他(1984) *Japonés hablado*, Ed. Alhambra, Madrid.
- Pottier, Bernard (1969) *Grammaire de l'espagnol*, Presses Universitaires de France, Paris. 島岡茂・訳(1971)『スペイン文法』、白水社。
- Real Academia Española (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua*

española, Espasa-Calpe, Madrid.

Rodríguez-Izquierdo y Gavala, Fernando(1978) “¿Pueden los 《conceptos universales》 sustentan una semántica interlingüística? (Con especial consideración de las lenguas japonesa y española,” *Revista Española de Lingüística* 8-2, Sociedad Española de Lingüística.

Spaulding, Robert K. (1952) *Syntax of the Spanish verb*, Liverpool University.

T. de N., C. Yñigo (1897, 1992) *Vocabulario japonés & lecciones de japonés*, Hiperión, Madrid.

高垣敏博(1990)「スペイン語前置詞句の連体機能について—スペイン語の“de”と日本語の「の」を中心に」、京都産業大学論集19-3。

高橋覺二(1988)「日本人に苦手なスペイン語の表現—スペイン語の動的性格について」アカデミア文学・語学編44、南山大学。

高橋正武(1951)『スペイン広文典』、(1967改訂)『新スペイン広文典』、白水社。

田中京子(1992)「指示詞が指し示すもの—日西比較の試み—」、言語文化論集14-1、名古屋大学。

田村すず子(1975)「諸言語の中の日本語—語順について」、講座日本語教育11、早稲田大学。

東京スペイン語研究会・編、(1982)『宮城昇教授還暦記念論文集』、同会発行。

土屋博嗣(1983)「形容詞連用形のスペイン語訳に関して」、亜細亜大学教養部紀要28。

上田博人(1982)「日西語の呼称の比較—話者・聞き手・関係について」、東京外国語大学論集32。

瓜谷良平(1985) “La enseñanza del español en el Japón,” *Actas del Primer Congreso de Hispanistas de Asia*, Asociación Asiática de Hispanistas, Seúl.

_____(1990)「日本におけるスペイン語の学習、教育、研究の歴史」、イスパニカ34、日本イスパニヤ学会。

和佐敦子(1992)「〈ていねいさ〉にみる日西対照—聞き手の希望を聞く表現の指導を中心に—」、大阪外国語大学修士論文。

辞書

青山 文啓

1992年はアメリカ大陸発見五百年にあたり、スペインの国内外でいろいろな催物が行なわれ、まさに「スペインの年」と呼んでよいような一年だった。日本の中でもそれに関連して様々なイベントが行なわれたに違いないが、この章の話題にとって最も関係が深いのは、以下に初版の出版年が新しいものから順にあげるように、この年を前後して次々と新しい辞書が出版されたことである。

- [a]鼓直(1994)『プログレッシブ スペイン語辞典』小学館
- [b]ルビオ, カルロス／上田博人(1992)『新スペイン語辞典』研究社
- [c]宮城昇／山田善郎(1990)『現代スペイン語辞典』白水社
- [d]桑名一博(1990)『西和中辞典』小学館
- [e]ゴンザレス, ビセンテ／一色忠良(1986)『西和辞典』エンデルレ書店

これらの辞書は、ただ単にそれまで出版されていたスペイン語の辞書の中に新しく仲間入りしたというより、それ以前の辞書を歴史的に封印してしまったようにも思われる — このような表現は大げさで良識を欠いているように聞えるかもしれないが、実際、1970年代に筆者が初めて手にした当時のスペイン語の辞書（初版1958年）といえは収録語数に見劣りはないものの、同レベルの英語の辞書には文型の表示や可算名詞／不可算名詞の区別などとともに例文が満載されているのに較べると、両者の間には永遠に埋められないほどの差があるように感じられたものだ。ただ、その差はこうして二十年たらずの間に徐々に埋められる過程にある — あるいは、埋められてしまった、とさえいえるのかもしれない。

こうして日本で出版されているスペイン語の辞書は突然にして世代交代が行なわれたわけだが、（筆者のような）それ以前の学習者の立場からすれば、交代は徐々に行なわれるのに越したことはない。交代から交代への期間が今回のようにあまりに長引けば、その間に学習を始めた人は不幸な状態をそれだけ長く強いられることになるからだ。

この章では、上にあげた五つの辞書に見られる記述の相互比較を試みる。そのためには、特定の単語に焦点を絞るほうが話しを進めやすい。スペイン語には、よく話題にのぼる ESTAR と SER という二つの BE 動詞がある。ここではスペイン語の辞書に

見られるこれらの動詞の記述例を参考にすることで、辞書一般の抱える問題の一端に触れられるのではないかと、あるいはまた改訂に際しての一つの参考意見として迎えていただけるのではないかと、思う。

最初にこれらの辞書の「見出し語の概数」と「最上位ブランチの分類基準」を表に示す。表の中の、(E)は ESTAR の、(S)は SER の分類基準をそれぞれ指す。辞書記述は、見出し語の持つ用法をどのように分類して、提示するかにかかっている。この意味で、記述項目の「最上位ブランチ」の分類にどのような基準が使われているかは、ここで見る二つの動詞に限られた問題ではなく、それぞれの辞書の記述方針を端的に物語るものである。

以下の表からも、[e] を除く他の四つの辞書における分類基準は品詞に基づくものであり、大きな違いは認められないことがわかる。四つの辞書における目立った差異といえば、それぞれの動詞に助動詞としての用法を認めるかどうか、である。一般に、これらの動詞に現在分詞あるいは過去分詞が後続する場合、その用法は「助動詞」という名称で呼ばれる (ESTAR には両方の分詞が、SER には過去分詞がそれぞれ後続する可能性がある)。そのため、ブランチごとに「現在分詞」ないしは「過去分詞」が情報として示してあれば、「助動詞」というラベルは冗長的な情報しか与えないことになる。しかし、理づめと学習者の便宜とは別物であり、一貫した情報提示が見られる限り学習者にとっては冗長的な情報も役にたつ場合が多い (この意味で、[c] の記述には一方で「助動詞」を認め他方で認めない、という不統一が見られるが、これは単純な校正ミスと考えてよいだろう)。

	見出し語 の概数	最上位ブランチ の分類基準
[a]鼓 (1994)	2万5千	(E)自動詞, 再帰動詞, 助動詞に三分。 (S)自動詞, 助動詞, 名詞に三分。
[b]ルビオ／ 上田(1992)	3万7千	(E)自動詞, 助動詞, 再帰動詞に三分。 (S)自動詞, 助動詞, 名詞に三分。
[c]宮城／ 山田(1990)	3万5千	(E)自動詞, 再帰動詞に二分。 (S)自動詞, 助動詞, 名詞に三分。

[d]桑名 6万7千 (E)自動詞, 再帰動詞に二分。
(1990) (S)自動詞だけ。名詞は別見出し。

[e]ゴンザレス／ 8万 (E)自動詞, 熟語, 表現に三分。再帰
一色(1986) 動詞の記述は例文一例に留まる。
 (S)繫辞動詞, 二種の助動詞, 自動詞,
 熟語に五分。

この表からわかるのはその辞書の規模と最上位の分類基準だが, 次にその動詞が本動詞であれ助動詞であれ述語に立った場合に, それ以外の構成要素をいくつ要求するか, さらにそれぞれの構成要素の品詞論的性格は何か, このような観点からその動詞の用法を考える。そのためには, いくつかの約束事が必要になる。

ここでは構成要素間の階層性については無視し, 述語動詞(定動詞)にたどりついた段階で得られるそれ以外の構成要素(句)について, 便宜的に次のような名称で呼ぶことにする。また, その述語が本動詞か助動詞かの区別はしないことにする。[]内には, 以下で用いる略号を示した。

述語動詞 [V]
名詞句 [NP] (間接目的 {NP})
形容詞句 [AP]
副詞句 [JP]
前置詞句 [PP]

ところで, ESTAR も SER も BE 動詞であり, すべての動詞を他動詞/自動詞に二分する立場からは, (ESTAR に再帰代名詞が現れる用法を除いて考えれば) 両方とも直接目的格の名詞句を取らないと考えてよいので, 自動詞に分類される。従って, 自動詞であるこれらの動詞に直接目的格の名詞を認める必要はないと考えられるが, 間接目的格については上にあげた辞書の多くが, サイズを表わす形容詞句, 価格を表わす前置詞句および状態副詞句などの場合に, 以下の表に示した(5)(6)(7)のような構文を認めている。この場合の名詞句については, {NP}で表わすことにする(再帰代名詞を取る構文については文型の標示が煩雑になるので, 以下では省略に従う; 再帰代名詞については本書所収の拙論を参照)。また副詞句には状態副詞, 程度副詞, 場所の副詞, 時間の副詞だけを含めるが, 副詞句の略号を[JP]としたのは, 二文字におさ

めるためである。

以上のような約束事を前提に、上にあげた辞書にその用法が例文として登録されているものに限って表にまとめると、次のようになる。(前置詞句については、その構文に現れる前置詞をコロンの後に示した。また、一般には接続詞と認められる *que* や *como* についても便宜的に前置詞に含めて考える。)

	[V: ESTAR]	[V: SER]
[NP][V] (1)	+	+
[NP][V][JP] (2)	+	+
[NP][V][PP] (3a) [PP:a]	+	+
b) [PP:en]	+	+
c) [PP:de]	+	+
d) [PP:con]	+	+
e) [PP:sin]	+	
f) [PP:contra]	+	
g) [PP:para]	+	+
h) [PP:por]	+	
i) [PP:sobre]	+	
j) [PP:tras]	+	
k) [PP:que]	+	+
l) [PP:como]	+	
[NP][V][AP] (4)	+	+
[NP]{NP}[V][AP] (5)	+	
[NP]{NP}[V][PP] (6)	+	
[NP]{NP}[V][JP] (7)	+	
[NP][V][NP] (8)	+	+

上の表を見る限り、(3e, f, h, i, j, l)および(5)(6)(7)の構文が欠けるだけ *SER* の用法の方が *ESTAR* に較べてせまいということになるが、用例がたまたま今回参考にした辞書に登録されていない可能についても否定することはできない。このことに関連して、この種の表あるいはそれぞれの辞書記述に、学習者にとってそれ以上の意

味を持たせるためには、品詞からさらに一步踏みこんだ情報が提示される必要がある。これは辞書と文法の境界に位置する性格のものであり、すべての辞書記述が必ず違着する問題である。

この点について考えるまえに、上の表にあげた七種類の構文ごとに、それぞれの辞書にあげられた例文から適宜選んだものを提示しておきたい。[] の中にその辞書で使われているブランチャ番号を示した。番号のないブランチャはこちらでそれを補った(番号の右にあるアスタリスクは小見出しを指す)。

- (1) ¿Está? [c:4]
 Dios es.[e:4]
- (2) Tu bicicleta está allí.[d:1]
 La oficina es aquí.[c:2]
- (3a) [PP:a] La comida estará a las tres en punto.[c:1]
 El partido será a las siete.[b:2]
- b) [PP:en] El maestro no está en la escuela.[e:1]
 La fiesta es en la casa de María.[c:2]
- c) [PP:de] Está de camarero en un hotel.[d:13*]
 Esta taza es de plástico.[c:3]
- d) [PP:con] En esa cuestión estoy con Vd.[e:2]
 Soy en todo con Vd.[c:3]
- e) [PP:sin] Está sin trabajo ahora.[c:5]
- f) [PP:contra] ¿Estás con nosotros o contra nosotros?[b:7]
- g) [PP:para] Este fax es para usted.[b:1]
- h) [PP:por] Todos están por ti.[a:12*]
- i) [PP:sobre] Está sobre los obreros.[c:5]
- j) [PP:tras] Está tras ese puesto.[c:5]
- k) [PP:que] Estoy que me caigo.[c:6]
 La verdad es que yo lo sabía todo.[c:1]
- l) [PP:como] Está como presidente en funciones.[c:6]
- (4) El niño está muy alto.[c:1]
 Ella es muy alta.[c:1]
- (5) Esta chaqueta me está muy ancha.[c:1]
- (6) Este televisor me estuvo en sesenta mil pesetas.[d:1]
- (7) ¡Uy, te está muy bien![b:5]

- (8) Está muy mujerona.[c:7]
 Su padre es abogado.[e:4]

上の表にあげた構文情報からさらに進んだ情報を利用者に提示するには、次の二つの方法が考えられる。一つは、すべての名詞、副詞、形容詞についてより詳細な下位分類を示すことである。もう一つの方法は、問題となっている述語以外の構成要素の数とそれぞれの品詞標示などが類似していれば、二つの異なる述語が持つある構文と別の構文は同義関係に立つ可能性があることに着目し、それぞれの構文を記述するブラントごとに、（使用頻度の高い動詞に限って）同義的な述語を可能な限り書き出し、その用法上の区別について註記を加えることである。

前者の方法は理想的だが、例えば名詞の分類というより大きな袋小路に迷いこむことになる。一つの辞書の見出し語の中で名詞は最大のクラスを誇る。その中に含まれる一つ一つの名詞が「家族的類縁性」によって連綿とつながっているだけだとすれば、分類はいつまでたっても完成しないおそれがあるからだ。それに対して、後者の方法は局所的な解決しかもたらさないが、使用頻度を目安に書き出す述語のクラスさえ決めてしまえば、作業は手の届きうる範囲におさまるはずである。実際、上にあげた辞書で部分的に用いられているのは後者の方法であり、今後求められるのは、同義関係を記述する動詞のクラスを決めることと記述作業を徹底させることのように思われる。

ここでは上にあげた構文のうち、前置詞句を含むものを取りあげ、いくつか意見を述べることにしたい。まず、前置詞の *de* には名詞について形容詞を派生させる<1>のような用法が見られるが、この場合も<2>のように二つの *BE* 動詞の対立が見られる。このような形容詞的な働きを持つ前置詞句の範囲およびその同義的な形容詞の記述があれば、学習者にとって有用な情報になるはずである。

- <1> Es de suma importancia.[a:14*]
 Es de poco hablar.[a:14*]
 Es de color azul.[c:3]

- <2> Mi tío está de buen humor.[a:1]
 Este proceder no es de hombre de bien.[e:4]

これらの構文は<3><4><5>の構文とは区別される必要がある。さらに、<5>の所有関係と<6>が表現する授受関係とを区別する註記が必要である。

<3> La corbata es de seda.[a:14*]
Esta taza es de plástico.[c:3]
Las casas de mi pueblo son de piedra.[b:1]

<4> ¿De dónde eres? - Soy de Salamanca.[a:14*]
Antonio es de Madrid.[e:4]
Somos de Osaka.[c:3]
Estas naranjas son de Valencia.[c:3]

<5> Este terreno es de mi tío.[c:3]

<6> Este fax es para usted.[b:1]

次の用法はどちらも TENER と置き換えが可能であり、二つの BE 動詞について一般にいわれるような意味の区別は曖昧である。どちらの動詞が使われるかは、前置詞の con の後ろに来る名詞の性格次第で決定される。さらに、後者の例は一般の辞書記述には見られない ‘Es de ojos verdes’ の例と比較する必要がある。

<7> Está con la gripe.[c:5]
Es con un ojo bizco.[c:3]

もう一つは、<8><9>などに見られる二つの動詞の使い分けの問題である。これも定冠詞を取る主語の名詞句の性格によってどちらかの動詞が選ばれる例の一つである。<10>からも推測できるように、SER を取るのは人々が集まって何らかの活動を行なう名詞のようである。

<8> El maestro no está en la escuela.[e:1]
La fiesta es en la casa de María.[c:2]
La próxima Olimpiada es en Atlanta.[a:1]

<9> La comida estará a las tres en punto.[c:1]
El partido será a las siete.[b:2]

<10> La ceremonia es hoy, a las once.[c:2]

La conferencia es el miércoles/ a las ocho.[a:1]

La boda es este sábado.[b:2]

La reconquista de Toledo fue en 1085.[c:2]

恐らく今後の辞書記述で重要な位置をしめるのは、ここに述べたような情報の提示の仕方だと思われる。

英語圏では、BBI や COBUILD などの新しいタイプの辞書が出版されたり、コンピューターによる大量の実例データベース化が進められている。言語現象を文法と辞書に二分し、一度は文法の方に大きく振れた振り子は、再び辞書の方に向かって揺りかえしが起こっているようである。スペイン語の辞書記述もこのような流れとは無関係にはありえない。次の大きな改訂の波がスペイン語の辞書に押し寄せるころには、この章で述べた問題はすべて歴史的に封印され、あまりにも常識的な事柄ばかりになっているに違いない。

[付記] 以上、近年刊行されたスペイン語の辞書に見られる記述上の問題について、(編集に携わった経験のない) 利用者の立場からいくつか勝手な希望を述べることで「概説」に代えさせていただくことにした。データの取り扱いに思わぬ誤解や見落としがあるかもしれない。今後いろいろな機会に御教示をいただければと思う。また、ここで述べた辞書記述の考え方については、次にあげるものに多少詳しい説明が見えるので、参照いただければ幸いである：

青山文啓／橋本三奈子(1990)「統語情報(1)」『計算機用日本語基本形容詞辞書 —

I P A L (BASIC ADJECTIVES) — 』情報処理振興事業協会, pp.42-81.

橋本三奈子(1993)「I P A L — 新時代の日本語辞書データベース」『言語』22(5), pp.36-41.

言語教育・教授法

大倉 美和子

はじめに

1980年代の言語教育界の大きな変革の波がスペイン語教育の分野にも日本語教育の分野にも押し寄せ、それぞれの分野で言語教育に携わる者に、多かれ少なかれ、何らかの意識変革を迫っている。近年刊行される非母語話者へのスペイン語教育教材、日本語教育教材にその変化のほどをみることができる。それは、オーディオリンガルメソッドが提唱した大量の文型練習中心主義、教師主導型の教授法に対し、学習者の立場を考慮した、コミュニケーション能力開発のための教授法がヨーロッパから発信されはじめたことによる。

スペイン語教材では、‘curso comunicativo de español para extranjeros’の教材として、

“Para empezar” (EDI 6 S.A. 1983)

が、スペインで出版された。

日本語話者用には、

“Español funcional” (por Antonio Ruiz Tinoco. GEIRIN-SHOB0. 1986)

がある。

日本語教材についても

『生活日本語Ⅰ・Ⅱ』（文化庁. 1983, 1985）

『現代日本語コース中級Ⅰ・Ⅱ』（名古屋大学出版会 1983）

“Basic Functional Japanese” (The Japan Times. 1987.9)

“SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE volume one/two”

(BONJINSHA. 1991, 1992)

などが相次いで出版、市販されている。

いずれも、ある表現意図を目標言語で伝えたいときどのような言語形式を用いれば、的確な伝達が可能になるか、また、相手の用いた言語形式がどのような表現意図を伝達するものなのかを学習者に学ばせようとの目的で作成されたものである。

このような、コミュニケーション能力を身につけさせるためのスペイン語教材は、日本語話者用のものがすでに作成されているが、日本語教材に関しては、スペイン語話者用のものは、いまだ現れていない。

全般的にはこうした状況にあるスペイン語教育、日本語教育であるが、本稿では、

日本人に対するスペイン語教育とスペイン語話者に対する日本語教育の分野での研究についての概観に限定して文献を挙げることにする。

日本人に対するスペイン語教育

この分野での論文の著者は、大学の第二外国語としてのスペイン語教育担当者の手になるものが多いのがひとつの特徴である。少ない授業時間数であれもこれも教えねばならないカリキュラム体制の中で、いかに効率よく実効のある教育をするかという課題に常に向き合っている現場の担当者の悩みの反映であろうか。

教授法理論の変遷につれて、スペイン語教育も、構造シラバスに基づく教材を使用して構造文型を教師主導でパターンプラクティスにより徹底的に教えようという立場から、学習者に自己表現の手段としてのスペイン語を能動的に学習させようという立場まで、時代とともに論文の主張する教授法も変遷している。

上野(1966, 1967)は、英語の知識をもつ学習者を対象にスペイン語を教育する際の実際の教室作業の方法を提案したものである。上野(1966)では音声と構文、上野(1967)では語順の教え方を扱っている。日本語話者用のスペイン語教育の面できっと興味深いのは音声と構文の項である。オーディオリンガルメソッドによる教育実践を旨としているので、音声の指導については母音、子音ともミニマルペアを設定し、口頭練習の例を多く挙げている。構文の項ではser とestar の用法のちがいが動詞の活用形、あるいは日本語話者が不得手とする代名詞の用法を、意味をもったまとまりのある文の形で練習することに腐心している。ともすれば文法書による文法規則の理解から一足飛びに講読へと移行しがちな大学の第二外国語教育の現場に、母語の干渉からくる誤用を極力避けるために提案された当時隆盛のオーディオリンガルメソッドのパターンプラクティスを導入する日本語話者用のスペイン語教育の内容と方法を具体的に提起したものとして興味深い。

北村(1981, 1983)は、大学で第二外国語としてスペイン語を教えるために北村自身が作成した教材について解説したものである。「聞く、話す、読む、書く」の四技能を、学習の初期段階からバランスよく習得させ、学生が自信をもってスペイン語で発話でき、コミュニケーションできるように指導することを目標にしたその教材の一部が紹介されている。オーディオリンガルメソッドを基本に、その長所は文型導入に際しての工夫や口頭練習の多用という形で取り入れ、無味乾燥、機械的といわれる練習方法の短所は、作文や翻訳を初期から行うことで補うというように、意味、文脈を考えながら文型練習を行うことの重要性が強調されている。

Vásquez(1988)は、直接教授法とオーディオリンガルメソッドの折衷法で音声重視、

コミュニケーション能力開発の教育を実践するための具体的指導法を述べている。教室での指名のしかた、学生全員を授業に参加させ、発話させる方法の提示など、大学の第二外国語としてのスペイン語教育で、学生に学習意欲をもたせ、動機づけを強くして、学習項目の内在化を目指す氏の努力と熱意の実践記録でもある。

上記の上野、北村、Vasquezはいずれも、教室作業のありかたも含めきわめて具体的な提案をおこなっているが、大学の第二外国語教育の目標あるいは理念について述べたのが、乾(1988, 1989, 1991)である。乾の主張は、現在の外国語教育の前提として、日本語教育担当者も同様の考えに立って教育にあたっていることでもあるので、少し詳しく紹介したい。

乾は、外国語教育においては、「目標言語と母語との構造的差異とともに、その実際の運用面における、いわば機能的差異が十分に認識されなくてはならない」(1988, p. 52)こと、「機能的差異の認識とは、単に言語運用上の状況的側面に限ったものではなく、文化的、社会的背景を含むものであり、分析と比較を通じて学習項目を現実的な運用レベルで認識することを意味する」(1988, p. 52)との考えを自身の外国語教育に対する基本理念としている。目標言語による自己表出を可能にする外国語教育を目指しているわけである。そこで、外国語教育の実践は、「意味・内容のある事柄の表出という一点に集中するべきで」、「そのためには、目標言語の構造にのみ焦点を合わせることは避けるべきであり、常にどんな事柄を表出することができるかということ」を最大のポイントとして中心に据える必要がある。そうすることで、「(他者の言語活動を理解するという一筆者注)受動的・(自らが言語活動を行うという一筆者注)能動的両面の言語活動を理解させ、身につけさせることが可能になるだろう」(1989, pp. 22-23)と述べる。学習者の母語である日本語と目標言語であるスペイン語をともに意識しながらスペイン語を習得することが重要で、学習者自身が両言語の構造的差異や運用面での機能的差異(社会言語学的、語用論的差異)を分析、比較することで習得を促すことができ、ひいては、文化的、社会的背景に裏づけられた言語使用への認識をもはかることが可能になるものと考えている。こういう立場から、乾(1988)は、第二外国語としての大学でのスペイン語教育の現実に改善を求めている。乾は現行8種の教材をとりあげ、その中で命令法がどのように扱われているかを点検した結果、文法項目中心主義の弊害として形態論上の特色を無視した項目配列(提出)順序(直説法の三時制を学習したのち接続法の学習に移っている例を挙げている)がなされていると批判し、学習者に大きな心理的負担を課していることを憂いている。さらに重要な指摘として、命令法の幅広い用法と機能について十分な情報が学習者に与えられていないために、命令法が「依頼」を表現する際にも用いられる形式であることが学習者に理解されにくいことを述べ、「依頼」という表現意図にかかわる多様な言

語形式を整理して学ばせる立場に立った教材編成を提案している。

乾(1989)は、「できる限り正確な日本語を要求する形で『訳す』ことを、積極的に授業の場でする必要がある」「それこそが、目標言語と母語との構造的差異とともに、その実際の運用面における、いわば機能的差異を十分に認識させるための有効な手段である」(1989, p.20)と述べているように、「日本語もどき」の「直訳」ではない「本来の正確な日本語」に訳させることの有効性を説いている。

乾(1991)は、スペイン語母語話者との協力のもと、スペイン語による作文を学習者に課すことの必要性を説く。言語形式を覚えるための「形態練習」のような教科書の学習単元の枠組みの中での「練習」だけでなく、現実の言語活動に即した具体的状況を設定し、自己表出の機会を学習者に与えることが必要で、そのために「作文」作業が果たす役割は極めて重要だと指摘する。

乾の3論文は、大学の第二外国語としてのスペイン語教育を学習者の側からの学びやすさを視野に入れた教育という観点を明確にして教授法やカリキュラムの改善を提案しているのである。

- 上野政夫 1966. 「イスパニア語教授における言語学の適用(1)」『北九州大学教養部紀要3(1)』, pp.43-58
- 1967. 「イスパニア語教授における言語学の適用(2)」『北九州大学教養部紀要3(2)』, pp.69-73
- 北村光世 1981. 「スペイン語の教材と教授法」HISPANICA No.25 pp.82-92
- 1983. 「練習を中心とした教材作成の試み」, HISPANICA No.27 pp. 54-69
- 乾 英一 1988.3. 「スペイン語教授法の問題点(1) - 命令法について -」『語学教育論集3』(早稲田大学語学教育研究所) pp.52-60
- 1989.3. 「スペイン語教授法の問題点(2) - 「訳す」意味について -」『語学教育論集4』(早稲田大学語学教育研究所) pp.16-36
- 1991.3. 「スペイン語教授法の問題点(3) - 「作文」の位置付け -」『語学教育論集6』(早稲田大学語学教育研究所) pp.7-16
- Vásquez Solano, Claudio Antonio 1988. 「La enseñanza del español como lengua extranjera」『関西外国語大学研究論集47』, pp.105-115

音声教育については、Tamura(1979)が、日本語話者用(スペインの)スペイン語音声教材作成を目的に、日西両語の音声の詳細にわたって対照させ、日本語話者にとっての困難点をその理由を挙げて説明している。ストックウェルの難易度規準と学習者の誤用例を参考に選んだ重要指導項目が難度の高い順に23項目並べた表が付されている

る。Tamura(1980)では、アクセントとイントネーションについて、日西両語の対照が行われ、それぞれについてスペイン語学習者に指導すべき事項が整理して述べられている。

- Tamura Miyoko 1979. 「UN ESTUDIO DE LOS SONIDOS DEL ESPAÑOL Y EL JAPONES
—Problemas en la Enseñanza de la Pronunciación—」『長崎外国
語短期大学論叢22号』 pp.55-80
- 1980. 「UN ESTUDIO DE LOS PROSODEMAS DEL ESPAÑOL Y EL JAPONES
—Problemas en la Enseñanza —」『長崎外国語短期大学論叢23号』
pp.253-268

上述した研究以外に、教材作成の基礎資料となる研究成果をまとめたものが高橋(1986.1987.1988)、興津(1967.1969.1970.1972.1979.1980.1981)である。

高橋(1986)は、五種のスペイン語教科書と六種の既存基本語彙集、さらに、『スペイン語語彙頻度表』(上田博人 1984)を参考にしてスペイン語教育基本語彙1962語を選定したもの、高橋(1987)は、語彙力と語学力の相関関係を統計的に明らかにしたものである。高橋(1988)は、スペイン語の特徴として、「行為の完了か否かを明確に区別する」「行為と状態の区別が明確」「受動態に対する敬遠」「方向性が明確である」「間接補語の頻用」「自動詞の少なさ」など12項目を挙げ、これらが日本人にわかりにくい理由を説明している。興津(1967.1969.1970)は、日本人にわかりにくいスペイン語のいくつかの構造を、文型として捉えて、学習者にわかりやすく説明する工夫を述べたもので、高橋(1988)とともに、スペイン語の文型教育教材作成の資料を提供したものである。

- 高橋覚二 1986. 「スペイン語教育基本語彙について」『アカデミア文学・語学
編41』 pp.89-127
- 1987. 「スペイン語教育基本語彙と語学力の関係」『アカデミア文学・
語学編 43』 pp.87-119
- 1988. 「日本人に苦手なスペイン語の表現—スペイン語の動的性格に
ついて—」『アカデミア文学・語学編44号』 pp.15-37
- 興津憲作 1967. 「イスパニア語と日本語の相違—“向き違いの言い方について
—」『サビエンチア第2号』(英知大学) pp.81-101
- 1969. 「イスパニア語と日本語の比較研究(2)—受動態—」『サビエ
ンチア第3号』 pp.61-80

- 1970. 「イスパニア語と日本語の比較研究(3)－接続法－」『サビエンチア第4号』 pp.91-111
- 1972. 「イスパニア語と日本語の比較研究(4)－対応語の欠如・格遣い・品詞の違い・異種概念の不当同居－」『サビエンチア第6号』 pp.81-98
- 1979. 「イスパニア語と日本語の比較研究(5)－語形が似ていて紛らわしい語」『サビエンチア第13号』 pp.97-120
- 1980. 「イスパニア語と日本語の比較研究(6)－語形は違うが内容が似ていて使い分けが問題になる語」『サビエンチア第14号』 pp.113-143
- 1981. 「イスパニア語と日本語の比較研究(7)－西語が日本語より細分化していてその区別が問題になる語」『サビエンチア第15号』 pp. 107-121

スペイン語話者に対する日本語教育

日本語教育の分野に関しては、発音指導上の留意点については、単音レベル、音節レベルあるいはアクセントのレベルで、直井(1973.3)、大倉(1976)、蔭山(1977.1978)などの指摘や提案があるが、他の領域については、対照研究の未開拓とあいまって、いまだ有効な提案がなされぬまま今日にいたっている。わずかに、直井(1974.9)、山蔭(1978)、大倉(1977. 1978)が、語彙指導、文型指導の断片的な提案を、現場での必要に迫られて提示している程度といつてよい。せいぜい、学習者の母語＝スペイン語の干渉が入りこみやすい項目について、スペイン語話者を対象とする日本語教育担当者が、日々それぞれに、学習事項ごとに効果的な提出順序、導入方法、説明方法などに工夫をこらしながら、奮闘しているのが現状であろう。

その中で、吾郷(1988)と大木(1977)は、構造シラバスによる文型教育を行う際に課題となる文型設定のあり方に示唆を与えるものである。まず、吾郷(1988)は、「N₁はN₂にN₃をV」「N₁はN₂からN₃をV」「N₁はN₂に・からN₃をV」の文型にあらわれる格助詞「から・に」に対応するスペイン語の前置詞「a, de」についてその意味用法を説明しながら、両者がどのように対応するかを統語論の見地から整理し、対照させている。動詞の語彙の意味により動詞を分類することが、日本語学習者にとって、上述の3文型を理解、習得する助けになることを示している。

大木(1977)には、メキシコのエル・コレヒオ・デ・メヒコで大木自身が現地スタッフ(言語学者も含む)と討議を重ねながら作成したスペイン語話者用日本語教科書の内

容の一端が述べられている。現地スタッフ側の要求で日本語とスペイン語の対照の成果を教材化したものであるが、「は」と「が」の導入にあたって採用した文型提出順序の設定が興味深い。まず、第一課でスペイン語のser 文型に該当する時刻の表現を中心に「Nです」文型（「九時です」など）提示し、第二課で自動詞「雨が降ります」などを導入しながら「NがVます」「NがADJ です」文型を取り上げ、「が」の主格としての意味を学習者に印象づけることを目指している。「NはN/ADJです」文型は第三課まで登場しない。スペイン語のser とestar , 日本語の「は」と「が」を意識しての文型配列である。このような日本語とスペイン語の対照の成果に基づく教科書“Japonés para hispanohablantes”は、大量の練習問題を含む大部のものであるが、その後、その方針を受け継いだエル・コレヒオ・デ・メヒコのスタッフにより改定版が作成され、1982年に“curso intensivo de Japonés para hispanohablantes”として同大学の出版局から出版され、市販されるようになった。

また、蔭山（1977）は、「お名前はなんですか」の問いに、日本人なら、姓だけを答えるのが習慣であるのに対し、スペイン語話者の場合には、“¿Cómo se llama Vd?”あるいは“¿Cuál es su nombre?”（ともに「お名前はなんとおっしゃいますか」の意）に対し、姓名の名のみを答えるか、それとも姓名とも答えるかのいずれかであると述べ、言語使用上の慣習に踏み込んだ指導の必要を説いている。構造文型を教育するプログラムにおいても実際の言語使用場面に配慮した指導がさけられている昨今の日本語教育にとって重要な指摘を与えているものといえる。

- 吾郷成子 1988. 「スペイン語の前置詞 a/de と日本語の格助詞『に』・『から』・『の』」 福岡YMCA日本語教育論文集第2号, pp.1-26
- 大木隆二 1976.3 「メキシコにおける日本語教育」日本語学校論集3
pp.160-170
- 1977.3 「スペイン語版日本語テキスト作成をめぐる方法論的考察」
日本語学校論集4 pp.3-23
- 蔭山昭子 1977. 「スペイン語国民に対する日本語教育の問題点－現場からの報告・その1－」『日本語・日本文化5号』pp.21-28
- 1978. 「『見える』とそのスペイン語訳－『坊っちゃん』『砂の女』を通じて」『日本語・日本文化8号』pp.97-114
- 大倉美和子 1977. 「日西両語動詞『現在形』の用法をめぐる」『日本語・日本文化6号』pp. 125-136
- 1978. 「『た』をめぐる一考察」『日本語・日本文化8号』pp.63-78
- 直井恵理子 1973.3 「研修生の母国語と日本語の比較・対照－スペイン語と日

- 本語－」 研修 3 月号』(海外技術者研修協会) pp.28-30
- 1973.8 「見たことがある, 見た — スペイン語と日本語の「時」
のとらえ方 —」『研修 8 月号』(海外技術者研修協会) pp.28-30
- 1974.4 「女の人, 日本語を教えたのは A さんで — スペイン語と
日本語の語順について —」『研修 4 月号』(海外技術者研修協会)
pp.22-24
- 1974.9 「“私は寒いがあります”」『研修 4 月号』(海外技術者研
修協会) pp.22-24

日本語教育の海外における動向や指導の実態を述べたものとしては以下の文献がある。いずれも『日本語教育53号』(日本語教育学会, 1984.6) 所収のものである。

- 木村静子 「メキシコにおける日本語教育 — 成人教育の場合 —」 pp.21-33
- 直井恵理子 「メキシコ国立自治大学における日本語教育」 pp.34-40
- 岩沢正子 「メキシコにおける年少者の日本語教育—日墨学院の場合—」
pp.41-46
- 龍田俊夫 「ペルーにおける日本語教育の現状と問題点」 pp.47-58
- 酒井三代子 「ペルーにおける日本語教育」 pp.59-60
- 小林恵子 「パラグアイにおける日本語教育—Centro Regional de Educación
de Encarnación での活動を中心に—」 pp.61-68
- 小倉智恵子 「ベネズエラにおける日本語教育についての諸問題—特に大学教育の
一環として—」 pp.69-77
- 白鳥幸子 「中南米における日本語教育の実情」 pp.78-82

最近の動向を扱っている文献に以下の3点がある。

- 栗飯原淑恵 1991.5 「中南米の風土・文化と日本語教育」『講座日本語と日本
語教育14 日本語教育教授法(下)』(明治書院) pp.295-313
- 日向茂男 1991.6 「中南米諸国の日本語教育」『講座日本語と日本語教育15
日本語教育の歴史』(明治書院) pp.356-373
- 小久保ネイダ 1991.10 「南米における日本語教育概観」『講座日本語と日本語教
育16 日本語教育の現状と課題』(明治書院) pp.130-146

おわりに

以上、比較的入手しやすいと思われる文献を資料にして概観を行ってきた。資料をみると、スペイン語教育担当者の現場からの具体的な問題点の提起が少ないように思われる。スペイン語話者にスペイン語を媒介語として日本語を教えている教師の数に比べれば、日本語話者にスペイン語を教えている教師の方が圧倒的に数が多いにもかかわらず、現場で教授上問題になることがらについての提起あるいは解決法を述べた論文が少ない。スペイン語が最も多数の学習者を持つのは、大学の第二外国語教育としてのスペイン語教育においてと思われるが、大学設置基準の大綱化による大学改革の嵐の中で、スペイン語教育も、学習者の立場に留意しながらコミュニケーション能力を身につけさせるための教育方法論や教材開発、それに先立つスペイン語教育観の確立が求められていることが、北村氏や乾氏の論文からうかがえる。日本語教育の分野でも、スペイン語話者のための教育内容や教育方法論の確立が必要である。最近のコミュニケーション能力重視の教授法理論に基づいた研究は見当たらない。今後の研究の進展に待たざるをえない状況にある。日本語話者に対するスペイン語教育、スペイン語話者に対する日本語教育の両分野での研究の進展のためには、両言語の教育担当者間の緊密な交流と連携を今後さらに強めていくことがますます必要になるものと思われる。

執筆者一覧 (国立国語研究所 客員研究員)

高垣 敏博	京都産業大学外国語学部	教授 スペイン語学
三原 健一	大阪外国語大学外国語学部	助教授 対照言語学
福寫 教隆	神戸市外国語大学外国語学部	助教授 イスパニア語学
野田 尚史	大阪府立大学総合科学部	助教授 日本語学
青山 文啓	東海大学文明研究所	助教授 言語学
大倉美和子	京都工芸繊維大学繊維学部	教授 日本語教育学
上田 博人	東京大学教養学部	助教授 スペイン語学

1994（平成 6）年 3月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14

電話 03-3900-3111（代表）FAX 03-3906-3530

本書の市販品発行所

くろしお出版

〒101 東京都千代田区神田小川町3-24

電話とFAX 03-3291-3557

Informe del Instituto Nacional
de Investigación de la Lengua Japonesa 108

Estudios contrastivos del japonés con las lenguas extranjeras I

EL JAPONÉS Y EL ESPAÑOL (1)

Instituto Nacional de Investigación
de la Lengua Japonesa
1994

日本語とスペイン語（１）正誤表

謹んでお詫び申し上げますとともに
宜しくご訂正下さいますよう
お願い申し上げます。

10 ページ 下から 8 行目

5. 連体詞 → 5. 連体節

177 ページ 1 行目

形態・語義 → 形態・語彙